



## **Cisco UCS Director リリース 6.5 アドミニストレーションガイド**

初版：2017年07月11日

### **シスコシステムズ合同会社**

〒107-6227 東京都港区赤坂9-7-1 ミッドタウン・タワー  
<http://www.cisco.com/jp>

お問い合わせ先：シスコ コンタクトセンター  
0120-092-255（フリーコール、携帯・PHS含む）

電話受付時間：平日 10:00～12:00、13:00～17:00  
<http://www.cisco.com/jp/go/contactcenter/>

**【注意】** シスコ製品をご使用になる前に、安全上の注意（[www.cisco.com/jp/go/safety\\_warning/](http://www.cisco.com/jp/go/safety_warning/)）をご確認ください。本書は、米国シスコ発行ドキュメントの参考和訳です。リンク情報につきましては、日本語版掲載時点で、英語版にアップデートがあり、リンク先のページが移動/変更されている場合がありますことをご了承ください。あくまでも参考和訳となりますので、正式な内容については米国サイトのドキュメントを参照ください。また、契約等の記述については、弊社販売パートナー、または、弊社担当者にご確認ください。



## 目次

### はじめに **xix**

対象読者 **xix**

表記法 **xix**

マニュアルに関するフィードバック **xxi**

マニュアルの入手方法およびテクニカル サポート **xxi**

### このリリースの新規情報および変更情報 **1**

このリリースの新規情報および変更情報 **1**

### 概要 **9**

Cisco UCS Director **9**

機能と利点 **10**

物理的および仮想的な管理機能 **12**

モデルベースのオーケストレーション **13**

Cisco UCS Director の新しいユーザ インターフェイス **14**

ランディング ページ **16**

共通のアイコン **18**

統合ビュー **21**

クラウド アカウントの追加レポートの生成 **21**

クラシック ビューへの切り替え **22**

Cisco UCS Director のガイド付きセットアップ ウィザード **22**

ワークフローからのウィザードの作成 **23**

Cisco UCS Director ユーザ インターフェイスへの非セキュアな接続の設定 **24**

最初のログイン **25**

システム設定の推奨順序 **26**

Cisco UCS Director のホスト名の設定 **28**

暗号方式の操作 **28**

暗号化使用率の編集 **29**

Java Cryptography Extension (JCE) の最新のポリシー ファイルのインストール 29

## ユーザとグループの管理 31

ユーザの役割 31

ユーザ ロールの追加 33

ユーザの追加 34

ユーザ タイプの管理 37

デフォルトのユーザ権限 37

ユーザの役割および権限 38

サーバ管理の権限 42

すべてのポリシー管理者 43

請求管理者 45

コンピューティング管理者 48

グループ管理者 50

IS 管理者 52

ネットワーク管理者 54

演算子 56

サービス エンド ユーザ 59

ストレージ管理者 61

ユーザ用ユーザ ロール情報の表示 63

ユーザの最近のログイン履歴の確認 63

ユーザのセッション制限の設定 64

ユーザ アカウント ステータスの管理 65

ユーザのリソースの割り当て解除 65

Cisco UCS Director ユーザ アカウントの無効化 66

グループ内のユーザ アカウントを無効にする 67

MSP 管理者ロール 67

グループの管理 69

ユーザ グループの作成 69

MSP 組織の作成 70

顧客組織の作成 72

パスワード ポリシー 73

パスワード ポリシーの作成 74

グループ予算ポリシー	75
グループ予算ポリシーの表示および編集	75
リソース制限値	76
リソース制限の表示	77
リソース制限の編集	77
管理プロファイルの設定	81
管理者プロファイルの作成	81
管理者プロファイルの編集	82
ブロードキャストメッセージの送信	84
管理者パスワードの変更	85
現在のオンラインユーザの表示	85
ユーザアクセスプロファイルの管理	85
マルチロールアクセスプロファイル	85
ユーザアクセスプロファイルの作成	86
プロファイルへのログイン	87
デフォルトのプロファイル	87
デフォルトプロファイルの変更	88
認証およびLDAP統合	88
認証の環境設定	88
LDAP統合	89
LDAP統合の規則と制限事項	90
LDAP統合の管理	92
LDAPサーバの設定	94
LDAPサーバの接続のテスト	98
LDAPサーバのサマリー情報の表示	98
LDAP検索ベースDNエントリの追加	99
LDAP同期システムタスクの実行	99
LDAPサーバの詳細の変更	99
グループメンバーシップ情報の表示	102
LDAPサーバ情報の削除	103
シングルサインオン	104
OneLoginサイトでのCisco UCS Directorアプライアンスのマッピング	104

OneLogin 証明書の生成	106
シングル サインオンの有効化	107
顧客組織のブランディング	107
ユーザ グループのブランディング	108
顧客組織のブランディング	109
ログイン ページのブランディング	111
カスタム ドメイン ロゴの設定	111
<b>エンドユーザ ポータルの設定</b>	<b>113</b>
エンドユーザ ポータル	113
エンドユーザ ポータルを設定するタスクの概要	114
エンドユーザ ポータルのユーザ アカウントの設定	114
ユーザ グループの作成	114
ユーザの追加	115
エンドユーザ ポータルの権限の設定	118
承認に必要な権限	118
カタログに必要な権限	119
予算エントリに必要な権限	120
物理リソース	120
CloudSense レポートに必要な権限	120
ラック サーバに必要な権限	120
サーバに必要な権限	121
サービス プロファイルに必要な権限	121
SnapMirrors に必要な権限	121
ストレージ仮想マシンに必要な権限	121
vFiler に必要な権限	122
SVM イニシエータ グループに必要な権限	122
SVM LUN に必要な権限	122
SVM CIFS 共有に必要な権限	123
SVM エクスポート ポリシーに必要な権限	123
SVM エクスポート ルールに必要な権限	123
SVM イニシエータに必要な権限	124
SVM ポートセットに必要な権限	124

SVM SIS ポリシーに必要な権限	124
SVM スナップショット ポリシーに必要な権限	124
SVM WWPN エイリアスに必要な権限	125
SVM ボリューム スナップショットに必要な権限	125
SVM ボリュームに必要な権限	125
vFiler ボリュームに必要な権限	126
サービス	127
支払い情報に必要な権限	127
サービス リクエストに必要な権限	127
ユーザ OVF 管理に必要な権限	128
仮想リソース	128
アプリケーション コンテナに必要な権限	128
VM に必要な権限	129
イメージに必要な権限	130
エンドユーザ ポータルのユーザ インターフェイスの設定	131
ダッシュレットの設定	131
ダッシュレットのレポートの色の変更	132
エンドユーザ ポータルのカタログの選択	133
システム管理設定の管理	135
送信メール サーバの設定	136
電子メール テンプレートの使用	137
電子メール テンプレートの追加	137
電子メール テンプレートのプレビュー	139
デフォルトの電子メール テンプレートの設定	139
システム パラメータの設定 (任意)	140
システム パラメータの設定	140
インフラストラクチャ システム パラメータの設定 (任意)	141
オブジェクト検索の実行	142
ライセンスの更新	142
ライセンスの交換	143
ライセンス使用率の確認	143
ライセンス使用率履歴の表示	144

リソース使用率データの表示	145
非アクティブ ライセンス情報の表示	145
アプリケーション カテゴリ	146
アプリケーション カテゴリの追加	146
ポータルのカスタマイズ	148
ログイン ページと背景イメージのカスタマイズ	148
アプリケーション ロゴのカスタマイズ	150
ファビコンのカスタマイズ	150
アプリケーション ヘッダーのカスタマイズ	151
日付表示のカスタマイズ	153
カラー テーマのカスタマイズ	153
ログアウト時のリダイレクト先のカスタマイズ	154
レポートのカスタマイズ	154
詳細な制御の有効化	155
サービス プロバイダー機能の有効化	157
ユーザ メニュー	157
ユーザ メニューの設定	158
ユーザ権限の設定	158
システム タスク	158
ノードプールの作成	160
システム タスク ポリシーの作成	160
システム タスク ポリシーへのノードプールの割り当て	161
サービス ノードの作成	161
システム タスクへのシステム ポリシーの割り当て	163
システム タスクの実行	163
システム タスクの有効化または無効化	164
Cisco UCS Director ユーザ インターフェイスのアイコンの管理	164
Cisco UCS Director ユーザ インターフェイスのアイコンの変更	165
アイコンの編集	167
アイコンの削除	167
アイコンのプレビュー	168
タグ ライブラリ	168

タグの作成	168
サポート情報	170
システム情報の表示	171
ログの表示	172
ログのダウンロード	173
デバッグ ログの開始	173
API ログの生成	174
データベース監査ロギング	174
監査ロギングの有効化	175
統合設定の管理	177
[統合設定 (Integration Settings) ] について	177
構成管理データベースの統合	177
CMBD 統合の設定	178
計測データのエクスポート	179
計測データのエクスポートの設定	179
変更レコード	179
変更レコードの表示	179
システム ログ	179
システム ログの設定	180
ストレージおよび OVF のアップロード	181
複数言語のサポート	181
Cisco UCS Director 用言語の選択	181
ユーザ インターフェイスのロケール設定	182
物理インフラストラクチャの管理	183
物理インフラストラクチャの管理について	183
統合ビューの使用	183
サイトの追加	184
Pod の追加	185
物理的なアカウントの追加	186
マルチドメイン マネージャ アカウントの追加	189
ネットワーク要素の追加	191
DHCP ロギングのイネーブル化	192

接続のテスト	193
管理対象ネットワーク機器の接続テスト	193
物理アカウントへの接続のテスト	193
デバイス検出の有効化	194
仮想インフラストラクチャの管理	197
VMware クラウドの管理について	197
VMware クラウドの作成	198
PowerShell エージェント インストーラのダウンロード	202
PowerShell エージェントの作成	203
クラウドの検出および接続の確認	204
接続のテスト	204
vCenter プラグインの表示	204
Cisco UCS Director での仮想マシンのプロビジョニング	205
ポリシーの管理	209
ポリシー	209
コンピューティング ポリシー	210
コンピューティング ポリシーの作成	210
ベア メタル サーバのプロビジョニング ポリシーの設定	214
ベア メタル サーバのプロビジョニング ポリシーの検証	220
データ コレクション ポリシー	221
仮想アカウントのデータ コレクション ポリシーの設定	221
仮想アカウントのデータ コレクション ポリシーの関連付け	224
グループの共有ポリシーについて	224
グループ共有ポリシーの作成	224
ストレージ ポリシー	225
複数ディスク VM のストレージ ポリシー	226
ストレージ ポリシーの追加と設定	226
仮想ストレージ カタログ	234
仮想ストレージ カタログの設定	234
クレデンシャル ポリシー	235
クレデンシャル ポリシーの設定	236
ネットワーク ポリシー	237

スタティック IP プール ポリシーの追加	237
IP サブネット プール ポリシーの設定	239
ネットワーク ポリシーの追加	241
ネットワーク キング プロビジョニング ポリシー	245
ネットワーク プロビジョニング ポリシーの設定	245
VLAN プール ポリシー	247
VLAN プール ポリシーの設定	247
システム ポリシー	248
システム ポリシーの設定	248
OS ライセンス	255
OS ライセンスの追加	256
エンドユーザセルフサービス ポリシー	256
エンドユーザ ポリシーの作成	257
VM 管理ポリシーの設定	258
<b>仮想データセンターの管理</b>	<b>263</b>
仮想データセンター	263
VDC アクション	264
仮想データセンターの追加	264
仮想データセンターの表示	268
仮想データセンターのアプリケーション カテゴリの管理	268
複数の VDC へのアプリケーション カテゴリの割り当て	268
仮想データセンター サービス プロファイル	270
仮想データセンター サービス プロファイルの追加	270
<b>リソース グループの管理</b>	<b>275</b>
リソース グループ	275
環境変数	276
カスタム環境変数の追加	287
リソース グループの追加	288
リソース グループの編集	299
リソース グループへのポッドの追加	301
リソース グループのタグの管理	302
リソース グループの削除	304

テナント	304
提供サービス	305
提供サービスの追加	306
提供サービスの複製	310
提供サービスの編集	315
提供サービスの削除	320
テナント プロファイル	321
テナント プロファイルの追加	321
提供サービス リストのトラブルシューティング	323
テナント プロファイルの複製	324
テナント プロファイルの編集	326
テナント プロファイルの削除	327
カタログの管理	329
カタログ管理について	329
カタログの公開	331
詳細カタログの公開について	341
詳細カタログの公開	341
ベア メタル サーバ カタログの作成	343
フォルダ内のカタログの並べ替え	346
展開するホストへのアクセス	347
カタログ フォルダの並べ替え	347
セルフサービス プロビジョニングの使用法	349
Self-Service プロビジョニング	349
サービス リクエスト	350
標準カタログ タイプを使用したサービス リクエストの作成	350
詳細カタログ タイプを使用したサービス リクエストの作成	358
カタログ タイプを使用したサービス リクエストの作成：ベア メタル	359
サービス リクエスト ワークフローと詳細	363
サービス リクエスト ワークフロー	363
サービス リクエスト 詳細	365
サービス リクエストのワークフロー ステータスの表示	367
サービス リクエストのログ詳細の表示	367

サービス リクエストのスケジュール設定について	368
サービス リクエストのスケジュール設定	368
サービス リクエストの再送信について	368
サービス リクエストの再送信	369
その他のサービス リクエスト機能	369
サービス リクエストのキャンセル	369
サービス リクエストのロールバック	370
サービス リクエストのアーカイブ	370
サービス リクエストの削除	371
特定グループのサービス リクエストの表示	372
グループ用サービス リクエスト履歴の検索	373
グループ用サービス リクエストのレポートのエクスポート	373
アーカイブ済みのサービス リクエストの回復	374
サービス リクエストの承認プロセス	374
サービス リクエストの承認	374
サービス リクエストの拒否	375
サービス リクエストの承認情報の表示	375
サービス リクエスト承認履歴の検索	375
サービス リクエスト承認のレポートのエクスポート	376
サービス リクエストの予算作成	376
今月の利用可能な予算の表示	376
予算エントリの表示	377
予算エントリの追加	377
<b>複数ディスクの VM プロビジョニング</b>	<b>379</b>
複数ディスクの VM プロビジョニングについて	379
複数ディスクの VM プロビジョニングの手順の概要	380
複数ディスクを含むテンプレートについて	380
ディスク カテゴリの割り当て	380
ストレージ ポリシーの定義	381
ストレージ ポリシーの作成	382
カタログの作成	389
カタログの追加	389

VM ディスクの作成	399
チャージバック モジュールの使用方法	403
チャージバック機能について	403
予算ポリシー	404
予算ポリシーの設定	404
タグベース コスト モデルの作成	405
コスト モデル	406
コスト モデルの作成	407
ベア メタル コスト モデルの作成	412
VDC を編集してコスト モデルを含める	413
VDC へのコスト モデルの追加	413
VDC を編集してコスト モデルに含める	416
パッケージ ベースのコスト モデル	416
パッケージ ベースのコスト モデルの作成	417
ストレージ階層コスト モデル	419
階層へのコストの割り当て	419
階層へのデータストアの割り当てについて	419
階層へデータストアの割り当て	420
チャージバック レポート	420
今月のサマリーの表示	422
前月のサマリーの表示	422
月間リソース アカウンティング情報の表示	422
VM レベルのリソース アカウンティングの詳細の表示	423
VM レベルのチャージバックの詳細の表示	423
月間リソース アカウンティングの詳細のエクスポート	424
VM レベルのリソース アカウンティングの詳細のエクスポート	424
VM レベルのチャージバックの詳細のエクスポート	425
変更レコードについて	425
変更レコードへのアクセス	426
チャージバックの計算	426
システムのモニタリングとレポート作成	429
ダッシュボード	429

ダッシュボードの有効化	430
追加ダッシュボードの作成	430
ダッシュボードの削除	430
レポート ウィジェットの追加	431
ウィジェットデータの更新	431
要約	431
仮想マシン、クラウド、およびシステムのサマリー情報	432
サマリー レポート ウィジェットのカスタマイズ	432
インベントリ管理	432
システム インベントリの詳細情報へのアクセス	433
リソース プール	433
リソースの詳細情報へのアクセス	434
クラスタ (Clusters)	434
クラスタへのアクセス	434
イメージ (Images)	434
イメージへのアクセス	435
ユーザまたはグループへの VM イメージの割り当て	435
ホスト ノード	436
ホスト ノードへのアクセス	436
仮想マシン (VM)	436
VM へのアクセス	436
グループ レベル VM へのアクセス	437
トポロジ	437
トポロジ タイプへのアクセス	437
アセスメント	438
評価へのアクセス	438
レポート	438
レポートへのアクセス	439
ライフサイクルの管理	441
VM の電源設定の管理	441
VM スナップショットの管理	442
VM スナップショットの作成	443

スナップショットへの復帰	444
ゴールデン スナップショットのマーキング	445
スナップショットの削除	445
すべてのスナップショットの削除	446
仮想マシンのリース時間の設定	446
VM アクションの管理	447
VM の詳細の表示	448
VM のサイズ変更	449
スタック ビューオプションの使用	450
VM ディスクの作成	451
VM ディスクのサイズ変更	453
Cisco UCS Director での VM のロック	454
vNIC の追加	455
vNIC の置換	457
VM クライアントの起動	459
VM の VNC コンソールの有効化	459
VM の VNC コンソールの自動設定解除	460
VNC クライアントを使用した VM コンソールへのアクセス	461
VM コンソールへの VNC アクセスのための ESX/ESXi サーバの設定	462
VM の割り当て	463
VM クレデンシャル	465
VM クレデンシャルの表示	465
VM のインベントリ収集の開始	466
VNC 接続のテスト	466
VM の複製	467
VM の VDC への移動	474
VM の再同期	474
VM へのタグの適用	475
ISO イメージを CD/DVD ドライブとしてマウント	476
CD/DVD ドライブとしての ISO イメージのマウント解除	476
CloudSense 分析の管理	479
CloudSense 分析	479

レポートの生成	480
アセスメントの生成	482
カスタム レポート テンプレートのレポート ビルダ	483
レポート ビルダ テンプレートの作成	483
テンプレートからのレポートの生成	485
テンプレートから生成されたレポートの表示	486
テンプレートから生成されたレポートの電子メールによる送信	487





## はじめに

---

ここでは、次の項について説明します。

- [対象読者](#), [xix ページ](#)
- [表記法](#), [xix ページ](#)
- [マニュアルに関するフィードバック](#), [xxi ページ](#)
- [マニュアルの入手方法およびテクニカル サポート](#), [xxi ページ](#)

## 対象読者

このマニュアルは、Cisco UCS Director を使用し、以下の少なくとも 1 つの分野において責任と専門知識を持つデータセンター管理者を主に対象としています。

- サーバ管理
- ストレージ管理
- ネットワーク管理
- ネットワーク セキュリティ
- 仮想化および仮想マシン

## 表記法

テキストのタイプ	表示
GUI 要素	タブの見出し、領域名、フィールドのラベルのような GUI 要素は、[GUI 要素] のように示しています。 ウィンドウ、ダイアログボックス、ウィザードのタイトルのようなメインタイトルは、[メインタイトル] のように示しています。

テキストのタイプ	表示
マニュアルのタイトル	マニュアルのタイトルは、イタリック体 ( <i>Italic</i> ) で示しています。
TUI 要素	テキストベースのユーザ インターフェイスでは、システムによって表示されるテキストは、courier フォントで示しています。
システム出力	システムが表示するターミナルセッションおよび情報は、courier フォントで示しています。
CLI コマンド	CLI コマンドのキーワードは、 <b>this font</b> で示しています。 CLI コマンド内の変数は、イタリック体 ( <i>italic</i> ) で示しています。
[ ]	角カッコの中の要素は、省略可能です。
{x y z}	どれか1つを選択しなければならない必須キーワードは、波カッコで囲み、縦棒で区切って示しています。
[x y z]	どれか1つを選択できる省略可能なキーワードは、角カッコで囲み、縦棒で区切って示しています。
string	引用符を付けない一組の文字。string の前後には引用符を使用しません。引用符を使用すると、その引用符も含めて string とみなされます。
<>	パスワードのように出力されない文字は、山カッコで囲んで示しています。
[ ]	システム プロンプトに対するデフォルトの応答は、角カッコで囲んで示しています。
!、#	コードの先頭に感嘆符 (!) またはポンド記号 (#) がある場合には、コメント行であることを示します。



(注) 「注釈」です。役立つ情報や、このマニュアル以外の参照資料などを紹介しています。



注意 「要注意」の意味です。機器の損傷またはデータ損失を予防するための注意事項が記述されています。

**ヒント**

「問題解決に役立つ情報」です。ヒントには、トラブルシューティングや操作方法ではなく、ワンポイントアドバイスと同様に知っておくと役立つ情報が記述される場合もあります。

**ワンポイントアドバイス**

「時間の節約に役立つ操作」です。ここに紹介している方法で作業を行うと、時間を短縮できます。

**警告****安全上の重要事項**

「危険」の意味です。人身事故を予防するための注意事項が記述されています。機器の取り扱い作業を行うときは、電気回路の危険性に注意し、一般的な事故防止策に留意してください。各警告の最後に記載されているステートメント番号を基に、装置に付属の安全についての警告を参照してください。

これらの注意事項を保管しておいてください。

## マニュアルに関するフィードバック

このマニュアルに関する技術的なフィードバック、または誤りや記載もれなどお気づきの点がございましたら、[ucs-director-docfeedback@cisco.com](mailto:ucs-director-docfeedback@cisco.com) までコメントをお送りください。ご協力をよろしくお願いいたします。

## マニュアルの入手方法およびテクニカル サポート

マニュアルの入手方法、テクニカル サポート、その他の有用な情報について、毎月更新される『[What's New in Cisco Product Documentation](#)』を参照してください。シスコの新規および改訂版の技術マニュアルの一覧も示されています。

『*What's New in Cisco Product Documentation*』は RSS フィードとして購読できます。また、リーダーアプリケーションを使用してコンテンツがデスクトップに直接配信されるように設定することもできます。RSS フィードは無料のサービスです。シスコは現在、RSS バージョン 2.0 をサポートしています。





# 第 1 章

## このリリースの新規情報および変更情報

---

この章は、次の項で構成されています。

- [このリリースの新規情報および変更情報, 1 ページ](#)

## このリリースの新規情報および変更情報

次の表に、最新リリースに関するこのガイドでの重要な変更点の概要を示します。この表は、このマニュアルに加えられた変更やこのリリースの新しい機能をすべて網羅するものではありません。

機能	説明	参照先
VDC のコスト関連の情報を無効にするオプション。	<p>VDC を追加または変更するときに、ユーザインターフェイスの次のページからコスト関連の情報の表示を無効にすることができるようになりました。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• [サービス リクエストの作成 (Create Service Request) ] ウィザード</li> <li>• [VM のサイズ変更 (Resize VM) ] ページ</li> <li>• [VM ディスクのサイズ変更 (Resize VM Disk) ] ページ</li> <li>• [VM ディスクの作成 (Create VM Disk) ] ページ</li> <li>• 電子メール通知</li> </ul>	仮想データセンターの追加, (264 ページ)
ReadyClones に対応するためにストレージポリシーを変更	ストレージポリシーは、VM またはテンプレートが HX データストアにある場合に ReadyClone 操作を組み込むように更新されました。	ストレージポリシーの追加と設定, (226 ページ)
すべてのユーザ ロールに導入可能性に関するアセスメントの許可権限を導入	<p>デフォルトでは、すべてのユーザロールに対してこの権限が有効になります。管理者は、システム内に設定されているユーザに対してこの権限を無効または有効にすることができます。</p> <p>あるユーザに対してこのオプションを無効にすると、そのユーザはカタログ上で導入可能性に関するアセスメントを実行できません。</p>	ユーザの役割および権限, (38 ページ)

機能	説明	参照先
以降のログイン時のクラシック ビューの起動をサポート	<p>管理者は、ユーザの以降のログインセッションで、クラシック ビューのユーザ インターフェイスを表示するようにシステムを設定できます。また、システム内の他のユーザにもクラシック ビューを起動するようにシステムを設定できます。</p> <p>以降のログイン時および他のユーザ向けにクラシック ビューを起動するようにシステムを設定する機能を使用できるのは、リリース 6.5 のみです。クラシック ビューは、後続のリリースで削除される予定です。</p>	<p><a href="#">管理者プロファイルの編集</a>, (82 ページ)</p> <p><a href="#">ユーザの追加</a>, (34 ページ)</p>
VM のスタック ビュー レポートを変更	<p>このリリースで、VM のスタック ビュー レポートが次のように変更されています。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• レポートに複数のコンポーネントがある場合、特定のコンポーネントの選択にドロップダウン リストが使用できます。</li> <li>• レポートのコンポーネントの追加詳細情報を表示するように選択できます。</li> </ul>	<p><a href="#">スタック ビューオプションの使用</a>, (450 ページ)</p>
ReadyClones に対応するために [カタログの追加 (Add Catalog) ] と [VM の複製 (Clone VM) ] が変更されています。	<p>ReadyClone 操作を組み込むように [カタログの追加 (Add Catalog) ] ページと [VM の複製 (Clone VM) ] ページが更新されました。</p>	<p><a href="#">カタログの公開</a>, (331 ページ)</p> <p><a href="#">VM の複製</a>, (467 ページ)</p>

機能	説明	参照先
VNC コンソール管理を強化	VNC コンソールは、[VM クライアントの起動 (VMクライアントの起動) ]アクションとは別に、[VNC コンソールの起動 (Launch VNC Console) ]アクションを使用して起動できるようになりました。  VNC コンソールの設定を自動的に解除するタスクを有効にできます。	<a href="#">VNC クライアントを使用した VM コンソールへのアクセス, (461 ページ)</a>  <a href="#">VM の VNC コンソールの自動設定解除, (460 ページ)</a>
VM 名とホスト名の一意性チェックを無効にする機能	VM 名およびホスト名のチェックを無効にして名前の検証を行わないようにし、複数テナントかつ複数ドメインの環境で同じ VM 名およびホスト名を使用できるようにします。	<a href="#">システムポリシーの設定, (248 ページ)</a>
Cisco UCS Central アカウントに対するベアメタルサーバのプロビジョニングポリシーの作成をサポート	このリリース以降は、Cisco UCS Central アカウントにベアメタルサーバのプロビジョニングポリシーを作成し、このポリシーにサービスリクエストを作成できます。	<a href="#">ベアメタルサーバのプロビジョニングポリシーの設定, (214 ページ)</a>  <a href="#">カタログタイプを使用したサービスリクエストの作成: ベアメタル, (359 ページ)</a>

機能	説明	参照先
ベアメタルサーバのプロビジョニングポリシーの設定を変更	<p>このリリースでは、次のような変更が行われました。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• ポリシーの範囲をサーバまたはサーバプールを含むように設定できます。</li> <li>• サーバの設定にポリシーを使用している間は、ユーザが特定のサーバを選択できるようにすることができます。</li> <li>• サーバに1つ以上のWindows OS イメージを選択できるようになりました。</li> <li>• サーバのIPアドレスの割り当てに静的IPプールポリシーを使用できます。</li> <li>• ベアメタルサーバのサーバホスト名の検証にホスト名検証ポリシーを使用できます。</li> </ul>	ベアメタルサーバのプロビジョニングポリシーの設定、(214ページ)
ベアメタルサーバのプロビジョニングポリシーの検証をサポート	ベアメタルサーバのプロビジョニングポリシーを作成した後、そのポリシーをユーザインターフェイスから検証し、ポリシーに問題があるかどうかを判断できます。	ベアメタルサーバのプロビジョニングポリシーの検証、(220ページ)

機能	説明	参照先
ベアメタルサーバのサービスリクエストの作成を変更	<p>ベアメタルサーバのサービスリクエストを作成する手順に次の変更が加えられました。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>ベアメタルサーバカタログを実行する必要があるサーバを選択する機能。</li> <li>概算コストに関する情報が表示されます。</li> <li>導入アセスメントに関する情報が使用できるようになりました。</li> </ul>	<a href="#">カタログタイプを使用したサービスリクエストの作成：ベアメタル、（359 ページ）</a>
汎用アカウントおよびレガシーアカウントのクレデンシャルポリシー作成のサポート	<p>汎用アカウントにクレデンシャルポリシーを作成し、そのポリシーを新しい汎用クレデンシャルポリシーの取得のワークフロータスクに使用できます。</p> <p>サポートされているレガシーアカウントタイプのクレデンシャルポリシーを作成できます。</p>	<a href="#">クレデンシャルポリシーの設定、（236 ページ）</a>
CDドライブまたはDVDドライブからのISOイメージのマウント解除機能	<p>仮想マシン上のCD/DVDドライブにすでに接続されているISOイメージのマウントを解除できます。</p>	<a href="#">CD/DVDドライブとしてのISOイメージのマウント解除、（476 ページ）</a>
既存ライセンスの置換をサポート	<p>グラフィカルユーザーインターフェイスを使用して、既存のライセンスを置き換えることができます。さらに、システムでアクティブになっていないライセンスのリストを表示できます。</p>	<a href="#">ライセンスの交換、（143 ページ）</a> <a href="#">非アクティブライセンス情報の表示、（145 ページ）</a>

機能	説明	参照先
ベアメタルサーバのプロビジョニングの電子メール通知をサポート	カタログを使用したベアメタルサーバのプロビジョニングのステータスに関する電子メール通知を受信するユーザの電子メール通知を設定できます。	ベアメタルサーバカタログの作成、 (343 ページ)
アカウントのポリシー変更の動的更新をサポート	クレデンシャルポリシーを使用して作成したアカウントの場合、ポリシーに加えられた変更はアカウント上で動的に更新されます。	クレデンシャルポリシーの設定、 (236 ページ)
ユーザの最近のログイン履歴の表示をサポート	[すべてのユーザのログイン履歴 (All Users Login History)] オプションを使用すると、システム内のすべてのユーザのログイン関連情報を確認できます。	ユーザの最近のログイン履歴の確認、 (63 ページ)
ユーザのセッション管理機能を導入	管理者は、システム内の同時セッションの最大数を設定できます。	ユーザのセッション制限の設定、 (64 ページ)
ダッシュボードにより機能を強化	[ダッシュボード (Dashboard)] オプションを有効にした後は、他のダッシュボードを追加したり、それらを削除することができます。	追加ダッシュボードの作成、 (430 ページ) ダッシュボードの削除、 (430 ページ)
統合ビューを導入	ナビゲーションメニューの [統合 (Converged)] ビューを使用すると、サイトのグラフカルな表現、それらのサイト内のポッド、およびサイトの各ポッド内のアカウントを表示できます。	統合ビューの使用、 (183 ページ)
カタログのテーブルビューを導入	デフォルトでは、カタログはタイルビューで表示されます。これをテーブルビューに切り替えるオプションが利用できるようになりました。	カタログ管理について、 (329 ページ)

機能	説明	参照先
VMのプロビジョニング時にソケットあたりのコア数を設定する機能	ソケットあたりのコア数の許可値をコンピューティングポリシーで定義できます。  ソケットあたりのコアの数は、サービスリクエストの作成時、VMの導入時、VMのクローニング時、またはVMのプロビジョニング時にオーケストレーションワークフローを使用して設定できます。	<a href="#">コンピューティングポリシーの作成</a> , (210 ページ) <a href="#">標準カタログタイプを使用したサービスリクエストの作成</a> , (350 ページ) <a href="#">VMの複製</a> , (467 ページ)
ユーザが使用できるようにするロールの指定をサポート	ユーザロールの追加時に、ロールの可用性を有効または無効にできます。	<a href="#">ユーザロールの追加</a> , (33 ページ)
オブジェクト検索を導入	[オブジェクト検索 (Object Search)]機能を使用すると、特定の表形式レポートを[物理 (Physical)]メニューおよび[仮想 (Virtual)]メニューで、または[ワークフロー (Workflows)]画面および[カスタムタスク (Custom Tasks)]画面で検索できます。	<a href="#">オブジェクト検索の実行</a> , (142 ページ)
システムブロードキャストメッセージにタイマーを追加する機能	管理者は、ユーザインターフェイスにログインしているすべてのユーザにブロードキャストメッセージを送信できます (タイマー付きまたはタイマーなし)。	<a href="#">ブロードキャストメッセージの送信</a> , (84 ページ)



## 第 2 章

### 概要

---

この章は、次の項で構成されています。

- [Cisco UCS Director, 9 ページ](#)
- [Cisco UCS Director ユーザ インターフェイスへの非セキュアな接続の設定, 24 ページ](#)
- [最初のログイン, 25 ページ](#)
- [システム設定の推奨順序, 26 ページ](#)
- [Cisco UCS Director のホスト名の設定, 28 ページ](#)
- [暗号方式の操作, 28 ページ](#)

## Cisco UCS Director

Cisco UCS Director は、エンドツーエンドの管理やオーケストレーション、自動化に関する、安全性の高い包括的なソリューションです。Cisco や他社の広範なデータ インフラストラクチャ コンポーネントおよび Cisco UCS と Cisco Nexus プラットフォームに基づく、業界をリードするコンバージドインフラストラクチャソリューションに対応します。サポート対象のインフラストラクチャ コンポーネントとソリューションの完全なリストについては、『[Cisco UCS Director Compatibility Matrix](#)』を参照してください。

Cisco UCS Director は、次の標準テンプレートを使用する 64 ビットのアプライアンスです。

- Open Virtualization Format (OVF) for VMware vSphere
- Virtual Hard Disk (VHD) for Microsoft Hyper-V

### Cisco UCS Director を介した管理

Cisco UCS Director は、Cisco UCS を通じてコンピューティング層およびネットワーク層の統合を拡張し、データ センター インフラストラクチャ コンポーネントの包括的な可視性と管理性を提供します。サポート対象のシスコとシスコ以外のコンポーネントの設定、管理およびモニタのために Cisco UCS Director を使用できます。実行できるタスクには次のものがあります。

- すべての Cisco UCS サーバおよびコンピューティングアプリケーションを対象にした、サービス プロファイルとテンプレートの作成、複製、および導入
- コンバージドインフラストラクチャにおける組織の使用状況、トレンドおよび容量の継続的なモニタリング。たとえば、すべてのデータセンター間の仮想マシン (VM) の使用率を示すヒートマップを表示できます。
- 一貫したリピート可能な方法によるコンバージドインフラストラクチャへの容量の導入や追加。
- Cisco UCS ドメインや Cisco Nexus ネットワーク デバイスなどの、データセンター コンポーネントの管理、監視、報告。
- 物理インフラストラクチャへのサービスを追加するための仮想サービス カタログの拡張。
- 非仮想化ワークロードで動作する仮想化ワークロードに対応するための安全なマルチテナント環境の管理。

### Cisco UCS Director による自動化とオーケストレーション

Cisco UCS Director では、自動化サービスを提供するワークフローを構築し、ワークフローを公開して、そのサービスをオンデマンド方式でユーザに提供できます。社内の他のエキスパートと連携して、ポリシーを迅速かつ簡単に作成できます。単純または複雑なプロビジョニングおよび設定プロセスを自動化するための Cisco UCS Director ワークフローを構築できます。

一度構築および検証された後は、これらのワークフローは誰が実行しても常に同じように実行できます。経験豊富なデータセンター管理者がそれらを実行したり、または、ロールベースアクセスコントロールを実行してユーザや顧客が必要に応じてセルフサービスベースでワークフローを実行できるようにすることができます。

Cisco UCS Director を使用して、サポート対象のシスコおよびシスコ以外のさまざまなハードウェアおよびソフトウェアのデータセンター コンポーネント間で多岐にわたるタスクおよび使用例を自動化できます。自動化できる使用例には以下のものがありますが、これらに限定されません。

- VM のプロビジョニングとライフサイクル管理
- ネットワーク リソースの設定とライフサイクル管理
- ストレージ リソースの設定とライフサイクル管理
- テナント オンボーディングとインフラストラクチャの設定
- アプリケーション インフラストラクチャのプロビジョニング
- セルフサービス カタログと VM プロビジョニング
- オペレーティング システムのインストールを含むベア メタル サーバのプロビジョニング

## 機能と利点

Cisco UCS Director の機能と利点を以下に示します。

機能	利点
中央管理	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 管理者に物理、仮想、ベアメタル環境全体のシステムをプロビジョニング、モニタリング、管理する単一インターフェイスを提供</li> <li>• 統合型ダッシュボード、レポート、ヒートマップを提供し、トラブルシューティングとパフォーマンスのボトルネックを削減</li> </ul>
セルフサービスカタログ	<ul style="list-style-type: none"> <li>• エンドユーザが IT の規定したポリシーやガバナンスに準拠して、新しいインフラストラクチャインスタンスの発注および導入が可能</li> </ul>
適応型のプロビジョニング	<ul style="list-style-type: none"> <li>• リアルタイムで利用可能な機能、内部ポリシー、アプリケーションワークロード要件を使用して、リソースの可用性を最適化</li> </ul>
動的な容量管理	<ul style="list-style-type: none"> <li>• インフラストラクチャリソースの継続的なモニタリングにより、リアルタイムでキャパシティプランニング、使用率、管理を改善</li> <li>• 使用率の低いリソースや使用率の高いリソースを特定</li> </ul>
複数のハイパーバイザのサポート	<ul style="list-style-type: none"> <li>• VMware ESX、ESXi、Microsoft Hyper-V、Red Hat の各ハイパーバイザをサポート</li> </ul>
コンピューティングの管理	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 物理、仮想、ベアメタルの各サーバおよびブレードをプロビジョニング、モニタリング、管理</li> <li>• エンドユーザがスナップショットを介して仮想マシンのライフサイクル管理とビジネス継続性を実現可能</li> <li>• 管理者にサーバ使用率のトレンド分析を提供</li> </ul>
ネットワーク管理	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 物理スイッチ、仮想スイッチ、動的ネットワークトポロジをポリシーベースでプロビジョニング</li> <li>• 管理者が VLAN、仮想ネットワークインターフェイスカード (vNIC)、ポートグループ、ポートプロファイル、IP および動的ホスト制御プロトコル (DHCP) 割り当て、アクセスコントロールリスト (ACL) を、複数のネットワークデバイスにわたって設定可能</li> </ul>

機能	利点
ストレージの管理	<ul style="list-style-type: none"> <li>ファイラ、仮想ファイラ (vFiler)、論理ユニット番号 (LUN)、ボリュームをポリシーベースでプロビジョニングおよび管理可能</li> <li>統合ダッシュボードにより、管理者が組織的な使用状況、トレンド、キャパシティ分析の詳細を包括的に可視性可能</li> </ul>

## 物理的および仮想的な管理機能

物理サーバの管理	仮想コンピューティング管理
<ul style="list-style-type: none"> <li>設定と変更の検出および収集</li> <li>物理サーバのモニタリングと管理</li> <li>ポリシーベースでのサーバプロビジョニングの実行</li> <li>ブレードの電力管理</li> <li>サーバライフサイクルの管理</li> <li>サーバの使用傾向と容量分析の実行</li> <li>Preboot execution Environment (PXE) ブート管理機能を使用したベアメタルプロビジョニングの実行</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>仮想コンピューティング環境の検出、収集、モニタリング</li> <li>ポリシーベースでのプロビジョニングと動的リソース割り当ての実行</li> <li>ホストサーバの負荷と電力の管理</li> <li>VMライフサイクルとスナップショットの管理</li> <li>VMの容量とスプロール、ホストの使用率を評価するための分析の実行</li> </ul>

<p><b>物理ストレージの管理</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• ストレージ ファイラの検出、収集、モニタリング</li> <li>• ポリシーベースでの vFiler プロビジョニングの実行</li> <li>• ボリュームのプロビジョニングとマッピング</li> <li>• 論理ユニット番号 (LUN) と iGroup インスタンスの作成とマッピング</li> <li>• SAN ゾーン管理の実行</li> <li>• Network-Attached Storage (NAS) および SAN ベースのストレージのモニタリングと管理</li> <li>• ストレージ実装のベスト プラクティスと推奨事項</li> </ul>	<p><b>仮想ストレージの管理</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• vFiler のストレージおよびストレージプールの検出、収集、モニタリング</li> <li>• シックおよびシンクライアントを対象としたポリシーベースでのストレージプロビジョニングの実行</li> <li>• 新しいデータストアの作成と仮想デバイスコンテキスト (VDC) へのマッピング</li> <li>• VM へのディスクの追加とサイズ調整</li> <li>• 組織でのストレージ使用率のモニタリングと管理</li> <li>• 仮想ストレージの傾向と容量分析の実行</li> </ul>
<p><b>物理ネットワークの管理</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 物理ネットワーク要素の検出、収集、モニタリング</li> <li>• 複数のスイッチ間のプロビジョニング VLAN</li> <li>• ネットワーク デバイスに対するアクセスコントロール リスト (ACL) の設定</li> <li>• ストレージ ネットワークの設定</li> <li>• 動的ネットワーク トポロジの実装</li> </ul>	<p><b>仮想ネットワークの管理</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• VM へのネットワークの追加</li> <li>• IP および DHCP 割り当てによるポリシーベースでのプロビジョニングの実行</li> <li>• VLAN およびプライベート VLAN に対する仮想ネットワークインターフェイスカード (vNIC) の設定と接続</li> <li>• VM のためのポート グループとポート プロファイルの作成</li> <li>• 組織での仮想ネットワークの使用率のモニタリング</li> </ul>

## モデルベースのオーケストレーション

Cisco UCS Director には、1000 以上のタスクや、すぐに使用できるワークフローなどが含まれているタスク ライブラリが用意されています。モデルベースのオーケストレーションとワークフローデザイナーを利用すると、インフラストラクチャの管理タスクと運用タスクをカスタマイズおよび自動化できます。また、個々の必要性に対応して、システムの拡張とカスタマイズを進められます。

次の表は、タスク ライブラリの 1 日目から 3 日目のメンテナンスおよび更新アクティビティを示しています。

1 日目	2 日目	3 日目
<ul style="list-style-type: none"> <li>• テナントの追加</li> <li>• 申請者の移行または追加</li> <li>• エンタープライズ システムとの統合</li> <li>• エンドユーザポータルを利用する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• パフォーマンスのモニタリング</li> <li>• ミーティングおよび請求の開始</li> <li>• テナントの変更の管理</li> <li>• セルフサービス Infrastructure as a Service (IaaS)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• ハードウェアの追加とアップグレード</li> <li>• 用途変更</li> </ul>

## Cisco UCS Director の新しいユーザインターフェイス

Cisco UCS Director では、管理ポータルに新しいユーザインターフェイスが導入されています。ここでは、この新しいユーザインターフェイスの主な機能のいくつかについて説明します。

### ナビゲーションの変更

以前のリリースでは、メインメニューバーを使用して画面にアクセスできました。このリリース以降、すべてのナビゲーション オプションは、水平メインメニューバーではなく、サイドバーから使用できるようになりました。そのため、ユーザインターフェイスにメインメニューバーは表示されなくなりました。マウスを使用してカーソルをサイドナビゲーションバーのオプションの上に合わせ、メニュー オプションのいずれかをクリックします。

### ユーザインターフェイスのラベルの廃止

ユーザインターフェイスに、[追加 (Add)]、[編集 (Edit)]、[削除 (Delete)]、[エクスポート (Export)]、[フィルタ (Filter)] などのアクションのラベルが表示されなくなりました。これらのアクションはアイコンのみで表示されます。マウスを使用してカーソルをアイコンの上に合わせると、そのアイコンを使用して実行できるアクションがラベルに表示されます。また、ユーザインターフェイス内のアクションやステータス メッセージのすべてのアイコンが変更できます。詳細については、[Cisco UCS Director ユーザインターフェイスのアイコンの変更](#)、(165 ページ) を参照してください。

### クラシック ビューの可用性

デフォルトでは、Cisco UCS Director にログインすると、新しいユーザインターフェイスが表示されます。現在はクラシック ビューと呼ばれる以前のバージョンのインターフェイスも使用できます。ただし、このクラシックビューは、ユーザインターフェイスから間もなく削除される予

定です。クラシック ビューへのアクセス方法については、[クラシック ビューへの切り替え](#)、(22 ページ) を参照してください。

### ダッシュボードを使用した詳細レポートへのアクセス

ダッシュボードが有効になっている場合は、これが Cisco UCS Director にログインしたときに最初に表示される画面になります。通常はこのダッシュボードを使用して重要なレポートや頻繁にアクセスするレポートのウィジェットを追加します。ダッシュボードに表示されたレポートをクリックすると、より詳細な情報が表示されるユーザインターフェイスの画面にすぐにアクセスできるようになりました。

詳細については、次を参照してください。 [ダッシュボードの有効化](#)、(430 ページ)

さらに、複数のダッシュボードを作成したり、必要がなくなった場合はそれらを削除することができます。詳細については、[追加ダッシュボードの作成](#)、(430 ページ) および [ダッシュボードの削除](#)、(430 ページ) を参照してください。

### 表形式レポートの機能強化

次に、ユーザインターフェイスで使用できる表形式レポートで強化された機能のいくつかを示します。

- 右クリックによる他のオプションの表示

行を選択した後でマウスを右クリックすると、選択した行に関連するオプションのリストが表示されます。

- フィルタおよび検索

Cisco UCS Director インターフェイスの表形式レポートで [フィルタ (Filter) ] オプション、または [検索 (Search) ] オプションが使用できます。表形式レポートの任意のページで [フィルタ (Filter) ] オプションを使用すると、表形式レポートの結果を特定の基準で絞り込むことができます。この [フィルタ (Filter) ] オプションは複数のページにまたがっていない表形式レポートで使用できます。複数のページにまたがる表形式レポートの場合は、[検索 (Search) ] オプションを使用して検索結果を絞り込みます。

- [お気に入り (Favorites) ] メニューへの表形式レポートの追加

ユーザインターフェイスに表示された表形式レポートをお気に入りとして追加できます。お気に入りとしてレポートを追加すると、[お気に入り (Favorites) ] メニューからそのレポートにアクセスできます。

- 列のサイズ変更

表形式レポートに表示された列は、最後の列を含めて、すべてサイズを変更できます。列を展開した後、水平スクロールバーを使用すると、画面全体を表示できます。

- データがない場合に表示される情報メッセージ

レポートに表示する情報がない場合は、次のメッセージが表示されます。

[データがありません (No Data) ]

## タブの削除と復元

使用できるタブが複数ある画面では、その画面に表示するタブの数を選択できます。画面上でタブを閉じると、そのタブはユーザインターフェイスに表示されるタブの行に表示されなくなります。そのタブを画面に戻すには、画面の右端に表示されている下向きの矢印をクリックします。使用可能ではあるものの非表示になっているタブのドロップダウンリストが表示されます。復元するタブを選択します。



(注) 2個以上のタブが画面にあるときにのみ、タブを削除または復元できます。この機能は、インターフェイスの画面に表示されるタブが1個のみの場合は使用できません。

## レポート機能の強化

次に、ユーザインターフェイスで使用できる、強化されたレポート機能の一部を示します。

- 円グラフと棒グラフの導入

円グラフまたは棒グラフを個々に PDF、CSV、または XLS の形式でエクスポートしたり、ダッシュボードに追加できます。

- [他のレポート (More Reports) ] オプションの可用性

[他のレポート (More Reports) ] オプションを使用すると、クラウドアカウントのリソースに関する特定のデータについてのレポートを生成できるようになりました。詳細については、[クラウドアカウントの追加レポートの生成](#)、(21 ページ) を参照してください。

## ランディング ページ

Cisco UCS Director 管理者ポータルにログインすると、ランディングページが表示されます。ランディングページに表示される要素は、どのように表示を設定しているかによって異なります。デフォルトでは、ポータルにログインすると統合ビューが表示されます。

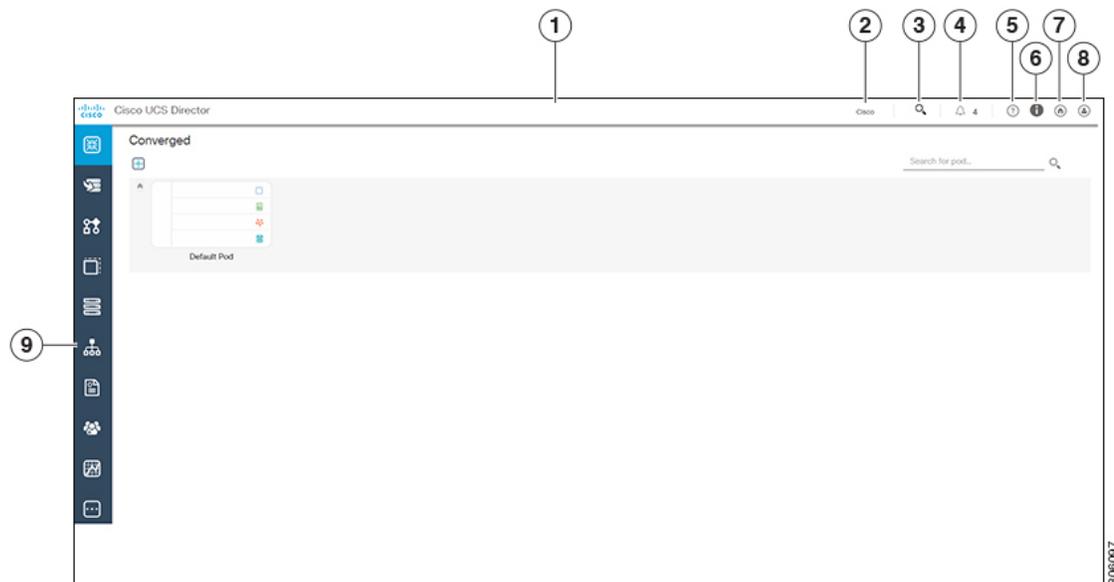
次に、ランディング ページで利用可能な要素を示します。

- ヘッダー：画面の上部に表示されます。
- ナビゲーション メニュー：メインナビゲーションバーが画面の上部に表示されなくなりました。画面左側の垂直メニューとして利用できるようになっています。



(注) このメニューにスクロールバーはありません。使用可能なスペースに収まる数のオプションのみが表示されます。一部のオプションは、画面を最小化したり、または拡大すると表示されないことがあります。使用可能なオプションをすべて表示するには、[サイトマップ (Site Map)] をクリックします。

図 1: 新しいユーザインターフェイス



番号	名前	説明
1	ヘッダー	メニューなどの頻繁にアクセスする要素が含まれています。ヘッダーは常に表示されています。
2	リンク	ソフトウェアの仕様に関する情報にアクセスできるシスコの Web サイトへのリンクが提供されています。
3	[検索 (Search)] アイコン	ポータルで特定のレポートを検索してそのレポートに直接移動できます。
4	[診断システム メッセージ (Diagnostic System Messages)] アイコン	ログに記録されている診断システムメッセージの数を表示します。このリンクをクリックすると、詳細情報を表示できる [診断システム メッセージ (Diagnostic System Messages)] 画面が表示されます。

番号	名前	説明
5	[ヘルプ (Help) ]アイコン	管理者ポータル オンライン ヘルプ システムにリンクしています。
6	[バージョン情報 (About) ]アイコン	ソフトウェアについての情報と、現在インストールされているバージョンが表示されます。
7	[ホーム (Home) ]アイコン	ユーザインターフェイスの任意の場所からランディング ページに戻ります。
8	[ユーザ (User) ]アイコン	プロフィールの編集、ダッシュボードの有効化または無効化、ユーザインターフェイスのクラシック ビューへのアクセス、およびログアウトができます。
9	[操作 (Navigation) ]メニュー	垂直のナビゲーションメニューであり、インターフェイスのさまざまな画面にアクセスできます。

## 共通のアイコン

次の表に、ユーザインターフェイスで使用される共通のアイコンについての情報を示します。アイコンの上にカーソルを合わせると、アイコンの名前を確認できます。一部のアイコンは、使用するコンテキストに応じて名前が異なる場合があります。

アイコン	名前	説明
	検索 (Search)	検索はヘッダーと個々の画面で使用できます。ユーザインターフェイスのレポートを検索するには、ヘッダーで [検索 (Search) ] をクリックします。レポートの1つ以上の項目を検索するには、個々の画面で [検索 (Search) ] をクリックします。
	アラート (Alert)	アラートはヘッダーで使用できます。診断システム メッセージを表示するには、[アラート (Alert) ] をクリックします。
	ユーザ (User)	ユーザはヘッダーで使用できます。プロフィールにアクセス、ログアウト、またはユーザインターフェイスのクラシック表示にアクセスするには、[ユーザ (User) ] をクリックします。
	エクスポート (Export)	エクスポートは個別の画面で使用できます。画面に表示されるレポートの内容をエクスポートするには、[エクスポート (Export) ] をクリックします。

アイコン	名前	説明
	インポート (Import)	インポートは個別の画面で使用できます。ファイルをインポートするには、[インポート (Import)] をクリックします。
	更新 (Refresh)	更新は個別の画面で使用できます。画面に表示されるデータを更新するには、[更新 (Refresh)] をクリックします。
	詳細の表示 (View Details)	詳細の表示は個別の画面で使用できます。テーブル内の選択した行に関する詳細を表示するには、[詳細の表示 (View Details)] をクリックします。
	テーブル ビュー (Table View)	テーブル ビューはアプリケーション コンテナおよびカタログに使用できます。アプリケーションコンテナまたはカタログを各アプリケーション コンテナまたはカタログの詳細とともに表形式で表示するには、[テーブル ビュー (Table View)] をクリックします。
	タイル ビュー (Tile View)	タイル ビューは、カタログとアプリケーション コンテナに使用できます。カタログとアプリケーション コンテナをアイコンのタイルビューで表示するには、[タイル ビュー (Tile View)] をクリックします。このビューでは、カタログ項目またはアプリケーション コンテナの詳細を表示するには、アイコンをクリックする必要があります。
	作成 (Create)	作成は個別の画面で使用できます。VMディスクのような新しいオブジェクトを作成するには、[作成 (Create)] をクリックします。
	追加 (Add)	追加は個別の画面で使用できます。既存のカタログ フォルダにカタログ項目を追加するといった、既存のオブジェクトに項目を追加するには、[追加 (Add)] をクリックします。このアイコンの名前には、[カタログの追加 (Add Catalog)] のように追加する項目が含まれる場合があります。

アイコン	名前	説明
	値のリストの展開 (Expand a list of values)	<p>値のリストは、IPアドレスやVMなど、1つ（単一選択）または複数（複数選択）の項目を選択する必要がある場合にフォームで使用できます。</p> <p><b>ヒント</b> 複数選択リストには、最初の列ラベルの横のテーブルの左上隅にチェックボックスが表示されます。このチェックボックスをクリックすると、テーブル内のすべての項目が選択されます。</p> <p>アイテム ラベルは、[展開 (Expand)] アイコンの右側に表示されます。[展開 (Expand)] アイコンをクリックしてリストを表示し、項目を選択します。</p> <p>項目が選択されると、その値は [展開 (Expand)] アイコンとラベルの右側にカッコで囲まれて表示されます。</p>
	値のリストを折りたたむ (Collapse a list of values)	<p>値のリストが展開されると、[展開 (Expand)] アイコンが [折りたたみ (Collapse)] アイコンに変わります。[折りたたみ (Collapse)] アイコンをクリックすると、リストの下に表示される内容などの値のリストが非表示になります。</p>
	編集 (Edit)	<p>編集は個別の画面で使用できます。カタログ項目または VM ディスクなどの既存のオブジェクトを変更するには、[編集 (Edit)] をクリックします。</p>
	削除 (Delete)	<p>削除は個別の画面で使用できます。カタログ項目または VM ディスクなどのオブジェクトを削除するには、[削除 (Delete)] をクリックします。</p>
	カスタムアクション (Custom Actions)	<p>このアイコンは、関連付けられたアイコンがない追加タスクを表します。また、ユーザ インターフェイスで使用可能なデフォルトのアイコンを表します。</p>
	お気に入り (Favorites)	<p>[お気に入り (Favorite)] メニューにページを追加します。このオプションを使用すると、頻繁にアクセスするページを簡単に表示できるようになります。</p>
	フィルタ (Filter)	<p>ページにフィルタリング パラメータを提供します。</p>



- (注) [管理 (Administration)] > [ユーザ インターフェイス設定 (User Interface Settings)] > [アイコン管理 (Icon Management)] 画面から、アイコンの完全なリストとその詳細を表示できます。これらのアイコンは、[アクションアイコンセット (Action Icon Set)] カテゴリにリストされます。

## 統合ビュー

管理者ポータルに初めてログインすると、デフォルトで [統合 (Converged)] 画面が表示されます。この画面には、環境内に現在設定されているポッドが表示されます。この画面から、他のポッドを追加したり、またはポッドを選択してポッド内のリソースに関する追加詳細情報を表示できます。通常、表示される追加詳細情報は次のとおりです。

- 仮想リソース
- コンピューティング リソース
- ネットワーク リソース
- ストレージ リソース

これらのリソースのいずれかをクリックすると、画面に追加情報が表示されます。

Cisco UCS Director では、ユーザ インターフェイスにログインするときに表示される最初の画面としてダッシュボードを設定できます。詳細については、[ダッシュボードの有効化](#)、(430 ページ) を参照してください。

## クラウド アカウントの追加レポートの生成

仮想クラウドアカウントまたは物理ポッドアカウントのいずれかに特定のレポートを生成するには、[他のレポート (More Reports)] オプションを使用します。この [他のレポート (More Reports)] オプションを使用して生成されるレポートのタイプはアカウントのタイプによって異なります。

このレポートの生成に使用できる情報がない場合は、データがないことを示すメッセージが表示されます。

### 手順

- ステップ 1** 追加レポートを生成するクラウドアカウントまで移動します。
- ステップ 2** [その他のアクション (More Actions)] ドロップダウンメニューで、[他のレポート (More Reports)] をクリックします。
- ステップ 3** [タイプ (Type)] ドロップダウンリストと [レポート (Report)] ドロップダウンリストから、生成するレポートのタイプを選択します。  
レポートが生成され、ユーザ インターフェイスに表示されます。

**ステップ 4** (任意) [設定 (Settings)] > [レポートのエクスポート (Export Report)] をクリックし、エクスポートするレポートの形式を選択します。

## クラシック ビューへの切り替え

クラシック ビューは、Cisco UCS Director の以前のバージョンの管理者ユーザ インターフェイスです。新しいユーザ インターフェイスからクラシック ビューに切り替えることができます。

ヘッダーで、ユーザ名のアイコンをクリックし、[クラシック ビュー (Classic View)] を選択します。以前のインターフェイスが新しいブラウザ タブに開きます。

この [クラシック ビュー (Classic View)] オプションは、[enableClassicView] パラメータを [true] に設定している場合にのみ、ユーザ インターフェイスで使用できます。

```
cd /opt/infra/web_cloudmgr/apache-tomcat/webapps/app/ux/resources/  
vi appConfigs.json  
enableClassicView=true
```

このオプションを表示するには、ユーザ インターフェイスを更新する必要があります。

## Cisco UCS Director のガイド付きセットアップウィザード

Cisco UCS Director には、重要な機能の設定をサポートする一連のウィザードが組み込まれています。使用可能なガイド付きセットアップウィザードは次のとおりです。

- [デバイス検出 (Device Discovery)] : このウィザードでは、デバイスを検出し、そのデバイスをポッドに割り当てることができます。
- [システム初期設定 (Initial System Configuration)] : このウィザードでは、ライセンスのアップロード、SMTP、NTP、および DNS サーバのセットアップなど、Cisco UCS Director をセットアップするための初期タスクを実行できます。
- [vDC の作成 (vDC Creation)] : このウィザードでは、プライベートクラウドで VM をプロビジョニングするために必要なポリシーを設定できます。
- [FlexPod の設定 (FlexPod Configuration)] : このウィザードでは FlexPod のアカウントをセットアップできます。
- [Vblock ポッド設定 (Vblock Pod Configuration)] : このウィザードでは、アカウントを検出し、Vblock ポッドに割り当てることができます。
- [VSPEX ポッド設定 (VSPEX Pod Configuration)] : このウィザードでは、アカウントを検出し、VSPEX ポッドに割り当てることができます。
- [仮想SANポッド設定 (Virtual SAN Pod Configuration)] : このウィザードでは、仮想 SAN ポッドを設定し、デバイスを追加することができます。

最初に Cisco UCS Director にログインすると、[ウィザードエクスプローラ (Wizard Explorer)] ウィンドウが表示されます。このウィンドウから、使用可能なガイド付きセットアップウィザードの詳細を表示し、そのいずれかを選択して起動できます。ログインするたびにこの [ウィザードエ

クスプローラ (Wizard Explorer) ] を表示させないようにするには、[今後このページを表示しない (Do not show this page again) ] チェック ボックスをオンにします。これらのウィザードを後で起動するには、[管理 (Administration) ] > [ガイド付きセットアップ (Guided Setup) ] をクリックします。

システムが提供するこれらのウィザードに加え、以前に設定したワークフローからウィザードを作成することもできます。詳細については、[ワークフローからのウィザードの作成](#)、(23 ページ) を参照してください。

## ワークフローからのウィザードの作成

有効なワークフローをウィザードに変換して Cisco UCS Director に保存することができます。

### はじめる前に

Cisco UCS Director で、有効なワークフローをする必要があります。

### 手順

- ステップ 1 [管理 (Administration) ] > [ガイド付きセットアップ (Guided Setup) ] を選択します。
- ステップ 2 [ガイド付きセットアップ (Guided Setup) ] ページで [セットアップ (Setup) ] をクリックします。
- ステップ 3 [その他のアクション (More Actions) ] ドロップダウンメニューで、[ワークフローから作成 (Create from Workflow) ] をクリックします。
- ステップ 4 [ワークフローからのウィザードの作成 (Create Wizard from Workflow) ] 画面で、次を含む必須フィールドに値を入力します

名前	説明
[ワークフローの選択 (Select Workflow) ] フィールド	ウィザードに変換するワークフローのチェックボックスをオンにします。  ワークフローを選択した後、[検証 (Validate) ] をクリックし、ワークフローが有効であることを確認します。
[静的フィールドの値を引き継ぐ (Carry over static field values) ] チェック ボックス	静的な値を選択したワークフローのタスクからウィザードのページに引き継ぐ場合に、このチェック ボックスをオンにします。
[ラベル (Label) ] フィールド	ウィザードの名前。これは、ウィザードの基本名です。
[2 つ目のラベル (Second Label) ] フィールド	ウィザードの 2 次名。
[説明 (Description) ] フィールド	ウィザードの説明。

名前	説明
[アイコンイメージ (Icon Image) ]フィールド	リストを展開し、このワークフローに関連付けるアイコンのチェック ボックスをオンにします。

**ステップ 5** [送信 (Submit) ] をクリックします。

### 次の作業

次の作業を実行できます。

- ウィザードを起動する。
- ウィザードを編集する。
- ウィザードの詳細を表示する。
- インターフェイスでのウィザードの順序を変更する。
- ウィザードを削除する。

## Cisco UCS Director ユーザインターフェイスへの非セキュアな接続の設定

デフォルトでは、Cisco UCS Director ユーザインターフェイスはセキュア モードで起動します。セキュア モード、非セキュア モード (HTTP) のユーザインターフェイスの起動をバイパスしたい場合には、次の手順に従う必要があります。

### 手順

**ステップ 1** root としてログインします。

**ステップ 2** /Opt/infra/web\_cloudmgr/apache-tomcat/conf/server.xml ファイルを次のように変更します。

a) 既存の 8080 ポート コネクタのタグをコメントアウトします。

```
<!--
<Connector port="8080" protocol="HTTP/1.1"
redirectPort="443" maxHttpHeaderSize="65536"
URIEncoding = "UTF-8"/>
-->
```

b) 新しい 8080 ポート コネクタのタグとして次を追加します。

```
<Connector port="8080" protocol="HTTP/1.1"
maxThreads="150" minSpareThreads="4"
connectionTimeout="20000"
URIEncoding = "UTF-8" />
```

**ステップ 3** /opt/infra/web\_cloudmgr/apache-tomcat/webapps/app/WEB-INF/web.xml ファイルに <security-constraint> タグをコメントします。

```
<!--
<security-constraint>
<web-resource-collection>
<web-resource-name>HTTPSOnly</web-resource-name>
<url-pattern>/*</url-pattern>
</web-resource-collection>
<user-data-constraint>
<transport-guarantee>CONFIDENTIAL</transport-guarantee>
</user-data-constraint>
</security-constraint>
-->
```

**ステップ 4** サービスを再起動します。

**ステップ 5** ユーザ インターフェイスを起動してシステムにログインします。  
次の URL フォーマットを使用して非セキュア モードでシステムにログインできます。

http://<IP-Address>:8080、または、http://<IP-Address>

セキュアおよび非セキュア モードの両方のユーザ インターフェイスが起動できます。

## 最初のログイン

ホスト名と IP アドレスのいずれかと次のクレデンシャルを使用して、Cisco UCS Director にログインします。

- ユーザ名 : admin
- パスワード : admin

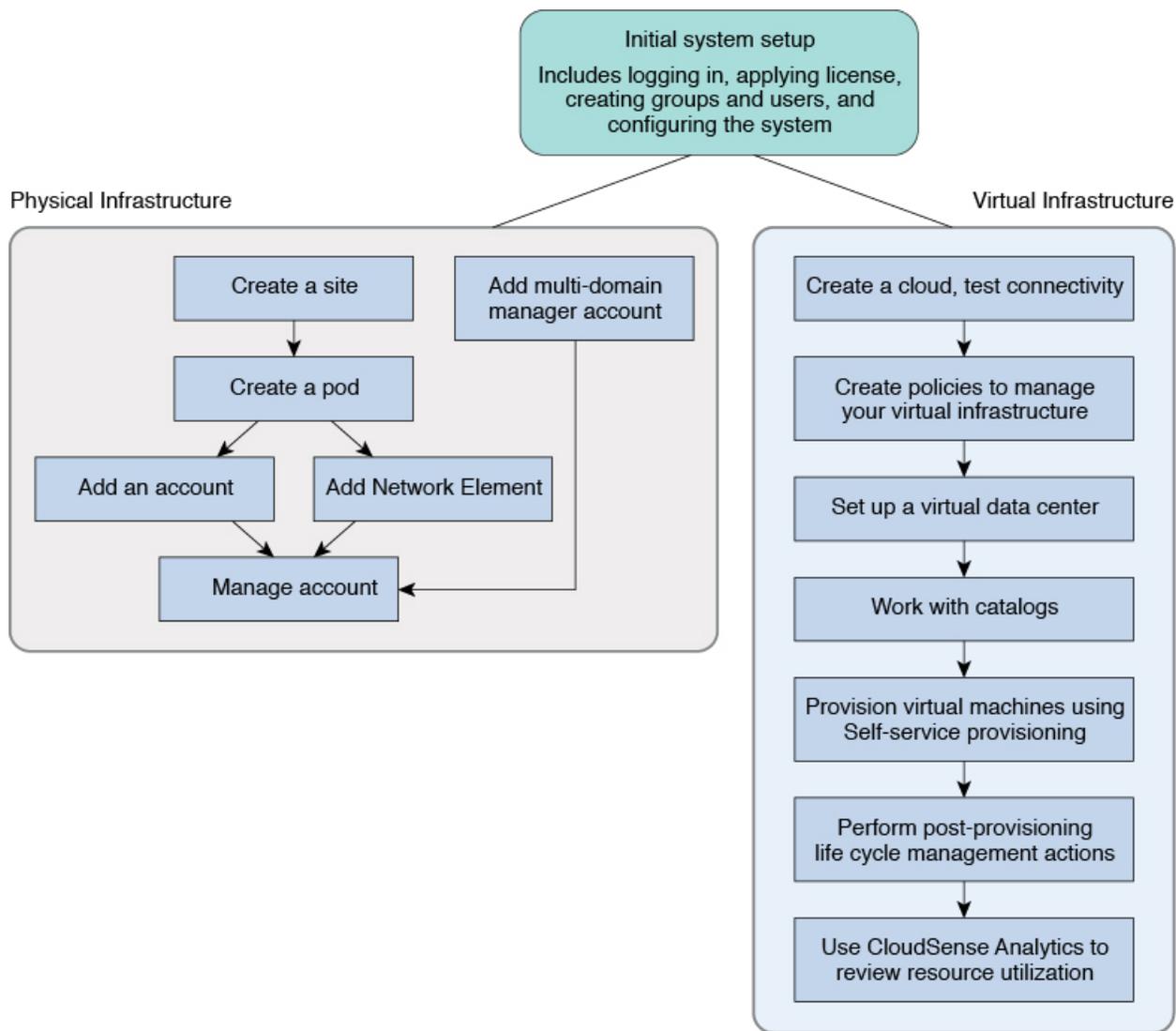


(注) 最初の管理アカウントを作成した後、起動時の管理アカウントを削除するか、少なくともデフォルトのパスワードを変更することをお勧めします。エンドユーザポータルにアクセスするには、有効な電子メールアドレスが必要です。

## システム設定の推奨順序

次の図は、Cisco UCS Director を使用した環境設定のワークフローを示しています。

図 2：環境設定のサンプルワークフロー



環境を設定するときは、以下の章を参照してください。

名前	章	説明
初期設定	2、3、 4、5	ライセンスの適用、管理者プロファイルの設定、グループの作成、およびユーザの作成の方法について説明します。言語サポートへ

名前	章	説明
		のアクセス、ポータル カスタマイズの適用、およびシステム設定の方法を習得します。
物理インフラストラクチャ	[6]	任意でのポッドと物理アカウントの追加、ネットワーク要素の追加、接続のテスト、およびアカウント検出の検証の方法について説明します。  (注) 必要に応じて、物理インフラストラクチャよりも前に仮想インフラストラクチャを作成できます。
仮想インフラストラクチャ	7	クラウドの作成、クラウド検出および接続の検証、接続のテスト、および vCenter プラグインの表示の方法について説明します。
ポリシー	8	コンピューティング ポリシー、ストレージポリシー、ネットワーク ポリシー、およびシステム ポリシーを作成して管理する方法について説明します。Microsoft Windows カタログの OS ライセンスを追加する方法を習得します。
仮想データセンター	9	グループ、ポリシー、およびコスト モデルに対する特定の環境を管理するための VDC の設定方法、および VDC レベルでのリソース制限の設定と管理の方法について説明します。
カタログ	10	カタログ項目の設定方法、カタログへのアクセス権限をグループに追加する方法、およびカタログ項目の公開方法について説明します。
Self-Service プロビジョニング	11	プロビジョニング サービス リクエストの作成および管理方法について説明します。
Multi-Disk プロビジョニング	12	1 つまたは複数のデータストアで VM ディスク プロビジョニングを設定する方法を説明します。また、テンプレートで追加ディスクごとに個別のディスク ポリシーを設定する手順についても説明します。
チャージバック	13	チャージバック サマリーレポート、詳細レポート、およびリソース アカウンティング レポートを作成する方法について説明します。コスト モデルが定義され、部門や組織内のポリシーに割り当てられる仕組みも示します。
クラウド管理	18	クラウドを完全に可視化し、リソース使用率をモニタし、クラウドスタック（クラウド、クラスタ、ホストサーバ、および仮想マシン）を管理する方法について説明します。
ライフサイクル	15	VM 電源管理、VM サイズ変更、VM スナップショット管理など、プロビジョニング後のライフサイクル管理アクションを VM に対して実行する方法について説明します。

名前	章	説明
CloudSense	16	Cisco UCS Director で生成可能な、基礎となる物理インフラストラクチャと仮想インフラストラクチャに関する分析レポートについて説明します。

## Cisco UCS Director のホスト名の設定

コマンドプロンプトを使用して Cisco UCS Director のアプライアンスのデフォルト ホスト名を変更した場合は、この手順に従って /etc/hosts ファイル内の名前が更新されていることを確認する必要があります。

### 手順

**ステップ 1** root アカウントを使用してアプライアンスに SSH でログインします。

**ステップ 2** /etc/hosts を編集して新しいホスト名を更新します。  
単一ノードの環境では、次の形式でファイルを更新する必要があります。

```
vi /etc/hosts
```

```
198.51.100.1 new_hostname
```

マルチノードの環境では、他のノードのホスト名が変更された場合は、プライマリ ノード、サービス ノード、およびデータベース ノード上で IP アドレスと新しいホスト名を更新する必要があります。次に例を示します。

```
vi /etc/hosts
```

```
198.51.100.1 new_hostname
```

Ex:

```
198.51.100.2 UCSD_Primary
```

```
198.51.100.3 UCSD_Service
```

```
198.51.100.4 UCSD_Inv_DB
```

```
198.51.100.5 UCSD_Mon_DB
```

**ステップ 3** アプライアンス サービスを再起動します。

## 暗号方式の操作

Cisco UCS Director の管理者は、プロパティファイルの暗号を有効または無効にすることができます。潜在的なセキュリティ リスクがある暗号を有効にすると、Cisco UCS Director ログ ファイルに警告メッセージが記録されます。デフォルトでは、リスクをもたらすすべての暗号化は無効になっています。/opt/infra/inframgr のフォルダにある

defaultEnabledCipherSuites.properties ファイルから特定の暗号方式を設定できます。詳細については、[暗号化使用率の編集](#)、(29 ページ) を参照してください。

また、システム要件に基づいて暗号化標準設定で優先順位を変更できます。デフォルトでは、標準的な暗号化は優先順位に従ってリストされています。

Cisco UCS Director は、Java SE ランタイム環境に、Java Cryptography Extension (JCE) ポリシーのファイルの「limited」と「strong」をサポートしています。JCE ポリシーを「unlimited」と「strong」に変更したい場合、Oracle の Web サイトから最新の JCE ポリシー ファイルをダウンロードしてインストールする必要があります。詳細については、[Java Cryptography Extension \(JCE\) の最新のポリシー ファイルのインストール](#)、(29 ページ) を参照してください。

## 暗号化使用率の編集

CipherSuites は defaultEnabledCipherSuites.properties ファイルに保持されます。ネットワークのアプリケーション要件に基づき、このファイルの暗号化のリストを編集できます。

常に標準的な暗号化を使用し、破損している、あるいは危険な暗号化をアプリケーションに対して有効化しないことを推奨します。

### 手順

- 
- ステップ 1 defaultEnabledCipherSuites.properties ファイルを開きます。  
これらは iopt/infra/inframgr/ ディレクトリで使用可能です。
  - ステップ 2 壊れた暗号を使用するには、ファイル内に暗号を配置し、コメントアウトします。
  - ステップ 3 ファイルを保存します。
  - ステップ 4 サービスを再起動します。
- 

## Java Cryptography Extension (JCE) の最新のポリシー ファイルのインストール

最新の JCE ポリシー ファイルをダウンロードしてインストールするには、次の手順を実行します。

### 手順

- 
- ステップ 1 \$JAVA\_HOME/jre/lib/security フォルダ内の次のファイルのバックアップを取得します。
    - local\_policy.jar
    - US\_export\_policy.jar

- ステップ 2** <http://www.oracle.com/technetwork/java/javase/downloads.index.html>で Oracle Java SE のダウンロードのページにアクセスします。
- ステップ 3** [追加リソース (Additional Resources) ]セクションまでスクロールして Java Cryptography Extension (JCE) Unlimited Strength Jurisdiction Policy File を見つけます。
- ステップ 4** Java Cryptography Extension (JCE) Unlimited Strength Jurisdiction Policy Files for JDK/JRE 8 zip ファイルをダウンロードします。
- ステップ 5** zip ファイルを解凍します。
- ステップ 6** local\_policy.jar と US\_export\_policy.jar を \$JAVA\_HOME/jre/lib/security フォルダ内で交換します。
- ステップ 7** アプリケーションを再起動します。
-



## 第 3 章

# ユーザとグループの管理

---

この章は、次の項で構成されています。

- [ユーザの役割, 31 ページ](#)
- [ユーザ ロールの追加, 33 ページ](#)
- [ユーザの追加, 34 ページ](#)
- [ユーザ タイプの管理, 37 ページ](#)
- [デフォルトのユーザ権限, 37 ページ](#)
- [ユーザ アカウント ステータスの管理, 65 ページ](#)
- [MSP 管理者ロール, 67 ページ](#)
- [グループの管理, 69 ページ](#)
- [管理プロファイルの設定, 81 ページ](#)
- [ユーザ アクセス プロファイルの管理, 85 ページ](#)
- [顧客組織のブランディング, 107 ページ](#)
- [ユーザ グループのブランディング, 108 ページ](#)
- [顧客組織のブランディング, 109 ページ](#)
- [ログイン ページのブランディング, 111 ページ](#)

## ユーザの役割

Cisco UCS Director は次のユーザ ロールをサポートしています。

- すべてのポリシー管理者
- 請求管理者
- コンピューティング管理者

- グループ管理者：ユーザを追加する権限を持つエンド ユーザ。このユーザは エンド ユーザ ポータル を使用できます。
- IS 管理者
- MSP 管理者
- ネットワーク管理者
- 演算子
- サービス エンド ユーザ：このユーザは エンド ユーザ ポータル の表示および使用のみが可能です。
- ストレージ管理者
- システム管理者

これらのユーザ ロールはシステムで定義されており、Cisco UCS Director においてデフォルトで使用できます。あるロールがデフォルトで使用できるかどうかは、[ユーザ (User)] ページの [デフォルトのロール (Default Role)] 列に [はい (Yes)] とマークされているかどうかで判別できます。



(注) 管理者は Cisco UCS Director にて、カスタム定義されたユーザ ロールまたはシステムが提供するユーザ ロールをユーザに割り当てることができます。付け加えて、最後の時点で、ユーザが割り当てられていた役割の情報を見ることができます。詳細については、『[ユーザ用ユーザロール情報の表示](#)』を参照してください。

システムの管理者は、ユーザ ロールについて次のタスクを実行できます。

- システムのカスタム ユーザ ロールを作成し、この役割を持つユーザ アカウントを作成するか、既存のユーザにロールを割り当てます。  
新しいユーザ ロールを作成する場合は、ユーザ ロールを管理者またはエンド ユーザに割り当てるかを指定できます。ユーザ ロールの作成の詳細については、[ユーザ ロールの追加、\(33 ページ\)](#) を参照してください。特定のロールに対するユーザ アカウントの作成の詳細については、[ユーザの追加、\(34 ページ\)](#) を参照してください。
- デフォルトのロールを含む既存のユーザ ロールを変更し、そのロールに関連付けられたユーザのメニュー設定と読み取り/書き込み権限を変更します。  
ロールのメニュー設定と権限を変更する手順は、ユーザ ロールを追加する手順と同じです。

### ユーザに対する VM 管理タスクの実行権限の定義

従来は、VM 管理タスクの権限をエンド ユーザのみに提供するには、エンド ユーザセルフサービス ポリシーで権限を定義するしかありませんでした。現在では、システムの管理者は、VM 管理タスクを実行する権限をどのユーザ ロールでも割り当てることができるようになりました。そのロールに割り当てられたユーザは、選択された VM 管理関連タスクを実行できます。ただし、エンド ユーザ用の VM 管理タスクを割り当てるには、エンド ユーザセルフサービス ポリシーを使

用して、最初にこのユーザ ロールのすべての VM 管理アクションを無効にし、次にそのほかの管理タスクをすべて有効にする必要があります。

システムの全てのユーザが、VM 管理タスクを実行する機能は、以下によって決定されます。

- ユーザがマッピングされているユーザ ロールに割り当てられた権限
- VDC にマッピングされているエンドユーザセルフサービス ポリシー。

最新リリースにアップグレードした場合、VM 管理タスクを実行する権限は、以前のリリースバージョンにおいて作成したエンドユーザのセルフサービスポリシーに保持されます。ただし、ユーザ ロールに対しては、現在のリリースへのアップグレード後に設定した権限が優先されます。



(注) MSP 管理者や、グループ管理者のような他の管理者に VM 管理タスクの実行権限を付与するには、ユーザ ロールにのみその権限を定義します。

## ユーザ ロールの追加

Cisco UCS Director に任意の数のユーザ ロールを作成し、そのロールのユーザのメニュー設定を定義できます。

### 手順

- ステップ 1 [管理 (Administration) ] > [システム (System) ] を選択します。
- ステップ 2 [システム (System) ] ページで [ユーザ ロール (User Role) ] をクリックします。
- ステップ 3 [追加 (Add) ] をクリックします。
- ステップ 4 [ユーザ ロールの追加 (Add User Role) ] 画面で、次の必須フィールドに値を入力します。

名前	説明
[ユーザロール (User Role) ] フィールド	ユーザ ロールの名前。
[ロールタイプ (Role Type) ] ドロップダウンリスト	追加するロールのタイプを選択します。次のいずれかを設定できます。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• [管理 (Admin) ]</li> <li>• [エンドユーザ (End user) ]</li> </ul>
[説明 (Description) ] フィールド	追加するロールの説明。

名前	説明
[拒否ロールのリスト (Deny Role List) ]	<p>ユーザロールのリストを展開し、拒否するロールのチェックボックスをオンにします。これにより、そのロールで作成されたユーザが拒否されます。</p> <p>たとえば、管理者が、クローン機能を使用してシステム内に新しいグループ管理ロールを作成するとします。このグループ管理ロールには、グループ管理ルールより高い権限を持つユーザを作成する能力が必要です。しかしデフォルトのグループ管理ロールでは、グループ管理ルールよりも高い権限を持つユーザは作成できません。この場合、管理者は、拒否リストでデフォルトのグループ管理ロールを選択する必要があります。</p> <p>ロールを確認したら、[検証 (Validate) ] をクリックします。</p>

**ステップ 5** [次へ (Next) ] をクリックします。

**ステップ 6** [メニュー設定 (Menu Settings) ] ペインで、このロールで定義されたユーザに表示するメニューオプションをオンにします。

**ステップ 7** [次へ (Next) ] をクリックします。

**ステップ 8** [ユーザ権限 (User Permissions) ] ペインでは、ユーザの利用可能なタスクに関連付けられた読み取りまたは書き込み権限を選択します。

**ステップ 9** [送信 (Submit) ] をクリックします。

### 次の作業

このタイプのロールを持つユーザを作成します。

## ユーザの追加

### はじめる前に

グループにユーザを追加する前に、そのグループが作成されていることを確認してください。

手順

- ステップ 1 [管理 (Administration) ] > [ユーザとグループ (Users and Groups) ] を選択します。
- ステップ 2 [ユーザとグループ (Users and Groups) ] ページで [ユーザ (Users) ] をクリックします。
- ステップ 3 [追加 (Add) ] をクリックします。
- ステップ 4 [ユーザの追加 (Add User) ] 画面で、次の必須フィールドに値を入力します。

フィールド名	説明
[ユーザロール (User Role) ] ドロップダウンリスト	ユーザのロールタイプを選択します。  (注) このドロップダウンリストには、Cisco UCS Director で使用可能なすべてのユーザロールが表示されます。デフォルトで使用可能なユーザロールに加えて、追加のユーザロールを作成できます。ユーザロールの作成の詳細については、 <a href="#">ユーザロールの追加</a> 、(33 ページ) を参照してください。
[ユーザグループ (User Group) ] ドロップダウンリスト	ユーザがアクセスできるグループを選択します。すでに使用可能なグループを選択するか、または新しいグループを追加できます。  (注) このフィールドは、ユーザロールとしてサービスエンドユーザまたはグループ管理者を選択している場合のみ表示されます。
[MSP 組織 (MSP Organization) ] ドロップダウンリスト	ユーザが管理する MSP 組織を選択します。現在使用可能な組織を選択するか、または新しい組織を追加できます。  (注) このフィールドは、ユーザロールとして [MSP 管理者 (MSP Admin) ] を選択している場合のみ表示されます。
[ログイン名 (Login Name) ] フィールド	ログイン名。 次のような特殊文字を使用できます。()&-_~\$%^{ }!'@

フィールド名	説明
[パスワード (Password) ] フィールド	パスワード。  (注) ユーザに対して Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) 認証を設定している場合は、ローカル サーバではなく LDAP サーバでのみパスワードが検証されます。
[パスワードの確認 (Confirm Password) ] フィールド	確認のためにパスワードを再入力します。
[ユーザの連絡先電子メール (User Contact Email) ] フィールド	電子メールアドレス。  (注) 電子メールアドレスは、サービス リクエストのステータスと承認についてグループ所有者に通知するために必要です。
[名 (First Name) ] フィールド	名。
[姓 (Last Name) ] フィールド	姓。
[電話 (Phone) ] フィールド	ユーザの電話番号です。
[住所 (Address) ] フィールド	ユーザのオフィス住所です。
[ユーザ無効化の日付を設定 (Set user disable date) ] チェック ボックス	システムでユーザアカウントを無効にする日時を設定する場合にオンにします。ユーザアカウントが無効になると、ユーザはシステムにログインできなくなります。  この日付から 1 週間前に、アカウントが無効になることを知らせる電子メール メッセージがユーザに送信されます。この自動メール メッセージは、PeriodicNotificationToUserTask システム タスクによって生成され、送信されます。  指定された日時に、ユーザアカウントが自動的に無効になります。ユーザが指定した日付にシステムにログインすると、ログインセッションは自動的に終了します。

フィールド名	説明
[ロケール (Locale) ] ドロップダウン リスト	<p>このユーザのシステムの言語を個別に選択します。デフォルトでは、原語は英語に設定されています。</p> <p>このユーザがログインすると、ユーザインターフェイスは、選択した言語で表示されます。このロケールの選択は、このユーザにのみ適用されます。</p>
[クラシック ビューでログイン (Login with Classic View) ] チェック ボックス	<p>このユーザがシステムにログインしたときに、クラシック ビュー ユーザ インターフェイスを起動する場合にオンにします。</p> <p>他のユーザ用にクラシック ビューを起動するようにシステムを設定する機能は、リリース 6.5 でのみ使用できます。クラシック ビューは、続くリリースでは削除されます。</p>

ステップ 5 [追加 (Add) ] をクリックします。

#### 次の作業

ユーザが含まれている行をクリックし、[プロファイルの管理 (Manage Profiles) ] をクリックして、オプションでそのユーザに複数のロールを割り当てます。

## ユーザタイプの管理

システム管理者には、ユーザの追加、ユーザとユーザ権限の表示、さまざまなシステム コンポーネントに対する個別ユーザの読み取り/書き込み権限の変更など、Cisco UCS Director を管理するためのすべての権限が与えられています。

ほとんどのユーザは、ログイン時に管理ポータルにアクセスします。

## デフォルトのユーザ権限

各管理ユーザには、Cisco UCS Director にアクセスするための一連の権限が付与されています。ユーザ権限のタイプは次のとおりです。

- 読み取り：読み取り権限を持つ管理ユーザは、ファイルの読み取りのみを行うことができます。

- 書き込み：書き込み権限を持つ管理ユーザは、ファイルの読み取り、書き込み、および変更を行うことができます。この権限では、ファイルの削除または名前変更を実行できます。
- 読み取り/書き込み：読み取り/書き込み権限が付与されている管理者ユーザは、ファイルの読み取りおよび書き込みを実行できます。

## ユーザの役割および権限

次の表に、各ユーザ ロールにマップされている権限のリストを示します。

権限	すべてのポリシー管理者	請求管理者	コンピューティング管理者	グループ管理者	IS 管理者	MSP 管理者	ネットワーク管理者	演算子	サービスエンドユーザ	ストレージ管理者
仮想コンピューティング	読み取り		読み取り	読み取り/書き込み	読み取り	書き込み	読み取り	読み取り	読み取り/書き込み	読み取り
VM ラベル	書き込み		書き込み	書き込み	書き込み	書き込み	書き込み	書き込み	書き込み	書き込み
vDC への VM 割り当て	書き込み				書き込み			書き込み		
仮想ストレージ	読み取り		読み取り		読み取り		読み取り	読み取り		読み取り
仮想ネットワーク	読み取り		読み取り		読み取り		読み取り	読み取り		読み取り
物理コンピューティング	読み取り/書き込み		読み取り/書き込み		読み取り		読み取り	読み取り	読み取り	読み取り
物理ストレージ	読み取り/書き込み		読み取り	読み取り/書き込み	読み取り		読み取り	読み取り	読み取り	読み取り/書き込み

権限	すべてのポリシー管理者	請求管理者	コンピューティング管理者	グループ管理者	IS 管理者	MSP 管理者	ネットワーク管理者	演算子	サービスエンドユーザ	ストレージ管理者
物理ネットワーク	読み取り/書き込み		読み取り		読み取り		読み取り/書き込み	読み取り/書き込み		読み取り
グループのサービスリクエスト	読み取り/書き込み	読み取り	読み取り	読み取り/書き込み	読み取り	読み取り/書き込み	読み取り	読み取り/書き込み	読み取り/書き込み	読み取り
サービスリクエストの作成	書き込み			書き込み		書き込み		書き込み	書き込み	
承認者のサービスリクエスト	読み取り/書き込み		読み取り/書き込み	読み取り/書き込み	読み取り/書き込み	読み取り/書き込み	読み取り/書き込み	読み取り	読み取り/書き込み	読み取り/書き込み
予算	読み取り	読み取り/書き込み	読み取り		読み取り	読み取り/書き込み	読み取り	読み取り		読み取り
リソースアカウントティング	読み取り	読み取り	読み取り	読み取り	読み取り	読み取り	読み取り	読み取り	読み取り	読み取り
チャージバック	読み取り	読み取り	読み取り	読み取り	読み取り	読み取り	読み取り	読み取り	読み取り	読み取り
システム管理者	読み取り		読み取り		読み取り		読み取り	読み取り		読み取り
ユーザとグループ	読み取り		読み取り		読み取り		読み取り	読み取り		読み取り
仮想アカウント	読み取り		読み取り		読み取り		読み取り	読み取り		読み取り

権限	すべてのポリシー管理者	請求管理者	コンピューティング管理者	グループ管理者	IS 管理者	MSP 管理者	ネットワーク管理者	演算子	サービスエンドユーザ	ストレージ管理者
カタログ	読み取り		読み取り	読み取り	読み取り	読み取り	読み取り	読み取り	読み取り	読み取り
vDC	読み取り		読み取り	読み取り	読み取り/書き込み	読み取り	読み取り	読み取り	読み取り	読み取り
コンピューティングポリシー	読み取り/書き込み		読み取り/書き込み		読み取り		読み取り	読み取り		読み取り
ストレージポリシー	読み取り/書き込み		読み取り		読み取り		読み取り	読み取り		読み取り/書き込み
ネットワークポリシー	読み取り/書き込み		読み取り		読み取り		読み取り/書き込み	読み取り		読み取り
導入ポリシー	書き込み		読み取り		読み取り/書き込み		読み取り	読み取り		読み取り
サービス提供	読み取り/書き込み		読み取り		読み取り/書き込み		読み取り	読み取り		読み取り
リソース制限レポート	読み取り	読み取り	読み取り	読み取り	読み取り	読み取り	読み取り	読み取り	読み取り	読み取り
グループユーザ	読み取り		読み取り	読み取り/書き込み	読み取り	読み取り/書き込み	読み取り	読み取り		読み取り

権限	すべてのポリシー管理者	請求管理者	コンピューティング管理者	グループ管理者	IS 管理者	MSP 管理者	ネットワーク管理者	演算子	サービスエンドユーザ	ストレージ管理者
CloudSense レポート	読み取り	読み取り/書き込み	読み取り	読み取り/書き込み	読み取り		読み取り	読み取り	読み取り	読み取り
CloudSense アセスメントレポート	読み取り	読み取り/書き込み	読み取り				読み取り			読み取り
オーケストレーション	読み取り/書き込み		読み取り/書き込み		読み取り/書き込み		読み取り/書き込み			読み取り/書き込み
検出	読み取り	読み取り	読み取り		書き込み		読み取り/書き込み			読み取り/書き込み
自動化モジュールを開く										
CS 共有レポート				読み取り/書き込み		読み取り			読み取り	
CS 共有評価				読み取り/書き込み						
リモート VM アクセス										

権限	すべてのポリシー管理者	請求管理者	コンピューティング管理者	グループ管理者	IS 管理者	MSP 管理者	ネットワーク管理者	演算子	サービスエンドユーザ	ストレージ管理者
モバイルアクセス設定										
エンドユーザのチャージバック				読み取り		読み取り			読み取り	
UCSD クラスタ										
リソースグループ			読み取り/書き込み		読み取り/書き込み		読み取り/書き込み			読み取り/書き込み
タグライブラリ			読み取り/書き込み		読み取り/書き込み		読み取り/書き込み			読み取り/書き込み
導入可能性に関するアセスメントの許可	はい	はい	はい	はい	はい	はい	はい	はい	はい	はい

## サーバ管理の権限

以前のリリースでは、物理サーバの管理手段として、Cisco UCS Director では次のオプションしか提供していませんでした。

- 物理コンピューティングの読み取り
- 物理コンピューティングの書き込み

管理者が書き込み権限を有効にすると、ユーザは環境内のすべての Cisco UCS 物理サーバを管理できるようになります。今回のリリースでは、[物理コンピューティングの書き込み (Write Physical Computing)] 権限内に、次の新しい権限のカテゴリが導入されました。

- 物理サーバの管理
- その他の物理コンピューティング管理

[物理サーバ管理 (Physical Server Management)] を有効にすると、Cisco UCS サーバの管理のみ可能になります。このカテゴリには、次のアクションが含まれます。

- 電源管理 (電源オン/オフ)
- グループ管理 (グループの割り当ておよびグループの割り当て解除)
- インベントリ管理
- サーバ管理
- サーバアクセス

ユーザに対してこれらのタスクを有効にすると、ユーザはポータルでこれらのアクションやタスクを表示できるようになります。ただし、エンドユーザの場合、これらのタスクを有効にしても、Cisco UCS サーバでは次のタスクしか実行できません。

- 電源オン/オフ
- グループのおよび関連付け解除。
- KVM コンソール

[その他の物理コンピューティング管理 (Other Physical Compute Management)] を有効にすると、環境内の他の UCS サーバの管理タスクが有効になります。この権限が有効になっているユーザは、サービス プロファイルまたは VLAN の操作などのタスクを実行できます。

## すべてのポリシー管理者

次の表は、全ポリシー管理者が実行できるアクションのリストを示します。

操作	権限	
	読み取り	書き込み
仮想コンピューティング	はい	
VM ラベル		はい
vDC への VM 割り当て		はい
仮想ストレージ	はい	

操作	権限	
仮想ネットワーク	はい	
物理コンピューティング	はい	はい
物理ストレージ	はい	はい
物理ネットワーク	はい	はい
グループのサービス リクエスト	はい	はい
サービス リクエストの作成		はい
承認者のサービス リクエスト	はい	はい
予算	はい	
リソース アカウンティング	はい	
チャージバック	はい	
システム管理者	はい	
ユーザとグループ	はい	
仮想アカウント	はい	
カタログ	はい	
vDC	はい	
コンピューティング ポリシー	はい	はい
ストレージポリシー	はい	はい
導入ポリシー		はい
ネットワークポリシー	はい	はい
サービス提供	はい	はい

操作	権限	
リソース制限レポート	はい	
グループ ユーザ	はい	
CloudSense レポート	はい	
CloudSense アセスメント レポート	はい	
オーケストレーション	はい	はい
検出	はい	
自動化モジュールを開く		
CS 共有レポート		
CS 共有評価		
リモート VM アクセス		
モバイルアクセス設定		
エンドユーザのチャージ バック		
リソース アカウンティング の書き込み		
UCSD クラスタ		
リソース グループ		
タグ ライブラリ		
導入可能性に関するアセス メントの許可		はい

## 請求管理者

次の表は、請求管理者が実行できるアクションのリストを示します。

操作	権限	
	読み取り	書き込み
仮想コンピューティング		
VM ラベル		
vDC への VM 割り当て		
仮想ストレージ		
仮想ネットワーク		
物理コンピューティング		
物理ストレージ		
物理ネットワーク		
グループのサービス リクエスト	はい	
承認者のサービス リクエスト		
予算	はい	はい
リソース アカウンティング	はい	
チャージバック	はい	
システム管理者		
ユーザとグループ		
仮想アカウント		
カタログ		
vDC		
コンピューティング ポリシー		
ストレージ ポリシー		

操作	権限	
導入ポリシー		
ネットワーク ポリシー		
サービス提供		
リソース制限レポート	はい	
グループ ユーザ		
CloudSense レポート	はい	はい
CloudSense アセスメント レポート	はい	はい
オーケストレーション		
検出	はい	
自動化モジュールを開く		
CS 共有レポート		
CS 共有評価		
リモート VM アクセス		
モバイルアクセス設定		
エンド ユーザのチャージ バック		
リソース アカウンティン グの書き込み		はい
UCSD クラスタ		
リソース グループ		
タグ ライブラリ		
導入可能性に関するアセス メントの許可		はい

## コンピューティング管理者

次の表は、コンピューティング管理者が実行できるアクションのリストを示します。

操作	権限	
	読み取り	書き込み
仮想コンピューティング	はい	
VM ラベル		はい
vDC への VM 割り当て		
仮想ストレージ	はい	
仮想ネットワーク	はい	
物理コンピューティング	はい	はい
物理ストレージ	はい	
物理ネットワーク	はい	
グループのサービスリクエスト	はい	
承認者のサービスリクエスト	はい	はい
予算	はい	
リソース アカウティング	はい	
チャージバック	はい	
システム管理者	はい	
ユーザとグループ	はい	
仮想アカウント	はい	
カタログ	はい	

操作	権限	
vDC	はい	
コンピューティングポリシー	はい	はい
ストレージポリシー	はい	
導入ポリシー	はい	
ネットワークポリシー	はい	
サービス提供	はい	
リソース制限レポート	はい	
グループ ユーザ	はい	
CloudSense レポート	はい	
CloudSense アセスメント レポート	はい	
オーケストレーション	はい	はい
検出	はい	
自動化モジュールを開く		
CS 共有レポート		
CS 共有評価		
リモート VM アクセス		
モバイル アクセス 設定		
エンド ユーザのチャージバック		

操作	権限	
リソース アカウン ティングの書き込み		
UCSD クラスタ		
リソース グループ	はい	はい
タグ ライブラリ	はい	はい
導入可能性に関する アセスメントの許可		はい

## グループ管理者

次の表は、グループ管理者が実行できるアクションのリストを示します。

タスク	権限	
	読み取り	書き込み
仮想コンピューティング	はい	はい
VM ラベル		はい
vDC への VM 割り当て		
仮想ストレージ		
仮想ネットワーク		
物理コンピューティング		
物理ストレージ	はい	はい
物理ネットワーク		
グループのサービス リク エスト	はい	はい
サービス リクエストの作 成		はい
承認者のサービス リクエ スト	はい	はい

タスク	権限	
予算		
リソース アカウンティング	はい	
チャージバック	はい	
システム管理者		
ユーザとグループ		
仮想アカウント		
カタログ	はい	
vDC	はい	
コンピューティング ポリシー		
ストレージ ポリシー		
導入ポリシー		
ネットワーク ポリシー		
サービス提供		
リソース制限レポート	はい	
グループ ユーザ	はい	はい
CloudSense レポート	はい	はい
CloudSense アセスメント レポート		
オーケストレーション		
検出		
自動化モジュールを開く		
CS 共有レポート	はい	はい

タスク	権限	
CS 共有評価		
リモート VM アクセス		
モバイル アクセス設定		
エンドユーザのチャージバック	はい	
リソース アカウンティングの書き込み		
UCSD クラスタ		
リソース グループ		
タグ ライブラリ		
導入可能性に関するアセスメントの許可		はい

## IS 管理者

次の表は、IS 管理者が実行できるアクションのリストを示します。

タスク	権限	
	読み取り	書き込み
仮想コンピューティング	はい	
VM ラベル		はい
vDC への VM 割り当て		はい
仮想ストレージ	はい	
仮想ネットワーク	はい	
物理コンピューティング	はい	
物理ストレージ	はい	
物理ネットワーク	はい	

タスク	権限	
グループのサービスリクエスト	はい	
承認者のサービスリクエスト	はい	はい
予算	はい	
リソースアカウンティング	はい	
チャージバック	はい	
システム管理者	はい	
ユーザとグループ	はい	
仮想アカウント	はい	
カタログ	はい	
vDC	はい	はい
コンピューティング ポリシー	はい	
ストレージポリシー	はい	
導入ポリシー	はい	はい
ネットワークポリシー	はい	
サービス提供	はい	はい
リソース制限レポート	はい	
グループ ユーザ	はい	
CloudSense レポート	はい	
CloudSense アセスメント レポート	はい	
オーケストレーション	はい	はい
検出		はい

タスク	権限	
自動化モジュールを開く		
CS 共有レポート		
CS 共有評価		
リモート VM アクセス		
モバイル アクセス設定		
エンドユーザのチャージバック		
リソースアカウンティングの書き込み		
UCSD クラスタ		
リソース グループ	はい	はい
タグ ライブラリ	はい	はい
導入可能性に関するアセスメントの許可		はい

## ネットワーク管理者

次の表は、ネットワーク 管理者が実行できるアクションのリストを示します。

タスク	権限	
	読み取り	書き込み
仮想コンピューティング	はい	
VM ラベル		はい
vDC への VM 割り当て		
仮想ストレージ	はい	
仮想ネットワーク	はい	

タスク	権限	
物理コンピューティング	はい	
物理ストレージ	はい	
物理ネットワーク	はい	はい
グループのサービス リクエスト	はい	
承認者のサービス リクエスト	はい	はい
予算	はい	
リソース アカウンティング	はい	
チャージバック	はい	
システム管理者	はい	
ユーザとグループ	はい	
仮想アカウント	はい	
カタログ	はい	
vDC	はい	
コンピューティング ポリシー	はい	
ストレージポリシー	はい	
導入ポリシー	はい	
ネットワークポリシー	はい	はい
サービス提供	はい	
リソース制限レポート	はい	
グループ ユーザ	はい	
CloudSense レポート	はい	

タスク	権限	
CloudSense アセスメントレポート	はい	
オーケストレーション	はい	はい
検出	はい	はい
自動化モジュールを開く		
CS 共有レポート		
CS 共有評価		
リモート VM アクセス		
モバイル アクセス設定		
エンドユーザのチャージバック		
リソース アカウンティングの書き込み		
UCSD クラスタ		
リソース グループ	はい	はい
タグ ライブラリ	はい	はい
導入可能性に関するアセスメントの許可		はい

## 演算子

次の表は、オペレーターが実行できるアクションのリストを示します。

タスク	権限	
	読み取り	書き込み
仮想コンピューティング	はい	
VM ラベル		はい

タスク	権限	
vDC への VM 割り当て		はい
仮想ストレージ	はい	
仮想ネットワーク	はい	
物理コンピューティング	はい	
物理ストレージ	はい	
物理ネットワーク	はい	
グループのサービス リクエスト	はい	はい
サービス リクエストの作成		はい
承認者のサービス リクエスト	はい	はい
予算	はい	
リソース アカウンティング	はい	
チャージバック	はい	
システム管理者	はい	
ユーザとグループ	はい	
仮想アカウント	はい	
カタログ	はい	
vDC	はい	
コンピューティング ポリシー	はい	
ストレージポリシー	はい	
導入ポリシー	はい	

タスク	権限	
ネットワークポリシー	はい	
サービス提供	はい	
リソース制限レポート	はい	
グループ ユーザ	はい	
CloudSense レポート	はい	
CloudSense アセスメント レポート	はい	
オーケストレーション		
検出		
自動化モジュールを開く		
CS 共有レポート		
CS 共有評価		
リモート VM アクセス		
モバイル アクセス設定		
エンド ユーザのチャージ バック		
リソース アカウンティン グの書き込み		
UCSD クラスタ		
リソース グループ		
タグ ライブラリ		
導入可能性に関するアセス メントの許可		はい

## サービス エンド ユーザ

次の表は、サービス エンド ユーザ が実行できるアクションのリストを示します。

タスク	権限	
	読み取り	書き込み
仮想コンピューティング	はい	はい
VM ラベル		はい
vDC への VM 割り当て		
仮想ストレージ		
仮想ネットワーク		
物理コンピューティング	はい	
物理ストレージ	はい	
物理ネットワーク		
グループのサービス リクエスト	はい	はい
サービス リクエストの作成		はい
承認者のサービス リクエスト	はい	はい
予算		
リソース アカウンティング	はい	
チャージバック	はい	
システム管理者		
ユーザとグループ		
仮想アカウント		
カタログ	はい	

タスク	権限	
vDC	はい	
コンピューティング ポリシー		
ストレージ ポリシー		
導入ポリシー		
ネットワーク ポリシー		
サービス提供		
リソース制限レポート	はい	
グループ ユーザ		
CloudSense レポート	はい	
CloudSense アセスメント レポート		
オーケストレーション		
検出		
自動化モジュールを開く		
CS 共有レポート	はい	
CS 共有評価		
リモート VM アクセス		
モバイル アクセス設定		
エンドユーザのチャージバック	はい	
リソース アカウンティングの書き込み		
UCSD クラスタ		
リソース グループ		

タスク	権限	
タグライブラリ		
導入可能性に関するアセスメントの許可		はい

## ストレージ管理者

次の表は、ストレージ管理者が実行できるアクションのリストを示します。

タスク	権限	
	読み取り	書き込み
仮想コンピューティング	はい	
VM ラベル		はい
vDC への VM 割り当て		
仮想ストレージ	はい	
仮想ネットワーク	はい	
物理コンピューティング	はい	
物理ストレージ	はい	はい
物理ネットワーク	はい	
グループのサービス リクエスト	はい	
承認者のサービス リクエスト	はい	はい
予算	はい	
リソース アカウンティング	はい	
チャージバック	はい	
システム管理者	はい	

タスク	権限	
ユーザとグループ	はい	
仮想アカウント	はい	
カタログ	はい	
vDC	はい	
コンピューティング ポリシー	はい	
ストレージポリシー	はい	はい
導入ポリシー	はい	
ネットワークポリシー	はい	
サービス提供	はい	
リソース制限レポート	はい	
グループ ユーザ	はい	
CloudSense レポート	はい	
CloudSense アセスメント レポート	はい	
オーケストレーション	はい	はい
検出	はい	はい
自動化モジュールを開く		
CS 共有レポート		
CS 共有評価		
リモート VM アクセス		
モバイル アクセス設定		
エンド ユーザのチャージバック		

タスク	権限	
リソース アカウンティングの書き込み		
UCSD クラスタ		
リソース グループ	はい	はい
タグ ライブラリ	はい	はい
導入可能性に関するアセスメントの許可		はい

## ユーザ用ユーザ ロール情報の表示

システムの管理者は、カスタム定義されたユーザロールか、システムが提供するユーザロールをユーザに割り当てることができます。グループのすべてのユーザに対して最後の時点での情報を見ることができます。

### 手順

**ステップ 1** [組織 (Organizations)] > [概要 (Summary)] を選択します。

**ステップ 2** [概要 (Summary)] ページでユーザ グループを選択します。

**ステップ 3** [ユーザ (Users)] をクリックします。

このページから、選択したグループに属するユーザの詳細情報を表示できます。[アクセスレベル (Access Level)] カラムには、ユーザが割り当てられているシステム定義のロール、またはカスタム定義されたロールが表示されます。

オプションで、すべてのユーザ情報を表示するために [管理者 (Administration)] > [ユーザとグループ (User and Groups)] > [ユーザ (User)] を選択できます。

グループ管理者がこの情報を表示するには、[組織 (Organizations)] > [ユーザ (User)] を選択します。

## ユーザの最近のログイン履歴の確認

システムの管理者は、すべてのユーザのログイン履歴を確認できます。システムは、すべてのログイン試行に関する次の情報を記録します。

- ログイン名 : ログインしているユーザのユーザ名。

- リモートアドレス：ユーザがログインしたシステムまたはサーバの IP アドレス。
- クライアントの詳細：ブラウザ情報。
- クライアントタイプ：ユーザがブラウザにログインしたか、または REST API にログインしたかに関する情報。
- 認証ステータス：ログイン操作が成功したか、または失敗したかに関する情報。
- コメント：認証の失敗の原因。
- アクセス日時：ユーザのログインアクティビティの日時。

手順

- ステップ 1 [管理 (Administration) ] > [ユーザとグループ (Users and Groups) ] を選択します。
- ステップ 2 [ユーザとグループ (Users and Groups) ] ページで [すべてのユーザ ログイン履歴 (All Users Login History) ] をクリックします。
- ステップ 3 画面に表示される情報を確認します。

## ユーザのセッション制限の設定

ユーザ インターフェイスのセッションおよびシステム上でユーザが開始できる REST API 要求の数を設定できます。

手順

- ステップ 1 [管理 (Administration) ] > [ユーザとグループ (Users and Groups) ] を選択します。
- ステップ 2 [ユーザとグループ (Users and Groups) ] ページで [セッション管理 (Session Management) ] をクリックします。
- ステップ 3 [セッション管理 (Session Management) ] 画面で、次を含む必須フィールドに値を入力します

名前	説明
[ユーザあたりのセッションの最大数 (Maximum Sessions Per User) ] フィールド	ユーザごとにサポートされる同時 GUI セッションの最大数。1 ~ 128 の範囲内の数を入力してください。 デフォルト値は 16 です。
[ユーザあたりの同時 REST API 要求の最大数 (Maximum Concurrent REST API Requests Per User) ] フィールド	ユーザごとにサポートされる同時 REST API 要求の最大数。1 ~ 256 の範囲内の数を入力してください。 デフォルト値は 128 です。

**ステップ 4** [送信 (Submit) ] をクリックします。

### 次の作業

ユーザがこの画面で指定した制限値を超える GUI セッションまたは REST API 要求を開始すると、[システムメッセージ (System Messages) ] 画面にエラーメッセージが表示されます。このシナリオでは、ユーザが自分のセッションや API 要求をクリアするか、または管理者がシェルユーティリティを使用してユーザのセッションや要求をクリアします。詳細については、『Cisco UCS Director Shell Guide, Release 6.5』を参照してください。

## ユーザアカウントステータスの管理

Cisco UCS Director には、システム内のユーザを有効または無効にする機能があります。ユーザレコードを無効にすると、ユーザはシステムにログインできず、API を使用することもできません。さらに、無効化されたユーザレコードは、VM やポートグループの割り当てなどのアクションの実行中に表示される、どの [ユーザ (User) ] フィールドにも表示されません。ただし全システムユーザのレコードは、有効無効にかかわらず、[ユーザ (Users) ] タブに表示されます。このタブの [ステータス (Status) ] カラムは、ユーザアカウントステータスが [無効化 (Disabled) ] または [有効化 (Enabled) ] の場合に表示されます。

次のいずれかの方法でユーザを無効にできます。

- アカウントの作成時に、ユーザを無効にする日付を設定できます。詳細については、[ユーザの追加](#)、(34 ページ) を参照してください。
- [ユーザ (Users) ] ページでユーザを無効にします。詳細については、[Cisco UCS Director ユーザアカウントの無効化](#)、(66 ページ) を参照してください。
- MSP 組織または顧客組織のすべてのユーザを無効にします。詳細については、[グループ内のユーザアカウントを無効にする](#)、(67 ページ) を参照してください。



(注) ユーザアカウントを無効にしても、後でアカウント再有効にできます。

## ユーザのリソースの割り当て解除

Cisco UCS Director では、ユーザに割り当てられたリソースを解除できます。



(注) システムでユーザアカウントを無効にする前に、ユーザへのリソース割り当てを解除できません。

#### 手順

- ステップ 1 [管理 (Administration) ] > [ユーザとグループ (Users and Groups) ] を選択します。
- ステップ 2 [ユーザとグループ (Users and Groups) ] ページで [ユーザ (Users) ] をクリックします。
- ステップ 3 レポートからユーザを選択し、[表示 (View) ] をクリックします。
- ステップ 4 [ユーザの詳細 (User Details) ] 画面で、ユーザの割り当てを解除するリソースを選択します。複数のリソースを選択できます。
- ステップ 5 [Unassign (割り当て解除) ] をクリックします。
- ステップ 6 [リソースの割り当て解除 (Unassign Resource) ] 画面で、[割り当て解除 (Unassign) ] をクリックします。
- ステップ 7 [OK] をクリックします。

#### 次の作業

このリソースは、システム内の別のユーザに割り当てることができます。

## Cisco UCS Director ユーザアカウントの無効化

Cisco UCS Director で特定のユーザアカウントを無効にするには、次の手順を実行します。

#### 手順

- ステップ 1 メニューバーで、[管理 (Administration) ] > [ユーザとグループ (Users and Groups) ] の順に選択します。
- ステップ 2 [ユーザ (Users) ] タブをクリックします。
- ステップ 3 テーブルからユーザアカウントを選択します。複数のユーザを選択できます。
- ステップ 4 ツールバーで、[無効化 (Disable) ] を選択します。
- ステップ 5 [ユーザの無効化 (Disable User) ] ダイアログボックスで、[無効化 (Disable) ] をクリックします。
- ステップ 6 [OK] をクリックします。  
ユーザのアカウントが、グラフィカルユーザインターフェイスまたはAPIを通じたシステムにログインしている場合、そのユーザセッションを無効化したただちに終了するものとします。無効化されたユーザはアプリケーションにログインできません。

### 次の作業

ユーザアカウントは、後で有効にすることができます。有効にするには、[ユーザ (Users)] ページに戻り、そのユーザを選択して [有効化 (Enable)] をクリックします。

## グループ内のユーザ アカウントを無効にする

MSP 組織またはお客様の組織内のユーザアカウントを無効にするには、次の手順を実行します。

### 手順

- ステップ 1 メニュー バーで、[管理 (Administration)] > [ユーザとグループ (Users and Groups)] の順に選択します。
- ステップ 2 [MSP 組織 (MSP Organizations)] タブまたは [顧客組織 (Customer Organizations)] タブをクリックします。  
これらのタブの名前は目安にすぎません。[サービスプロバイダー機能 (Service Provider Feature)] を有効にしている場合は、第 1 レベルと第 2 レベルの組織の名前を指定する必要があります。指定した名前は、インターフェイスのタブとして表示されます。
- ステップ 3 テーブルからグループを選択します。  
複数のグループを選択できます。
- ステップ 4 [ユーザの無効化 (Disable Users)] をクリックします。
- ステップ 5 [ユーザの無効化 (Disable Users)] ダイアログ ボックスで、[ユーザの無効化 (Disable Users)] をクリックします。
- ステップ 6 [OK] をクリックします。

### 次の作業

[MSP 組織 (MSP Organizations)] タブまたは [お客様の組織 (Customer Organizations)] タブからのグループ内のすべてのユーザアカウントを有効化するにはグループを選択し、[ユーザの有効化 (Enable Users)] をクリックします。

## MSP 管理者ロール

マネージド サービス プロバイダー (MSP) の組織は、Cisco UCS Director での顧客グループのタイプです。これは、システム内において親組織と見なすことができます。この MSP 組織内で、複数のサブカテゴリまたは子組織をグループ化できます。たとえば、Cisco Systems のような企業名は MSP 組織を表します。この MSP 組織内で、人事、財務、運営などの複数の顧客グループを作成できます。これらのグループは MSP 組織内の顧客グループと見なされます。

管理者は、Cisco UCS Director の各 MSP に必要です。この管理者は MSP 管理者と呼ばれます。この管理者は、MSP 組織と MSP 組織内のすべての顧客組織を管理します。

Cisco UCS Director のグローバル管理者である場合の、MSP 組織および MSP 管理者を作成するステップの推奨手順を以下に示します。

- 1 Cisco UCS Director でサービス プロバイダー機能を有効にします。詳細については、[サービス プロバイダー機能の有効化](#)、(157 ページ) を参照してください。
- 2 MSP 組織を作成します。詳細については、[MSP 組織の作成](#)、(70 ページ) を参照してください。
- 3 MSP 組織内で顧客グループを作成します。詳細については、[顧客組織の作成](#)、(72 ページ) を参照してください。
- 4 Cisco UCS Director で MSP 管理者ロール権限を持つユーザアカウントを作成します。このユーザアカウントを作成するときに、このユーザが管理できる MSP 組織を選択し、新しい MSP 組織を作成することもできます。特定のロールを持つユーザアカウントを作成する方法の詳細については、[ユーザの追加](#)、(34 ページ) を参照してください。

ロールによって、ユーザが Cisco UCS Director で確認できるメニューおよびタブが定義されます。通常、MSP 管理者には次のメニューが必要です。

- 組織
- ポリシー
- CloudSense

MSP 組織および MSP 管理者ロールの作成に加えて、ロゴやアプリケーション ラベルをカスタマイズしてこれらの組織をブランディングすることもできます。詳細については、[顧客組織のブランディング](#)、(109 ページ) を参照してください。



(注)

Cisco UCS Director は、グローバル レベル、MSP 組織レベル、および顧客組織レベルでのブランディングをサポートしています。ただし、ユーザがどこまで詳細にブランディングを表示できるかは、特定のガイドラインによって制限されます。詳細については、[顧客組織のブランディング](#)、(107 ページ) を参照してください。

MSP 管理者向けに、次の表に Cisco UCS Director で実行できるタスクが記載されています。このガイドでの手順情報のセクションも表示されています。

タスク	ガイドの情報へのリンク
管理する顧客組織の作成	<a href="#">顧客組織の作成</a> 、(72 ページ)
顧客組織への特定のブランディングの適用	<a href="#">顧客組織のブランディング</a> 、(109 ページ)
VM をプロビジョニングするためのポリシーの作成と管理	<a href="#">ポリシーの管理</a> 、(209 ページ)

タスク	ガイドの情報へのリンク
Cloudsense 分析 を使用したレポートを生成	<a href="#">CloudSense 分析の管理, (479 ページ)</a>

# グループの管理

## ユーザグループの作成

### 手順

- ステップ 1 [管理 (Administration) ] > [ユーザとグループ (Users and Groups) ] を選択します。
- ステップ 2 [ユーザとグループ (Users and Groups) ] ページで [ユーザとグループ (Users and Groups) ] をクリックします。
- ステップ 3 [追加 (Add) ] をクリックします。
- ステップ 4 [グループの追加 (Add Group) ] 画面で、次のフィールドに入力します。

フィールド名	説明
[名前 (Name) ] フィールド	グループまたは顧客組織の名前。 次のような特殊文字を使用できます。 ( ) . & - _ ` ~ \$ % ^ { } ! ' @
[説明 (Description) ] フィールド	グループまたは顧客組織の説明 (必要な場合) 。
[コード (Code) ] フィールド	グループの短い名前またはコード名。この名前は、VM とホスト名テンプレートで使用されます。
[コストセンター (Cost Center) ] フィールド	(任意) コストセンターの名前または番号 (必要な場合) 。この名前または番号は、グループが関連付けられているコストセンターを表します。この名前は、VMware システム ポリシー VM の命名規則で使用できます。  命名規則にコストセンターを使用する方法の詳細については、 <a href="#">ポリシーの管理, (209 ページ)</a> を参照してください。
[連絡先の電子メール (Contact Email) ] フィールド	この電子メールは、必要に応じてサービスリクエストおよびリクエスト承認のステータスをグループ所有者に通知する目的で使用されます。
[名 (First Name) ] フィールド	連絡先の名。

フィールド名	説明
[姓 (Last Name) ] フィールド	連絡先の姓。
[電話 (Phone) ] フィールド	連絡先の電話番号。
[住所 (Address) ] フィールド	連絡先の住所。
[グループ共有ポリシー (Group Share Policy) ] ドロップダウンリスト	このグループのユーザのグループ共有ポリシーを選択します。 このドロップダウンリストにデータが取り込まれるのは、グループ共有ポリシーを作成した場合だけです。 このポリシーの作成の詳細については、 <a href="#">グループ共有ポリシーの作成</a> 、(224 ページ) を参照してください。
[ユーザへのリソース割り当てを許可 (Allow Resource Assignment To Users) ] チェックボックス	オンにすると、このグループのユーザは、そのユーザに割り当てられたリソースを持つことができ、これらのリソースを所有できます。また、これらのユーザは、グループに属するリソースを確認できます。ただし、ユーザ間でリソースを共有することはできません。

ステップ 5 [追加 (Add) ] をクリックします。

### 次の作業

さらにグループを追加する場合は、この手順を繰り返します。追加するグループごとに、リソース制限を編集し、タグを管理し、ロゴおよびアプリケーションラベルをカスタマイズすることができます。

## MSP 組織の作成

### 手順

ステップ 1 [管理 (Administration) ] > [ユーザとグループ (Users and Groups) ] を選択します。

ステップ 2 [MSP 顧客組織 (MSP Organizations) ] をクリックします。  
これらのタブの名前は目安にすぎません。[サービスプロバイダー機能 (Service Provider Feature) ] を有効にしている場合は、第 1 レベルと第 2 レベルの組織の名前を指定する必要があります。指定した名前は、インターフェイスのタブとして表示されます。

**ステップ 3** [追加 (Add) ] をクリックします。

**ステップ 4** [MSP 組織の追加 (Add MSP Organizations) ] 画面で、次を含む必須フィールドに値を入力します

フィールド名	説明	
[名前 (Name) ] フィールド	MSP 組織の名前。 次のような特殊文字を使用できます。 ( ) . & - _ ` ~ \$ % ^ { } ! '	
[説明 (Description) ] フィールド	MSP 組織の説明 (必要な場合) 。	
[コード (Code) ] フィールド	グループの短い名前またはコード名。この名前は、VM とホスト名テンプレートで使用されます。	
[コストセンター (Cost Center) ] フィールド	コストセンターの名前または番号 (必要な場合) 。	この名前または番号は、グループが関連付けられているコストセンターを表します。この名前は、VMware システム ポリシー VM の命名規則で使用できます。  命名規則にコストセンターを使用する方法の詳細については、 <a href="#">ポリシーの管理</a> 、 (209 ページ) を参照してください。
[連絡先の電子メール (Contact Email) ] フィールド	この電子メールは、必要に応じてサービスリクエストおよびリクエスト承認のステータスを MSP 管理者に通知する目的で使用されます。	
[名 (First Name) ] フィールド	連絡先の名。	
[姓 (Last Name) ] フィールド	連絡先の姓。	
[電話 (Phone) ] フィールド	連絡先の電話番号。	
[住所 (Address) ] フィールド	連絡先の住所。	

**ステップ 5** [追加 (Add) ] をクリックします。

### 次の作業

作成する MSP 組織ごとに、リソース制限を編集し、タグを管理し、ロゴおよびアプリケーションラベルをカスタマイズできます。各 MSP 組織内でお客様の組織を作成できます。

## 顧客組織の作成

MSP 組織内で顧客組織を作成するには、この手順に従います。

### 手順

- ステップ 1** [管理 (Administration) ] > [ユーザとグループ (Users and Groups) ] を選択します。
- ステップ 2** [顧客組織 (Customer Organizations) ] をクリックします。  
このタブ名は目安にすぎません。[サービス プロバイダー機能 (Service Provider Feature) ] を有効にしている場合は、第 1 レベルと第 2 レベルの組織の名前を指定する必要があります。これらの名前は、インターフェイスのタブとして表示されます。[サービス プロバイダー機能 (Service Provider Feature) ] を無効にしている場合は、[顧客組織 (Customer Organizations) ] タブのみが表示されます。
- ステップ 3** [追加 (Add) ] をクリックします。
- ステップ 4** [グループの追加 (Add Group) ] 画面で、次を含む必須フィールドに値を入力します。

フィールド名	説明
[名前 (Name) ] フィールド	グループまたは顧客組織の名前。 次のような特殊文字を使用できます。 ( ) . & - _ ` ~ \$ % ^ { } ! ' "
[説明 (Description) ] フィールド	グループまたはお客様の組織の説明 (必要な場合) 。
[MSPグループ名 (MSP Group Name) ] フィールド	ドロップダウン リストから MSP 組織名を選択します。 このリストには、現在管理できるすべてのグループが含まれています。たとえば、システムのグローバル管理者である場合、このリストには管理対象のすべての組織が表示されます。ただし、MSP 管理者の場合、このリストには管理者権限がある組織が表示されます。
[コード (Code) ] フィールド	グループの短い名前またはコード名。この名前は、VM とホスト名テンプレートで使用されます。
[コストセンター (Cost Center) ] フィールド	(任意) コストセンターの名前または番号 (必要な場合) 。この名前または番号は、グループが関連付けられているコストセンターを表します。この名前は、VMware システム ポリシー VM の命名規則で使用できます。  命名規則にコストセンターを使用する方法の詳細については、 <a href="#">ポリシーの管理</a> 、(209 ページ) を参照してください。
[連絡先の電子メール (Contact Email) ] フィールド	この電子メールは、必要に応じてサービスリクエストおよびリクエスト承認のステータスをグループ所有者に通知する目的で使用されます。

フィールド名	説明
[名 (First Name) ] フィールド	連絡先の名。
[姓 (Last Name) ] フィールド	連絡先の姓。
[電話 (Phone) ] フィールド	連絡先の電話番号。
[住所 (Address) ] フィールド	連絡先の住所。
[グループ共有ポリシー (Group Share Policy) ] ドロップダウンリスト	このグループのユーザのグループ共有ポリシーを選択します。 このドロップダウンリストにデータが取り込まれるのは、グループ共有ポリシーを作成した場合だけです。このポリシーの作成の詳細については、 <a href="#">グループ共有ポリシーの作成</a> 、(224 ページ) を参照してください。
[ユーザへのリソース割り当てを許可 (Allow Resource Assignment To Users) ] チェックボックス	オンにすると、このグループのユーザは、そのユーザに割り当てられたリソースを持つことができ、これらのリソースを所有できます。また、これらのユーザは、グループに属するリソースを確認できます。ただし、ユーザ間でリソースを共有することはできません。

**ステップ 5** [追加 (Add) ] をクリックします。

### 次の作業

さらにお客様の組織を追加する場合は、この手順を繰り返します。追加するお客様の組織ごとに、リソース制限を編集したり、タグを管理したり、ロゴおよびアプリケーションラベルをカスタマイズしたりすることができます。

## パスワードポリシー

パスワードポリシーはすべてのユーザに適用され、すべてのユーザタイプに関して、ユーザを追加するか、パスワードを変更する際に適用されます。このポリシーによって、次のパスワード制限が適用されます。

- パスワードの長さ
- パスワードをユーザ名と同じにすることができるかどうか
- 現在のパスワードを新規パスワードとして設定できるかどうか

- 特定の正規表現はパスワードでは許可されていないかどうか

## パスワードポリシーの作成

### 手順

- ステップ 1** [管理 (Administration) ] > [ユーザとグループ (Users and Groups) ] を選択します。
- ステップ 2** [ユーザとグループ (Users and Groups) ] ページで [パスワードポリシー (Password Policy) ] をクリックします。
- ステップ 3** [パスワードポリシー (Password Policy) ] 画面で、次を含む必須フィールドに値を入力します

名前	説明
[パスワードの最小長 (Minimum Password Length) ] ドロップダウン リスト	パスワードの最小文字数を選択します。 (注) パスワードの最小長は 4 文字未満にすることはできません。
[パスワードの最大長 (Maximum Password Length) ] ドロップダウン リスト	パスワードの最大文字数を選択します。 (注) パスワードの最大長は 127 文字までです。
[文字クラスの最小数 (Minimum Character Classes) ] ドロップダウン リスト	大文字、小文字、数字、特殊文字などの文字クラスの最小数を選択します。
[パスワードでのログイン名の使用を許可しない (Disallow Login in Password) ] チェック ボックス	ログイン ID と同じパスワードの使用を禁止するには、チェック ボックスをオンにします。
[前のパスワードを許可しない (Disallow Previous Password) ] チェック ボックス	新しいパスワードとして以前のパスワードの使用を禁止するには、このチェック ボックスをオンにします。
[以前のパスワードカウント (Previous Passwords Counts) ] ドロップダウン リスト	システムに保存する必要がある以前のパスワードの数を選択します。
[正規表現と一致するパスワードを許可しない (Disallow Passwords that match regular expression) ] フィールド	パスワードでの使用を禁止する正規表現 (1 行に 1 つずつ)。たとえば、「.*abc.*」と指定した場合は、パスワードに「abc」という文字列を含めることができなくなります。
[パスワードの有効期限 (日数) (Password expiry (in days)) ] フィールド	パスワードがアクティブな状態を保つ日数を指定します。デフォルトでは、このフィールドの値は 180 に設定されています。

名前	説明
[パスワードの有効期限を日数で警告 (Warn Password expiry (in Days)) ] ドロップダウン リスト	警告メッセージをユーザに送信するパスワードの有効期限までの日数を指定します。
[パスワードの猶予期間 (日数) (Grace Period for Password (in Days)) ] ドロップダウン リスト	パスワードの有効期限が切れてから、ユーザがシステムへのログインにそのパスワードを使用できる日数を指定します。

ステップ 4 [送信 (Submit) ] をクリックします。

## グループ予算ポリシー

チャージバック機能を使用して、リソースが計上されます。グループまたは顧客の組織ごとのリソース使用に対して、エンティティを予算ポリシーに関連付けます。

グループまたは顧客の組織を予算の監視機能付きで設定して、グループまたは顧客の組織が、プロビジョニングされた予算内で収まるようにすることも、予算を超過できるように設定することもできます。

### グループ予算ポリシーの表示および編集

#### 手順

- ステップ 1 [管理 (Administration) ] > [ユーザとグループ (Users and Groups) ] を選択します。
- ステップ 2 [ユーザとグループ (Users and Groups) ] ページで [ユーザとグループ (Users and Groups) ] をクリックします。
- ステップ 3 リストからグループを選択します。
- ステップ 4 [その他のアクション (More Actions) ] ドロップダウンメニューで、[予算ポリシー (Budget Policy) ] をクリックします。
- ステップ 5 [予算ポリシー (Budget Policy) ] 画面で、次を含む必須フィールドに値を入力します

名前	説明
[予算の監視の有効化 (Enable Budget Watch) ] チェック ボックス	このグループの予算の使用状況をモニタするには、このチェックボックスをオンにします。このグループのすべての予算エントリを無視するには、このチェックボックスをオフにします。

名前	説明
[予算超過を許容 (Allow Over Budget) ] チェックボックス	グループメンバーのプロビジョニング予算を超えるには、チェックボックスをオンにします。予算をすべて消化した場合に、新しい予算が追加されるまですべてのリクエストを却下するには、チェックボックスをオフにします。

ステップ 6 [保存 (Save) ] をクリックします。

## リソース制限値

リソース使用率を管理するために、グループ、お客様の組織またはテナントのリソース制限値を設定できます。次の制限値を指定できます。

- 仮想リソース
- オペレーティング システム リソース
- 物理リソース



(注) オペレーティング システム リソースと物理リソースの制限に関する設定は、パブリック クラウドではサポートされません。

### サービス プロバイダーの有効時のリソース制限の注意事項

Cisco UCS Director で、サービス プロバイダー機能を有効にしている場合は、リソース制限値を設定するときに次の事項に留意してください。

- 親組織に設定された制限値によって、親組織内の顧客グループとコンテナに対し設定できる制限値が決まります。
- 特定の顧客グループにリソース制限値を追加していないが、そのグループ内のコンテナに対し制限値を指定している場合は、親組織内の別の顧客グループに制限値を設定する前にリソース制限値の合計を考慮する必要があります。
- すべての顧客グループとその中のコンテナに設定されたリソース制限値の合計が親組織に設定されたリソース制限値を超えることはできません。
- 特定の顧客グループにはリソース制限値を追加しないが、そのグループ内のコンテナに対しリソース制限値を指定する場合は、親組織に制限値を設定する前にすべてのコンテナのリソース制限値の合計を考慮する必要があります。

たとえば、親組織であるテナント1に3つの顧客グループグループA、グループBおよびグループCがあるとします。テナント1に対しリソース制限値10を設定した場合、テナント1内のすべての顧客グループに指定された累積のリソース制限値が10を超えてはなりません。累積のリソース制限値には、顧客グループおよびコンテナに適用されるリソース制限値が含まれます。

グループAにはコンテナC1とC2があり、リソース制限値4がその顧客グループに割り当てられています。グループBにはコンテナC3とC4があり、それぞれのコンテナのリソース制限値は2です。この設定は、グループCとその中のすべてのコンテナに設定できるリソース制限値の最大値は2（テナント1に対するリソース制限値からグループA、グループBおよびコンテナC1、C2、C3およびC4に対するリソース制限値の合計を引いた値）であることを意味しています。

#### サービスプロバイダーの無効時のリソース制限の注意事項

サービスプロバイダー機能を無効にしている場合は、親組織は1つだけです。そのため、親組織に対しリソース制限値を設定している場合は、すべての顧客グループに指定する制限値の合計が親のリソース制限値を超えてはいけません。

たとえば、親組織内に2つの顧客グループ、グループAとグループBがあるとします。そして、親組織の制限値を10に設定し、グループAの制限値を5に設定したとします。この場合、グループBに設定するリソース制限値は5（親組織のリソース制限値からグループAのリソース制限値を引いた値）を超えてはいけません。

## リソース制限の表示

### 手順

- ステップ1 [組織 (Organizations)] > [概要 (Summary)] を選択します。
- ステップ2 [概要 (Summary)] ページでユーザグループを選択します。
- ステップ3 [リソース制限 (Resource Limits)] をクリックして、選択したグループのリソースの現在の制限、使用状況、保留中のSRの使用状況、およびステータスを表示します。

## リソース制限の編集

### 手順

- ステップ1 [管理 (Administration)] > [ユーザとグループ (Users and Groups)] を選択します。
- ステップ2 組織または顧客グループのリソース制限を編集する場合は、[顧客組織 (Customer Organization)] または [MSP 組織 (MSP Organization)] を選択します。  
**重要** これらのタブの名前は目安にすぎません。[サービスプロバイダー機能 (Service Provider Feature)] を有効にしている場合は、第1レベルと第2レベルの組織の名前を指定する必要があります。指定した名前は、インターフェイスのタブとして表示されます。

- ステップ 3 ユーザ グループのリソース制限を編集するには、[ユーザ グループ (User Groups)] を選択します。
- ステップ 4 グループをテーブルから選択し、[リソース制限の編集 (Edit Resources Limits)] をクリックします。[リソース制限 (Resource Limit)] 画面が表示されます。
- ステップ 5 [リソース制限 (Resource Limit)] 画面で、[リソースの制限の有効化 (Enable Resource Limits)] をオンにし、次を含む必須フィールドに値を入力します。

フィールド名	説明
[グループ (Group)] フィールド	選択したグループ名。
[リソースの制限の有効化 (Enable Resource Limits)] チェック ボックス	リソース制限を有効にする場合は、このチェックボックスをオンにします。リソース制限を無効にする場合は、このチェックボックスをオフにします。  チェックボックスをオンにすると、グループに対するリソース制限を設定するためのオプションが示され、ゼロ以外のリソース制限がすべて適用されます。
[アクティブな VM の最大数 (Maximum Active VM Count)] フィールド	アクティブな VM の最大数。
[VM の最大合計数 (Maximum Total VM Count)] フィールド	VM の合計数。
[VDC の最大合計数 (Maximum Total VDC Count)] フィールド	VDC の合計数。  VM のプロビジョニング時に、ユーザが指定する VDC の数がこのフィールドに指定した数を超過すると、エラーメッセージが表示されます。
[プロビジョニング済みvCPUの制限 (Provisioned vCPUs Limit)] フィールド	プロビジョニング済み vCPU の最大数。
[プロビジョニング済みメモリの制限(GB) (Provisioned Memory (GB) Limit)] フィールド	プロビジョニング済みメモリの制限 (GB) 。
[プロビジョニング済みディスクの制限(GB) (Provisioned Disk (GB) Limit)] フィールド	プロビジョニング済みディスクの制限 (GB) 。
[予約済みCPUの制限(GHz) (Reserved CPU (GHz) Limit)] フィールド	予約済み CPU の制限 (GHz) 。

フィールド名	説明
[予約済みメモリの制限(GB) (Reserved Memory (GB) Limit) ] フィールド	予約済みメモリの制限 (GB) 。
[スナップショットの制限(GB) (Maximum Snapshot (GB) Limit) ] フィールド	最大のスナップショット制限 (GB) 。
[非アクティブな VM のCPUとメモリのカウント (Count CPU and Memory for Inactive VMs) ] チェック ボックス	グループの非アクティブな VM CPU またはメモリ データをリソース制限の計算に含める場合は、このチェック ボックスをオンにします。非アクティブな VM CPU またはメモリ データをリソース計算から除外するには、このチェック ボックスをオフにします。
[OS リソース制限 (OS Resource Limits) ] (注) OS のリソース制限および物理リソースの制限の設定は、パブリック クラウドではサポートされません。	
[CentOS] フィールド	CentOS (Community Enterprise Operating System) サーバの最大数。
[Windows Server 2003] フィールド	Windows 2003 サーバの最大数。
[Windows Server 2008] フィールド	Windows 2008 サーバの最大数。
[Windows Server 2012] フィールド	Windows 2012 サーバの最大数。
[Windows 7] フィールド	Windows 7 マシンの最大数。
[Windows XP] フィールド	Windows XP マシンの最大数。
[Red Hat] フィールド	Red Hat マシンの最大数。
[Ubuntu] フィールド	Ubuntu マシンの最大数。
[FreeBSD] フィールド	FreeBSD マシンの最大数。
[その他のLinux (Other Linux) ] フィールド	その他の Linux OS の最大数。
[その他 (Other) ] フィールド	その他の OS の最大数。
[物理リソース制限 (Physical Resource Limits) ]	
[vFilerの最大数 (Maximum vFiler Count) ] フィールド	vFiler の最大数。

フィールド名	説明
[物理ストレージの最大容量(GB) (Maximum Physical Storage Space (GB)) ] フィールド	ストレージの最大容量。
[物理サーバの最大数 (Maximum Physical Server Count) ] フィールド	サーバの最大数。
[フル幅の物理サーバの最大数 (Maximum Full Width Physical Server Count) ] フィールド	フル レングス物理サーバの最大数。 このフィールドに指定するサーバの数は [ハーフ幅の物理サーバ最大数 (Maximum Half Width Physical Server Count) ] フィールドで指定され、追加されたサーバの数が [最大物理サーバ数 (Maximum Physical Server Count) ] フィールドで指定されたサーバの数以下である必要があります。 <b>重要</b> 現在、このフィールドは Cisco UCS ブレードサーバのみに適用できます。
[ハーフ幅の物理サーバ最大数 (Maximum Half Width Physical Server Count) ] フィールド	ハーフ長物理サーバの最大数。 このフィールドに指定するサーバの数は [フル幅の物理サーバの最大数 (Maximum Full Width Physical Server Count) ] フィールドで指定され、追加されたサーバの数が [最大物理サーバ数 (Maximum Physical Server Count) ] フィールドで指定されたサーバの数以下である必要があります。 <b>重要</b> 現在、このフィールドは Cisco UCS ブレードサーバのみに適用できます。
[物理サーバの最大メモリ(GB) (Maximum Physical Server Memory (GB)) ] フィールド	サーバの最大メモリ容量。
[物理サーバの最大CPU数 (Maximum Physical Server CPU Count) ] フィールド	サーバ CPU の最大数。

**ステップ 6** [保存 (Save) ] をクリックします。

# 管理プロファイルの設定

## 管理者プロファイルの作成

### 手順

- ステップ 1 [管理 (Administration) ] > [ユーザとグループ (Users and Groups) ] を選択します。
- ステップ 2 [ユーザとグループ (Users and Groups) ] ページで [ユーザ (Users) ] をクリックします。
- ステップ 3 [追加 (Add) ] をクリックします。
- ステップ 4 [ユーザの追加 (Add User) ] 画面で、次を含む必須フィールドに値を入力します。

フィールド名	説明
[ユーザタイプ (User Type) ] ドロップダウンリスト	ユーザタイプに [システム管理 (System Admin) ] を選択します。システム管理者には、すべての権限が与えられています。
[ログイン名 (Login Name) ] フィールド	ログイン名。デフォルトは [管理者 (admin) ] です。
[パスワード (Password) ] フィールド	管理者アカウントのパスワード。
[パスワードの確認 (Confirm Password) ] フィールド	確認のために管理者アカウントのパスワードを再入力します。
[ユーザの連絡先電子メール (User Contact Email) ] フィールド	管理者の電子メールアドレス。
[名 (First Name) ] フィールド	管理者の名。
[姓 (Last Name) ] フィールド	管理者の姓。
[電話 (Phone) ] フィールド	管理者の電話番号。
[住所 (Address) ] フィールド	管理者の住所。

フィールド名	説明
[ユーザ無効化の日付を設定 (Set user disable date) ] チェック ボックス	<p>システムでユーザアカウントを無効にする日時を設定する場合にオンにします。ユーザアカウントが無効になると、ユーザはシステムにログインできなくなります。</p> <p>この日付から1週間前に、アカウントが無効になることを知らせる電子メールメッセージがユーザに送信されます。この自動メールメッセージは、PeriodicNotificationToUserTask システムタスクによって生成され、送信されます。</p> <p>指定された日時に、ユーザアカウントが自動的に無効になります。ユーザが指定した日付にシステムにログインすると、ログインセッションは自動的に終了します。</p>
[ロケール (Locale) ] ドロップダウン リスト	<p>このユーザのシステムの言語を個別に選択します。デフォルトでは、原語は英語に設定されています。</p> <p>このユーザがログインすると、ユーザインターフェイスは、選択した言語で表示されます。このロケールの選択は、このユーザにのみ適用されます。</p>
[クラシック ビューでログイン (Login with Classic View) ] チェック ボックス	このユーザがシステムにログインする際にクラシック インターフェイスを起動する場合にオンにします。

ステップ 5 [追加 (Add) ] をクリックします。

## 管理者プロフィールの編集

システムの管理者は、システム内の自分自身のプロフィールを編集できます。

### 手順

ステップ 1 画面の右上隅にあるログイン名にカーソルを合わせます。

ステップ 2 [プロフィールの編集 (Edit My Profile) ] を選択します。  
アカウントの作成時に指定したすべての情報が表示されます。

**ステップ 3** [プロフィールの編集 (Edit My Profile)] 画面で、次を含む必須フィールドに値を入力します

名前	説明
[言語 (Language)] ドロップダウン リスト	ユーザインターフェイスの新しい言語を選択します。
[古いパスワード (Old Password)] フィールド	現在のパスワードを入力します。
[新しいパスワード (New Password)] フィールド	新しいパスワードを入力します。
[パスワードの確認 (Confirm Password)] フィールド	新しいパスワードをもう一度入力します。
[アクセス プロファイル (Access Profiles)]	新しいプロフィールをデフォルトのプロフィールとして選択します。
[ダッシュボードの有効化 (Enable Dashboard)] チェック ボックス	システムにログインした後に [ダッシュボード (Dashboard)] 画面を表示する場合に、このチェック ボックスをオンにします。

**ステップ 4** [詳細設定を表示する (Show Advanced Settings)] をクリックし、次を含む必須フィールドに値を入力します。

名前	説明
[REST API アクセス キー (REST API Access Key)] フィールド	[キー値のコピー (Copy Key Value)] オプション、または [キーの再生成 (Regenerate Key)] オプションを選択します。
[開発者メニューの有効化 (Enable Developer Menu)] チェック ボックス	システムで開発者メニューを有効にする場合に、このチェック ボックスをオンにします。 この変更を有効にするには、システムを再起動する必要があります。
[UI 設定 (UI Preference)] フィールド	以降のログイン時にクラシック ビューのユーザインターフェイスを起動する場合に、[クラシック ビューでログイン (Login with Classic View)] をオンにします。 <b>重要</b> 以降のログインでクラシック ビューを起動するようにシステムを設定できるのは、リリース 6.5のみです。クラシック ビューは、後続のリリースで削除される予定です。

名前	説明
[システムブロードキャストメッセージ (System Broadcast Message) ] フィールド	システム上でブロードキャストする必要があるメッセージを入力します。

**ステップ 5** [保存 (Save) ] をクリックします。

**ステップ 6** システムを再起動する。  
システムの再起動が必要な変更はすべてインターフェイスで実行できます。

## ブロードキャストメッセージの送信

システムの管理者は、現在 Cisco UCS Director にログインしているすべてのユーザにブロードキャストメッセージを送信できます。このメッセージを設定しているときに、このメッセージをタイマーを設定して送信するか、またはタイマーなしで送信するかを選択できます。

### 手順

**ステップ 1** 画面の右上隅にあるログイン名にカーソルを合わせます。

**ステップ 2** [プロフィールの編集 (Edit My Profile) ] を選択します。

**ステップ 3** [詳細設定を表示する (Show Advanced Settings) ] を選択し、次を含む必須フィールドに値を入力します。

名前	説明
[システムブロードキャストメッセージ (System Broadcast Message) ] フィールド	すべてのユーザへのブロードキャストとして送信するメッセージを入力します。
[メッセージを自動的に消去する (Dismiss Message Automatically) ] チェック ボックス	一定時間後にメッセージを自動的に消去する場合は、このチェックボックスをオンにします。このチェックボックスをオンにしない場合は、ユーザがメッセージを閉じる必要があります。
[表示時間 (分) (Number of Minutes to Display) ] ドロップダウン リスト	メッセージをユーザに表示する必要がある分数を選択します。この時間が経過すると、メッセージは自動的に閉じられます。

**ステップ 4** [送信 (Send) ] をクリックします。

## 管理者パスワードの変更

### 手順

- ステップ 1 [管理 (Administration)] > [ユーザとグループ (Users and Groups)] を選択します。
- ステップ 2 [ユーザとグループ (Users and Groups)] ページで [ユーザ (Users)] をクリックします。
- ステップ 3 アカунツのリストから、管理者のユーザ アカウンツを選択します。
- ステップ 4 [その他のアクション (More Actions)] ドロップダウンメニューから [パスワードの変更 (Change Password)] を選択します。
- ステップ 5 [パスワードの変更 (Change Password)] 画面で、admin ユーザの新しいパスワードを入力し、確認します。
- ステップ 6 [保存 (Save)] をクリックします。

## 現在のオンラインユーザの表示

### 手順

- ステップ 1 [管理 (Administration)] > [ユーザとグループ (Users and Groups)] を選択します。
- ステップ 2 オンラインユーザのリストを表示するには、[現在のオンラインユーザ (Current Online Users)] を選択します。各ユーザのユーザ名、IP アドレス、セッションの開始時刻、最終データアクセス、およびクライアントの一覧を表示します。

## ユーザアクセスプロファイルの管理

### マルチロールアクセスプロファイル

1 人のユーザを複数のロールに割り当てることができます。これは、1 つのユーザアクセスプロファイルとしてシステム内で反映されます。たとえば、あるユーザが、グループ管理者、および全ポリシーの管理者として Cisco UCS Director にログインしようとした場合、両方のタイプのアクセスが適切であれば、いずれのログインも可能です。

アクセスプロファイルは、ユーザごとに表示できるリソースも定義します。リリース Cisco UCS Director 5.4 では、シングルユーザへの複数のプロファイルのサポートが導入されました。バージョン 5.4 をインストールし、ユーザアカウントが複数のグループに関連付けられている場合、シス

テムはユーザアカウント用に複数のプロファイルを作成します。ただし、以前のバージョンからシステムをバージョン 5.4 にアップグレードし、[LDAP シンク タスク (LDAPSyncTask)] が実行されていない場合、デフォルトでは、1 つのプロファイルだけが、システムのユーザアカウント用にリストされます。

LDAP ユーザを Cisco UCS Director に統合するときにユーザが複数のグループに属している場合、システムにより各グループのプロファイルが作成されます。ただし、デフォルトでは、ドメインユーザ プロファイルが LDAP ユーザに追加されます。



(注) [プロファイルの管理 (Manage Profiles)] 機能を使用して、ユーザアクセス プロファイルに対して追加、ログイン、編集、または削除を行うことができます。

## ユーザアクセス プロファイルの作成

### 手順

- ステップ 1 [管理 (Administration)] > [ユーザとグループ (Users and Groups)] を選択します。
- ステップ 2 [ユーザとグループ (Users and Groups)] ページで [ユーザ (Users)] をクリックします。
- ステップ 3 リストからユーザを選択します。
- ステップ 4 [その他のアクション (More Actions)] ドロップダウンメニューで、[プロファイルの管理 (Manage Profiles)] をクリックします。
- ステップ 5 [プロファイルの管理 (Manage Profile)] 画面で、[追加 (Add)] をクリックします。
- ステップ 6 [アクセス プロファイルへのエントリの追加 (Add Entry to Access Profiles)] 画面で、次を含む必須フィールドに値を入力します。

フィールド名	説明
[名前 (Name)] フィールド	プロファイル名。
[説明 (Description)] フィールド	プロファイルの説明です。
[タイプ (Type)] ドロップダウン リスト	ユーザ ロールのタイプを選択します。
[顧客組織 (Customer Organizations)] ドロップダウン リスト	このユーザプロファイルを適用する組織を選択します。
[ユーザがアクセスを持つすべてのその他のグループのリソースを表示 (Show Resources From All Other Groups the user has access)] チェックボックス	ユーザがアクセスできるか、属する他のグループすべてのリソースを表示できるようにするには、このチェック ボックスをオンにします。

フィールド名	説明
[共有グループ (Shared Groups) ] フィールド	[選択 (Select) ] をクリックして、ユーザプロフィールを適用するグループを選択します。 ユーザは、選択されたグループに関連付けられたすべてのリソースにアクセスできます。
[デフォルト プロファイル (Default Profile) ] チェック ボックス	デフォルトのユーザ アクセス プロファイルである場合は、このチェックボックスをオンにします。デフォルトでない場合は、このチェックボックスをオフにします。

**ステップ 7** [送信 (Submit) ] をクリックします。

### 次の作業

必要に応じて、追加のユーザ プロファイルを作成します。

## プロフィールへのログイン

システムのユーザとして、ユーザアカウントに対して複数のプロフィールがある場合、特定のプロフィールを使用してシステムにログインできます。

### 手順

**ステップ 1** [Cisco UCS Director ログイン (Cisco UCS Director login) ] ダイアログ ボックスの [ユーザ名 (Username) ] フィールドに、ユーザ名を「ユーザ名:アクセスプロフィール名」の形式で入力します。

例 : Alex: GrpAdmin

**ステップ 2** [パスワード (Password) ] フィールドにパスワードを入力します。

**ステップ 3** [ログイン (Login) ] をクリックします。

## デフォルトのプロファイル

デフォルトプロフィールは、システムで作成した最初のプロファイルです。デフォルトプロフィールを別のプロフィールに変更できます。新しいデフォルトプロフィールを使用し、ユーザ名とパスワードを入力してログインします。

## デフォルト プロファイルの変更

### 手順

- 
- ステップ 1 ユーザ インターフェイスで、右上隅に表示されているユーザ名をクリックします。
  - ステップ 2 ドロップダウンメニューで、[Edit My Profile (プロフィールの編集)] をクリックします。
  - ステップ 3 [Edit My Profile (プロフィールの編集)] 画面で、デフォルトのプロファイルとして設定するプロファイルを選択します。  
(注) プロファイルは、追加または編集されている間、デフォルトとして設定できません。
- 

## 認証および LDAP 統合

管理者は、システムのユーザ アカウント用に認証メカニズムを指定できます。LDAP のフォールバックを選択して、認証を設定できます。また、フォールバックを行わない VeriSign ID 保護 (VID) 認証を設定できます。

名前	説明
[ローカルが最初、LDAPにフォールバック (Local First, fallback to LDAP)]	認証は最初にローカル サーバ (Cisco UCS Director) で実行されます。ローカル サーバにユーザレコードが見当たらない場合、認証プロセスを LDAP サーバにシフトします。
[VeriSign ID保護 (Verisign Identity Protection)]	VIP 認証サービス (2 要素認証) が有効化されます。

## 認証の環境設定

### 手順

- 
- ステップ 1 [管理 (Administration)] > [ユーザとグループ (Users and Groups)] を選択します。
  - ステップ 2 [ユーザとグループ (Users and Groups)] ページで [認証設定 (Authentication Preferences)] をクリックします。
  - ステップ 3 [認証の環境設定 (Authentication Preferences)] 画面で、次を含む必須フィールドに値を入力します。

名前	説明
[認証の環境設定 (Authentication Preferences) ] ドロップダウンリスト	<p>認証の環境設定を選択します。</p> <p>次のいずれかを選択できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• [ローカルが最初、LDAPにフォールバック (Local First, fallback to LDAP) ]</li> </ul> <p>このオプションを選択する場合は、LDAP サーバを設定する必要があります。詳細については、<a href="#">LDAP サーバの設定</a>、(94 ページ) を参照してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• [VeriSign ID保護 (Verisign Identity Protection) ]</li> </ul> <p>このオプションを選択した場合は、ステップ 4 に進みます。</p>

**ステップ 4** [VeriSign ID保護 (Verisign Identity Protection) ] を選択した場合は、次の手順を実行します。

- a) VIP 証明書をアップロードするには、[参照 (Browse) ] をクリックします。  
証明書を見つけて選択し、[アップロード (Upload) ] をクリックします。
- b) [パスワード (Password) ] を入力します。

**ステップ 5** [保存 (Save) ] をクリックします。

## LDAP 統合

LDAP 統合を使用して、LDAP サーバのグループおよびユーザを Cisco UCS Director と同期することができます。LDAP 認証により、同期されたユーザを LDAP サーバで認証することができます。LDAP ユーザおよびグループは、自動または手動で同期できます。LDAP アカウントの追加中に、LDAP アカウントが Cisco UCS Director と自動的に同期される頻度を指定できます。オプションで LDAPSycTask システム タスクを使用して、LDAP 同期を手動でトリガーすることもできます。

LDAP アカウントを設定し、同期プロセスが手動または自動で実行されると、最近追加した LDAP 情報が Cisco UCS Director に表示されます。この情報は、システムに追加されたすべての組織単位 (OU) 、グループ、およびユーザの階層構造を表すツリービューに表示されます。この情報は、[管理 (Administration) ] > [LDAP 統合 (LDAP Integration) ] を選択して表示できます。左ペインの OU を展開すると、すべてのグループを内部に表示できます。左ペインでグループを選択した場合、そのグループに関連付けられたユーザのリストを表示できます。OU が複数のサブ OU を持つ場合、右ペインの [組織 (Organization) ] タブをクリックすることで、詳細情報を表示できます。また、右ペインの [グループ (Groups) ] および [ユーザ (Users) ] タブには、選択した OU 内で同期されたユーザおよびグループがそれぞれ表示されます。

システムタスクを実行する機能に加えて、Cisco UCS Director には LDAP ディレクトリとシステムを同期するための追加オプションもあります。

- [LDAP ユーザのクリーンアップ (Cleanup LDAP Users) ] システム タスク：このシステム タスクは、システム内で同期されたユーザが LDAP ディレクトリから削除されたかどうかを判別します。LDAP ディレクトリから削除されたユーザ アカウントのレコードが存在する場合、このシステム タスクの実行後に、これらのユーザ アカウントはシステム内で無効としてマークされます。管理者は、これらの無効ユーザ アカウントのリソース割り当てを解除できます。デフォルトでは、このタスクは有効状態になっています。システムの 2 回目の再起動後、このシステムタスクは無効状態に変わります。これは、スタンドアロンのセットアップと複数のノードを使用したセットアップの両方に当てはまります。

複数のノードを使用したセットアップでは、サービスノードが構成されていても、このシステムタスクはプライマリ ノードでのみ実行されます。



#### 重要

グループ、またはドメイン ユーザのグループに属していないユーザは、[グループに属していないユーザ (Users with No Group) ] として LDAP に表示されます。これらのユーザは、Cisco UCS Director のドメイン ユーザのグループの下に追加されます。

異なる LDAP サーバアカウントでは同じ名前の LDAP ユーザを追加できます。複数のユーザレコードを区別するために、ログイン ユーザ名の末尾にドメイン名が追加されます。たとえば、abc@vxdomain.com などです。このルールは、ユーザ グループにも適用されます。

システムへのログイン用のユーザ名へのドメイン名の追加は、LDAP ユーザにのみ適用されません。これはローカルユーザには適用されません。すべてのローカル ユーザがユーザ名を使用してシステムにログインできます。

単一の LDAP アカウントが追加され、ユーザがユーザ名のみを指定してログインすると、Cisco UCS Director は最初にそのユーザがローカルユーザまたは LDAP ユーザのどちらであるかを判別します。ユーザがローカル ユーザおよび外部 LDAP ユーザの両方として識別された場合、ログイン段階でユーザ名がローカルユーザ名に一致すると、そのローカルユーザが Cisco UCS Director に対して認証されます。あるいは、ユーザ名が外部ユーザの名前に一致すると、その LDAP ユーザが Cisco UCS Director に対して認証されます。

## LDAP 統合の規則と制限事項

### グループの同期規則

- 選択した LDAP グループが Cisco UCS Director にすでに存在しており、ソースのタイプが [ローカル (Local) ] の場合、そのグループは同期中に無視されます。
- 選択した LDAP グループが Cisco UCS Director にすでに存在しており、グループ ソースのタイプが [外部 (External) ] の場合、そのグループの説明および電子メール属性が Cisco UCS Director で更新されます。

- LDAP サーバを追加する際には、ユーザーフィルタとグループフィルタを指定できます。グループフィルタを指定すると、指定したグループに属するすべてのユーザーがシステムに追加されます。さらに、次のような操作も行えます。
  - 指定したグループにサブグループが含まれている場合には、グループ、サブグループ、およびそれらのサブグループ内のユーザーがシステムに追加されます（これが該当するのは、手動で LDAP ディレクトリを同期した場合のみです）。
  - ユーザーが複数のグループの一部であり、グループフィルタとして指定されたグループに他のグループが一致しない場合、それらの追加グループはシステムに追加されません。
- ユーザーは複数の設定グループに属することができます。ただし、ユーザーが属しているグループリストで最初に表示されているグループは、ユーザーのデフォルトのプライマリグループとして設定されます。ユーザーがどのグループにも属していない場合は、デフォルトのプライマリグループが [ドメインユーザー (Domain Users)] として設定されます。



---

(注) ユーザーが属するすべてのグループに関する情報は、LDAPSyncTask システムタスクの実行後にのみ表示できます。

---

- LDAP グループを同期すると、グループ内のすべてのユーザーが最初にシステムに追加されます。また、指定された LDAP グループ内のユーザーが同じ OU 内の（または異なる OU 内の）他のグループに関連付けられている場合には、それらのグループも取得され、システムに追加されます。
- LDAP 同期プロセスでは、指定された LDAP グループが取得されてシステムに追加されると共に、ネストされたグループがあれば併せて追加されます。
- このリリースより前のリリースでは、ユーザーは 1 つのグループにのみ属していました。ユーザーが属するその他のグループは、最新リリースにアップグレードし、[LDAP シンク タスク (LDAPSyncTask)] システムタスクを実行した場合にのみ、[プロファイルの管理 (Manage Profiles)] ダイアログボックスに表示されます。これは、他のグループが、LDAP サーバの設定時に指定したグループフィルタの条件に一致する場合のみ該当します。

#### ユーザーの同期規則

- 名前に特殊文字が含まれている LDAP ユーザーは Cisco UCS Director に追加されます。
- LDAP サーバを追加する際には、ユーザーフィルタとグループフィルタを指定できます。ユーザーフィルタを指定すると、指定したフィルタに一致するすべてのユーザーと、それらのユーザーが属するグループが取得され、システムに追加されます。
- LDAP ユーザーには、複数のグループメンバーシップを設定できます。LDAP ユーザーがシステムと同期された場合、この複数のグループメンバーシップ情報は保持されます。Cisco UCS Director には、すべてのユーザーについてこの情報を表示するオプションがあります。詳細については、[グループメンバーシップ情報の表示](#)、(102 ページ) を参照してください。また、複数のアクセスプロファイルはユーザーに対しても自動的に作成されます。



(注) この情報は、LDAPサーバを設定し、グループが取得されてシステムに追加されたときに指定したフィルタに、グループが一致した場合にのみ表示されます。

- Cisco UCS Director では、システムに追加された各ユーザのユーザプリンシパル名 (UPN) が表示されるようになりました。これは、以前のリリースでシステムに追加されたユーザに適用可能です。ユーザは、ログイン名またはユーザプリンシパル名を使用してシステムにログインできます。プロファイル名とともにユーザプリンシパル名を使用してのログインはサポートされていません。
- 選択した LDAP ユーザが Cisco UCS Director にすでに存在しており、ソースのタイプが [外部 (External) ] の場合、そのユーザは同期時に無視されます。ユーザの名前、説明、電子メールおよびその他の属性が再度更新されることはありません。
- ユーザアカウントが2つの異なる LDAP ディレクトリで作成されている場合は、最初に同期された LDAP ディレクトリのユーザ詳細が表示されます。他の LDAP ディレクトリのユーザ詳細は表示されません。
- 複数の LDAP ディレクトリが同期された後、LDAP 外部ユーザは、完全なドメイン名と共にユーザ名を指定して Cisco UCS Director にログインする必要があります。たとえば、`vxdomain.com\username` のように指定します。ただし、Cisco UCS Director に追加されている LDAP サーバディレクトリが1つしかない場合には、この規則は適用されません。



(注) LDAP 同期プロセスの後に、ユーザが正しいグループに割り当てられていることを確認します。

## LDAP 統合の管理

### 手順

- ステップ 1 [管理 (Administration) ] > [LDAP 統合 (LDAP Integration) ] を選択します。
- ステップ 2 LDAP 統合を管理するため、LDAPサーバを選択し、必要に応じて次のボタンをクリックします。

名前	説明
[ベースDNの検索 (Search BaseDN) ] ボタン	<p>検索するドメインの識別名を選択できます。LDAP 同期処理が完了すると、選択した組織のすべてのユーザとグループが Cisco UCS Director に取り込まれます。このアクションは、自動同期プロセスであるとも見なされます。</p> <p>(注) LDAP サーバ同期をシステム タスクとして開始できます。詳細については、<a href="#">LDAP 同期システム タスクの実行, (99 ページ)</a> を参照してください。</p>
[LDAPの手動同期のリクエスト (Request Manual LDAP Sync) ]	表示されるダイアログ ボックスでは、LDAP ユーザおよびグループを取得するための基本検索条件または拡張検索条件を指定できます。

**ステップ 3** (任意) [LDAP の手動サーバ同期の要求 (Request LDAP Manual Server Sync) ] を選択した場合は、次のフィールドに入力します。

名前	説明
[基本検索 (Basic Search) ] チェック ボックス	組織単位ごとの基本検索を可能にします。
[詳細検索 (Advanced Search) ] チェック ボックス	詳細検索を可能にします。

**重要** いずれかの検索オプションを使用すると、検索条件に一致するユーザとグループが、すでに Cisco UCS Director に存在する場合は、検索結果の一部として表示されません。

**ステップ 4** 基本検索の場合は、[選択 (Select) ] をクリックして検索ベースを指定します。

**ステップ 5** 検索ベース DN を選択し、[選択 (Select) ] をクリックして、ステップ 9 に進みます。

**ステップ 6** 詳細検索の場合は、[詳細なフィルタ オプション (Advanced Filtering Options) ] ペインで、[ユーザフィルタ (User Filters) ] と [グループフィルタ (Group Filters) ] の属性名を追加または編集します。

**ステップ 7** [次へ (Next) ] をクリックします。

**ステップ 8** [ユーザとグループの選択 (Select Users and Groups) ] ペインで、次のフィールドに入力します。

名前	説明
[LDAP グループ (LDAP Groups) ] フィールド	ユーザを同期する必要がある LDAP グループ。
[LDAP ユーザ (LDAP Users) ] フィールド	同期する必要がある LDAP ユーザ。

**ステップ 9** [送信 (Submit)] をクリックして、LDAP サーバを同期します。

## LDAP サーバの設定

Cisco UCS Directorでは複数の LDAP サーバとアカウントを設定できます。LDAP アカウントを追加するときに、次の項目を指定できます。

- 検索ベース DN に含まれる組織単位 (OU)。
- LDAP アカウントがシステムと自動的に同期される頻度。
- 結果を絞り込み、グループおよびユーザに LDAP ロールフィルタを指定する、グループフィルタまたはユーザフィルタ。

LDAP サーバアカウントが追加されると直ちにこのアカウントのシステムタスクが自動的に作成され、データ同期を即時に開始します。LDAP サーバアカウントのすべてのユーザとグループがシステムに追加されます。デフォルトでは、LDAP アカウントのすべてのユーザが自動的にサービスエンドユーザプロファイルに割り当てられます。

### はじめる前に

認証の次のように設定しておく必要があります。

- [ローカルが最初、LDAPにフォールバック (Local First, fallback to LDAP)]

### 手順

**ステップ 1** [管理 (Administration)] > [LDAP 統合 (LDAP Integration)] を選択します。

**ステップ 2** [追加 (Add)] をクリックします。

**ステップ 3** [LDAP サーバ設定 (LDAP Server Configuration)] 画面で、次を含む必須フィールドに値を入力します

名前	説明
[アカウント名 (Account Name)] フィールド	アカウント名。 この名前は一意である必要があります。
[サーバタイプ (Server Type)] フィールド	LDAP サーバのタイプ。次のいずれかを設定できます。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• OpenLDAP</li> <li>• MSAD - Microsoft Active Directory</li> </ul>
[サーバ (Server)] フィールド	LDAP サーバの IP アドレスまたはホスト名。

名前	説明
[SSLの有効化 (Enable SSL) ] チェック ボックス	LDAP サーバへのセキュアな接続をイネーブルにします。
[ポート (Port) ] フィールド	ポート番号。 SSLの場合は636に、非セキュアモードの場合は389に自動的に設定されます。
[ドメイン名 (Domain Name) ] フィールド	ドメイン名。 LDAPディレクトリのタイプとして[OpenLDAP]を選択した場合は、このドメイン名が、ユーザ名で指定されたドメインと一致している必要があります。 <b>重要</b> 完全なドメイン名を指定する必要があります。たとえば、vxedomain.com などは、 です。
[ユーザ名 (User Name) ] フィールド	ユーザ名。 ユーザ名は、次のいずれかの形式で指定できます。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• &lt;username&gt;@domain.com</li> <li>• 次の形式のユーザの識別名 : CN=PowerUser,CN=Users,DC=domain,DC=com</li> </ul> LDAPディレクトリのタイプとして[OpenLDAP]を選択した場合は、ユーザ名を次の形式で指定してください。 uid=users,ou=People,dc=ucsd,dc=com ここに指定する ou は、ディレクトリ階層でその他のすべてのユーザが配置される場所です。
[パスワード (Password) ] フィールド	ユーザのパスワード。
[同期頻度 (Synchronization Frequency) ] ドロップダウンリスト	LDAP サーバが同期される頻度 (時間) を選択します。この属性の種類は次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• 1</li> <li>• 4</li> <li>• 12</li> <li>• 24</li> </ul>

**ステップ 4** [次へ (Next) ] をクリックします。

**ステップ 5** [LDAP 検索ベース (LDAP Search Base) ] ペインで [選択 (Select) ] をクリックし、LDAP 検索ベースのエントリを指定して、[選択 (Select) ] をクリックします。  
このリストには、Cisco UCS Director で利用できるすべての組織単位 (OU) が表示されます。

**ステップ 6** [次へ (Next) ] をクリックします。

**ステップ 7** [ユーザとグループのフィルタの設定 (Configure User and Group Filters) ] ペインで、次のフィールドに入力します。

名前	説明
[ユーザフィルタ (User Filters) ]	[+] 記号をクリックして、システムと同期する必要がある特定のユーザを選択します。 選択したユーザが属するグループがすべて取得され、システムに追加されます。
[グループフィルタ (Group Filters) ]	[+] 記号をクリックして、システムと同期する必要があるグループを選択します。 選択したグループフィルタに属するユーザがすべて取得され、システムに追加されます。ただし、選択したグループのユーザが他のグループにも属している場合は、ここで選択されていない限り、それらのグループは取得されず、システムへの追加もされません。
[グループフィルタへのエントリの追加 (Add Entry to Group Filters) ] ダイアログ ボックス	
[属性名 (Attribute Name) ] ドロップダウン リスト	[グループ名 (Group Name) ] または [ユーザ名 (User Name) ] を選択します。
[演算子 (Operator) ] ドロップダウン リスト	グループおよびユーザを取得する際に適用するフィルタを選択します。この属性の種類は次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• [等しい (Equals to) ]</li> <li>• [次で始まる (Starts with) ]</li> </ul>
[属性値 (Attribute Value) ] フィールド	検索に含めるキーワードまたは値を指定します。

フィルタに基づいて、グループまたはユーザが取得されます。

**ステップ 8** [次へ (Next) ] をクリックします。

**ステップ 9** [LDAPユーザロールフィルタ (LDAP User Role Filter) ] ペインで、[+] 記号をクリックして、ユーザ ロール フィルタを追加します。

**ステップ 10** [ユーザロールフィルタへのエントリの追加 (Add Entry to User Role Filters) ] ダイアログ ボックスで、次のフィールドに値を入力します。

名前	説明
[属性名 (Attribute Name) ] フィールド	属性の名前。これには、グループ名を指定できます。
[演算子 (Operator) ] ドロップダウン リスト	次のいずれかを設定できます。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• [次の値と等しい (Equal to) ]</li> <li>• [次で始まる (Starts with) ]</li> </ul>
[属性値 (Attribute Value) ] フィールド	このフィールドで値を指定します [演算子 (Operator) ] フィールドと [属性値 (Attribute Value) ] フィールドの値に一致するすべてのユーザが、[ユーザロールのマップ (Map User Role) ] ドロップダウン リストで選択するユーザ ロールに割り当てられます。
[ユーザロールのマップ (Map User Role) ] ドロップダウン リスト	ユーザのマップ先とするユーザ ロールを選択します。デフォルトで利用可能なロールを選択でき、またはシステムで作成したロールを選択できます。 次のロールはCisco UCS Director内でデフォルトで使用可能なロールです。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• すべてのポリシー管理者</li> <li>• 請求管理者</li> <li>• コンピューティング管理者</li> <li>• サービス エンド ユーザ</li> <li>• グループ管理者</li> <li>• IS 管理者</li> <li>• ネットワーク管理者</li> <li>• オペレータ管理者</li> <li>• ストレージ管理者</li> <li>• システム管理者</li> </ul>

**ステップ 11** [送信 (Submit)] をクリックします。

**ステップ 12** [OK] をクリックします。

ユーザ ロール フィルタが [ユーザロールフィルタ (User Role Filters)] テーブルに追加されます。

(注) 複数のユーザ ロール フィルタが指定されている場合は、最初の行に指定されたフィルタが処理されます。

[ログインユーザ (Login Users)] タブでユーザのユーザ ロールを手動で更新すると、そのユーザには、グループをマップしたユーザ ロールが適用されなくなります。

---

### 次の作業

LDAP に認証の環境設定を設定していない場合は、認証の環境設定を変更するように指示されます。認証の環境設定の変更に関する詳細については、[認証の環境設定](#)、(88 ページ) を参照してください。

## LDAP サーバの接続のテスト

### 手順

---

**ステップ 1** [管理 (Administration)] > [LDAP 統合 (LDAP Integration)] を選択します。

**ステップ 2** [LDAP インテグレーション (LDAP Integration)] タブで、テーブルから LDAP アカウント名を選択します。

**ステップ 3** [テスト接続 (Test Connection)] をクリックします。

**ステップ 4** [LDAP 接続のテスト (Test LDAP Connectivity)] 画面で、[閉じる (Close)] をクリックします。

---

## LDAP サーバのサマリー情報の表示

### 手順

---

**ステップ 1** [管理 (Administration)] > [LDAP 統合 (LDAP Integration)] を選択します。

**ステップ 2** [LDAP インテグレーション (LDAP Integration)] タブで、テーブルから LDAP アカウント名を選択します。

**ステップ 3** [表示 (View)] ボタンをクリックします。

[LDAP アカウント情報の表示 (View LDAP Account Information)] 画面に、LDAP アカウントのサマリー情報が表示されます。

**ステップ 4** [閉じる (Close)] をクリックします。

---

## LDAP 検索ベースDN エントリの追加

### 手順

- 
- ステップ 1 [管理 (Administration) ]>[LDAP 統合 (LDAP Integration) ] を選択します。
  - ステップ 2 [LDAP インテグレーション (LDAP Integration) ] タブで、テーブルから LDAP アカウント名を選択します。
  - ステップ 3 [ベースDNの検索 (Search BaseDN) ] をクリックします。
  - ステップ 4 [LDAP 検索ベース (LDAP Search Base) ] 画面で、[選択 (Select) ] をクリックして検索エントリを選択します。
  - ステップ 5 [選択 (Select) ] をクリックします。
  - ステップ 6 [送信 (Submit) ] をクリックします。
- 

## LDAP 同期システム タスクの実行

### 手順

- 
- ステップ 1 [管理 (Administration) ]>[システム (System) ] を選択します。
  - ステップ 2 [システム (System) ] ページで [システム タスク (System Tasks) ] をクリックします。
  - ステップ 3 [フィルタ (Filter) ] フィールドに LDAP と入力します。
  - ステップ 4 [システムのタスク (System Tasks) ] 表から [LDAPSyncTask] を選択します。
  - ステップ 5 [今すぐ実行 (Run Now) ] をクリックします。
  - ステップ 6 (任意) [タスクの管理 (Manage Task) ] をクリックして、同期処理を有効または無効にします。
- 

### 次の作業

同期プロセスの結果が Cisco UCS Director に表示されます。[LDAP 統合 (LDAP Integration) ] ページで LDAP アカウントを選択し、[結果 (Results) ] をクリックすると、同期プロセスの概要が表示されます。

## LDAP サーバの詳細の変更

設定済みの LDAP サーバに対し変更できるのは次の詳細情報のみです。

- ポート番号と SSL 設定
- ユーザ名とパスワード

- 同期頻度
- 検索ベース DN の選択内容
- マッピングされたユーザ ロールとグループ

手順

- ステップ 1** [管理 (Administration) ] > [LDAP 統合 (LDAP Integration) ] を選択します。
- ステップ 2** [LDAP インテグレーション (LDAP Integration) ] タブで、テーブルから LDAP アカウント名を選択します。
- ステップ 3** [変更 (Modify) ] をクリックします。
- ステップ 4** [LDAP サーバ設定の変更 (Modify LDAP Server Configuration) ] 画面で、次を含む必須フィールドに値を入力します

名前	説明
[SSLの有効化 (Enable SSL) ] チェック ボックス	LDAP サーバへのセキュアな接続をイネーブルにします。
[ポート (Port) ] フィールド	ポート番号。 SSL の場合は 636 に、非セキュア モードの場合は 389 に自動的に設定されます。
[ユーザ名 (User Name) ] フィールド	ユーザ名。 LDAP ディレクトリのタイプとして [OpenLDAP] を選択した場合は、ユーザ名を次の形式で指定してください。 <code>uid=users,ou=People,dc=ucsd,dc=com</code> ここに指定する <code>ou</code> は、ディレクトリ階層でその他のすべてのユーザが配置される場所です。
[パスワード (Password) ] フィールド	ユーザのパスワード。
[同期頻度 (Synchronization Frequency) ] ドロップダウン リスト	LDAP サーバがシステムデータベースと同期される頻度 (時間単位) を選択します。次のいずれかを設定できます。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• 1</li> <li>• 4</li> <li>• 12</li> <li>• 24</li> </ul>

- ステップ 5 [次へ (Next) ] をクリックします。
- ステップ 6 [LDAP 検索ベース (LDAP Search Base) ] ペインで [選択 (Select) ] をクリックし、LDAP 検索ベースのエントリを指定して、[選択 (Select) ] をクリックします。
- ステップ 7 [次へ (Next) ] をクリックします。
- ステップ 8 [ユーザとグループのフィルタの設定 (Configure User and Group Filters) ] ペインで、次のフィールドに入力します。

名前	説明
[ユーザフィルタ (User Filters) ]	[+] 記号をクリックして、システムと同期する必要がある特定のユーザを選択します。
[グループフィルタ (Group Filters) ]	[+] 記号をクリックして、システムと同期する必要があるグループを選択します。

- ステップ 9 [次へ (Next) ] をクリックします。
- ステップ 10 [LDAPユーザロールフィルタ (LDAP User Role Filter) ] ペインで、[+] 記号をクリックして、ユーザ ロール フィルタを追加します。
- ステップ 11 [ユーザロールフィルタへのエントリの追加 (Add Entry to User Role Filters) ] ダイアログ ボックスで、次のフィールドに値を入力します。

名前	説明
[属性名 (Attribute Name) ] フィールド	属性の名前。これには、グループ名を指定できます。
[演算子 (Operator) ] ドロップダウン リスト	次のいずれかを設定できます。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• [次の値と等しい (Equal to) ]</li> <li>• [次で始まる (Starts with) ]</li> </ul>
[属性値 (Attribute Value) ] フィールド	このフィールドで値を指定します [演算子 (Operator) ] フィールドと [属性値 (Attribute Value) ] フィールドの値に一致するすべてのユーザが、[ユーザロールのマップ (Map User Role) ] ドロップダウン リストで選択するユーザ ロールに割り当てられます。

名前	説明
[ユーザロールのマップ (Map User Role) ] ドロップダウンリスト	<p>ユーザのマップ先とするユーザロールを選択します。デフォルトで利用可能なロールを選択でき、またはシステムで作成したロールを選択できます。</p> <p>次のロールはCisco UCS Director内でデフォルトで使用可能なロールです。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• すべてのポリシー管理者</li> <li>• 請求管理者</li> <li>• コンピューティング管理者</li> <li>• サービス エンド ユーザ</li> <li>• グループ管理者</li> <li>• IS 管理者</li> <li>• ネットワーク管理者</li> <li>• オペレータ管理者</li> <li>• ストレージ管理者</li> <li>• システム管理者</li> </ul>

**ステップ 12** [送信 (Submit) ] をクリックします。

**ステップ 13** [OK] をクリックします。

ユーザ ロール フィルタが [ユーザロールフィルタ (User Role Filters) ] テーブルに追加されます。

(注) 複数のユーザ ロール フィルタが指定されている場合は、最初の行に指定されたフィルタが処理されます。

### グループ メンバーシップ情報の表示

システム内のユーザは、複数のユーザ グループに属することができます。ユーザがシステムに追加されると、ユーザが属するすべてのグループもシステムに追加されます。ただし、最後にユーザが追加されたグループは、ユーザのデフォルトのプライマリ グループとして設定されます。ユーザがどのグループにも属していない場合は、デフォルトのプライマリ グループが [ドメイン ユーザ (Domain Users) ] として設定されます。[プロファイルの管理 (Manage Profiles) ] オプションを使用して、ユーザのグループメンバーシップを表示し変更することができますが、Cisco UCS Director では特定のユーザが属しているすべてのグループのリストを表示する追加オプションもあります。

## 手順

- 
- ステップ 1 [管理 (Administration) ] > [ユーザとグループ (Users and Groups) ] を選択します。
  - ステップ 2 [ユーザとグループ (Users and Groups) ] ページで [ユーザ (Users) ] をクリックします。
  - ステップ 3 テーブルからユーザを選択します。
  - ステップ 4 [その他のアクション (More Actions) ] ドロップダウン メニューで、[グループ メンバーシップ (Group Membership) ] をクリックします。  
[MemberOf] 画面に、ユーザが属するすべてのグループが表示されます。
  - ステップ 5 [閉じる (Close) ] をクリックします。
- 

## LDAP サーバ情報の削除

LDAP サーバアカウントを削除すると、次の動作が開始されます。

- LDAP ユーザに割り当てられていたリソースの割り当てが解除されます。
- LDAP ユーザに割り当てられていた VM の割り当てが解除されます。
- LDAP グループに割り当てられていたリソースの割り当てが解除されます。
- LDAP グループに割り当てられていた VM の割り当てが解除されます。
- LDAP ユーザに割り当てられていた VM 共有ポリシーの割り当てが解除されます。
- LDAP ユーザおよびグループに適用されていたタグがクリアされます。
- ユーザおよびグループが、データベースから直ちに削除されます。
- LDAP サーバの詳細は、ツリー ビューから削除されます。

## 手順

- 
- ステップ 1 [管理 (Administration) ] > [LDAP 統合 (LDAP Integration) ] を選択します。
  - ステップ 2 [LDAP インテグレーション (LDAP Integration) ] タブで、テーブルから LDAP アカウント名を選択します。
  - ステップ 3 [削除 (Delete) ] をクリックします。
  - ステップ 4 [LDAP アカウントの削除 (Delete LDAP Account) ] 画面で、[削除 (Delete) ] をクリックします。
  - ステップ 5 [OK] をクリックします。  
これにより、Cisco UCS Director 内の LDAP アカウントの削除が開始されます。LDAP アカウント内のユーザ数およびグループ数によって、この削除プロセスが完了するまでに数分かかる場合があります。この間、LDAP アカウントが Cisco UCS Director に表示され続ける場合があります。[更新 (Refresh) ] をクリックして、アカウントが削除されたことを確認します。
-

## シングルサインオン

Cisco UCS Director は、SAML 2.0 に基づくシングルサインオン (SSO) サービスを提供していません。SSO を有効にするには、OneLogin Identity Provider (IDP) 上に Cisco UCS Director をサービスプロバイダー (SP) として登録する必要があります。SSO では、ユーザは個々のシステムにログインしなくても、複数のシステムにシームレスにアクセスできます。SP と IDP 間で SSO を設定して有効にすると、ユーザは OneLogin ポータルにログインすれば、再度ログインせずに Cisco UCS Director にアクセスできます。

シングルサインオンを有効にするには、次の手順を実行します。

- 1 OneLogin サイトでユーザ アカウントを作成します。
- 2 OneLogin サイトで Cisco UCS Director アプライアンスの詳細をマッピングします。  
詳細については、次を参照してください。 [OneLogin サイトでの Cisco UCS Director アプライアンスのマッピング](#)、(104 ページ)
- 3 OneLogin サイトでシングルサインオン証明書を生成します。  
詳細については、 [OneLogin 証明書の生成](#)、(106 ページ) を参照してください。
- 4 OneLogin サイトで作成したアカウントと同じ証明書を使用して、Cisco UCS Director でユーザ アカウントを作成します。ユーザ アカウントは、OneLogin サイトにマッピングされた同じアプライアンス上に作成する必要があります。  
ユーザの追加の詳細については、 [ユーザの追加](#)、(34 ページ) を参照してください。
- 5 OneLogin サイトで照会したアプライアンスに証明書をアップロードして、シングルサインオンを有効にします。  
詳細については、 [シングルサインオンの有効化](#)、(107 ページ) を参照してください。

この手順を完了すると、OneLogin サイトに戻って Cisco UCS Director をクリックしたときに、ユーザはこれ以降、ユーザ名とパスワード情報の入力を求められません。

### OneLogin サイトでの Cisco UCS Director アプライアンスのマッピング

シングルサインオンを有効にするには、まず Cisco UCS Director を実行中のシステムをマッピングする必要があります。

#### はじめる前に

OneLogin アカウントを持っている必要があります。

手順

- ステップ 1 OneLogin サイトには、<https://www.onelogin.com> からアクセスします。
- ステップ 2 アカウントの詳細を使用してサイトにログインします。
- ステップ 3 メニューバーから、[アプリケーション (Apps)] > [アプリケーションの追加 (Add Apps)] を選択します。
- ステップ 4 [アプリケーションの検索 (Find Applications)] フィールドに、「SAML」と入力します。
- ステップ 5 表示された検索結果で、[OneLogin SAML テスト(IdP) SAML 2.0 (OneLogin SAML Test (IdP) SAML 2.0)] を選択してダブルクリックします。  
[情報 (Info)] ペインが表示されます。
- ステップ 6 [情報 (Info)] ペインに、以下の情報を入力します。

フィールド	説明
[表示名 (Display Name)] フィールド	<p>Cisco UCS Director を実行中のシステムの一意の名前を入力します。</p> <p>この名前は、OneLogin ポータルのホームページに表示されます。このポータルでは、複数の Cisco UCS Director アプライアンスを登録できます。システムを正確に識別できる名前を入力してください。</p>

- ステップ 7 [保存 (Save)] をクリックします。
- ステップ 8 メニューバーから [設定 (Configuration)] を選択し、次の情報を入力します。

フィールド	説明
[SAML コンシューマ URL (SAML Consumer URL)] フィールド	<p>Cisco UCS Director を実行中のシステムの URL を入力します。</p> <p><b>重要</b> Cisco UCS Director のユーザインターフェイスにユーザがログインすると表示される URL を入力します。次の例のようになります。</p> <p><code>https://&lt;ip_address&gt;/app/cloudmgr/cloudmgr.jsp</code> 例： <code>https://10.10.10.10/app/cloudmgr/cloudmgr.jsp</code></p> <p>リリース 6.0 以降では、URL は次のようになります。</p> <p><code>https://&lt;ip_address&gt;/app/ux/index.html</code>例： <code>https://10.10.10.10/app/ux/index.html</code></p>

- ステップ 9** [保存 (Save) ] をクリックします。  
このサイトのホームページでは、指定したサーバの詳細に対応するアイコンが作成されます。OneLogin サイトで登録するアプライアンスごとに、ホームページにアイコンが表示されます。このアイコンをクリックすると、Cisco UCS Director のユーザインターフェイスに自動的に移動します。
- 

### 次の作業

OneLogin 証明書を生成し、Cisco UCS Director アプライアンスで SSO を有効にします。

## OneLogin 証明書の生成

### はじめる前に

- OneLogin アカウントを持っている必要があります。
- Cisco UCS Director アプリケーションは、OneLogin Web サイトに登録されている必要があります。

### 手順

- 
- ステップ 1** OneLogin サイトには、<https://www.onelogin.com> からアクセスします。
- ステップ 2** アカウントの詳細を使用してサイトにログインします。
- ステップ 3** メニューバーで、[設定 (Settings) ] > [SAML] を選択します。
- ステップ 4** [標準強度の証明書 (2048 ビット) (Standard Strength Certificate (2048-bit)) ] を選択します。
- ステップ 5** [ダウンロード (Download) ] をクリックします。
- ステップ 6** [OK] をクリックします。  
onelogin.pem というファイルがシステムにダウンロードされます。
- 

### 次の作業

この証明書を Cisco UCS Director アプライアンスにアップロードする必要があります。

## シングルサインオンの有効化

### 手順

- 
- ステップ 1 [管理 (Administration) ] > [ユーザとグループ (Users and Groups) ] を選択します。
  - ステップ 2 [ユーザとグループ (Users and Groups) ] ページで [シングルサインオン (Single Sign-On) ] をクリックします。
  - ステップ 3 [シングルサインオンの有効化 (Enable Single Sign-On) ] をオンにします。
  - ステップ 4 [ファイル (File) ] フィールドで、ファイルをドラッグアンドドロップするか、または [ファイルの選択 (Select a File) ] をクリックして参照し、システムの OneLogin 証明書ファイルを選択します。  
ワンログイン証明書ファイルは、「onelogin.pem」という名前でシステムに保存されます。
  - ステップ 5 [アップロード (Upload) ] をクリックします。
  - ステップ 6 アップロードが完了したら、[送信 (Submit) ] をクリックします。  
OneLogin サイトから Cisco UCS Director を起動する場合は、システムへのログインが要求されません。
- 

## 顧客組織のブランディング

Cisco UCS Director は、次のレベルでのポータルブランディングとカスタマイズをサポートしています。

- グローバル レベル：システム レベルでのブランディングは、グローバル管理者によって変更できます。
- MSP 組織レベルまたはテナント レベル：このレベルでのブランディングは、管理者または MSP 管理者によって変更できます。
- 顧客組織レベル：顧客組織は通常 MSP 組織にグループ化されます。したがって MSP 管理者またはグローバル管理者がブランディングの詳細を変更できます。

MSP 組織レベルでのブランディングサポートの導入では、ユーザ向けに表示されるブランディングの変更内容に適用される特定のルールがあります。適用される設定は、次によって異なります。

- ユーザ ロール：エンドユーザ、グループ管理者、または MSP 管理者が相当します。
- ユーザが属するお客様の組織とそれに対するブランディング設定。
- MSP 組織のブランディング設定。

次の表に、Cisco UCS Director でのブランディング動作の詳細を説明します。

表 1: Cisco UCS Directorでのブランディング動作

MSP組織レベルのブランディング設定	顧客組織レベルのブランディング設定	MSP 管理者	グループ管理者	エンドユーザー
はい	はい	MSP組織レベルで設定したブランディングの詳細が表示されます。	顧客組織レベルで設定したブランディングの詳細が表示されます。	このユーザーが属する顧客組織レベルで設定したブランディングの詳細が表示されます。
いいえ	はい	グローバルブランディングの詳細が表示されます。	顧客組織レベルで設定したブランディングの詳細が表示されます。	このユーザーが属する顧客組織レベルで設定したブランディングの詳細が表示されます。
はい	いいえ	MSP組織レベルで設定したブランディングの詳細が表示されます。	この顧客組織が属するMSP組織レベルで設定したブランディングの詳細が表示されます。	顧客組織が属するMSP組織レベルで設定したブランディングの詳細が表示されます。
いいえ	いいえ	グローバルブランディングの詳細が表示されます。	グローバルブランディングの詳細が表示されます。	グローバルブランディングの詳細が表示されます。

## ユーザーグループのブランディング

### 手順

- ステップ 1 [管理 (Administration) ] > [ユーザーとグループ (Users and Groups) ] を選択します。
- ステップ 2 [ユーザーとグループ (Users and Groups) ] ページで [ユーザーとグループ (Users and Groups) ] をクリックします。
- ステップ 3 ブランディングするグループを選択します。
- ステップ 4 [その他のアクション (More Actions) ] ドロップダウンメニューから [ブランディング (Branding) ] を選択します。  
[グループブランディング (Group Branding) ] 画面には、カスタマイズ可能なオプションが表示されます。

- ステップ 5** ユーザ インターフェイスの左上隅に表示されるイメージをカスタマイズするには、[ロゴ イメージ (Logo image)] をオンにします。
- a) ロゴ イメージ ファイルを参照して選択し、[アップロード (Upload)] をクリックします。  
 (注) ロゴ イメージの形式が JPG、PNG、または GIF であることを確認します。最適なイメージ サイズは幅 200 ピクセル、高さは 100 ピクセルです。ダウンロード時間を短縮するため、イメージ サイズを小さくしておくことをお勧めします。
  - b) [送信 (Submit)] をクリックします。
- ステップ 6** ユーザ インターフェイスの上部に表示されるヘッダー ラベルを指定する [アプリケーション ラベル (Application Labels)] をオンにします。
- a) [ラベル 1 (Label 1)] および [ラベル 2 (Label 2)] フィールドに少なくとも 1 つのアプリケーションのラベルを入力します。
- ステップ 7** ユーザ インターフェイスからログインした後、特定の URL にユーザをリダイレクトするための [ログアウト時の URL 転送 (URL Forwarding on Logout)] をオンにします。
- a) [URL] フィールドに、サーバの [URL] を入力します。
- ステップ 8** ユーザ インターフェイスの右上隅に表示されているリンクを指定するには、[カスタム リンク (Custom Link)] をオンにします。
- a) 少なくとも最初の 2 つのフィールドに値を入力してください。

名前	説明
[カスタム リンク 1 のラベル (Custom Link 1 Label)] フィールド	カスタム リンク 1 のラベル。
[カスタム リンク 1 の URL (Custom Link 1 URL)] フィールド	カスタム リンク 1 の URL。
[カスタム リンク 2 のラベル (Custom Link 2 Label)] フィールド	カスタム リンク 2 のラベル。
[カスタム リンク 2 の URL (Custom Link 2 URL)] フィールド	カスタム リンク 2 の URL。

- ステップ 9** [送信 (Submit)] をクリックします。

## 顧客組織のブランディング

Cisco UCS Director で顧客組織のロゴおよびアプリケーション ラベルをカスタマイズできます。

手順

- ステップ 1** [管理 (Administration) ] > [ユーザとグループ (Users and Groups) ] を選択します。
- ステップ 2** [顧客組織 (Customer Organizations) ] タブまたは [MSP 組織 (MSP Organizations) ] タブを選択します。  
これらのタブの名前は目安にすぎません。[サービスプロバイダー機能 (Service Provider Feature) ] を有効にしている場合は、第 1 レベルと第 2 レベルの組織の名前を指定する必要があります。指定した名前は、インターフェイスのタブとして表示されます。[サービスプロバイダー機能 (Service Provider Feature) ] を無効にしている場合は、[顧客組織 (Customer Organizations) ] タブのみが表示されます。
- ステップ 3** ブランディングする顧客組織を選択します。
- ステップ 4** [その他のアクション (More Actions) ] ドロップダウンメニューから [ブランディング (Branding) ] を選択します。  
[グループブランディング (Group Branding) ] 画面には、カスタマイズするオプションが表示されます。
- ステップ 5** ユーザ インターフェイスの左上隅に表示されるイメージをカスタマイズするには、[ロゴイメージ (Logo image) ] をオンにします。  
a) ロゴイメージファイルを参照して選択し、[アップロード (Upload) ] をクリックします。  
(注) ロゴイメージの形式が JPG、PNG、または GIF であることを確認します。最適なイメージサイズは幅 200 ピクセル、高さは 100 ピクセルです。ダウンロード時間を短縮するため、イメージサイズを小さくしておくことをお勧めします。  
b) [送信 (Submit) ] をクリックします。
- ステップ 6** ユーザ インターフェイスの上部に表示されるヘッダー ラベルを指定する [アプリケーション ラベル (Application Labels) ] をオンにします。  
a) [ラベル 1 (Label 1) ] および [ラベル 2 (Label 2) ] フィールドに少なくとも 1 つのアプリケーションのラベルを入力します。
- ステップ 7** ユーザ インターフェイスからログインした後、特定の URL にユーザをリダイレクトするための [ログアウト時の URL 転送 (URL Forwarding on Logout) ] をオンにします。  
a) [URL] フィールドに、サーバの [URL] を入力します。
- ステップ 8** ユーザ インターフェイスの右上隅に表示されているリンクを指定するには、[カスタム リンク (Custom Link) ] をオンにします。  
a) 少なくとも最初の 2 つのフィールドに値を入力してください。

名前	説明
[カスタム リンク 1 のラベル (Custom Link 1 Label) ] フィールド	カスタム リンク 1 のラベル。
[カスタム リンク 1 の URL (Custom Link 1 URL) ] フィールド	カスタム リンク 1 の URL。

名前	説明
[カスタム リンク 2 のラベル (Custom Link 2 Label) ] フィールド	カスタム リンク 2 のラベル。
[カスタム リンク 2 の URL (Custom Link 2 URL) ] フィールド	カスタム リンク 2 の URL。

ステップ 9 [送信 (Submit) ] をクリックします。

## ログインページのブランディング

ログインページは、ドメイン名に関連付けられているロゴを示すように設定できます。エンドユーザがそのドメインからログインすると、ログインページでそのカスタム ロゴが表示されます。ロゴの最適なイメージのサイズは幅 890 ピクセル、高さ 470 ピクセルで、余白に 255 ピクセルが割り当てられています。シスコは、より高速なダウンロードを実現するために、イメージサイズを小さくすることを推奨しています。



(注) グループまたは顧客組織のログインページは、最初にブランディングで設定される (有効にされる) 必要があります。

## カスタム ドメイン ロゴの設定

### 手順

- ステップ 1 [管理 (Administration) ] > [ユーザとグループ (Users and Groups) ] を選択します。
- ステップ 2 [ユーザとグループ (Users and Groups) ] ページで [ログインページブランディング (Login Page Branding) ] をクリックします。
- ステップ 3 [追加 (Add) ] をクリックします。
- ステップ 4 [ドメインブランディング (Domain Branding) ] 画面で、次を含む必須フィールドに値を入力します

名前	説明
[ドメイン名 (Domain Name) ] フィールド	ブランディングするドメイン名。

名前	説明
[カスタムドメインロゴ (Custom Domain Logo) ] チェック ボックス	指定されたドメイン名からのログイン ページ ブランディングを有効にするには、このチェッ ク ボックスをオンにします。
[ファイル (File) ] フィールド	アップロードするロゴファイル。ファイルをド ラッグしてこのフィールドにドロップするこ とも、[ファイルの選択 (Select a File) ] をクリッ クして参照し、アップロードするファイルを選 択することもできます。  (注) ロゴの最適なイメージサイズは、幅 890 ピクセル、高さ 470 ピクセル、余 白 255 ピクセルです。ダウンロード 時間を短縮するため、イメージサイ ズを小さくしておくことをお勧めし ます。

**ステップ 5** [送信 (Submit) ] をクリックします。

---



## 第 4 章

# エンドユーザポータルの設定

- [エンドユーザポータル, 113 ページ](#)
- [エンドユーザポータルを設定するタスクの概要, 114 ページ](#)
- [エンドユーザポータルのユーザアカウントの設定, 114 ページ](#)
- [エンドユーザポータルの権限の設定, 118 ページ](#)
- [エンドユーザポータルのユーザインターフェイスの設定, 131 ページ](#)

## エンドユーザポータル

エンドユーザポータルはセルフサービスポータルであり、ユーザに提供するサービスのカタログが含まれています。エンドユーザが使用可能なサービスの1つを要求すると、エンドユーザポータルは、ユーザに対して設定されたサービスリクエストのワークフローを実行します。このワークフローには、セルフサービスプロビジョニングリクエストの承認、必要なコンピューティング、ストレージ、ネットワークリソースの割り当て、さらには、セキュリティとパフォーマンスの設定が含まれます。サービスがプロビジョニングされると、エンドユーザは、ランディングページのサマリーダッシュレットやサマリーレポート、さらにはエンドユーザポータルから利用できるレポートを使用してサービスのステータスを追跡できます。

次に、エンドユーザがエンドユーザポータルで実行できるタスクを示します。

- 仮想マシン (VM)、アプリケーション固有のインフラストラクチャ、およびベアメタルサーバのプロビジョニング
- サービスリクエストの確認と管理
- OVF やその他の画像のアップロードと展開
- プロビジョニングされた仮想リソースと物理リソースのモニタとレポートの作成
- インフラストラクチャをプロビジョニングするためのサービスリクエストの承認

# エンドユーザポータルを設定するタスクの概要

管理者がエンドユーザポータルを設定するために実行する必要があるタスクを次に示します。

- ユーザグループの追加
- ユーザアカウントの追加
- 特定のタスクのエンドユーザ権限の設定
- ポータルのユーザインターフェイスの設定

## エンドユーザポータルのユーザアカウントの設定

### ユーザグループの作成

#### 手順

- ステップ 1** [管理 (Administration) ] > [ユーザとグループ (Users and Groups) ] を選択します。
- ステップ 2** [ユーザとグループ (Users and Groups) ] ページで [ユーザとグループ (Users and Groups) ] をクリックします。
- ステップ 3** [追加 (Add) ] をクリックします。
- ステップ 4** [グループの追加 (Add Group) ] 画面で、次のフィールドに入力します。

フィールド名	説明
[名前 (Name) ] フィールド	グループまたは顧客組織の名前。 次のような特殊文字を使用できます。 ( ) . & - _ ` ~ \$ % ^ { } ! ' @
[説明 (Description) ] フィールド	グループまたは顧客組織の説明 (必要な場合) 。
[コード (Code) ] フィールド	グループの短い名前またはコード名。この名前は、VM とホスト名テンプレートで使用されます。
[コストセンター (Cost Center) ] フィールド	(任意) コストセンターの名前または番号 (必要な場合) 。この名前または番号は、グループが関連付けられているコストセンターを表します。この名前は、VMware システム ポリシー VM の命名規則で使用できます。  命名規則にコストセンターを使用する方法の詳細については、 <a href="#">ポリシーの管理</a> 、(209 ページ) を参照してください。

フィールド名	説明
[連絡先の電子メール (Contact Email) ] フィールド	この電子メールは、必要に応じてサービスリクエストおよびリクエスト承認のステータスをグループ所有者に通知する目的で使用されます。
[名 (First Name) ] フィールド	連絡先の名。
[姓 (Last Name) ] フィールド	連絡先の姓。
[電話 (Phone) ] フィールド	連絡先の電話番号。
[住所 (Address) ] フィールド	連絡先の住所。
[グループ共有ポリシー (Group Share Policy) ] ドロップダウンリスト	このグループのユーザのグループ共有ポリシーを選択します。 このドロップダウンリストにデータが取り込まれるのは、グループ共有ポリシーを作成した場合だけです。 このポリシーの作成の詳細については、 <a href="#">グループ共有ポリシーの作成</a> 、(224 ページ) を参照してください。
[ユーザへのリソース割り当てを許可 (Allow Resource Assignment To Users) ] チェックボックス	オンにすると、このグループのユーザは、そのユーザに割り当てられたリソースを持つことができ、これらのリソースを所有できます。また、これらのユーザは、グループに属するリソースを確認できます。ただし、ユーザ間でリソースを共有することはできません。

**ステップ 5** [追加 (Add) ] をクリックします。

### 次の作業

さらにグループを追加する場合は、この手順を繰り返します。追加するグループごとに、リソース制限を編集し、タグを管理し、ロゴおよびアプリケーションラベルをカスタマイズすることができます。

## ユーザの追加

### はじめる前に

グループにユーザを追加する前に、そのグループが作成されていることを確認してください。

手順

- ステップ 1 [管理 (Administration) ] > [ユーザとグループ (Users and Groups) ] を選択します。
- ステップ 2 [ユーザとグループ (Users and Groups) ] ページで [ユーザ (Users) ] をクリックします。
- ステップ 3 [追加 (Add) ] をクリックします。
- ステップ 4 [ユーザの追加 (Add User) ] 画面で、次の必須フィールドに値を入力します。

フィールド名	説明
[ユーザロール (User Role) ] ドロップダウンリスト	ユーザのロールタイプを選択します。  (注) このドロップダウンリストには、Cisco UCS Director で使用可能なすべてのユーザロールが表示されます。デフォルトで使用可能なユーザロールに加えて、追加のユーザロールを作成できます。ユーザロールの作成の詳細については、 <a href="#">ユーザロールの追加, (33 ページ)</a> を参照してください。
[ユーザグループ (User Group) ] ドロップダウンリスト	ユーザがアクセスできるグループを選択します。すでに使用可能なグループを選択するか、または新しいグループを追加できます。  (注) このフィールドは、ユーザロールとしてサービスエンドユーザまたはグループ管理者を選択している場合にのみ表示されます。
[MSP 組織 (MSP Organization) ] ドロップダウンリスト	ユーザが管理する MSP 組織を選択します。現在使用可能な組織を選択するか、または新しい組織を追加できます。  (注) このフィールドは、ユーザロールとして [MSP 管理者 (MSP Admin) ] を選択している場合にのみ表示されます。
[ログイン名 (Login Name) ] フィールド	ログイン名。  次のような特殊文字を使用できます。 ( ) . & - _ ` ~ \$ % ^ { } ! ' @

フィールド名	説明
[パスワード (Password) ]フィールド	パスワード。 (注) ユーザに対して Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) 認証を設定している場合は、ローカルサーバではなく LDAP サーバでのみパスワードが検証されます。
[パスワードの確認 (Confirm Password) ]フィールド	確認のためにパスワードを再入力します。
[ユーザの連絡先電子メール (User Contact Email) ]フィールド	電子メール アドレス。 (注) 電子メールアドレスは、サービスリクエストのステータスと承認についてグループ所有者に通知するために必要です。
[名 (First Name) ]フィールド	名。
[姓 (Last Name) ]フィールド	姓。
[電話 (Phone) ]フィールド	ユーザの電話番号です。
[住所 (Address) ]フィールド	ユーザのオフィス住所です。
[ユーザ無効化の日付を設定 (Set user disable date) ]チェック ボックス	システムでユーザアカウントを無効にする日時を設定する場合にオンにします。ユーザアカウントが無効になると、ユーザはシステムにログインできなくなります。 この日付から 1 週間前に、アカウントが無効になることを知らせる電子メール メッセージがユーザに送信されます。この自動メールメッセージは、PeriodicNotificationToUserTask システムタスクによって生成され、送信されます。 指定された日時に、ユーザアカウントが自動的に無効になります。ユーザが指定した日付にシステムにログインすると、ログインセッションは自動的に終了します。

フィールド名	説明
[ロケール (Locale) ] ドロップダウン リスト	このユーザのシステムの言語を個別に選択します。デフォルトでは、原語は英語に設定されています。  このユーザがログインすると、ユーザインターフェイスは、選択した言語で表示されます。このロケールの選択は、このユーザにのみ適用されます。
[クラシック ビューでログイン (Login with Classic View) ] チェック ボックス	このユーザがシステムにログインしたときに、クラシック ビュー ユーザ インターフェイスを起動する場合にオンにします。  他のユーザ用にクラシック ビューを起動するようにシステムを設定する機能は、リリース 6.5でのみ使用できます。クラシックビューは、続くリリースでは削除されます。

ステップ 5 [追加 (Add) ] をクリックします。

### 次の作業

ユーザが含まれている行をクリックし、[プロファイルの管理 (Manage Profiles) ] をクリックして、オプションでそのユーザに複数のロールを割り当てます。

## エンドユーザポータルの権限の設定

エンドユーザポータルのユーザアカウントを作成したら、特定のタスクを実行するための権限をこれらのアカウントに指定する必要があります。以降のセクションでは、エンドユーザがカタログの管理や VM の管理などのタスクを実行するのに必要な権限について説明します。

### 承認に必要な権限

次の表に、利用可能な承認アクションおよび必要な権限のリストを示します。

タスク	エンドユーザの権限
サービス リクエストの詳細の表示	デフォルト
サービス リクエストの承認	デフォルト
サービス リクエストの拒否	デフォルト

タスク	エンドユーザの権限
サービス リクエストのキャンセル	デフォルト
サービス リクエストの再送信	デフォルト
サービス リクエストのアーカイブ	デフォルト
サービス リクエストへのメモの追加	デフォルト
サービス リクエストのロールバック	デフォルト

## カタログに必要な権限

次の表に、利用可能なカタログ アクションおよび必要な権限のリストを示します。

タスク	エンドユーザの権限
カタログの詳細の表示	デフォルト
標準のカタログ用サービス リクエストの作成	デフォルト
詳細なカタログのサービス リクエストの作成	デフォルト
サービス コンテナ カatalogのサービス リクエストの作成	デフォルト
ベア メタル カatalogのサービス リクエストの作成	デフォルト
導入可能性アセスメントの実行	デフォルト
標準カタログ項目の追加	追加の権限が必要
詳細カタログ項目の追加	追加の権限が必要
サービス コンテナのカタログ項目の追加	追加の権限が必要
ベア メタルのカタログ項目の追加	追加の権限が必要
カタログ項目の複製	追加の権限が必要
カタログの編集	追加の権限が必要
カタログの削除	追加の権限が必要

## 予算エントリに必要な権限

予算エントリに対してアクションを実行できます。アクションによっては、追加の権限が必要です。次の表に、利用可能な予算エントリ管理のアクションと必要な権限のリストを示します。

タスク	エンドユーザの権限
予算エントリの追加	追加の権限が必要
予算エントリの表示	追加の権限が必要

## 物理リソース

### CloudSense レポートに必要な権限

次の表に、利用可能な CloudSense 管理アクションおよび必要な権限のリストを示します。

タスク	エンドユーザの権限
CloudSense レポートの生成	デフォルト
CloudSense レポートを開く	追加の権限が必要
CloudSense レポートの電子メール送信	追加の権限が必要
CloudSense レポートの削除	追加の権限が必要

### ラック サーバに必要な権限

次の表に、利用可能なラックサーバ管理アクションおよび必要な権限のリストを示します。

タスク	エンドユーザの権限
ラックサーバの電源のオン/オフの切り替え	追加の権限が必要
ラックサーバのシャットダウン	追加の権限が必要
ラックサーバのハードリセットの実行	追加の権限が必要
ラックサーバの電源再投入	追加の権限が必要

タスク	エンドユーザの権限
ラック サーバの KVM コンソールの起動	追加の権限が必要

## サーバに必要な権限

次の表に、利用可能なサーバ管理アクションおよび必要な権限のリストを示します。

タスク	エンドユーザの権限
サーバの電源のオン/オフの切り替え	追加の権限が必要
サーバとサービス プロファイルの関連付け	追加の権限が必要
サーバの関連付け解除	追加の権限が必要
サーバの KVM コンソールの起動	追加の権限が必要

## サービス プロファイルに必要な権限

次の表に、利用可能なサービス プロファイル管理アクションおよび必要な権限のリストを示します。

タスク	エンドユーザの権限
サービス プロファイルの詳細の表示	デフォルト
サービスプロファイルとサーバの関連付け解除	追加の権限が必要
インベントリ コレクションのリクエスト	追加の権限が必要

## SnapMirrors に必要な権限

次の表に、利用可能な SnapMirror アクションおよび必要な権限のリストを示します。

タスク	エンドユーザの権限
SnapMirror の詳細の表示	デフォルト

## ストレージ仮想マシンに必要な権限

次の表に、利用可能な SVM 管理アクションおよび必要な権限のリストを示します。

タスク	エンドユーザの権限
SVMの詳細の表示	デフォルト

## vFilerに必要な権限

次の表に、利用可能な NetApp vFiler のアクションおよび必要な権限のリストを示します。

タスク	エンドユーザの権限
vFilerの詳細の表示	デフォルト
vFilerのセットアップ	追加の権限が必要
vFilerでのCIFSのセットアップ	追加の権限が必要

## SVM イニシエータ グループに必要な権限

次の表に、利用可能な SVM イニシエータ グループ アクションおよび必要な権限のリストを示します。

タスク	エンドユーザの権限
イニシエータ グループの作成	追加の権限が必要
SVM イニシエータ グループの名前変更	追加の権限が必要
SVM イニシエータ グループへのポートセットのバインド	追加の権限が必要
SVM イニシエータ グループからのポートセットのバインド解除	追加の権限が必要

## SVM LUNに必要な権限

次の表に、利用可能な SVM LUN アクションおよび必要な権限のリストを示します。

タスク	エンドユーザの権限
SVM LUNの詳細の表示	デフォルト
SVM LUNの作成	追加の権限が必要
SVM LUNのサイズ変更	追加の権限が必要

タスク	エンドユーザの権限
SVM LUN の複製	追加の権限が必要
SVM LUN のオフラインまたはオンラインの切り替え	追加の権限が必要
イニシエータグループへの SVMLUN のマッピング	追加の権限が必要
イニシエータグループからの SVMLUN のマッピング解除	追加の権限が必要
SVM LUN 上のスペース予約の切り替え	追加の権限が必要

### SVM CIFS 共有に必要な権限

次の表に、利用可能な CIFS 共有アクションおよび必要な権限のリストを示します。

タスク	エンドユーザの権限
SVM での CIFS 共有の作成	追加の権限が必要
SVM に対する CIFS 共有アクセスの設定	追加の権限が必要

### SVM エクスポートポリシーに必要な権限

次の表に、利用可能な SVM エクスポートポリシーアクションおよび必要な権限のリストを示します。

タスク	エンドユーザの権限
SVM のエクスポートポリシーの作成	追加の権限が必要

### SVM エクスポートルールに必要な権限

次の表に、利用可能な SVM エクスポートルールアクションおよび必要な権限のリストを示します。

タスク	エンドユーザの権限
SVM エクスポートルールの作成	追加の権限が必要

## SVM イニシエータに必要な権限

次の表に、利用可能な SVM イニシエータ アクションおよび必要な権限のリストを示します。

タスク	エンドユーザの権限
SVM イニシエータの作成	追加の権限が必要

## SVM ポートセットに必要な権限

次の表に、利用可能な SVM ポートセット アクションと必要な権限のリストを示します。

タスク	エンドユーザの権限
SVM ポートセットの作成	追加の権限が必要
SVM ポートセットの破棄	追加の権限が必要
SVM ポートセットへのポートの追加	追加の権限が必要
SVM ポートセットからのポートの削除	追加の権限が必要

## SVM SIS ポリシーに必要な権限

次の表に、利用可能な SVM SIS ポリシーのアクションと必要な権限のリストを示します。

タスク	エンドユーザの権限
SVM の SIS ポリシーの作成	追加の権限が必要

## SVM スナップショットポリシーに必要な権限

次の表に、利用可能な SVM スナップショットポリシー アクションおよび必要な権限のリストを示します。

タスク	エンドユーザの権限
SVM スナップショットポリシーの詳細の表示	デフォルト
SVM でのスナップショットポリシーの作成	追加の権限が必要
SVM のスナップショットポリシーの有効化および無効化	追加の権限が必要

タスク	エンドユーザの権限
SVM スナップショットポリシーのスナップショットポリシー スケジュールの作成	追加の権限が必要

### SVM WWPN エイリアスに必要な権限

次の表に、利用可能な SVM WWPN エイリアス アクションおよび必要な権限のリストを示します。

タスク	エンドユーザの権限
SVM での WWPN エイリアスの作成	追加の権限が必要

### SVM ボリューム スナップショットに必要な権限

次の表に、利用可能な SVM ボリューム スナップショット アクションおよび必要な権限のリストを示します。

タスク	エンドユーザの権限
SVM ボリュームのスナップショットの作成	追加の権限が必要
スナップショットからの SVM ボリュームの復元	追加の権限が必要
スナップショットを使用して SVM ボリューム上のファイルを復元する	追加の権限が必要
スナップショットを使用した SVM ボリューム上のファイルの部分的な復元	追加の権限が必要

### SVM ボリュームに必要な権限

次の表に、使用可能な SVM ボリューム アクションのリストと、必要な権限を示します。

タスク	エンドユーザの権限
SVM ボリュームの詳細の表示	デフォルト
SVM ボリュームの作成	必要な追加の権限

タスク	エンドユーザの権限
SVM ボリュームをオフラインまたはオンラインにする	必要な追加の権限
SVM ボリュームのサイズ変更	必要な追加の権限
SVM ボリュームの複製	必要な追加の権限
マルチボリューム スナップショットの作成	必要な追加の権限
SVM ボリュームの移動	必要な追加の権限
SVM ボリュームのマウントとマウント解除	必要な追加の権限
SVM ボリュームでの重複排除の有効化と無効化	必要な追加の権限
SVM ボリュームでの重複排除の開始	必要な追加の権限
SVM ボリュームでの重複排除の停止	必要な追加の権限
SVM ボリュームでの Qtree の作成	必要な追加の権限
SVM ボリュームでのインベントリ収集の実行	必要な追加の権限
SVM ボリュームのスナップショット予約の設定	必要な追加の権限
SVM ボリュームのグループへの割り当て	必要な追加の権限
グループからの SVM ボリュームの割り当て解除	必要な追加の権限

## vFiler ボリュームに必要な権限

次の表に、使用可能な vFiler ボリューム アクションのリストと、必要な権限を示します。

タスク	エンドユーザの権限
vFiler ボリュームの詳細の表示	デフォルト
vFiler ボリュームの作成	必要な追加の権限
vFiler ボリュームのサイズ変更	必要な追加の権限

タスク	エンドユーザの権限
vFiler ボリュームのオフラインまたはオンラインの切り替え	必要な追加の権限
vFiler ボリュームでの重複排除の有効化と無効化	必要な追加の権限
NFS を使用した vFiler ボリュームのエクスポート	必要な追加の権限
vFiler ボリューム スナップショットの作成	必要な追加の権限
vFiler ボリュームのスナップショット予約のサイズ変更	必要な追加の権限
vFiler ボリュームでの CIFS 共有の作成	必要な追加の権限
vFiler ボリュームに対する CIFS 共有アクセスの設定	必要な追加の権限
vFiler ボリュームでの Qtree の作成	必要な追加の権限

## サービス

### 支払い情報に必要な権限

次の表に、利用可能な支払いアクションおよび必要な権限のリストを示します。

タスク	エンドユーザの権限
支払い情報の詳細の表示	追加の権限が必要
支払いの実施	追加の権限が必要
支払い詳細の更新	追加の権限が必要
資金の確認	追加の権限が必要

### サービス リクエストに必要な権限

次の表に、利用可能なサービス リクエスト アクションおよび必要な権限のリストを示します。

タスク	エンドユーザの権限
サービス リクエストの詳細の表示	デフォルト
標準のカタログ用サービス リクエストの作成	デフォルト
詳細なカタログのサービス リクエストの作成	デフォルト
サービス コンテナのサービス リクエストの作成	デフォルト
ベア メタル カatalogのサービス リクエストの作成	デフォルト
サービス リクエストのキャンセル	デフォルト
サービス リクエストの再送信	デフォルト
サービス リクエストのアーカイブ	デフォルト
サービス リクエストへのメモの追加	デフォルト
サービス リクエストのロールバック	デフォルト

## ユーザ OVF 管理に必要な権限

次の表に、利用可能な OVF 管理アクションおよび必要な権限のリストを示します。

タスク	エンドユーザの権限
OVA ファイルのアップロード	デフォルト
OVA ファイルの破棄	デフォルト

## 仮想リソース

### アプリケーション コンテナに必要な権限

次の表に、利用可能なアプリケーションコンテナアクションおよび必要な権限のリストを示します。

タスク	エンドユーザの権限
アプリケーション コンテナの詳細の表示	デフォルト
アプリケーション コンテナ レポートの表示	デフォルト
アプリケーション コンテナの電源管理	デフォルト
アプリケーション コンテナの廃止	デフォルト
アプリケーション コンテナの複製	デフォルト
アプリケーション コンテナへの VM の追加	デフォルト
導入済み APIC アプリケーション コンテナへの ベア メタル サーバの追加	デフォルト
アプリケーション コンテナの削除	デフォルト
VM コンソールへのアクセス	デフォルト
リソース制限の編集	デフォルト
コスト モデルの編集	デフォルト
アプリケーション コンテナ コントラクトの追加	デフォルト

## VMに必要な権限

次の表に、利用可能なVMライフサイクル管理アクションおよび必要な権限のリストを示します。

タスク	エンドユーザの権限
VMの詳細の表示	デフォルト
VMのインベントリ収集のリクエスト	デフォルト
VMクライアントの起動	追加の権限が必要
VNCコンソールの起動	追加の権限が必要
VMRC HTML5 コンソールの起動	追加の権限が必要
VMのリース時間の設定	追加の権限が必要

タスク	エンドユーザの権限
VMの電源管理	追加の権限が必要
スナップショットの作成	追加の権限が必要
スナップショットの復帰	追加の権限が必要
スナップショットをゴールデンとしてマーキング	追加の権限が必要
VMの複製	追加の権限が必要
VMのサイズ変更	追加の権限が必要
VMの再同期	追加の権限が必要
VMディスクの作成	追加の権限が必要
VMへのvNICの追加	追加の権限が必要
VMのVDCへの割り当て	追加の権限が必要
VMのVDCへの移動	追加の権限が必要
VMをイメージとして複製	追加の権限が必要
VMをイメージとして変換	追加の権限が必要
VMのVMRCコンソールの有効化および無効化	追加の権限が必要
ISOイメージをCD/DVDドライブとしてマウント	追加の権限が必要
CD/DVDドライブとしてマウントしたISOイメージのマウント解除	追加の権限が必要

## イメージに必要な権限

次のテーブルに、利用可能なイメージアクションおよび必要な権限のリストを示します。

タスク	エンドユーザの権限
イメージからVMへの変換	追加の権限が必要
テンプレートからのVMの展開	追加の権限が必要

# エンドユーザポータルのユーザインターフェイスの設定

エンドユーザの権限を有効にすることに加え、エンドユーザポータルで特定の要素を有効にすることもできます。これには次が含まれます。

- ダッシュレットの設定
- ダッシュレット レポートの色の変更
- カタログの選択

## ダッシュレットの設定

ダッシュレットは、エンドユーザポータルのダッシュボードに表示できるレポートです。

使用可能なダッシュレットは、次のとおりです。

- VM
- UCS サーバ
- 注文
- カタログ
- 承認

管理者は、エンドユーザポータルのダッシュレットの一部またはすべてを表示させるかを選択できます。各ユーザグループのダッシュレットを設定できます。



(注) すべての使用可能なダッシュレットはユーザグループにユーザが含まれる場合にのみユーザグループを追加できます。ユーザグループに1人のユーザもない場合、ダッシュレットにユーザグループは表示されません。

ユーザグループのダッシュレットを設定するには、次の手順を実行します。

## 手順

- 
- ステップ 1** [管理 (Administration) ] > [ユーザとグループ (Users and Groups) ] を選択します。
- ステップ 2** [ユーザとグループ (Users and Groups) ] ページで [ユーザとグループ (Users and Groups) ] をクリックします。
- ステップ 3** ダッシュレットを設定するユーザグループを含む行をクリックします。
- ステップ 4** [その他のアクション (More Actions) ] ドロップダウンリストから [ダッシュレットのセットアップ (Dashlet Setup) ] を選択します。  
[ダッシュレットのレポート (Dashlets Report) ] 画面には、すべての使用可能なダッシュレットが表示されます。  
(注) ユーザグループ内にユーザがない場合、[ダッシュレットのレポート (Dashlets Report) ] 画面ではダッシュレットは表示されません。ダッシュレットを設定するには、ユーザグループにユーザを追加します。
- ステップ 5** [ダッシュレットのレポート (Dashlets Report) ] 画面で、ユーザグループに必要なないダッシュレットを選択し、[X] (削除) アイコンをクリックします。
- ステップ 6** ユーザグループにダッシュレットを追加するには、[+] (追加) アイコンをクリックします。[エントリの追加 (Add Entry) ] 画面で、次のフィールドに値を入力します。
- ダッシュレット名リストから、ダッシュレットのタイプを選択します。
  - [ダッシュレットデータレポート (Dashlet Data Report) ] セクションで、[+] (追加) アイコンをクリックします。
  - ダッシュレットデータレポートへのエントリの追加で、エントリ (ステータス、タイプ、選択したダッシュレットタイプの状態) を選択し、エントリの色を指定し、[送信 (Submit) ] をクリックします。
  - エントリの REST に色を指定します。
  - ダッシュレットにエントリに色を指定した後、[送信 (Submit) ] をクリックします。
- ステップ 7** [ダッシュレットのレポート (Dashlets Report) ] 画面で、[エンドユーザへの公開 (Publish to end users) ] ボックスがオンになっていることを確認します。  
このオプションを使用すると、このグループのユーザ用にダッシュレットをエンドユーザポータルに表示できます。
- ステップ 8** [送信 (Submit) ] をクリックします。
- 

## ダッシュレットのレポートの色の変更

管理者は、エンドユーザポータルに表示されるダッシュレットレポート内の各エントリの色の変更を選択できます。エントリはダッシュレットによりステータス (進行中または完了) 、カテゴリタイプ (標準または拡張) 、または電源の状態 (オンまたはオフ) の可能性があります。たとえば、VM ダッシュレット用に、ON 状態に赤を OFF 状態にグレーを割り当てることができます。

ダッシュレット レポートのエントリの色を変更するには、次の手順を実行します。

#### 手順

- 
- ステップ 1** [管理 (Administration)] > [ユーザとグループ (Users and Groups)] を選択します。
  - ステップ 2** [ユーザとグループ (Users and Groups)] ページで [ユーザとグループ (Users and Groups)] をクリックします。
  - ステップ 3** ダッシュレットを設定するユーザ グループを含む行をクリックします。
  - ステップ 4** [その他のアクション (More Actions)] ドロップダウンリストから [ダッシュレットのセットアップ (Dashlet Setup)] を選択します。  
[ダッシュレットのレポート (Dashlets Report)] 画面には、すべての使用可能なダッシュレットが表示されます。
  - ステップ 5** [ダッシュレットのレポート (Dashlets Report)] 画面で、ダッシュレットを選択し、[編集 (Edit)] をクリックします。  
[エントリの追加 (Add Entry)] 画面が表示されます。
  - ステップ 6** [エントリの追加 (Add Entry)] 画面で、次のフィールドに値を入力します。
    - a) ダッシュレット データ レポート 領域へのエントリの追加で、エントリを選択し、エントリに色を指定し、[送信 (Submit)] をクリックします。
    - b) エントリの REST に色を割り当てます。
    - c) ダッシュレットにエントリに色を指定した後、[送信 (Submit)] をクリックします。
  - ステップ 7** [エンドユーザへの入力 (Publish to end users)] チェック ボックスがオンになっていることを確認します。  
このダッシュレットの変更のオプションを有効化すると、このグループのユーザ用にエンドユーザポータル上に表示されます。
  - ステップ 8** [送信 (Submit)] をクリックします。
- 

## エンドユーザポータルのカタログの選択

管理者は、フォルダ内のフォルダおよびカタログをエンドユーザポータルのダッシュボードに表示できます。最大 25 のカタログフォルダと最大 25 のフォルダ内のカタログをエンドユーザポータルのダッシュボードに表示できます。

カタログをエンドユーザポータルのダッシュボードに表示するよう設定するには、次の手順を実行してください:

## 手順

---

- ステップ 1** [管理 (Administration)] > [ユーザとグループ (Users and Groups)] を選択します。
- ステップ 2** [ユーザとグループ (Users and Groups)] ページで [ユーザとグループ (Users and Groups)] をクリックします。
- ステップ 3** MSP モードを有効にしている場合は、[お客様の組織 (Customer Organizations)] タブを選択します。
- ステップ 4** Catalog を設定するユーザグループを含む行をクリックします。
- ステップ 5** [その他のアクション (More Actions)] ドロップダウンリストから [Catalog のセットアップ (Catalog Setup)] を選択します。  
[Catalog の設定 (Configure Catalog)] 画面でユーザグループに使用できるCatalogのリストが表示されます。  
(注) Catalogのユーザグループに割り当てられていない場合、[Catalog の設定 (Configure Catalog)] 画面は空です。
- ステップ 6** [Catalog の設定 (Configure Catalog)] 画面で、エンドユーザポータルのダッシュボードに表示する必要があるCatalogをオンにします。
- ステップ 7** [送信 (Submit)] をクリックします。  
エンドユーザポータルへのログイングループに属しているユーザは、ダッシュボードに選択されたCatalogとCatalogフォルダが入力されます。
-



## 第 5 章

# システム管理設定の管理

---

この章は、次の項で構成されています。

- [送信メール サーバの設定, 136 ページ](#)
- [電子メール テンプレートの使用, 137 ページ](#)
- [システム パラメータの設定 \(任意\) , 140 ページ](#)
- [オブジェクト検索の実行, 142 ページ](#)
- [ライセンスの更新, 142 ページ](#)
- [ライセンスの交換, 143 ページ](#)
- [ライセンス使用率の確認, 143 ページ](#)
- [ライセンス使用率履歴の表示, 144 ページ](#)
- [リソース使用率データの表示, 145 ページ](#)
- [非アクティブ ライセンス情報の表示, 145 ページ](#)
- [アプリケーション カテゴリ, 146 ページ](#)
- [ポータルのカスタマイズ, 148 ページ](#)
- [レポートのカスタマイズ, 154 ページ](#)
- [詳細な制御の有効化, 155 ページ](#)
- [サービス プロバイダー機能の有効化, 157 ページ](#)
- [ユーザ メニュー, 157 ページ](#)
- [ユーザ権限の設定, 158 ページ](#)
- [システム タスク, 158 ページ](#)
- [Cisco UCS Director ユーザ インターフェイスのアイコンの管理, 164 ページ](#)
- [タグ ライブラリ, 168 ページ](#)

- [サポート情報, 170 ページ](#)
- [データベース監査ロギング, 174 ページ](#)

## 送信メール サーバの設定

Cisco UCS Director から送信されるすべての電子メールに SMTP サーバが必要です。

### 手順

- ステップ 1** [管理 (Administration) ] > [システム (System) ] を選択します。
- ステップ 2** [システム (System) ] ページで [メールセットアップ (Mail Setup) ] をクリックします。
- ステップ 3** [電子メール設定] 画面で、次のフィールドに値を入力します。

名前	説明
[送信電子メールサーバ (SMTP) ] フィールド	送信 SMTP サーバのアドレス。
[送信 SMTP ポート (Outgoing SMTP Port) ] フィールド	送信 SMTP サーバ ポートの番号。
[送信 SMTP ユーザ (Outgoing SMTP User) ] フィールド	ユーザ ID。
[送信 SMTP パスワード (Outgoing SMTP Password) ] フィールド	ユーザのパスワード。
[送信電子メール送信者電子メールアドレス (Outgoing Email Sender Email Address) ] フィールド	ユーザの電子メール アドレス。
[サーバの IP アドレス (Server IP Address) ] フィールド	Cisco UCS Director 仮想アプライアンスの IP アドレスまたは DNS 名。このフィールドは、ユーザのワークフロー処理に対して、電子メールで正しいリンクを作成するために使用します。
[テスト電子メールの送信 (Send Test Email) ] チェック ボックス	現行の電子メール設定をテストするには、このチェック ボックスをオンにします。

- ステップ 4** [保存 (Save) ] をクリックします。

## 電子メール テンプレートの使用

Cisco UCS Director には通知メカニズムがあり、VM のプロビジョニングなど、特定のイベントが発生した場合に管理者に送信される電子メールを設定できます。また、すべてのタスクについて承認が必要な場合には、1 人の管理者、またはグループの管理者へ電子メール通知を送信できます。



(注) 電子メールの通知に対して複数の受信者を指定できます。カンマを区切り文字として使用して、複数の電子メールアドレスを区切ります。

Cisco UCS Director には、異なるシナリオに対応する、HTML 形式の電子メール テンプレートのセットがあります。以下は、電子メール テンプレートで実行できるタスクの一部です。

- 新しい電子メール テンプレートの追加
- 既存の電子メールテンプレートの編集：電子メールテンプレートについて、件名とメッセージの詳細、または書式設定とプレゼンテーションのフィールドを編集できます。テンプレート内の Java 関連の情報は変更しないでください。
- 電子メール テンプレートのプレビュー：電子メールの内容をプレビューし、電子メール テンプレートに変更が必要かどうかを確認できます。
- 電子メール テンプレートをデフォルトに設定：デフォルトの電子メール テンプレートに基づいて電子メール通知が送信されるように設定できます。
- 電子メールテンプレートの削除：追加したテンプレートを削除できます。ただし、次のいずれかの条件にあてはまる場合は、テンプレートを削除することはできません。
  - テンプレートを追加してデフォルトのテンプレートに設定した。
  - システムによって提供されたテンプレートである。

## 電子メール テンプレートの追加

### 手順

- ステップ 1 [管理 (Administration) ] > [システム (System) ] を選択します。
- ステップ 2 [システム (System) ] ページで [電子メールテンプレート (Email Templates) ] をクリックします。
- ステップ 3 [追加 (Add) ] をクリックします。
- ステップ 4 [テンプレートの追加 (Add Template) ] 画面で、次のフィールドに値を入力します。

名前	説明
[電子メール テンプレート名 (Email Template Name) ] フィールド	電子メール テンプレートの名前。
[テンプレートの説明 (Template Description) ] フィールド	電子メール テンプレートの説明。
[テンプレートのタイプ (Template Type) ] ドロップダウン リスト	追加する電子メールテンプレートのタイプを選択します。このドロップダウンリストには、システムから提供されたテンプレートが表示されます。
[件名 (Subject) ] フィールド	電子メール テンプレートの件名行。
[デフォルトの件名にリセットします (Reset to Default Subject) ] チェック ボックス	このチェックボックスをオンにすると、入力した件名行が削除され、システムにより提供された件名行が [件名 (Subject) ] フィールドに読み込まれます。
[本文 (Body) ] フィールド	電子メールのコンテンツ、フォントのサイズと色、通知トリガーなど、電子メールテンプレートを定義する HTML コード。
[デフォルトの本文にリセットします (Reset to Default Body) ] チェック ボックス	このチェックボックスをオンにすると、システムが提供する電子メールテンプレートで使用されている HTML コードが、[スクリプト (Script) ] フィールドに入力されます。  HTML コードが入力された後で、コードに対する変更を維持するには、このチェックボックスをオフにする必要があります。

**ステップ 5** [送信 (Submit) ] をクリックします。

### 次の作業

さらに変更を加えるかどうかを判断するには、電子メール テンプレートをプレビューで表示します。

## 電子メール テンプレートのプレビュー

Cisco UCS Director で新しい電子メール テンプレートを作成すると、電子メール コンテンツのプレビューを表示して、さらに変更が必要かどうかを判断できます。

### 手順

- 
- ステップ 1 [管理 (Administration) ]>[システム (System) ]を選択します。
  - ステップ 2 [システム (System) ]ページで[電子メールテンプレート (Email Templates) ]をクリックします。
  - ステップ 3 電子メールテンプレートタイプを含むフォルダを展開し、プレビューする電子メールテンプレートを含む行をクリックします。
  - ステップ 4 [テンプレートのプレビュー (Preview Template) ]をクリックします。
  - ステップ 5 [レポートの開始 (Launch Report) ]画面で、[送信 (Submit) ]をクリックします。  
(注) 電子メールテンプレートのプレビュー モードでは、静的な情報だけが表示されます。顧客名などの動的な情報やリソースは表示されません。
- 

### 次の作業

必要に応じて、電子メール テンプレートに戻ってさらに変更を加えることができます。

## デフォルトの電子メール テンプレートの設定

通常は、システムテンプレートがデフォルトの電子メールテンプレートに設定されています。特定のシナリオで複数のテンプレートを追加した場合は、いずれかのテンプレートをデフォルトのテンプレートとして選択できます。デフォルトとしてテンプレートを設定すると、選択したテンプレートが通知に使用されることを意味します。

### 手順

- 
- ステップ 1 [管理 (Administration) ]>[システム (System) ]を選択します。
  - ステップ 2 [システム (System) ]ページで[電子メールテンプレート (Email Templates) ]をクリックします。
  - ステップ 3 電子メールテンプレートタイプを含むフォルダを展開し、デフォルトとして設定する電子メールテンプレートを含む行をクリックします。
  - ステップ 4 [デフォルトの電子メール テンプレートとして設定 (Set As Default Email Template) ]をクリックします。
-

# システムパラメータの設定（任意）

## システムパラメータの設定

システムパラメータを編集する必要があるのは、デフォルト値を変更する必要がある場合だけです。

### 手順

**ステップ 1** [管理（Administration）]>[システム（System）]を選択します。

**ステップ 2** [システム（System）] ページで [システムパラメータ（System Parameters）] をクリックします。

**ステップ 3** [システム（System）] 画面で、次のフィールドに値を入力します。

名前	説明
[削除した VM のデータを保持する日数（Number of Days to Keep Deleted VMs Data）] フィールド	ユーザが定義した、システムで VM データを保持する日数。
[イベントを保持する日数（Number of Days to Keep Events）] フィールド	ユーザが定義した、システムですべてのイベントを保持する日数。  (注) 指定した期間を超えたイベントは削除されます。
[傾向データを保持する日数（Number of Days to Keep Trend Data）] フィールド	ユーザが定義した、システムでインベントリの傾向データまたは履歴データ（CPU、ストレージ、メモリ使用状況など）を保持する日数。  (注) このデータはレポートに使用されません。
[計測データを保持する日数（Number of Days to Keep Metering Data）] ドロップダウンリスト	ユーザが定義した、システムで VM 計測レコードを保持する日数。  (注) このデータは、VM とリソースに固有です。
[URL からの VM ロックコントロールのダウンロード（Download VM Locking Controls from URL）] フィールド	Cisco UCS Director 稼働状態でシステムからアクセスでき、サーバ上でホストされたコントロールファイルをロックする VM の URL  (注) このファイルは XML 形式である必要があります。コントロールファイルをロックするこの VM の作成の詳細については、 <a href="#">Cisco UCS Director での VM のロック</a> 、(454 ページ) を参照してください。

名前	説明
[通貨 (Currency) ] ドロップダウン リスト	使用する通貨の種類を選択します。  使用可能な通貨は、[US]、[EURO]、[GBP]、[KRW]、[CAD]、[CHF]、[CLP]、[NR]、[JPY]、[AUD]、[NZD]、[SGD]、[HKD]、[MYR]、[MXN]、[BRL]、[AED]、[DKK]、[SEK]、[KWD]、[CYN]、[RUB]、[ZAR]、および [その他 (Other) ] です。
[通貨 (Currency) ] フィールド	通貨の名前 (1 つのみ) を入力します。  (注) このフィールドは、通貨として [その他 (Other) ] が選択されている場合に表示されます。
[通貨の精度 (Currency Precision) ] ドロップダウン リスト	通貨の小数点以下の精度を選択します。使用可能な小数点以下の精度は 0 から 5 です。
[資金残高確認間隔 (分) (Funds Availability Check Interval (mins)) ] ドロップダウン リスト	資金の残高を確認する間隔を選択します。

**ステップ 4** [保存 (Save) ] をクリックします。

## インフラストラクチャ システム パラメータの設定 (任意)

仮想および物理システムインフラストラクチャリソースのポーリングに関するパラメータを設定できます。

### 手順

- ステップ 1** [管理 (Administration) ] > [システム (System) ] を選択します。
- ステップ 2** [システム (System) ] ページで [インフラストラクチャ システム パラメータ (Infrastructure System Parameters) ] をクリックします。
- ステップ 3** [インフラストラクチャ システム パラメータ (Infrastructure System Parameters) ] 画面で、システムインフラストラクチャのトレンドデータを保持する日数を入力します。デフォルトは 30 日です。
- ステップ 4** [保存 (Save) ] をクリックします。

## オブジェクト検索の実行

オブジェクト検索機能を使用して、ユーザ インターフェイスの次の画面から特定のレポートを検索します。

- 物理
- 仮想
- ワークフロー
- カスタム タスク

### 手順

- 
- ステップ 1** [サイトマップ (Sitemap) ] を選択します。
- ステップ 2** [サイトマップ (Sitemap) ] 画面で、[オブジェクト検索 (Object Search) ] をクリックします。
- ステップ 3** 検索を実行する必要があるタブを特定するには、[詳細検索 (Advanced Search) ] を選択します。[物理 (Physical) ] 画面と [仮想 (Virtual) ] 画面で検索可能なオブジェクトを含むすべてのレポートが、[ワークフロー (Workflows) ] および [カスタム タスク (Custom Tasks) ] を選択するためのオプションとともに表示されます。
- デフォルトでは、これらのすべてのオプションがオンになっています。
- ステップ 4** 検索に含めないタブのチェック ボックスをオフにします。
- ステップ 5** [検索 (Search) ] フィールドには、検索するオブジェクトの 3 文字を入力することを推奨します。検索フィールドでは、大文字と小文字が区別されます。
- ステップ 6** [検索 (Search) ] アイコンをクリックし、キーボードの Enter を押します。検索条件に一致するすべてのレポートが表示されます。
- 

## ライセンスの更新

製品認証キー (PAK) を使用して、ライセンスを更新することができます。

### 手順

- 
- ステップ 1** [管理 (Administration) ] > [ライセンス (License) ] の順に選択します。
- ステップ 2** [ライセンス (License) ] ページで [ライセンス キー (License Keys) ] をクリックします。
- ステップ 3** [ライセンスの更新 (Update License) ] をクリックします。

[ライセンスの更新 (Update License) ] 画面が表示されます。

- ステップ 4** [ファイルの選択 (Select a File) ] をクリックして PAK ライセンス ファイルに移動し、ファイルを選択します。
- ステップ 5** PAK ライセンス ファイルをアップロードするには、[アップロード (Upload) ] をクリックします。
- (注) ライセンス ファイルをアップロードしない場合は、チェック ボックスをオンにして、ライセンス テキストをライセンス テキスト フィールドにコピーアンドペーストします。
- ステップ 6** [送信 (Submit) ] をクリックします。  
ライセンスが更新されます。
- 

## ライセンスの交換

この手順を使用すると、システム内のライセンスを交換することができます。このアクションによって、システム上のその他すべての既存のライセンスが非アクティブになります。

### 手順

---

- ステップ 1** [管理 (Administration) ] > [ライセンス (License) ] の順に選択します。
- ステップ 2** [ライセンス (License) ] ページで [ライセンス キー (License Keys) ] をクリックします。
- ステップ 3** [ライセンスの交換 (Replace License) ] を選択します。
- ステップ 4** [ファイル (File) ] フィールドで、PAK ファイルをドラッグアンドドロップするか、または [ファイルの選択 (Select a File) ] をクリックしてファイルを参照し、選択します。
- ステップ 5** (任意) [ライセンス テキストの入力 (Enter License Text) ] をオンにし、ライセンス テキストをコピーして貼り付けます。
- ステップ 6** [送信 (Submit) ] をクリックします。  
すべての既存のライセンスが新しいライセンスに交換されます。
- 

## ライセンス使用率の確認

[ライセンス使用率 (License Utilization) ] ページに、使用中のライセンス、および各ライセンスの詳細 (ライセンスの期限、使用可能な数、ステータス、コメントなど) が表示されます。ライセンスの監査もこのページから実行できます。

## 手順

- 
- ステップ1 [管理 (Administration) ] > [ライセンス (License) ] の順に選択します。
  - ステップ2 [ライセンス (License) ] ページで [ライセンス使用状況 (License Utilization) ] をクリックします。
  - ステップ3 検証するライセンスを含む行を選択します。
  - ステップ4 (任意) ライセンス監査を実行するには、[ライセンス監査の実行 (Run License Audit) ] をクリックします。
  - ステップ5 [ライセンス監査の実行 (Run License Audit) ] 画面で、[送信(Submit)] をクリックします。  
このプロセスは、実行に数分かかります。
- 

# ライセンス使用率履歴の表示

ネットワークリソースの利用状況を把握するため、ライセンス取得済みネットワークコントローラ、ストレージコントローラ、サーバ、サーバおよびデスクトップ VM、およびスモールポッドとミディアムポッドの数を時間の経過に伴い追跡できます。

## 手順

- 
- ステップ1 [管理 (Administration) ] > [ライセンス (License) ] の順に選択します。
  - ステップ2 [ライセンス (License) ] ページで [ライセンス使用状況履歴 (License Utilization History) ] をクリックします。
- 

次のリソースカテゴリのライセンス使用状況履歴がタイムスタンプとともに表示されます。

- ネットワーク コントローラ
- ストレージ コントローラ
- サーバ
- サーバ VM
- デスクトップ VM
- スモールポッド
- ミディアムポッド

## リソース使用率データの表示

ご使用の環境でのリソースの使用状況を確認できます。

### 手順

- 
- ステップ 1** [管理 (Administration)] > [ライセンス (License)] の順に選択します。
- ステップ 2** [ライセンス (License)] ページで [リソース使用状況データ (Resource Usage Data)] をクリックします。
- 

使用可能なレポート カテゴリを次に示します。

- Resource Name : Cisco UCS Director に関連付けられている利用可能なリソースの名前。
- Resource Count : 利用可能な各リソースの量。

## 非アクティブ ライセンス情報の表示

非アクティブ ライセンスのリストはユーザ インターフェイスから表示できます。非アクティブ ライセンスに関する次の情報を表示できます。

- PAK ファイル名
- ファイル ID
- ライセンス エントリ
- ライセンス価格
- 有効期限日
- 非アクティブ化された時刻
- ライセンスを非アクティブ化したユーザの名前

### 手順

- 
- ステップ 1** [管理 (Administration)] > [ライセンス (License)] の順に選択します。
- ステップ 2** [ライセンス (License)] ページで [非アクティブ化されたライセンス (Deactivated Licenses)] をクリックします。
- ステップ 3** すべての非アクティブ ライセンスに関して表示された情報を確認します。
-

## アプリケーション カテゴリ

「アプリケーションカテゴリ」は、VMのワークロードタイプを定義するためのオプション設定です。アプリケーションカテゴリを使用しない場合、Cisco UCS Directorはユーザ用にプロビジョニングされたすべてのVMを汎用VMとみなし、CPU集約型のワークロードを処理するように設定します。デフォルトのアプリケーションカテゴリを使用するか独自のアプリケーションカテゴリを作成するかにかかわらず、アプリケーションのニーズに応じた定義済みワークロードのセットをユーザに提供できます。

アプリケーションカテゴリのワークロードオプションには、次のものがあります。

- CPU 集約型
- ネットワーク I/O 集約型
- ディスク I/O 集約型
- メモリ集約型
- 上記の組み合わせ

アプリケーションカテゴリを作成した後、対象とするクラウドアカウントに移動して、作成したアプリケーションカテゴリにvDCポリシーを割り当てることができます。この割り当てにより、アプリケーションをプロビジョニングできるインフラストラクチャの境界が決まります。また、アプリケーションカテゴリを使用して、アプリケーションのタイプに基づくクラスタを割り当てることもできます。たとえば、クラスタ1をWebアプリケーション用に割り当てて、クラスタ2をデータベースアプリケーション用に割り当てることができます。

ユーザがアプリケーションカテゴリを選択すると、Cisco UCS DirectorはvDCの割り当てに基づいて、アプリケーションのワークロードのニーズに最適なvDC境界内の場所を判断します。たとえば、ユーザがCPU集約型のアプリケーションカテゴリを選択した場合、Cisco UCS Directorは、利用可能なインフラストラクチャのうち、CPU使用率が最も低いインフラストラクチャにアプリケーションをプロビジョニングします。

## アプリケーションカテゴリの追加

デフォルトでは、Cisco UCS Directorは次のアプリケーションカテゴリを提供します。これらのカテゴリを使用または編集できます。

- 検出された VM
- 汎用 VM
- Web サーバ
- アプリケーション サーバ
- データベース
- アプリケーション - CPU 集約型

- アプリケーション - メモリ集約型
- アプリケーション - ディスク集約型
- アプリケーション - ネットワーク集約型
- その他のアプリケーション 1
- その他のアプリケーション 2
- その他のアプリケーション 3

Cisco UCS Director では、複数の仮想データセンターのアプリケーション カテゴリをシステムレベルで作成できます。この機能により、個別の仮想データセンターを選択してカテゴリにポリシーを割り当てるといった反復的な作業が不要になります。

### 手順

- ステップ 1** [管理 (Administration) ] > [システム (System) ] を選択します。
- ステップ 2** [システム (System) ] ページで [アプリケーションカテゴリ (Application Categories) ] をクリックします。
- ステップ 3** [追加 (Add) ] をクリックします。
- ステップ 4** [カテゴリの追加 (Add Category) ] 画面で、次のフィールドに値を入力します。

名前	説明
[カテゴリラベル (Category Label) ] フィールド	カテゴリの固有名。
[カテゴリコード (Category Code) ] フィールド	カテゴリのコードを指定します。このコードは、VM またはホスト名のテンプレートで使用できます。
[カテゴリの説明 (Category Description) ] フィールド	ポリシーの説明。
[有効になっているカテゴリ (Category Enabled) ] チェック ボックス	カテゴリを有効にするには、このチェックボックスをオンにします。カテゴリを有効にすると、VDC の割り当て時にそのカテゴリを選択できます。  このチェックボックスをオンにしていない場合、そのカテゴリはシステムで使用できません。
[デフォルトのスマート割り当てアルゴリズム (Default Smart Allocation Algorithm) ] ドロップダウンリスト	VM のプロビジョニングで適用する必要がある、デフォルトのアルゴリズムを選択します。

- ステップ 5** [送信 (Submit)] をクリックします。  
アプリケーション カテゴリは、仮想データセンターの [カテゴリの管理 (Manage Categories)] オプションをクリックすると表示されます。

### 次の作業

アプリケーション カテゴリを作成した後、次の作業を実行できます。

- アプリケーション カテゴリを編集または複製します。
- 複数の仮想データセンターへのアプリケーション カテゴリを割り当てます。詳細については、[仮想データセンターのアプリケーションカテゴリの管理](#)、(268 ページ) を参照してください。

## ポータルのカスタマイズ

組織はエンドユーザーポータルをカスタマイズすることができます。ブランディングおよびユーザーインターフェイス関連の変更に対して、ロゴ、ログインページ、ホームページなどをカスタマイズできます。

## ログインページと背景イメージのカスタマイズ

カスタムイメージをアップロードして、ログインページと背景イメージを変更できます。

### 手順

- ステップ 1** [管理 (Administration)] > [ユーザインターフェイス設定 (User Interface Settings)] を選択します。
- ステップ 2** [ユーザインターフェイス設定 (User Interface Settings)] ページで [ログインページ (Login Page)] をクリックします。
- ステップ 3** [カスタマイズ可能なログインページの使用 (Use customizable Login page)] をオンにします。
- ステップ 4** [ロゴイメージ (Logo Images)] セクションで [追加 (Add)] をクリックし、次のフィールドに値を入力します。

フィールド	説明
[イメージラベル (Image Label)] フィールド	イメージの名前。
[説明 (Description)] フィールド	アップロードするイメージの説明。

フィールド	説明
[アップロードするファイルの選択 (Select a file for upload) ]フィールド	イメージファイルを検索して選択するには、[参照 (Browse) ]をクリックします。  <b>重要</b> 最適なイメージは、幅 200 ピクセル、高さ 100 ピクセルの PNG 形式です。
[アップロード (Upload) ]オプション	イメージをアップロードするには、このオプションをクリックします。  このオプションは、イメージを参照し選択した後にのみ有効になります。
[送信 (Submit) ]オプション	イメージのアップロード後、[送信 (Submit) ]をクリックします。

**ステップ 5** [背景画像 (Background Images) ]セクションで項目を選択するか、または[追加 (Add) ]をクリックして次のフィールドに値を入力します。

フィールド	説明
[イメージラベル (Image Label) ]フィールド	イメージの名前。
[説明 (Description) ]フィールド	アップロードするイメージの説明。
[アップロードするファイルの選択 (Select a file for Upload) ]フィールド	イメージファイルを検索して選択するには、[参照 (Browse) ]をクリックします。  <b>重要</b> 最適なイメージは、幅 890 ピクセル、高さ 470 ピクセル、余白 255 ピクセルです。また、イメージは PNG 形式である必要があります。
[アップロード (Upload) ]オプション	イメージをアップロードするには、このオプションをクリックします。  このオプションは、イメージを参照し選択した後にのみ有効になります。

**ステップ 6** [送信 (Submit) ]をクリックします。

## アプリケーション ロゴのカスタマイズ

カスタムイメージをアップロードしてホームページのアプリケーションロゴをカスタマイズできます。

### 手順

- ステップ 1** [管理 (Administration) ]>[ユーザ インターフェイス設定 (User Interface Settings) ]を選択します。
- ステップ 2** [ユーザ インターフェイス設定 (User Interface Settings) ] ページで [アプリケーション ロゴ (Application Logo) ] をクリックします。
- ステップ 3** [イメージ (Images) ] セクションで、[追加 (Add) ] をクリックしてリストされていない新規イメージを追加し、次のフィールドに値を入力します。

フィールド	説明
[イメージ ラベル (Image Label) ] フィールド	イメージの名前。
[説明 (Description) ] フィールド	アップロードするイメージの説明。
[アップロードするファイルの選択 (Select a file for upload) ] フィールド	イメージ ファイルを検索して選択するには、[参照 (Browse) ] をクリックします。  <b>重要</b> サポートされるイメージの形式は、PNG、JPG、および GIF です。最適なイメージサイズは幅 100 ピクセル、高さは 50 ピクセルです。
[アップロード (Upload) ] オプション	イメージをアップロードするには、このオプションをクリックします。  このオプションは、イメージを参照し選択した後にのみ有効になります。

- ステップ 4** [送信 (Submit) ] をクリックします。

## ファビコンのカスタマイズ

ページがブックマークされている場合に、ブラウザのアドレスバーやそのページ名の横に表示されるお気に入りアイコン (ファビコン) をカスタマイズできます。

## 手順

- ステップ 1** [管理 (Administration) ]>[ユーザインターフェイス設定 (User Interface Settings) ]を選択します。
- ステップ 2** [ユーザインターフェイス設定 (User Interface Settings) ] ページで [ファビコン (Favicon) ] をクリックします。
- ステップ 3** [イメージ (Image) ] セクションで、[追加 (Add) ] をクリックしてリストされていない新規イメージを追加し、次のフィールドに値を入力します。

フィールド	説明
[イメージ ラベル (Image Label) ] フィールド	イメージの名前。
[説明 (Description) ] フィールド	アップロードするイメージの説明。
[アップロードするファイルの選択 (Select a file for upload) ] フィールド	イメージ ファイルを検索して選択するには、[参照 (Browse) ] をクリックします。 <b>重要</b> サポートされるイメージの形式は PNG です。最適なイメージサイズは 16 X 16 ピクセルです。
[アップロード (Upload) ] オプション	イメージをアップロードするには、このオプションをクリックします。 このオプションは、イメージを参照し選択した後にのみ有効になります。

- ステップ 4** [送信 (Submit) ] をクリックします。

## アプリケーションヘッダーのカスタマイズ

顧客ロゴの横の エンドユーザ ポータル ラベルをカスタマイズするには、既存のラベルを変更します。

## 手順

- ステップ 1** [管理 (Administration) ]>[ユーザインターフェイス設定 (User Interface Settings) ] を選択します。
- ステップ 2** [ユーザインターフェイス設定 (User Interface Settings) ] ページで [アプリケーションヘッダー (Application Header) ] をクリックします。
- ステップ 3** 次のフィールドに入力します。

名前	説明
[ヘッダー全体の非表示 (Hide Entire Header) ] チェック ボックス	ヘッダーセクションを非表示にする場合にオンにします。オンにすると、ロゴイメージ、アプリケーション名、リンク ([ログアウト (Logout) ] など) を含むヘッダーが非表示になります。
[製品名 (Product Name) ] フィールド	ヘッダーに表示する必要がある製品名。
[製品名の 2 行目 (Product Name 2nd Line) ] フィールド	製品の 2 番目の名前。
[バージョン情報] ダイアログの有効化 (Enable About Dialog) ] チェック ボックス	ヘッダーで [バージョン情報 (About) ] リンクを有効にする場合にオンにします。ヘッダーで [バージョン情報 (About) ] リンクを無効にする場合はオフにします。
<b>管理者ポータル</b>	
[カスタム リンク 1 のラベル (Custom Link 1 Label) ] フィールド	管理者ポータルのカスタム リンク 1 のラベル。
[カスタム リンク 1 の URL (Custom Link 1 URL) ] フィールド	管理者ポータルのカスタム リンク 1 の URL。
[カスタム リンク 2 のラベル (Custom Link 2 Label) ] フィールド	管理者ポータルのカスタム リンク 2 のラベル。
[カスタム リンク 2 の URL (Custom Link 2 URL) ] フィールド	管理者ポータルのカスタム リンク 2 の URL。
<b>エンド ユーザ ポータル</b>	
[カスタム リンク 1 のラベル (Custom Link 1 Label) ] フィールド	エンド ユーザ ポータルのカスタム リンク ラベル 1。
[カスタム リンク 1 の URL (Custom Link 1 URL) ] フィールド	エンド ユーザ ポータルのカスタム リンク URL 1。
[カスタム リンク 2 のラベル (Custom Link 2 Label) ] フィールド	エンド ユーザ ポータルのカスタム リンク ラベル 2。
[カスタム リンク 2 の URL (Custom Link 2 URL) ] フィールド	エンド ユーザ ポータルのカスタム リンク URL 2。

ステップ4 [保存 (Save) ]をクリックします。

---

## 日付表示のカスタマイズ

さまざまな日付表示の形式がサポートされています。

### 手順

---

- ステップ1 [管理 (Administration) ]>[ユーザインターフェイス設定 (User Interface Settings) ]を選択します。
  - ステップ2 [ユーザインターフェイス設定 (User Interface Settings) ] ページで [データ表示 (Date Display) ] をクリックします。
  - ステップ3 日付形式を編集します。
  - ステップ4 必要に応じて、[タイムゾーンの非表示 (Hide Timezone) ] をオンにし、タイムゾーンがユーザインターフェイスに表示されないようにします。
  - ステップ5 [保存 (Save) ] をクリックします。
- 

## カラー テーマのカスタマイズ

### 手順

---

- ステップ1 [管理 (Administration) ]>[ユーザインターフェイス設定 (User Interface Settings) ] を選択します。
  - ステップ2 [ユーザインターフェイス設定 (User Interface Settings) ] ページで [カラー テーマ (Color Theme) ] をクリックします。
  - ステップ3 ドロップダウン リストから使用可能なテーマ スタイルを選択します。
  - ステップ4 [保存 (Save) ] をクリックします。
-

## ログアウト時のリダイレクト先のカスタマイズ

### 手順

- 
- ステップ 1 [管理 (Administration) ]>[ユーザ インターフェイス設定 (User Interface Settings) ]を選択します。
  - ステップ 2 [ユーザ インターフェイス設定 (User Interface Settings) ]ページで[ログアウトリダイレクト (Logout Redirect) ]をクリックします。
  - ステップ 3 [ログアウトリダイレクト (Logout Redirect) ]フィールドに URL を入力します。
  - ステップ 4 [保存 (Save) ]をクリックします。
- 

## レポートのカスタマイズ

レポートのカスタマイズでは、カスタム ラベルを作成したり、使用可能なレポートを非表示にしたりできます。



- (注) ユーザおよびグループのレポートをカスタマイズまたは非表示にすることはできません。他のすべてのページではレポート テーブルをカスタマイズすることができます。[アクションありの表形式 (Tabular with actions) ]として識別されるレポートのみカスタマイズできます。
- 

### 手順

- 
- ステップ 1 [管理 (Administration) ]>[ユーザ インターフェイス設定 (User Interface Settings) ]を選択します。
  - ステップ 2 [ユーザ インターフェイス設定 (User Interface Settings) ]ページで[レポートのカスタマイズ (Reports Customization) ]をクリックします。
  - ステップ 3 カスタマイズするレポート含む行をクリックします。
  - ステップ 4 [編集 (Edit) ]をクリックします。
  - ステップ 5 [レポートのカスタマイズ (Customize Report) ]画面で、次のフィールドに値を入力します。

名前	説明
[レポートを非表示 (Hide Report) ]チェックボックス	レポートを非表示にする場合にオンにします。レポートを表示する場合はオフにします。
[新しいラベル (New Label) ]フィールド	レポートの新しいラベル (必要な場合) 。

ステップ6 [保存 (Save) ]をクリックします。

## 詳細な制御の有効化

### 手順

- ステップ1 [管理 (Administration) ]>[システム (System) ]を選択します。
- ステップ2 [システム (System) ]ページで[高度な制御 (Advanced Controls) ]をクリックします。
- ステップ3 必要なフィールドをオンにします。

名前	説明
[パフォーマンスモニタリング (Performance Monitoring) ]チェック ボックス	仮想インフラストラクチャのモニタリング、物理インフラストラクチャのモニタリング、および外部クラウドのモニタリングを有効にする場合にオンにします。  必要に応じて、このカテゴリのチェックボックスをすべてオンにします。
[リソースメーター (Resource Metering) ]チェック ボックス	VM 測定機能のモニタリングを有効にする場合にオンにします。  (注) VMメーター機能が無効になっている場合、チャージバックは作動しません。
[イベントのモニタリング (Event Monitoring) ]チェック ボックス	仮想および物理インフラストラクチャのイベントを有効にする場合にオンにします。
[自動サポート (Auto Support) ]チェック ボックス	自動サポートを有効にする場合にオンにします。
[ヒートマップレポート コンピューティング (Heat Map Report Computing) ]チェック ボックス	仮想インフラストラクチャのヒートマップレポートの生成を有効にする場合にオンにします。
[自動評価 (Automatic Assessment) ]チェック ボックス	仮想評価のレポートを生成する場合にオンにします。

名前	説明
[適応プロビジョニングインデックス (Adaptive Provisioning Indexing) ] チェック ボックス	<p>さまざまなホストパラメータについてホストのロードインデックスを有効にし、4時間ごとに計算する場合にオンにします。</p> <p>これらのインデックスは、カタログの適応プロビジョニングで使用されます。インデックスの数が小さいと、ホストがプロビジョニング対象として選択される可能性が高くなります。このプロセスは、特定の VDC のコンピューティング ポリシーに従って機能します。</p>
[VDCポリシーに基づいて非アクティブな VM を削除 (Delete Inactive VMs Based on VDC Policy) ] チェック ボックス	<p>管理者が指定した時間が経過した後、VDC の非アクティブな (電源がオフになっている) VM を有効化して削除する場合にオンにします。これらの非アクティブな VM の削除は、管理者によって定義された VM 管理ポリシーによっても制御されます。非アクティブな VM が削除される前に、電子メールでの通知がユーザに送信されます。</p> <p>このプロパティは、VM 管理ポリシーの [非アクティブな VM を削除するまでの期間 (Delete after inactive VM days) ] フィールドに関連付けられます。</p> <p>(注) デフォルトでは、このプロパティボックスはオフになっています。</p>
[システム タスクのリモート実行 (System Task Remoting) ] チェック ボックス	<p>管理のためにリモート実行を有効にする場合にオンにします。</p>

ステップ 4 [送信 (Submit) ] をクリックします。

# サービス プロバイダー機能の有効化

## 手順

- ステップ 1** [管理 (Administration) ]>[システム (System) ]を選択します。
- ステップ 2** [システム (System) ] ページで [サービス プロバイダー機能 (Service Provider Feature) ] をクリックします。
- ステップ 3** 次のフィールドに入力します。

名前	説明
[Enable Service Provider Feature (Requires System Restart) (サービス プロバイダー機能の有効化 (システムの再起動が必要) ) ] チェック ボックス	Cisco UCS Director でサービス プロバイダーを有効にする場合にオンにします。
[組織名 (第 1 レベル) (Organization Name (First Level)) ] フィールド	この機能を有効にする親組織の名前。
[組織名 (第 2 レベル) (Organization Name (Second Level)) ] フィールド	この機能を有効にする子組織の名前。

- ステップ 4** [送信 (Submit) ] をクリックします。

## ユーザ メニュー

個々のユーザ ロールに応じてカスタマイズしたメニュー操作を有効にすることができます。ユーザがアプリケーション内で表示、アクセスできるメニュー設定は、指定されているユーザの権限および、権限毎に設定されているメニュー操作に基づきます。

## ユーザメニューの設定

### 手順

- 
- ステップ 1 [管理 (Administration)] > [システム (System)] を選択します。
  - ステップ 2 [システム (System)] ページで [ユーザ ロール (User Role)] をクリックします。
  - ステップ 3 ユーザメニューを編集するユーザ ロールを含む行をクリックします。
  - ステップ 4 [編集 (Edit)] をクリックします。
  - ステップ 5 [ユーザ役割の編集 (Edit User Role)] 画面で、[次へ (Next)] をクリックします。
  - ステップ 6 [メニュー設定 (Menu Settings)] 画面に、選択したユーザ ロールのメニュー設定を表示できます。
  - ステップ 7 メニューチェックボックスをオンまたはオフにして、そのロールにメニューを許可するか、または [デフォルトにリセット (Reset to Defaults)] をオンにします。
  - ステップ 8 [送信 (Submit)] をクリックします。
- 

## ユーザ権限の設定

### 手順

- 
- ステップ 1 [管理 (Administration)] > [システム (System)] を選択します。
  - ステップ 2 [システム (System)] ページで [ユーザ ロール (User Role)] をクリックします。
  - ステップ 3 ユーザの権限を編集するユーザ ロールを含む行をクリックします。
  - ステップ 4 [編集 (Edit)] をクリックします。
  - ステップ 5 [ユーザ役割の編集 (Edit User Role)] 画面で、[次へ (Next)] をクリックします。
  - ステップ 6 [ユーザの権限 (User Permissions)] 画面で、選択したユーザ ロールの読み取り/書き込み操作を確認できます。
  - ステップ 7 チェックボックスをオンまたはオフにして個々のロールに読み取り操作と書き込み操作を許可するか、または [デフォルトにリセット (Reset to Defaults)] をオンにします。
  - ステップ 8 [送信 (Submit)] をクリックします。
- 

## システム タスク

[システムのタスク (System Tasks)] 画面には、現在 Cisco UCS Director で利用可能なすべてのシステム タスクが表示されます。ただし、このシステム タスクのリストは、Cisco UCS Director で

作成したアカウントのタイプにリンクされています。たとえば、初めてログインした場合は、一連の汎用システム関連のタスクまたはVMware 関連タスクだけがこのページに表示されます。ラック アカウントや Cisco UCS Manager アカウントなどのアカウントを追加した際に、これらのアカウントに関連するシステム タスクがこのページに読み込まれます。

以下は、[システムのタスク (System Tasks)] 画面から完了できるタスクです。

- 使用可能なシステム タスクの参照：[展開 (Expand)] および [折りたたむ (Collapse)] オプションを使用して、このページで使用可能なすべてのシステム タスクを表示できます。タスクは Cisco UCS Director で使用可能なアカウントに従って分類されます。例：Cisco UCS タスク、NetApp タスクなど。
- システム タスクの無効化と有効化：アプライアンスで実行しているプロセスまたはタスクが複数ある状況において、システム タスクの無効化を選択することができます。無効にすると、手動で有効にするまで、システム タスクは実行されません。これは他のレポートに入力されるデータに影響します。たとえば、インベントリ収集のシステム タスクを無効にすると、このデータが必要なレポートに正確なデータが表示されない場合があります。この場合、インベントリ収集プロセスを手動で実行するか、システム タスクを有効にする必要があります。

詳細については、[システム タスクの有効化または無効化](#)、(164 ページ) を参照してください。

サーバが 1 台しかない Single-Node 設定では、すべてのシステム タスクがこのサーバで実行されます。複数のサーバが設定されている Multi-Node 設定では、デフォルトですべてのシステム タスクがプライマリ サーバで実行されます。ただし、セカンダリ サーバで実行するシステム タスクを指定できます。次に示すのは、このタスクを実行する推奨手順です。

- 1 セカンダリ サーバがノードとして Cisco UCS Director で使用できることを確認します。サーバが使用できない場合、サーバをノードとして追加する必要があります。[サービス ノードの作成](#)、(161 ページ) を参照してください。
- 2 使用可能なサーバからノードプールを作成します。[ノードプールの作成](#)、(160 ページ) を参照してください。
- 3 システム タスク ポリシーを作成し、ノード ポリシーと関連付けます。[システム タスク ポリシーの作成](#)、(160 ページ) を参照してください。
- 4 ノードプールをシステム タスク ポリシーと関連付けます。[システム タスク ポリシーへのノードプールの割り当て](#)、(161 ページ) を参照してください。
- 5 システム タスクを選択し、システム タスク ポリシーと関連付けます。[システム タスクへのシステム ポリシーの割り当て](#)、(163 ページ) を参照してください。

## ノードプールの作成

### 手順

- 
- ステップ 1 [管理 (Administration)] > [システム (System)] を選択します。
  - ステップ 2 [システム (System)] ページで [サービス ノード (Service Nodes)] をクリックします。
  - ステップ 3 [サービス ノード プール (Service Node Pool)] をクリックします。
  - ステップ 4 [サービス ノード プール (Service Node Pool)] 画面で、[追加 (Add)] をクリックします。
  - ステップ 5 [サービス ノード プールにエントリを追加 (Add Entry to Service Node Pools)] 画面で、[名前 (Name)] フィールドにノードプール名を入力します。
  - ステップ 6 (任意) [説明 (Description)] フィールドに、ノードプール名の説明を入力します。
  - ステップ 7 [送信 (Submit)] をクリックします。ノードプールが作成されます。
- 

## システム タスク ポリシーの作成

管理者は、いくつかのポリシーの結合、システム タスク ポリシーの作成をデフォルトのシステム タスク ポリシーに加えて、選択することができます。複数のシステム タスクを1つのシステム タスク ポリシーとしてグループ化して、どのシステム タスクがどのノードで実行されるかを後で決定できます。

### 手順

- 
- ステップ 1 [管理 (Administration)] > [システム (System)] を選択します。
  - ステップ 2 [システム (System)] ページで [システム タスク ポリシー (System Task Policy)] をクリックします。
  - ステップ 3 [追加 (Add)] をクリックします。
  - ステップ 4 [追加 (Add)] 画面で、システム タスク ポリシーに指定した名前を [名前 (Name)] フィールドに入力します。
  - ステップ 5 (任意) [説明 (Description)] フィールドに、システム タスク ポリシーの説明を入力します。
  - ステップ 6 [ノード プール (Node Pool)] ドロップダウン リストから、このシステム タスク ポリシーが属するノードプールを選択します。
  - ステップ 7 [送信 (Submit)] をクリックします。  
選択したノードプールは、新しく作成されたシステム タスク ポリシーに属するようになりました。
-

## システム タスク ポリシーへのノード プールの割り当て

### 手順

- 
- ステップ 1** [管理 (Administration) ]>[システム (System) ]を選択します。
- ステップ 2** [システム (System) ]ページで[システム タスク ポリシー (System Task Policy) ]をクリックします。
- ステップ 3** ノード プールを割り当てるシステム タスク ポリシーを含む行をクリックします。
- ステップ 4** [編集 (Edit) ]をクリックします。  
(注) デフォルトのシステム タスク ポリシーが使用されている場合、このポリシーにサービス ノードを割り当てることができます。デフォルトとは異なるポリシーを設定する場合は、[システム タスク ポリシーの作成](#)、(160 ページ) を参照してください。
- ステップ 5** [ノード プール (Node Pool) ] ドロップダウン リストから、システム タスク ポリシーに割り当てるノード プールを選択します。
- ステップ 6** [送信 (Submit) ]をクリックします。  
選択したノード プールは、このシステム タスクのポリシーに属することになります。
- 

## サービス ノードの作成

### 手順

- 
- ステップ 1** [管理 (Administration) ]>[システム (System) ]を選択します。
- ステップ 2** [システム (System) ]ページで[サービス ノード (Service Nodes) ]をクリックします。
- ステップ 3** [追加 (Add) ]をクリックします。
- ステップ 4** [サービス ノード (Service Node) ]画面で、次のフィールドに入力します。

名前	説明
[ノード名 (Node Name) ]フィールド	サービス ノードの名前。
[ロール (Role) ]フィールド	このフィールドは編集できません。デフォルトでは、このフィールドには、[サービス (Service) ]をこのノードのロールとして表示します。
[サービス ノード プール (Service Node Pool) ] ドロップダウン リスト	デフォルトでは、[デフォルト サービス ノード プール (default-service-node-pool) ]タブが表示されます。

名前	説明
[DNS 名 (DNS Name) ]フィールド	<p>サービスノードの DNS 名または IP アドレスを入力します。</p> <p>(注) このフィールドには、プライマリノードの IP アドレスは使用できません。有効なサービスノード DNS 名または IP アドレスが入力されていることを確認します。</p>
[説明 (Description) ]フィールド	サービスノードの説明。
[プロトコル (Protocol) ]ドロップダウンリスト	[http] (デフォルト) または [https] を選択します。
[ポート (Port) ]フィールド	Hypertext Transfer Protocol (HTTP) のデフォルトの TCP ポートは、デフォルトでは 80 が入力されます。必要に応じて異なる TCP ポートを入力します。
[ユーザ名 (UserName) ]フィールド	<p>デフォルトでは、ユーザ名 <code>infraUser</code> が入力されます。</p> <p><code>infraUser</code> は、デフォルトで作成されるユーザアカウントです。メニューバーからこのユーザアカウントを検索するには、[管理 (Administration) ]&gt;[ユーザとグループ (Users and Groups) ]を選択します。</p> <p>[ログインユーザ (Login Users) ]をクリックし、[ログイン名 (Login Name) ]列で <code>infraUser</code> ユーザアカウントを見つけます。</p> <p>(注) <code>InfraUser</code> ユーザ名はシステム自体にログインするデフォルトの管理者ユーザではありません。</p> <p>別のユーザ名をこのフィールドに追加できます。サービスノードでの認証に、このユーザの API キーが使用されます。</p>

ステップ 5 [送信 (Submit) ] をクリックします。

## システム タスクへのシステム ポリシーの割り当て

### 手順

- 
- ステップ 1 [管理 (Administration)] > [システム (System)] を選択します。
  - ステップ 2 [システム (System)] ページで [システム タスク (System Tasks)] をクリックします。
  - ステップ 3 システム タスクが含まれているフォルダを選択します。フォルダの矢印をクリックして、タスクを展開します。  
(注) 128 のシステム タスクが使用可能です。
  - ステップ 4 タスクを選択し、[タスクの管理 (Manage Task)] をクリックします。  
[タスクの管理 (Manage Task)] 画面が表示されます。
  - ステップ 5 [タスク実行 (Task Execution)] ドロップダウンリストから [有効化 (Enable)] を選択します。
  - ステップ 6 [システムタスクポリシー (System Task Policy)] ドロップダウンリストからシステム ポリシーを選択します。
  - ステップ 7 [送信 (Submit)] をクリックします。  
選択したシステム ポリシーにシステム タスクが割り当てられます。
- 

## システム タスクの実行

Cisco UCS Director では、サービス ノードでリモートで実行できないシステム タスクが含まれます。システム ポリシーは、ローカル ホストまたはプライマリ ノードからリモートで割り当てることもできます。

また、特定のシステム タスクを検索および選択でき、システムですぐに実行します。

### 手順

- 
- ステップ 1 [管理 (Administration)] > [システム (System)] を選択します。
  - ステップ 2 [システム (System)] ページで [システム タスク (System Tasks)] をクリックします。
  - ステップ 3 リストからタスクを選択します。
  - ステップ 4 [今すぐ実行 (Run Now)] をクリックします。  
システム タスクを実行した結果がユーザ インターフェイスに更新されます。
-

## システム タスクの有効化または無効化

### 手順

- 
- ステップ 1** [管理 (Administration) ] > [システム (System) ] を選択します。
- ステップ 2** [システム (System) ] ページで [システム タスク (System Tasks) ] をクリックします。
- ステップ 3** 1 つ以上のシステム タスクを含むフォルダを選択します。フォルダの矢印をクリックして、タスクを展開します。  
(注) 128 のシステム タスクが使用可能です。
- ステップ 4** タスクを選択し、[タスクの管理 (Manage Task) ] をクリックします。  
[タスクの管理 (Manage Task) ] 画面が表示されます。
- ステップ 5** システム タスクを無効にするには、[タスクの実行 (Task Execution) ] ドロップダウンリストから [無効 (Disable) ] を選択します。
- ステップ 6** システム タスクを有効にするには、[タスクの実行 (Task Execution) ] ドロップダウンリストから [有効 (Enable) ] を選択します。
- ステップ 7** [送信 (Submit) ] をクリックします。
- 

## Cisco UCS Director ユーザ インターフェイスのアイコンの管理

Cisco UCS Director は、カタログアイコン、アクション関連のアイコン、およびステータス関連のアイコンのカスタマイズと管理をサポートします。システムに設定された各アイコンには、デフォルトで利用可能ないくつかのイメージが含まれています。カタログ、アクション、またはステータスのいずれかに表示されるアイコンを変更できます。新しいイメージをアップロードしてアイコンとして設定することができます。または、システムが提供する一連のアイコンから別のアイコンを選択することもできます。

**重要**

- アイコンをアップロードしているときに、アイコンが .SVG 形式か .PNG 形式のいずれかであることを確認します。 .SVG イメージをアップロードする場合、ピクセルの圧縮が次のとおりであることを確認します。
  - アクションアイコンの場合 : 24 px x 24px
  - テーブルアイコンの場合 : 16 px x 16px
  - ステータスアイコンの場合 : 16 px x 16px
  - ヘッダーアイコンの場合 : 20 px x 20px (警告アイコンを除く)
- アイコン選択後に、システムからログアウトして再度ログインし、新しいアイコンがユーザーインターフェイスに表示されるようにする必要があります。

次に、Cisco UCS Director に事前に設定されているアイコンセットを示します。

- 標準カタログアイコンセット
- ステータスアイコンセット
- ベアメタルカタログアイコンセット
- 高度なカタログアイコンセット
- コンテナカタログアイコンセット
- カタログフォルダアイコンセット
- アクションアイコンセット

ユーザーインターフェイスのアイコンを変更するだけでなく、デフォルトのアイコンに戻すこともできます。

## Cisco UCS Director ユーザーインターフェイスのアイコンの変更

### 手順

- ステップ 1** [管理 (Administration) ] > [ユーザーインターフェイス設定 (User Interface Settings) ] を選択します。
- ステップ 2** [ユーザーインターフェイス設定 (User Interface Settings) ] ページで [アイコン管理 (Icon Management) ] をクリックします。
- ステップ 3** アイコンセットカテゴリを選択します。  
次のいずれかを設定できます。
  - 標準カタログアイコンセット
  - ステータスアイコンセット

- ベアメタルカタログアイコンセット
- 高度なカタログアイコンセット
- コンテナカタログアイコンセット
- カatalogフォルダアイコンセット
- アクションアイコンセット

**ステップ4** [アイコンイメージ (Icon Images) ]をクリックします。

**ステップ5** [アイコンイメージ (Icon Images) ]を展開します。

**ステップ6** アイコンのリストからアイコンイメージを選択します。

**ステップ7** [編集 (Edit) ]をクリックします。

**ステップ8** [アイコンイメージエントリの編集 (Edit Icon Images Entry) ]ページで、次の手順のいずれかを実行します。

- a) [既存のアイコンの使用 (Use Existing icon) ]ドロップダウンリストを使用して、システム内に現在存在するイメージを1つ選択します。
- b) [ファイル (File) ]フィールドにイメージをドラッグするか、または[ファイルを選択 (Select a File) ]オプションを使用して参照し、イメージを選択することによって、新しいイメージをシステムにアップロードします。

**重要** アイコンをアップロードしているときに、アイコンが.SVG形式か.PNG形式のいずれかであることを確認します。.SVGイメージをアップロードする場合、ピクセルの圧縮が次のとおりであることを確認します。

- アクションアイコンの場合 : 24 px x 24px
- テーブルアイコンの場合 : 16 px x 16px
- ステータスアイコンの場合 : 16 px x 16px
- ヘッダーアイコンの場合 : 20 px x 20px (警告アイコンを除く)

**ステップ9** [送信 (Submit) ]をクリックします。

---

### 次の作業

システムからログアウトして再度ログインし、新しいアイコンがユーザインターフェイスに表示されるようにする必要があります。

## アイコンの編集

### 手順

- ステップ 1 [管理 (Administration) ]>[ユーザインターフェイス設定 (User Interface Settings) ]を選択します。
- ステップ 2 [ユーザインターフェイス設定 (User Interface Settings) ] ページで [アイコン管理 (Icon Management) ] をクリックします。
- ステップ 3 編集するアイコンがあるアイコン カテゴリを含む行を選択します。
- ステップ 4 [アイコンイメージ (Icon Images) ] をクリックします。
- ステップ 5 [アイコンイメージの管理 (Manage Icon Images) ] 画面で、編集するアイコンイメージを選択します。
- ステップ 6 [編集 (Edit) ] をクリックします。
- ステップ 7 [アイコンイメージエントリの編集 (Edit Icon Images Entry) ] 画面で、[説明 (Description) ] を編集します。
- ステップ 8 [参照 (Browse) ] をクリックしてイメージを参照し、アップロードする代わりにファイルを選択します。
- ステップ 9 [アップロード (Upload) ] をクリックします。
- ステップ 10 アップロードが終了したら、[送信 (Submit) ] をクリックします。

## アイコンの削除

### 手順

- ステップ 1 [管理 (Administration) ]>[ユーザインターフェイス設定 (User Interface Settings) ]を選択します。
- ステップ 2 [ユーザインターフェイス設定 (User Interface Settings) ] ページで [アイコン管理 (Icon Management) ] をクリックします。
- ステップ 3 削除するアイコンがあるアイコン カテゴリを含む行を選択します。
- ステップ 4 [アイコンイメージ (Icon Images) ] をクリックします。
- ステップ 5 [アイコンイメージの管理 (Manage Icon Images) ] 画面でアイコンのイメージを選択し、[削除 (Delete) ] をクリックします。
- ステップ 6 [送信 (Submit) ] をクリックします。

## アイコンのプレビュー

### 手順

- 
- ステップ 1 [管理 (Administration)] > [ユーザ インターフェイス設定 (User Interface Settings)] を選択します。
  - ステップ 2 [ユーザ インターフェイス設定 (User Interface Settings)] ページで [アイコン管理 (Icon Management)] をクリックします。
  - ステップ 3 プレビューするアイコン カテゴリを含む行を選択します。
  - ステップ 4 [アイコン イメージ (Icon Images)] をクリックします。
  - ステップ 5 [アイコン イメージの管理 (Manage Icon Images)] 画面で、プレビューするアイコン イメージを選択します。
  - ステップ 6 [情報 (Information)] アイコンをクリックしてイメージをプレビューします。
- 

## タグ ライブラリ

タグ付けは、オブジェクトにラベルを割り当てるときに行います。管理者は、Cisco UCS Director のリソースグループやユーザグループなどのオブジェクトにタグ付けするかどうかを決定できます。コンピューティング、ストレージ、ネットワーク、仮想などのカテゴリにタグを割り当てることができます。また、選択したカテゴリのアカウントの特定のタイプにタグを適用することもできます。リソースグループでのタグの適用と削除の方法については、『*Cisco UCS Director APIC Management Guide*』のセクション「*Managing Tags of a Resource Group*」の項を参照してください。

タグが作成されると、定義された適用可能なルールに基づいて、タグがフィルタ処理され、オブジェクトレポートに表示されます。タグは、リソースグループなどのオブジェクトに関連付けることができます。タグに関連付けたリソースのエンティティを表示するには、タグを選択し、[詳細の表示 (View Details)] をクリックします。別の方法として、タグをダブルクリックすることもできます。



---

(注) リソース エンティティがタグに関連付けられていない場合、テーブルは空になります。

---

## タグの作成

レポート ページで1つ以上のオブジェクトに割り当てることができるタグを作成するには、[タグ ライブラリ (Tag Library)] 画面の [作成 (Create)] アクションを使用します。

## 手順

**ステップ 1** [ポリシー (Policies)] > [タグ ライブラリ (Tag Library)] を選択します。

**ステップ 2** [作成 (Create)] をクリックします。

**ステップ 3** [タグの作成 (Create Tags)] 画面で、次のフィールドに値を入力します。

名前	説明
[名前 (Name)] フィールド	タグの名前。
[説明 (Description)] フィールド	タグの説明。
[タイプ (Type)] ドロップダウンリスト	タグタイプとして [整数 (INTEGER)] または [文字列 (STRING)] を選択します。
[可能なタグ値 (Possible Tag Values)] フィールド	タグに設定可能な値。

**ステップ 4** [Next] をクリックします。

**ステップ 5** [適用可能なルール (Applicability Rules)] 画面で、次のフィールドに値を入力します。

名前	説明
[エンド ユーザに表示 (Visible to End User)] フィールド	Checko は、エンド ユーザに表示されるタグを作成します。

名前	説明
[タグ付け可能なエンティティ (Taggable Entities) ] フィールド	<p>タグの適用が必要なエンティティを選択します。</p> <p>エンティティを追加するには、以下の手順に従ってください。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 [+] アイコンをクリックします。</li> <li>2 [カテゴリ (Category) ] ドロップダウンリストからカテゴリを選択します。次のいずれかを設定できます。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• [Virtual_Compute]</li> <li>• [Virtual_Storage]</li> <li>• [Virtual_Network]</li> <li>• [Physical_Compute]</li> <li>• [Physical_Storage]</li> <li>• [Physical_Network]</li> <li>• [管理 (Administration) ]</li> </ul> </li> <li>3 タグ付け可能なエンティティを選択します。</li> <li>4 [送信 (Submit) ] をクリックします。</li> </ol> <p>(注) タグは、セットになったタグ付け可能なエンティティに応じてそれぞれのカテゴリの下に表示されます。</p>

**ステップ 6** [送信 (Submit) ] をクリックします。

#### 次の作業

作成したタグは、ユーザインターフェイスのオプションを選択して編集、複製、および削除できます。

## サポート情報

Cisco UCS Director サポートは、ライセンス ステータス、データベース テーブル、バージョン、リソース使用状況、ログ、トラブルシューティング用のデバッグプロセスを含む、基本および高度なシステム情報を提供します。

[サポート情報 (Support Information) ] ページでは、次の操作を実行できます。

- システム情報の表示（基本）
- システム情報の表示（詳細）
- ログの表示
- すべてのログのダウンロード
- デバッグのロギングを開始および停止
- API のロギングを開始および停止

## システム情報の表示

Cisco UCS Director ユーザ インターフェイスからシステム情報にアクセスできます。次のタイプのシステム情報にアクセスできます。

- 基本システム情報
- 詳細システム情報

基本システム情報には次のものがあります。

- ソフトウェアのバージョン
- アップタイム
- サービス ステータス
- システム ライセンス ステータス
- システムの使用状況
- コンピュート アカウント ステータス
- コンピュート サーバ ステータス
- ストレージ アカウント ステータス
- システム カタログ
- ネットワーク デバイスのステータスと
- クラウド ステータス

詳細システム情報は次の情報を含んでいます。

- 基本システム情報
- データベース テーブル サマリー
- 本体設定
- TOP プロセス情報
- プロセッサ、メモリ、ディスク、ログ ファイル、ネットワーク、ログインの情報

- システム タスク ステータス
- クラウド インベントリ
- モニタリング ステータス

#### 手順

- 
- ステップ 1** [管理 (Administration) ] > [サポート情報 (Support Information) ] を選択します。
- ステップ 2** [システム情報 (System Information) ] ドロップダウンリストより、表示したいシステム情報を選択します。
- ステップ 3** [送信 (Submit) ] をクリックします。  
[システム情報 (System Information) ] ページが新しいタブで開き、アプライアンスに関する情報が Cisco UCS Director 表示されます。
- 

## ログの表示

Cisco UCS Director システムの次のログを照合します。

- インフラマネージャ
- Web コンテキストクラウドマネージャ
- Tomcat ログ
- オーセンティケーターログ
- メール配信ログ
- パッチログ

#### 手順

- 
- ステップ 1** [管理 (Administration) ] > [サポート情報 (Support Information) ] を選択します。
- ステップ 2** [システム情報 (System Information) ] ドロップダウンリストから、[ログを表示 (Show Log) ] を選択します。
- ステップ 3** [ログを表示 (Show Log) ] ドロップダウンリストから、表示したいログを選択します。
- ステップ 4** [ログの表示 (Show Logs) ] をクリックします。  
ログファイルが新しいタブ、またはブラウザウィンドウで開き、使用可能な情報、警告、およびエラー ログが表示されます。
-

## ログのダウンロード

zip ファイルとしてすべてのログ ファイルをダウンロードできます。

### 手順

- 
- ステップ 1 [管理 (Administration) ] > [サポート情報 (Support Information) ] を選択します。
  - ステップ 2 [システム情報 (System Information) ] ドロップダウンリストから、[すべてのログのダウンロード (Download All Logs) ] を選択します。
  - ステップ 3 [ダウンロード (Download) ] をクリックします。
- 

## デバッグ ログの開始

デバッグ ログでは、最大で 30 分間のデバッグ ログをログ ファイルに記録できます。

### 手順

- 
- ステップ 1 [管理 (Administration) ] > [サポート情報 (Support Information) ] を選択します。
  - ステップ 2 [システム情報 (System Information) ] ドロップダウンリストから、[デバッグ ログ (Debug Logging) ] を選択します。
  - ステップ 3 [デバッグ ログの開始 (Start Debug Logging) ] をクリックします。
  - ステップ 4 記録を停止するには、[デバッグ ログの停止 (Stop Debug Logging) ] をクリックします。録音は自動的に 30 分の制限に達すると停止します。
  - ステップ 5 zip のログファイルをダウンロードするには、[HH.MM.SS] (時間) から [デバッグ ログをダウンロード (Download Debug Logs) ] をクリックします。
-

## API ログの生成

### 手順

- 
- ステップ 1 [管理 (Administration)] > [サポート情報 (Support Information)] を選択します。
  - ステップ 2 [システム情報 (System Information)] ドロップダウンリストから、[API ログ (API Logging)] を選択します。
  - ステップ 3 [API ログの開始 (Start API Logging)] をクリックします。
  - ステップ 4 目的のテストを実行します。
  - ステップ 5 記録を停止するには、[API ログの停止 (Stop API Logging)] をクリックします。
  - ステップ 6 zip ファイルをダウンロードするには [HH.MM.SS] (時間) から [API デバッグ ログをダウンロード (Download API Debug Logs)] をクリックします。  
圧縮 (zip) ファイルが生成され、デスクトップにダウンロードされます。この zip ファイルには、タイムスタンプとともに、アプライアンスで起動した REST API が記載されたテキストファイルが含まれています。
- 

## データベース監査ロギング

データベース監査ロギングによって、ログインイベントおよび照会イベントに関する情報を記録できます。これらのイベントは、`/var/lib/mysql/data/audit.log` ファイルに記録されます。デフォルトでは、データベース監査ロギングは無効になっています。データベース監査ロギングを有効にするには、`dbAuditLog.sh` コマンドを使用します。詳細については、[監査ロギングの有効化](#)、(175 ページ) を参照してください。



- 
- (注) 大量の監査ログが出力された結果、システムにパフォーマンス上の問題が発生した場合、データベース監査ロギングを無効にできます。
-

## 監査ログの有効化

### 手順

- 
- ステップ 1** 直接、または SSH クライアントを使用して、Cisco UCS Director アプライアンスに root でログインします。
- ステップ 2** 次のコマンドを実行して、システム上で実行されているすべてのサービスを停止します。
- ```
[root@localhost infra]# pwd
/opt/infra
[root@localhost infra]# ./stopInfraAll.sh
[root@localhost infra]# ./statusInfra.sh
```
- ステップ 3** 次のコマンドを実行し、監査ログの有効にします。
- ```
[root@localhost infra]# cd bin
[root@localhost bin]# pwd
/opt/infra/bin
[root@localhost bin]# ./dbAuditLog.sh ON
```
- ステップ 4** 次のコマンドを実行し、サービスを再起動します。
- ```
[root@localhost infra]# pwd
/opt/infra/bin
[root@localhost infra]# ./startInfraAll.sh
```
- ステップ 5** 次のコマンドを実行し、監査ログのステータスを確認します。
- ```
[root@localhost bin]# ./dbAuditLog.sh STATUS
audit-log= ON
```
- データベースの起動に問題があることを示すメッセージが表示された場合は、audit.log ファイルを削除するか、または名前を変更してから、Cisco UCS Director データベース サーバを再起動する必要があります。
-





## 第 6 章

# 統合設定の管理

---

この章は、次の項で構成されています。

- [\[統合設定 \(Integration Settings\)\]](#) について, 177 ページ
- [構成管理データベースの統合](#), 177 ページ
- [計測データのエクスポート](#), 179 ページ
- [変更レコード](#), 179 ページ
- [システム ログ](#), 179 ページ
- [ストレージおよび OVF のアップロード](#), 181 ページ
- [複数言語のサポート](#), 181 ページ

## [統合設定 (Integration Settings)] について

このメニューを使用すると、Cisco UCS Director で次の操作を実行できます。

- [アプリケーションストレージ情報のモニタリング](#)
- [CMDB 統合の設定](#)
- [OVF の管理](#)
- [測定レポートのエクスポート](#)
- [システム ログの表示](#)

## 構成管理データベースの統合

構成管理データベース (CMDB) は、システムの変更を追跡および管理するために使用されます。CMDB には通常、仮想マシン (VM)、サービスリクエスト、グループなどのリソースに対する追加、削除、または変更のイベントタイプが表示されます。

## CMDB 統合の設定

### 手順

- ステップ 1** [管理 (Administration) ] > [統合 (Integration) ] を選択します。
- ステップ 2** [統合 (Integration) ] ページで [CMDB 統合セットアップ (CMDB Integration Setup) ] をクリックします。
- ステップ 3** [CMDB 統合設定 (CMDB Integration Setup) ] 画面で、次を含む必須フィールドに値を入力します

名前	説明
[FTP サーバにエクスポート (Export to FTP Server) ] チェック ボックス	FTP サーバに変更記録をエクスポートするには、このチェック ボックスをオンにします。
[エクスポート形式 (Export Format) ] ドロップダウン リスト	エクスポート形式の種類 (CSV または XML) を選択します。
[FTP サーバ (FTP Server) ] フィールド	FTP サーバのアドレス。
[FTP ポート (FTP Port) ] フィールド	FTP サーバポート番号。
[FTP ユーザ (FTP User) ] フィールド	FTP ユーザ ID。
[FTP パスワード (FTP Password) ] フィールド	FTP ユーザ パスワード。
[FTP エクスポート頻度 (FTP Export Frequency) ] ドロップダウン リスト	変更記録を FTP サーバにエクスポートする頻度を選択します。
[FTP ファイル名 (FTP File Name) ] フィールド	エクスポートされる変更記録のファイル名。ファイルがターゲット FTP サーバにエクスポートされるたびに、次の変数を使用して新しいファイル名を作成できます。  MONTH、WEEK、DAY、YEAR、HOUR、MIN、SEC、MLLIS  例 : XYZ-\$DAY-\$HOUR-\$MIN-\$SEC
[FTP のテスト (Test FTP) ] チェック ボックス	FTP の設定をテストするには、このチェック ボックスをオンにします。

- ステップ 4** [保存 (Save) ] をクリックします。

# 計測データのエクスポート

計測データのエクスポートを設定することにより、VM リソースの使用率や、リソース アカウンティングの詳細などのトレンドデータを、サーバへエクスポートできます。

## 計測データのエクスポートの設定

### 手順

- 
- ステップ 1 [管理 (Administration) ] > [統合 (Integration) ] を選択します。
  - ステップ 2 [統合 (Integration) ] ページで [メータリングデータ エクスポート セットアップ (Metering Data Export Setup) ] をクリックします。
  - ステップ 3 構成管理データベース (CMDB) の設定に使用するフィールドに値を入力します。詳細については、[CMDB 統合の設定](#)、(178 ページ) を参照してください。
  - ステップ 4 [保存 (Save) ] をクリックします。
- 

## 変更レコード

### 変更レコードの表示

最大 1,000 件のレコードを表示できます。レポートのリストは降順で表示され、最近のレポートが上部の行に表示されます。

### 手順

- 
- ステップ 1 [管理 (Administration) ] > [統合 (Integration) ] を選択します。
  - ステップ 2 [統合 (Integration) ] ページで [変更レコード (Change Records) ] をクリックします。
- 

## システム ログ

システム ログ (syslog) 情報を設定されたサーバに転送できます。各システム メッセージは重大度レベルに関連付けられます。ターゲットサーバに転送するシステムログの重大度レベルを決定できます。

## システム ログの設定

### 手順

- ステップ 1** [管理 (Administration) ] > [統合 (Integration) ] を選択します。
- ステップ 2** [統合 (Integration) ] ページで [Syslogs] をクリックします。
- ステップ 3** [Syslog 転送の有効化 (Enable Syslog Forward) ] チェック ボックスをオンにし、次を含む必須フィールドに値を入力します。

フィールド	説明
[重大度の最小値 (Minimum Severity) ] ドロップダウン リスト	どの重大度メッセージが syslog サーバに転送されないかのしきい値を下記から選択します。
<b>プライマリ Syslog サーバ</b>	
[サーバのアドレス (Server Address) ] フィールド	プライマリ サーバのアドレス。
[プロトコル (Protocol) ] ドロップダウン リスト	プロトコル (UDP または TCP) を選択します。
[ポート (Port) ] フィールド	ポート番号。
[Syslog メッセージフォーマット (Syslog Message Format) ] ドロップダウン リスト	メッセージの形式 (XML またはプレーン テキスト) を選択します。
<b>セカンダリ Syslog サーバ</b>	
[サーバのアドレス (Server Address) ] フィールド	セカンダリ サーバのアドレス。
[プロトコル (Protocol) ] ドロップダウン リスト	プロトコル (UDP または TCP) を選択します。
[ポート (Port) ] フィールド	ポート番号。
[Syslog メッセージフォーマット (Syslog Message Format) ] ドロップダウン リスト	メッセージの形式 (XML またはプレーン テキスト) を選択します。

- ステップ 4** [保存 (Save) ] をクリックします。

## ストレージおよび OVF のアップロード

管理者、グループ管理者、またはエンドユーザがアップロードしたファイルの保管場所を設定できます。アップロードされたファイルをローカルに保存するか、または外部 NFS 共有マウントポイントを保存先として設定することができます。システムの管理者は、ネットワークファイルシステム (NFS) の場所を設定できます。

ファイルアップロード機能を使用して、管理者、グループ管理者、またはエンドユーザ (サービスエンドユーザポータル) は、オープン仮想化フォーマット (OVF) ファイルをローカルストレージまたは外部 NFS 共有マウントポイントにアップロードすることもできます。詳細については、『Cisco UCS Director OVF File Upload Guide』を参照してください。

## 複数言語のサポート

Cisco UCS Director は、次の言語の同時表示および入力をサポートしています。

- 英語 (米国)
- 日本語 (日本)
- スペイン語 (ラテンアメリカ)
- フランス語 (フランス)
- 韓国語 (韓国)
- 中国語 (中国)
- ロシア語 (ロシア)

すべての入力フィールドで、ユーザが選択した言語でのテキスト入力をサポートしています。

管理者は、特定のユーザをシステムに追加する際にそのユーザ用に言語設定を指定できます。詳細については、[ユーザの追加](#) (34 ページ) を参照してください。また、システム内の各ユーザがユーザインターフェイスの言語を選択できます。詳細については、[次](#)を参照してください。  
[ユーザインターフェイスのロケール設定](#) (182 ページ)

## Cisco UCS Director 用言語の選択

Cisco UCS Director 用のユーザインターフェイスの言語は変更できます。

## 手順

- 
- ステップ 1** [管理 (Administration) ]>[ユーザインターフェイス設定 (User Interface Settings) ]を選択します。
- ステップ 2** [ユーザインターフェイス設定 (User Interface Settings) ] ページで [言語 (Language) ] をクリックします。
- ステップ 3** [言語 (Language) ] ドロップダウン リストから言語を選択します。
- ステップ 4** [保存 (Save) ] をクリックします。
- 重要** 言語の変更を有効にするためには、システムを再起動する必要があります。
- 

## ユーザインターフェイスのロケール設定

システムのユーザとして、ユーザインターフェイスに指定の言語を選択できます。この言語設定は、自身のログインセッションだけに設定され、他のユーザ用の言語選択には影響しません。

## 手順

- 
- ステップ 1** 画面の右上隅に表示されているユーザ名をクリックし、[プロフィールの編集 (Edit My Profile) ] を選択します。
- ステップ 2** [プロフィールの編集 (Edit My Profile) ] 画面で、[言語 (Language) ] ドロップダウン リストから言語を選択します。
- ステップ 3** [保存 (Save) ] をクリックします。  
ユーザインターフェイスの言語が即時変更されます。
- (注) [言語 (Language) ] ドロップダウンリストと [保存 (Save) ] オプションが表示されない場合、ブラウザのキャッシュをクリアして、Cisco UCS Director 再起動する必要があります。
-



## 第 7 章

# 物理インフラストラクチャの管理

この章は、次の項で構成されています。

- [物理インフラストラクチャの管理について](#), 183 ページ
- [接続のテスト](#), 193 ページ
- [デバイス検出の有効化](#), 194 ページ

## 物理インフラストラクチャの管理について

Cisco UCS Director を使用すると、物理インフラストラクチャと仮想インフラストラクチャの両方を管理できます。物理アカウントを管理するには、まずサイトを作成してサイトにポッドを追加する必要があります。このアカウントを作成すると、Cisco UCS Director が新しく作成された物理アカウント内のすべてのコンポーネントを検出します。通常、検出プロセスには約 5 分かかります。システムで、新しいポッドを追加するか、または使用可能なデフォルトのポッドを使用できます。物理アカウントは、デフォルトのポッドにも、追加したポッドにも関連付けることができます。



(注) 管理者はシステムに、最初に物理アカウントやバーチャルアカウントを作成できます。Cisco UCS Director の物理アカウントは仮想（クラウド）アカウントに依存しません。

## 統合ビューの使用

統合ビューには、サイトや Cisco UCS Director で設定したポッドがグラフィカルに表示されます。このビューにアクセスするには、サイドナビゲーションバーから [統合 (Converged)] を選択します。システムに1つまたは複数のサイトを設定している場合、[統合 (Converged)] ビューページには、サイトを選択し、そのサイトに関連付けられているポッドを表示するためのドロップダウンリストが表示されます。ただし、このページからはサイトを追加できません。サイトの追加の詳細については、[サイトの追加](#), (184ページ) を参照してください。システムにサイトを追加

すると、[統合 (Converged)] ページからポッドを追加するか、または [管理 (Administration)] > [物理アカウント (Physical Accounts)] > [ポッド (Pods)] 画面からポッドを追加できます。

[統合 (Converged)] ページでは、各サイトに関連付けられているポッドを表示できるほか、次のオプションも使用できます。

- 検索：複数のポッドがサイトにある場合は、検索機能を使用すると、検索条件として名前を使用して特定のポッドを見つけることができます。
- 追加、編集、削除：これらのオプションを使用してポッドを追加、変更、削除します。
- サイトに表示されたポッドの行を折りたたんだり、展開します。
- 各ポッドの特定のアカウント情報を表示します。
  - ポッドを選択し、アカウント上にカーソルを合わせると、アカウントのすべての詳細が表示されます。または、アカウントをクリックすると、詳細情報が表示されます。
  - アカウントの電源ステータス：アカウント上の電源アイコンは、アカウントの電源がオンになっているか、オフになっているかを示します。緑色は電源がオンになっていることを示し、赤色は電源がオフになっていることを示します。

## サイトの追加

### 手順

- 
- ステップ 1** [管理 (Administration)] > [物理アカウント (Physical Accounts)] を選択します。
- ステップ 2** [物理アカウント (Physical Accounts)] ページで [サイト管理 (Site Management)] をクリックします。
- ステップ 3** [追加 (Add)] をクリックします。
- ステップ 4** [サイトの追加 (Add Site)] 画面で、次のフィールドに入力します。

名前	説明
[サイト名 (Site Name)] フィールド	サイトの記述名。
[説明 (Description)] フィールド	サイトの説明 (ロケーション、重要性など)。
[連絡先の名前 (Contact Name)] フィールド	このサイトの担当者の名前。

- ステップ 5** [送信 (Submit)] をクリックします。
-

## Podの追加

### 手順

- ステップ1 [管理 (Administration) ]>[物理アカウント (Physical Accounts) ]を選択します。
- ステップ2 [物理アカウント (Physical Accounts) ] ページで [ポッド (Pods) ] をクリックします。
- ステップ3 [追加 (Add) ] をクリックします。
- ステップ4 [Pod の追加 (Add Pod) ] 画面で、次のフィールドに入力します。

名前	説明
[名前 (Name) ] フィールド	Pod の記述名です。
[タイプ (Type) ] ドロップダウンリスト	<p>追加するポッドのタイプを選択します。次のタイプのいずれかになります。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• [FlexPod]</li> <li>• [VersaStack]</li> <li>• [汎用 (Generic) ]</li> <li>• [ExpressPodミディアム (ExpressPod Medium) ]</li> <li>• [VSPEX]</li> <li>• [ExpressPodスモール (ExpressPod Small) ]</li> <li>• [Vblock]</li> <li>• [HyperFlex]</li> <li>• [仮想 SAN Pod (Virtual SAN Pod) ]</li> </ul> <p>汎用タイプ以外のPodには、特定の物理コンポーネントおよび仮想コンポーネントにのみ対応しています。汎用ポッドには特定のポッドライセンスは必要ありません。また、汎用ポッドには、任意のタイプの物理コンポーネントまたは仮想コンポーネントを追加できます。Podの実行に必要な個々のデバイスライセンスを含む、バンドルされたPodライセンス (FlexPod、Vblock、VSPEX) の詳細については、『<a href="#">Cisco UCS Director Installation and Upgrade Guides</a>』を参照してください。</p> <p>(注) Cisco UCS Director の IBM アカウントでは、VersaStack ポッドと汎用ポッドのみがサポートされています。</p>
[サイト (Site) ] ドロップダウンリスト	Podを追加するサイトを選択します。環境にサイトがない場合は、このステップを省略できます。

名前	説明
[説明 (Description) ]フィールド	(任意) Pod の説明です。
[住所 (Address) ]フィールド	Pod の物理ロケーションです。たとえば、このフィールドには Pod の市区町村、またはその他の内部的な識別子を入力します。
[POD を非表示 (Hide Pod) ] チェック ボックス	統合チェック ビューに Pod を表示しないようにするには、このチェック ボックスをオンにして Pod を非表示にします。Pod からアカウントの追加または削除は引き続き実行できます。  たとえば、このチェック ボックスを使用して、物理要素や仮想要素の存在しないポッドが統合ビューに表示されないようにすることができます。

**ステップ 5** [追加 (Add) ] をクリックします。

#### 次の作業

Pod にアカウントを 1 つ以上追加します。

## 物理的なアカウントの追加

#### 手順

- ステップ 1** [管理 (Administration) ] > [物理アカウント (Physical Accounts) ] を選択します。
- ステップ 2** [物理アカウント (Physical Accounts) ] ページで [物理アカウント (Physical Accounts) ] をクリックします。
- ステップ 3** [追加 (Add) ] をクリックします。
- ステップ 4** [アカウントの追加 (Add Account) ] 画面で、次のフィールドに入力します。

名前	説明
[ポッド (POD) ] ドロップダウン リスト	物理アカウントが属する Pod を選択します。
[カテゴリ (Category) ] ドロップダウン リスト	カテゴリタイプを選択します ([コンピューティング (Computing) ] または [ストレージ (Storage) ]) 。 [ストレージ (Storage) ] を選択した場合は、ステップ 6 に進みます。

名前	説明
[アカウントタイプ (Account Type) ] ドロップダウンリスト	この物理アカウントのアカウントタイプを次から選択します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• [UCSM]</li> <li>• [HP ILO]</li> <li>• [Ciscoラックサーバ(CIMC)]</li> <li>• [IPMI]</li> </ul>

**ステップ 5** [送信 (Submit) ] をクリックします。

**ステップ 6** [アカウントの追加 (Add Account) ] 画面で、次のフィールドに入力します。

名前	説明
[認証タイプ (Authentication Type) ] ドロップダウンリスト	このアカウントに使用する認証タイプを次から選択します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• [ローカルで認証済み (Locally Authenticated) ] : ローカルで認証されたユーザアカウントとは、ファブリックインターコネクトを介して直接認証されたユーザアカウントのことであり、管理者権限または AAA (認証、認可、アカウントिंग) 権限を持っていれば誰でも有効/無効にすることができます。</li> <li>• [リモートで認証済み (Remotely Authenticated) ] : リモートで認証されたユーザアカウントとは、LDAP、RADIUS、TACACS+ のいずれかを介して認証されたユーザアカウントのことです。</li> </ul>
[サーバ管理 (Server Management) ] ドロップダウンリスト	次のオプションのうちいずれかを選択して、このアカウントによってサーバを管理する方法を選択します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• [すべてのサーバ (All Servers) ]</li> <li>• [選択済みのサーバ (Selected Servers) ]</li> </ul>
[アカウント名 (Account Name) ] フィールド	追加したい物理アカウントに割り当てる固有の名前

名前	説明
[サーバのアドレス (Server Address) ]フィールド	サーバの IP アドレス。
[クレデンシャルポリシーの使用 (Use Credential Policy) ]チェック ボックス	手動で情報を入力する代わりに、このアカウントのクレデンシャル ポリシーを使用する場合は、このチェック ボックスをオンにします。
[クレデンシャルポリシー (Credential Policy) ]ドロップダウン リスト	[クレデンシャルポリシーの使用 (Use Credential Policy) ]をオンにした場合は、このドロップダウン リストから、使用するクレデンシャル ポリシーを選択します。  このフィールドが表示されるのは、クレデンシャル ポリシーの使用を選択した場合のみです。
[ユーザ ID (User ID) ]フィールド	このアカウントにアクセスするためのユーザ名。  このフィールドは、クレデンシャルポリシーの使用を選択した場合には表示されません。
[パスワード (Password) ]フィールド	ユーザ名に関連付けられたパスワードです。  このフィールドは、クレデンシャルポリシーの使用を選択した場合には表示されません。
[通信タイプ (Transport Type) ]ドロップダウン リスト	アカウントで使用する通信タイプを選択します。  次のいずれかになります。  • [HTTP] • [HTTPS]  このフィールドは、クレデンシャルポリシーの使用を選択した場合には表示されません。
[ポート (Port) ]フィールド	サーバ ポート番号。  このフィールドは、クレデンシャルポリシーの使用を選択した場合には表示されません。
[説明 (Description) ]フィールド	アカウントの説明。
[連絡先の電子メール (Contact Email) ]フィールド	アカウントの連絡先の電子メール アドレス。

名前	説明
[ロケーション (Location) ] フィールド	ロケーション。
[サービス プロバイダー (Service Provider) ] フィールド	サービス プロバイダーの名前 (既存する場合)。

**ステップ 7** このアカウントがストレージである場合、適切なアカウントタイプとして、[NetApp ONTAP]、[NetApp OnCommand]、[EMC VNX]、[EMC VMAX Solutions Enabler] または [WHIPTAIL] の中から選択します。

**ステップ 8** [追加 (Add) ] をクリックします。

## マルチドメイン マネージャ アカウントの追加

次のタイプのマルチドメイン マネージャ アカウントを追加できます。

- PNSC : Cisco Prime Network Services Controller アカウント
- DCNM : Cisco Prime Data Center Network Manager アカウント
- UCS Central : Cisco UCS Central アカウント
- APIC : Cisco Application Policy Infrastructure Controller アカウント
- EMC RecoverPoint アカウント
- EMC VPLEX アカウント

### はじめる前に

このタスクを完了するには、アプライアンスにログインする必要があります。

## 手順

- ステップ 1** [管理 (Administration) ] > [物理アカウント (Physical Accounts) ] を選択します。
- ステップ 2** [物理アカウント (Physical Accounts) ] ページで [マルチドメイン マネージャ (Multi-Domain Managers) ] をクリックします。
- ステップ 3** [追加 (Add) ] をクリックします。
- ステップ 4** [アカウントの追加 (Add Account) ] 画面で、ドロップダウン リストからアカウント タイプを選択します。
- ステップ 5** [送信 (Submit) ] をクリックします。
- ステップ 6** [マルチドメイン マネージャ アカウント (Multi-Domain Manager Account) ] 画面で、次のフィールドに値を入力します。

名前	説明
[アカウント名 (Account Name) ] フィールド	このマルチドメイン マネージャ アカウントが属するアカウント名を選択します。
[説明 (Description) ] フィールド	(任意) アカウントについての説明。
[サーバのアドレス (Server Address) ] フィールド	マルチドメイン マネージャ アカウントを管理するサーバの IP アドレスを入力します。
[アカウント名 (Account Name) ] フィールド	追加したい物理アカウントに割り当てる固有の名前
[サーバのアドレス (Server Address) ] フィールド	サーバの IP アドレス。
[ユーザ ID (User ID) ] フィールド	このアカウントにアクセスするためのユーザ名。
[パスワード (Password) ] フィールド	ユーザ名に関連付けられたパスワードです。
[通信タイプ (Transport Type) ] ドロップダウン リスト	アカウントで使用する通信タイプを選択します。次のいずれかになります。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• [http]</li> <li>• [https]</li> </ul>
[ポート (Port) ] フィールド	サーバ ポート番号。デフォルト ポートは 443 です。
[連絡先の電子メール (Contact Email) ] フィールド	(任意) アカウントの連絡先電子メールアドレス。

名前	説明
[ロケーション (Location) ] フィールド	(任意) ロケーション。

**ステップ 7** [送信 (Submit) ] をクリックします。

## ネットワーク要素の追加

ロードバランシングをサポートする仮想サーバを作成するには、最初にネットワーク要素を Cisco UCS Director に追加しておく必要があります。ロードバランサを Cisco UCS Director のネットワーク要素として追加した後、[管理するネットワーク機器 (Managed Network Element) ] 画面にその要素が表示されます。

### はじめる前に

このタスクを完了するには、アプライアンスにログインする必要があります。

### 手順

**ステップ 1** [管理 (Administration) ] > [物理アカウント (Physical Accounts) ] を選択します。

**ステップ 2** [物理アカウント (Physical Accounts) ] ページで [管理型ネットワーク要素 (Managed Network Elements) ] をクリックします。

**ステップ 3** [ネットワーク機器の追加 (Add Network Element) ] をクリックします。

**ステップ 4** [ネットワーク要素の追加 (Add Network Element) ] 画面で、次のフィールドに入力します。

名前	説明
[ポッド (POD) ] ドロップダウンリスト	ネットワーク要素が属するポッドを選択します。
[デバイス カテゴリ (Device Category) ] ドロップダウンリスト	このネットワーク要素のデバイスカテゴリを選択します。たとえば [F5 ロードバランサ (F5 Load Balancer) ] を選択します。
[デバイス IP (Device IP) ] フィールド	このデバイスの IP アドレス。

名前	説明
[プロトコル (Protocol) ] ドロップダウン リスト	<p>使用されるプロトコルを選択します。リストには次の内容が含まれます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• [Telnet]</li> <li>• [SSH]</li> <li>• [HTTP]</li> <li>• [HTTPS]</li> </ul> <p>(注) F5 ロードバランサデバイスを使用する場合、HTTP および HTTPS のみを選択できます。</p>
[ポート (Port) ] フィールド	使用するポート番号。
[ログイン (Login) ] フィールド	ログイン名。
[パスワード (Password) ] フィールド	ログイン名に関連付けられるパスワード。

**ステップ 5** [送信 (Submit) ] をクリックします。

F5 ロードバランサの追加が、システムタスクのインベントリ収集のトリガーとなります。[システムのタスク (System Tasks) ] 画面で設定するポーリング間隔はインベントリ収集の頻度を指定します。

#### 次の作業

仮想サーバを変更または編集するには、サーバを選択して [変更 (Modify) ] をクリックします。仮想サーバを削除するには、サーバを選択して [削除 (Delete) ] をクリックします。

## DHCP ログイングのイネーブル化

### はじめる前に

このタスクを完了するには、アプライアンスにログインする必要があります。

### 手順

- 
- ステップ 1 [管理 (Administration) ] > [物理アカウント (Physical Accounts) ] を選択します。
  - ステップ 2 [物理アカウント (Physical Accounts) ] ページで、[ネットワーク サービス エージェント (Network Service Agents) ] を選択します。
  - ステップ 3 [組み込みネットワーク サービス (Embedded Network Services) ] をクリックします。
  - ステップ 4 [組み込みネットワーク サービス (Embedded Network Services) ] 画面で、[DHCP ログを有効にする (Enable DHCP Logging) ] をオンにします。
- 

## 接続のテスト

管理するネットワーク機器、仮想アカウント、および物理アカウントの接続をテストできます。

### 管理対象ネットワーク機器の接続テスト

#### 手順

- 
- ステップ 1 [管理 (Administration) ] > [物理アカウント (Physical Accounts) ] を選択します。
  - ステップ 2 [物理アカウント (Physical Accounts) ] ページで [管理型ネットワーク要素 (Managed Network Elements) ] をクリックします。
  - ステップ 3 接続をテストするポッドを含む行をクリックします。
  - ステップ 4 [テスト接続 (Test Connection) ] をクリックします。
- 

### 物理アカウントへの接続のテスト

ポッドをアカウントに追加した後は、いつでも接続をテストできます。

## 手順

- 
- ステップ 1** [管理 (Administration) ] > [物理アカウント (Physical Accounts) ] を選択します。
- ステップ 2** [物理アカウント (Physical Accounts) ] ページで [マルチドメイン マネージャ (Multi-Domain Managers) ] をクリックします。
- ステップ 3** [マルチドメイン マネージャ (Multi-Domain Managers) ] 画面で、接続のテスト対象となるアカウントの行をクリックします。
- ステップ 4** [テスト接続 (Test Connection) ] をクリックします。
- ステップ 5** 接続テストが完了したら、[閉じる (Close) ] をクリックします。
- 

## 次の作業

接続が失敗した場合は、ユーザ名やパスワードを含め、アカウントの構成を検証します。ユーザ名とパスワードが正しい場合は、ネットワーク接続に問題があるかどうかを確認します。

## デバイス検出の有効化

## 手順

- 
- ステップ 1** [管理 (Administration) ] > [物理アカウント (Physical Accounts) ] を選択します。
- ステップ 2** [物理アカウント (Physical Accounts) ] ページで [検出されたデバイス (Discovered Devices) ] をクリックします。
- ステップ 3** [設定の検出 (Setup Discovery) ] をクリックします。
- ステップ 4** [設定の検出 (Setup Discovery) ] 画面で、[検出を有効にする (Enable Discovery) ] をオンにします。
- ステップ 5** [設定の検出 (Setup Discovery) ] 画面で、[IP アドレス範囲 (IP address range) ] フィールドに値を入力し、ご使用の環境で次のフィールドのデフォルト値が適切かどうかを判断します。

名前	説明
[検出を有効にする (Enable Discovery) ] チェックボックス	このチェックボックスは、対象のアカウントに対するデバイス検出を有効にするためにデフォルトでオンになっています。
[IP範囲 (IP Range) ] フィールド	デバイス検出の IP アドレス範囲。(例: 10.1.1.1-10.1.1.12)
[TCPタイムアウト(ミリ秒単位) (TCP Timeout (ms)) ] フィールド	TCP のタイムアウト (ms) (デフォルト値は 2000 ms) 。

名前	説明
[SNMPタイムアウト(ミリ秒単位) (SNMP Timeout (ms)) ] フィールド	SNMPのタイムアウト (ms) (デフォルト値は1500 ms) 。
[SNMPコミュニティストリング (SNMP Community Strings) ] フィールド	SNMPコミュニティストリング (デフォルトは [パブリック (public) ]) 。

**ステップ 6** [送信 (Submit) ] をクリックします。

---





## 第 8 章

# 仮想インフラストラクチャの管理

この章は、次の項で構成されています。

- [VMware クラウドの管理について, 197 ページ](#)
- [クラウドの検出および接続の確認, 204 ページ](#)
- [vCenter プラグインの表示, 204 ページ](#)
- [Cisco UCS Director での仮想マシンのプロビジョニング, 205 ページ](#)

## VMware クラウドの管理について

Cisco UCS Director は、vCenter (ESX 3.5、ESX/ESXi 4.x および 5.x) で VMware をサポートします。Cisco UCS Director は自動的にすべての既存の仮想マシン (VM) と新しく追加したクラウドのアカウントのイメージを検出します。通常、検出プロセスには約 5 分かかります。VMware クラウドを追加することもできます。



(注) 「クラウド」という用語は 1 つの vCenter インストール環境を指します。

Cisco UCS Director では、複数のデータセンターとクラスタを使用してインベントリ収集および VM のプロビジョニングをサポートします。Vmware クラウドを作成すると、複数のデータセンターおよびクラスタを検出し、選択するオプションを選択できます。一度検出されたデータセンターとクラスタをクラウドに追加した場合、クラウドから編集してそれらを選択解除することはできません。ただし、クラウドを編集して予備のデータセンターとクラスタを追加することはできます。



(注) Cisco UCS Director では、同じ vCenter アカウントを使用するクラウドの作成をサポートしていません。重複したアカウントがある場合、VMware を作成できません。また、重複するアカウントがある場合、VM のプロビジョニングが失敗し、バーチャルアカウントのステータスでエラーが表示されます。[接続テスト (Test Connectivity)] 機能は失敗し、エラーメッセージが表示されます。このエラーは、異なるクラウドにおいて、同一サーバで同一クラスタの組み合わせを使用した場合に発生するものです。

この機能を無効にするには、手動で `cd /opt/infra/inframgr` ディレクトリにある `vmware.properties` ファイル内の `allowDuplicateClouds` フィールドを `[True]` に設定し、重複アカウントを許可する必要があります。デフォルトでは、`[False]` に設定されています。

以前のリリースからアップグレードすると、接続ステータス フィールドにすべての重複アカウントが表示されます。エラーメッセージが表示されますが、VM 上で、すべてのアクションが実行されます。

## VMware クラウドの作成

VMware クラウドの作成時に、次のいずれかの方法でデータセンターとクラスタを指定できます。

- クレデンシャル ポリシーに含まれます。
- [VMware データセンター (VMware Datacenter)] および [VMware クラスタ (VMware Cluster)] フィールド
- [Discover データセンター/クラスタ (Discover Datacenters / Clusters)] チェック ボックス



(注) クレデンシャル ポリシー内のデータセンターや VMware データセンターおよび VMware クラスタを選択できます。[クラウドの追加 (Add Cloud)] 画面やクレデンシャル ポリシー フォームでデータセンターを指定すると、エラーが発生します。

### 手順

- ステップ 1 [管理 (Administration)] > [バーチャル アカウント (Virtual Accounts)] を選択します。
- ステップ 2 [バーチャルアカウント (Virtual Accounts)] ページで [バーチャルアカウント (Virtual Accounts)] をクリックします。
- ステップ 3 [追加 (Add)] をクリックします。
- ステップ 4 [クラウドの追加 (Add Cloud)] 画面で、次の必須フィールドに入力します。

名前	説明
[クラウドタイプ (Cloud Type) ] ドロップダウンリスト	<p>使用可能なクラウドタイプが表示されます。 [VMware] を選択します。</p> <p>(注) 次のフィールドは、[VMware] を選択した場合に表示されます。他のクラウドタイプでは、そのクラウドタイプに固有のフィールドが表示されません。</p>
[クラウド名 (Cloud Name) ] フィールド	<p>クラウドの名前。この名前に一重引用符を含めることはできません。</p> <p>(注) Cisco UCS Director 内では各クラウドに固有の名前を付ける必要があります。クラウドの追加後は、すべてのレポートでこのクラウド名によって表されます。</p>
[サーバのアドレス (Server Address) ] フィールド	vCenter サーバのアドレス。
[クレデンシャルポリシーの使用 (Use Credential Policy) ] チェック ボックス	手動で情報を入力する代わりに、このアカウントのクレデンシャル ポリシーを使用する場合は、このチェック ボックスをオンにします。
[クレデンシャルポリシーの使用 (Use Credential Policy) ] ドロップダウンリスト	<p>[クレデンシャルポリシーの使用 (Use Credential Policy) ] をオンにした場合は、このドロップダウンリストから使用するクレデンシャル ポリシーを選択します。</p> <p>このフィールドが表示されるのは、クレデンシャル ポリシーの使用を選択した場合のみです。</p>
[サーバのユーザ ID (Server User ID) ] フィールド	vCenter サーバのユーザ名。
[サーバのパスワード (Server Password) ] フィールド	vCenter サーバのパスワード。
[サーバアクセスポート (Server Access Port) ] フィールド	サーバ ポート番号。
[サーバアクセス URL (Server Access URL) ] フィールド	サーバ アクセス URL。

名前	説明
[VMwareデータセンター (VMware Datacenter) ] フィールド	vCenter アカウントのデータセンター名。
[Discover データセンター/クラスタ (Discover Datacenters / Clusters) ] チェック ボックス	VMware データセンターと関連する VMware クラスタを検出して使用するには、このチェックボックスをオンにします。
[VMwareクラスタ (VMware Cluster) ] フィールド	vCenter アカウントの VMware クラスタの名前。 この名前を使用して、指定されているポッドのリソースを検出、監視、管理できます。vCenter アカウント全体が Cisco UCS Director によって管理される場合は、このフィールドを空白にします。
[データセンター/クラスタの選択 (Select Datacenters / Clusters) ] フィールド	使用したい関連データセンターとクラスタをチェックします。  (注) このフィールドは、[Discover データセンター/クラスタ (Discover Datacenters / Clusters) ] チェックボックスをオンにした場合のみ表示されます。
[SRM を有効化します (Enable SRM) ] チェック ボックス	アカウントの Site Recovery Manager (SRM) を有効にするには、このチェックボックスをオンにします。
[プライマリ SRM サーバアドレス (Primary SRM Server Address) ] フィールド	プライマリ SRM サーバの IP アドレス。  (注) このフィールドは、[SRM を有効化します (Enable SRM) ] チェックボックスをオンにした場合のみ表示されます。
[プライマリ SRM サーバのユーザ ID (Primary SRM Server User ID) ] フィールド	プライマリ SRM サーバのユーザ ID。  (注) このフィールドは、[SRM を有効化します (Enable SRM) ] チェックボックスをオンにした場合のみ表示されます。
[プライマリ SRM サーバのパスワード (Primary SRM Server Password) ] フィールド	プライマリ SRM サーバのユーザのパスワード。  (注) このフィールドは、[SRM を有効化します (Enable SRM) ] チェックボックスをオンにした場合のみ表示されます。

名前	説明
[プライマリ SRM サーバアクセスポート (Primary SRM Server Access Port) ] フィールド	<p>プライマリ SRM サーバのポート番号。SRM バージョン 6.0 の場合は、ポート番号として「9086」と入力します。</p> <p>(注) このフィールドは、[SRMを有効化します (Enable SRM) ]チェック ボックスをオンにした場合のみ表示されます。</p>
[リモート SRM サーバユーザ ID (Remote SRM Server User ID) ] フィールド	<p>リモート SRM サーバのユーザ ID。</p> <p>(注) このフィールドは、[SRMを有効化します (Enable SRM) ]チェック ボックスをオンにした場合のみ表示されます。</p>
[リモート SRM サーバパスワード (Remote SRM Server Password) ] フィールド	<p>リモート SRM サーバのユーザ ID のパスワード。</p> <p>(注) このフィールドは、[SRMを有効化します (Enable SRM) ]チェック ボックスをオンにした場合のみ表示されます。</p>
[SSO の使用 (Use SSO) ] チェック ボックス	<p>シングルサインオン (SSO) による認証を行うには、このチェック ボックスをオンにします。</p> <p>SSO オプションは、仮想 SAN (VSAN) にものみ使用可能です。SSO のクレデンシャルは、仮想 SAN クラスタのストレージプロファイルを使用した VM のプロビジョニングが必要です。</p>
[SSO サーバのアドレス (SSO Server Address) ] フィールド	<p>シングル サインオン サーバの IP アドレス。</p> <p>(注) このフィールドは、[SSOの使用 (Use SSO) ]チェック ボックスをオンにした場合のみ表示されます。</p>
[SSO サーバのユーザ ID (SSO Server User ID) ] フィールド	<p>SSO サーバのユーザ ID。</p> <p>(注) このフィールドは、[SSOの使用 (Use SSO) ]チェック ボックスをオンにした場合のみ表示されます。</p>
[SSO サーバのパスワード (SSO Server Password) ] フィールド	<p>SSO サーバのユーザ ID のパスワード。</p> <p>(注) このフィールドは、[SSOの使用 (Use SSO) ]チェック ボックスをオンにした場合のみ表示されます。</p>

名前	説明
[SSO サーバのアクセスURL (SSO Server Access URL) ] フィールド	SSO サーバ アクセス用の URL。 (注) このフィールドは、[SSOの使用 (Use SSO) ]チェックボックスをオンにした場合のみ表示されます。
[SSO サーバのアクセスポート (SSO Server Access Port) ] フィールド	ポート番号。vCenter バージョン 5.x の場合は、ポート番号として「7444」と入力します。 (注) このフィールドは、[SSOの使用 (Use SSO) ]チェックボックスをオンにした場合のみ表示されます。
[サーバアクセス URL (Server Access URL) ] フィールド	サーバ アクセス用の URL。
[説明 (Description) ] フィールド	クラウドの説明。
[連絡先の電子メール (Contact Email) ] フィールド	クラウドの連絡先の電子メールアドレス。
[ロケーション (Location) ] フィールド	ロケーション。
[POD] ドロップダウン リスト	コンバージド インフラストラクチャ ポッドを選択します。 ポッドの名前を選択すると、VMware クラウドのアカウントが、コンバージドインフラストラクチャ スタックにて使用可能となります。 (注) 仮想 SAN ポッドには、複数の仮想アカウントを追加することはできません。
[サービス プロバイダー (Service Provider) ] フィールド	サービス プロバイダーの名前。

ステップ 5 [追加 (Add) ] をクリックします。

## PowerShell エージェント インストーラのダウンロード

PowerShell エージェントは Windows Server 2008 R2 または Windows Server 2012 64 ビット仮想マシンにインストールされます。

## 手順

- 
- ステップ 1** [管理 (Administration) ]>[バーチャル アカウント (Virtual Accounts) ] を選択します。
- ステップ 2** [バーチャル アカウント (Virtual Accounts) ] ページで [PowerShell エージェント (PowerShell Agents) ] をクリックします。
- ステップ 3** [インストーラのダウンロード (Download Installer) ] をクリックします。
- ステップ 4** [エージェントインストーラのダウンロード (Download Agent Installer) ] 画面で、表示されているインストール要件をシステムが満たしているかどうかを確認します。
- ステップ 5** 要件を満たしている場合は [送信 (Submit) ] をクリックします。  
[PSASetup. Exe を開く (Opening PSASetup. exe) ] ダイアログ ボックスに、実行可能ファイルを保存するよう伝えるメッセージが表示されます。
- ステップ 6** [ファイルの保存 (Save File) ] をクリックします。  
ファイルはシステムのダウンロード ロケーションに保存されます。
- ステップ 7** [PSASetup. exe ファイル (PSASetup. exe file) ] を Windows Server 2008 R2 または Windows Server 2012 64 ビット仮想マシン (VM) にインストールします。
- 

## PowerShell エージェントの作成

## 手順

- 
- ステップ 1** [管理 (Administration) ]>[バーチャル アカウント (Virtual Accounts) ] を選択します。
- ステップ 2** [バーチャル アカウント (Virtual Accounts) ] ページで [PowerShell エージェント (PowerShell Agents) ] をクリックします。
- ステップ 3** [追加 (Add) ] をクリックします。
- ステップ 4** [エージェントの追加 (Add Agent) ] 画面で、次を含む必須フィールドに値を入力します。

名前	説明
[エージェント名 (Agent Name) ] フィールド	エージェントの名前。
[エージェントアドレス (Agent Address) ] フィールド	エージェントのアドレス。
[エージェントのアクセスポート (Agent Access Port) ] フィールド	エージェントのアクセス ポート番号。
[アクセスキー (Access Key) ] フィールド	アクセス キー。
[説明 (Description) ] フィールド	エージェントの説明。

ステップ5 [送信 (Submit)] をクリックします。

---

## クラウドの検出および接続の確認

### 接続のテスト

#### 手順

---

- ステップ1 [管理 (Administration)] > [バーチャルアカウント (Virtual Accounts)] を選択します。
  - ステップ2 [バーチャルアカウント (Virtual Accounts)] ページで [バーチャルアカウント (Virtual Accounts)] をクリックします。
  - ステップ3 テストする VMware アカウントを選択します。
  - ステップ4 [接続のテスト (Test Connectivity)] をクリックします。  
接続テストの結果を表示する経過表示バーはありません。クラウドアカウントが追加され、データが収集されていることを確認するには、[サマリ (Summary)] タブを使用します。
  - ステップ5 [仮想 (Virtual)] > [コンピューティング (Compute)] を選択します。
  - ステップ6 [サマリー (Summary)] をクリックします。  
自動検出とデータの入力が完了するまでに数分かかる場合があります。
  - ステップ7 クラウド名を選択すると、そのステータスの詳細が表示されます。
- 

## vCenter プラグインの表示

#### 手順

---

- ステップ1 [管理 (Administration)] > [バーチャルアカウント (Virtual Accounts)] を選択します。
  - ステップ2 [バーチャルアカウント (Virtual Accounts)] ページで [プラグイン (Plugins)] をクリックします。
-

# Cisco UCS Director での仮想マシンのプロビジョニング

Cisco UCS Director での仮想マシンのプロビジョニングは複数の手順を踏んで行われます。このプロセスには、仮想アカウントの作成や、ポリシー、カタログ、サービスリクエストの作成などのステップが必要になります。管理者は、このタスクを開始する前に次の事項を決定しておく必要があります。

- VM を導入するクラスタ
- VM のプロビジョニングで使用するクラスタ内のデータストア
- VM を導入するクラスタ内の使用可能なネットワーク



## 注目

この情報がない中で、無効なデータストアを選択したり、クラスタに誤ったネットワークを選択すると、Cisco UCS Director での VM のプロビジョニングが失敗します。

Cisco UCS Director での VM のプロビジョニングのプロセスの概要は次のとおりです。

### 1 ユーザ グループを作成します。

詳細については、[ユーザ グループの作成](#)、(69 ページ) を参照してください。

### 2 仮想アカウントを作成します。

VM は、Cisco UCS Director の仮想アカウント内にプロビジョニングされます。詳細については、[VMware クラウドの作成](#)、(198 ページ) を参照してください。

### 3 VMware システム ポリシーを作成します。

このポリシーで、VM のシステム固有の情報を定義します。使用する VM の命名テンプレート、設定する OS、VM をプロビジョニングするドメインを指定する必要があります。詳細については、[システム ポリシーの設定](#)、(248 ページ) を参照してください。

### 4 VMware コンピューティング ポリシーを作成します。

コンピューティングポリシーでは、グループまたはワークロードの要件を満たすために、プロビジョニング時に使用されるコンピューティングリソースを決定します。このポリシーで指定するクラスタによって、後続のポリシーでの選択内容が決まります。詳細については、[コンピューティング ポリシーの作成](#)、(210 ページ) を参照してください。

### 5 ストレージポリシーを作成します。

ストレージポリシーは、データストアの範囲、使用するストレージの種類、容量、遅延などの最小条件といったリソースを定義します。詳細については、[ストレージポリシーの追加と設定](#)、(226 ページ) を参照してください。

### 6 ネットワーク ポリシーを作成します。

ネットワークポリシーでは、ネットワーク設定、DHCP、スタティック IP などのリソースに加え、VM のプロビジョニングに複数の vNIC を追加するためのオプションを定義します。詳

細については、[ネットワークプロビジョニングポリシーの設定](#)、(245 ページ) を参照してください。

#### 7 仮想データセンターを作成します。

仮想データセンター (VDC) は、仮想リソース、動作の詳細、ルール、およびポリシーを組み合わせた環境です。VDC を作成するときに、VM のプロビジョニング用に作成したユーザグループを選択し、ポリシーを作成するときに指定したクラウドを選択します。選択したクラウドアカウントに基づいて、後続のポリシー関連のすべてのフィールドにデータが入力されます。詳細については、[仮想データセンターの追加](#)、(264 ページ) を参照してください。

#### 8 テンプレートを選択するためのカタログを作成します。

事前定義されたカタログ項目を使用して仮想マシン (VM) のセルフプロビジョニングができます。「カタログ」では、VM をバインドするクラウドの名前およびグループの名前などのパラメータを定義します。詳細については、[カタログの公開](#)、(331 ページ) を参照してください。

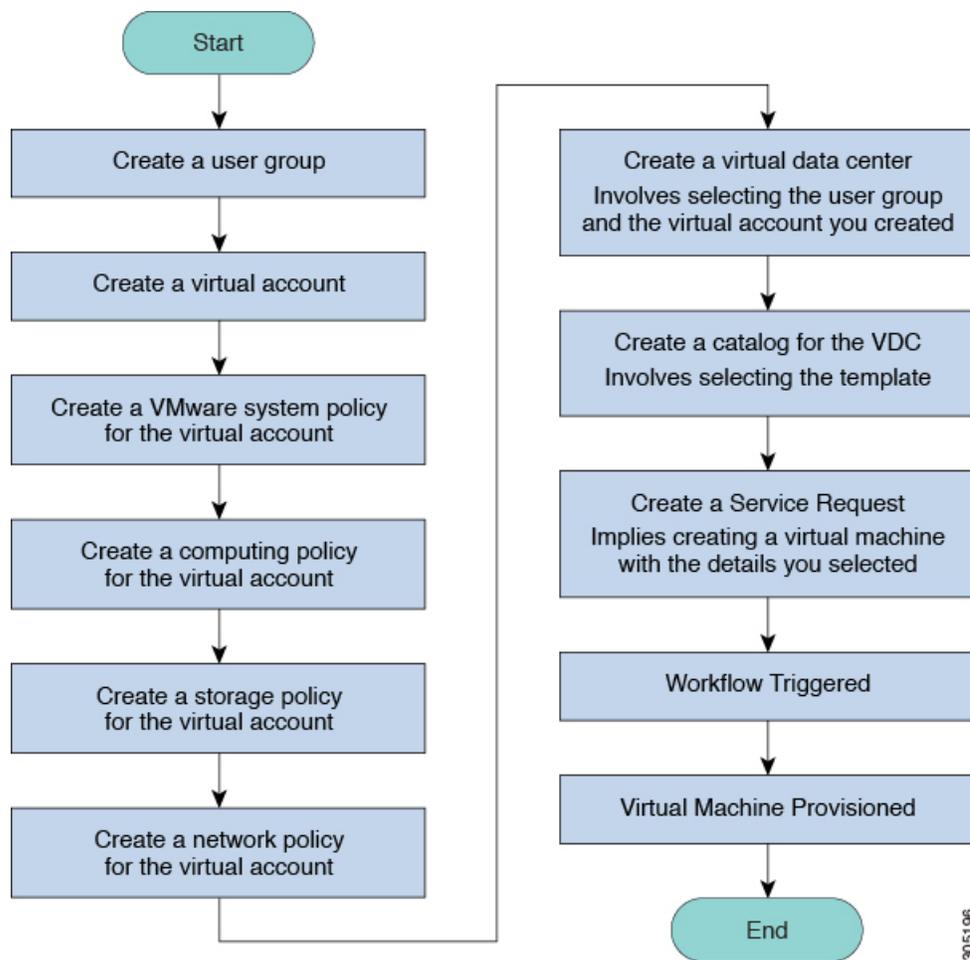
#### 9 サービス リクエストを作成して送信します。

セルフサービス プロビジョニング機能を使用してサービス リクエストを作成し、仮想マシン (VM) 、サービス、またはアプリケーションをプロビジョニングできます。サービス リクエスト プロセスにより、VM 作成のプロビジョニング ワークフローが生成されます。詳細については、[標準カタログタイプを使用したサービス リクエストの作成](#)、(350 ページ) を参照してください。

サービス リクエストを送信すると、ワークフローがトリガーされて、VM がプロビジョニングされます。

次の図に、Cisco UCS Director で VM をプロビジョニングするときのワークフローを示します。

図 3 : Cisco UCS Director での仮想マシンのプロビジョニングのワークフロー



305196





## 第 9 章

# ポリシーの管理

---

この章は、次の項で構成されています。

- [ポリシー](#), 209 ページ
- [コンピューティング ポリシー](#), 210 ページ
- [ベア メタル サーバのプロビジョニング ポリシーの設定](#), 214 ページ
- [データ コレクション ポリシー](#), 221 ページ
- [グループの共有ポリシーについて](#), 224 ページ
- [ストレージ ポリシー](#), 225 ページ
- [クレデンシャル ポリシー](#), 235 ページ
- [ネットワーク ポリシー](#), 237 ページ
- [システム ポリシー](#), 248 ページ
- [エンドユーザセルフサービス ポリシー](#), 256 ページ
- [VM 管理ポリシーの設定](#), 258 ページ

## ポリシー

Cisco UCS Director は、仮想マシン (VM) やベア メタル サーバなどのリソースを、管理者の設定による事前定義されたポリシーを使用して割り当てられたリソースのプールからプロビジョニングする エンドユーザ ポータル を提供します。

ポリシーとは、仮想マシンまたはベア メタル サーバのいずれであるかにかかわらず、新しいリソースが利用可能なシステム リソースに基づいてインフラストラクチャ内でプロビジョニングされる場所と仕組みを決定する一連のルールのことです。

Cisco UCS Director では、リソースをプロビジョニングするために次のポリシーをセットアップする必要があります。

- コンピューティング
- ストレージ
- ネットワーク
- システム
- ベア メタル



**重要** VMをプロビジョニングするためのポリシーを設定する前に、クラウドのアカウントを作成します。

## コンピューティングポリシー

コンピューティングポリシーでは、グループまたはワークロードの要件を満たすために、プロビジョニング時に使用されるコンピューティングリソースを決定します。

管理者として、コンピューティングポリシーのさまざまな条件を組み合わせることで高度なポリシーを定義できます。



(注) コンピューティングポリシーのすべてのフィールドについて十分に理解することをお勧めします。条件の組み合わせによってはセルフサービスプロビジョニング中に使用できるホストマシンが存在しない場合があります。

## コンピューティングポリシーの作成

### 手順

- ステップ 1** [ポリシー (Policies)] > [仮想/ハイパーバイザポリシー (Virtual/Hypervisor Policies)] > [コンピューティング (Computing)] を選択します。
- ステップ 2** [コンピューティング (Computing)] ページで [VMware コンピューティングポリシー (VMware Computing Policy)] をクリックします。
- ステップ 3** [追加 (Add)] をクリックします。
- ステップ 4** [コンピューティングポリシーの追加 (Add Computing Policy)] 画面で、次のフィールドに値を入力します。

名前	説明
[ポリシー名 (Policy Name) ] フィールド	ポリシーの名前。 (注) この名前は、カタログの定義時に使用されます。
[ポリシーの説明 (Policy Description) ] フィールド	ポリシーの説明。
[クラウド名 (CloudName) ] ドロップダウンリスト	リソース割り当てを行うクラウドを選択します。
[ホストノードまたはクラスタスコープ (Host Node/Cluster Scope) ] ドロップダウンリスト	導入の適用範囲を選択します。 (注) すべてのオプションを使用するか、選択したオプションを含めるか、または選択したオプションを除外するかを指定して、導入の範囲を絞り込むことができます。選択した内容に基づいて、必要なホストまたはクラスタを選択できる新しいフィールドが表示されます。
[リソースプール (Resource Pool) ] ドロップダウンリスト	リソース プールを選択します。
[ESXタイプ (ESX Type) ] ドロップダウンリスト	ESX のインストールタイプ ([ESX]、[ESXi]、または[両方 (both) ]) を選択します。
[ESXバージョン (ESX Version) ] ドロップダウンリスト	ESX のバージョンを選択します。
[フィルタ条件 (Filter Conditions) ] チェックボックス	一致しなければならない1つ以上の条件をオンにします。これらの条件を満たしていないホストは検討から除外されます。複数の条件を選択した場合は、選択した条件すべてを満たしている必要があります。
展開オプション	
[テンプレートのオーバーライド (Override Template) ] チェック ボックス	テンプレートのプロパティをオーバーライドする場合にオンにします。CPUとメモリのカスタム設定を入力できるオプションも用意されています。

名前	説明
[vCPU数 (Number of vCPUs) ] フィールド	<p>vCPU のカスタム数。VM に対して指定する vCPU の数は、選択されているホストノードまたはクラスタのスコープの総コア数を超えてはいけません。</p> <p>(注) このオプションは、[テンプレートのオーバーライド (Override Template) ] をオンにした場合に表示されます。</p>
[CPU予約(MHz) (CPU Reservation (MHz)) ] フィールド	<p>VM用に予約するCPU。予約は、指定したvCPUの数によって異なります。</p> <p>(注) このオプションは、[テンプレートのオーバーライド (Override Template) ] をオンにした場合に表示されます。</p>
[CPUの制限(MHz) (CPU Limit (MHz)) ] フィールド	<p>VMに対するCPU制限。CPUの制限は、選択されたホストノードまたはクラスタのスコープに基づいています。</p>
[CPU共有 (CPU Shares) ] ドロップダウンリスト	<p>CPU共有 ([低 (low) ]、[ノーマル (normal) ]、または [高 (high) ]) を選択します。CPU共有により、VM間で競合が発生した場合に、どのVMがCPUリソースを取得するかが決定します。</p> <p>(注) このオプションは、[テンプレートのオーバーライド (Override Template) ] をオンにした場合に表示されます。</p>
[メモリ (Memory) ] フィールド	<p>VMのカスタムメモリ。</p> <p>(注) このオプションは、[テンプレートのオーバーライド (Override Template) ] をオンにした場合に表示されます。</p>
[メモリ予約(MB) (Memory Reservation (MB)) ] フィールド	<p>VMのメモリ予約。予約は、指定したメモリによって異なります。</p> <p>(注) このオプションは、[テンプレートのオーバーライド (Override Template) ] をオンにした場合に表示されます。</p>

名前	説明
[メモリ制限(MB) (Memory Limit(MB)) ]フィールド	<p>VM に対するメモリ制限。メモリの制限は、選択されたホストノードまたはクラスタのスコープに基づいています。</p> <p>(注) このオプションは、[テンプレートのオーバーライド (Override Template) ]をオンにした場合に表示されます。</p>
[メモリ共有 (Memory Shares) ]ドロップダウンリスト	<p>メモリ共有 ([低 (low) ]、[ノーマル (normal) ]、または[高 (high) ]) を選択します。メモリ共有により、VM 間で競合が発生した場合に、どのVM がメモリリソースを取得するかが決定します。</p> <p>(注) このオプションは、[テンプレートのオーバーライド (Override Template) ]をオンにした場合に表示されます。</p>
サイズ変更オプション	
[VM のサイズ変更を許可 (Allow Resizing of VM) ]チェック ボックス	<p>プロビジョニング前のVM サイズの変更や、既存のVM サイズの変更を許可する場合にオンにします。</p>
[vCPU の許容値 (Permitted Values for vCPUs) ]フィールド	<p>VM のプロビジョニング中、または既存のVM のサイズの変更中に使用するvCPU の範囲。選択したクラウド (vCenter) が5以上であり、かつVM バージョン8を使用している場合のみ、VM のプロビジョニングまたはサイズ変更時に8を超える範囲が表示されます。このボックスで指定された値だけが表示されます。</p> <p>(注) このオプションは、[VM のサイズ変更を許可 (Allow Resizing of VM) ]をオンにした場合に表示されます。</p>
[ソケットあたりのコア数の許容値 (Permitted Values for cores per socket) ]	<p>ソケットあたりに許可されているコアの数。ソケットあたりのコアの数は、サービスリクエストの作成時、VM の導入時、VM のクローニング時、またはVM のプロビジョニング時にオーケストレーションワークフローを使用して設定できます。このフィールドが空の場合、VM のプロビジョニングやその他のアクション時にソケットあたりのコアの数を指定するオプションが使用できません。</p>

名前	説明
[メモリの許容値 (MB 単位) (Permitted Values for Memory in MB) ] フィールド	VM のプロビジョニング中、または既存の VM のサイズの変更中に使用するメモリの範囲。 例：512、768、1024、1536、2048、3072、4096 など。このボックスで指定された値だけが表示されます。  (注) このオプションは、[VM のサイズ変更を許可 (Allow Resizing of VM) ] をオンにした場合に表示されます。

ステップ 5 [送信 (Submit) ] をクリックします。

## ベアメタルサーバのプロビジョニングポリシーの設定

### はじめる前に

- ベアメタルエージェント (BMA) アカウントは、ベアメタル OS イメージを使用して追加および設定する必要があります。
- Cisco UCS Manager アカウントを追加する必要があります。
- Cisco UCS Central アカウントを追加する必要があります。
- ベアメタルサーバに関連する特定のコストが必要な場合は、このポリシーを作成する前に、ベアメタルサーバのコストモデルを作成する必要があります。

### 手順

ステップ 1 [ポリシー (Policies) ] > [物理インフラストラクチャポリシー (Physical Infrastructure Policies) ] > [ベアメタルサーバ (Bare Metal Servers) ] を選択します。

ステップ 2 [ベアメタルサーバ (Bare Metal Servers) ] ページで [ベアメタルサーバのプロビジョニングポリシー (Bare Metal Server Provisioning Policy) ] をクリックします。

ステップ 3 [追加 (Add) ] をクリックします。

ステップ 4 [ベアメタルサーバプロビジョニングポリシーの追加 (Add Bare Metal Server Provisioning Policy) ] 画面で、次を含む必須フィールドに値を入力します。

名前	説明
[ポリシー名 (Policy Name) ] フィールド	ポリシーの一意の名前を入力します。

名前	説明
[ポリシーの説明 (Policy Description) ] フィールド	ポリシーの説明を入力します。
[アカウントタイプ (Account Type) ] ドロップダウンリスト	<p>ドロップダウンリストからアカウントタイプを選択します。次のいずれかを設定できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• UCS セントラル (UCS Central)</li> <li>• UCS マネージャ</li> </ul>
[UCS セントラル アカウント名 (UCS Central Account Name) ] ドロップダウンリスト	<p>Cisco UCS Central のアカウント名を選択します。</p> <p>(注) このフィールドは、[アカウントタイプ (Account Type) ] ドロップダウンリストから [UCS セントラル (UCS Central) ] を選択した場合にのみ表示されます。</p>
[アカウント名 (Account Name) ] ドロップダウンリスト	ドロップダウンリストからアカウント名を選択します。
[サーバの選択範囲 (Server Selection Scope) ] ドロップダウンリスト	<p>ポリシーの範囲を選択します。次のいずれかを設定できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• [サーバを含める (Include Servers) ]</li> <li>• [サーバプールを含める (Include Server Pools) ]</li> </ul>
[ドメイングループ (Domain Group(s) ) リスト	<p>リストを展開し、このポリシーに含める UCS ドメイングループをオンにします。ドメイングループをオンにした後に、[検証 (Validate) ] をクリックします。</p> <p>(注) このフィールドは、[アカウントタイプ (Account Type) ] ドロップダウンリストから [UCS セントラル (UCS Central) ] を選択した場合にのみ表示されます。</p>

名前	説明
[グループ化されていないドメインを含める (Include Ungrouped Domains) ] チェック ボックス	[ドメイン名 (Domain Name(s)) ]リストにグループ化されていないドメインと、選択したドメイングループに含まれているドメイン名を読み込む場合に、このチェックボックスをオンにします。  (注) このフィールドは、[アカウントタイプ (Account Type) ]ドロップダウンリストで[UCS セントラル (UCS Central) ]を選択し、[ドメイングループ (Domain Group(s)) ]リストからドメイングループを選択している場合にのみ表示されます。
[ドメイン名 (Domain Name(s)) ]リスト	このリストを展開し、このポリシーに含める UCS ドメイン名をオンにします。ドメイン名をオンにした後、[検証 (Validate) ]をクリックします。  (注) このフィールドは、[アカウントタイプ (Account Type) ]ドロップダウンリストから[UCS セントラル (UCS Central) ]を選択した場合にのみ表示されます。
[サーバ (Servers) ]フィールド	このポリシーのサーバをオンにします。  このフィールドは、[サーバの選択範囲 (Server Selection Scope) ]ドロップダウンリストから[サーバを含める (Include Servers) ]を選択した場合にのみ表示されます。
[サーバプール (Server Pools) ]フィールド	このポリシーのサーバプールをオンにします。  このフィールドは、[サーバの選択範囲 (Server Selection Scope) ]ドロップダウンリストから[サーバプールを含める (Include Server Pools) ]を選択した場合にのみ表示されます。
[サービスプロファイルのテンプレート (Service Profile Template) ]ドロップダウンリスト	サービスプロファイルテンプレートを選択します。
[SAN ブートに使用する (Use for SAN Boot) ] チェック ボックス	少なくとも 1 つの FCoE 対応インターフェイスカードを含むサーバを含める場合にオンにします。

名前	説明
[CPU の最小数 (minimum Number of CPUs) ] フィールド	サーバに含める必要がある CPU の最小数を指定します。
[最小メモリ容量(MB) (Minimum Amount of Memory (MB)) ] フィールド	サーバ上で使用可能な最小メモリ量を指定します。
[有効なコアの最小数 (Minimum Number of Cores Enabled) ] フィールド	サーバで有効になっている必要があるコアの数を指定します。
[ユーザがサーバを選択できる (Allow User to Choose Servers) ] チェック ボックス	ベアメタルサーバをプロビジョニングするためにこのポリシーを使用している間はユーザがサーバを選択できるようにする場合にオンにします。このチェックボックスをオンにしなかった場合、ベアメタルサーバはこのポリシーで指定するパラメータに基づいてプロビジョニングされます。
[サーバリソースをユーザに表示 (Show Server Resources to User) ] チェック ボックス	ベアメタルサーバのプロビジョニング時にシステムリソースを表示する場合にオンにします。次のいずれかのリソースを選択できます。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• [CPU]</li> <li>• [メモリ (Memory) ]</li> <li>• [ストレージ(Storage)]</li> </ul>
[ターゲット BMA (Target BMA) ] ドロップダウン リスト	PXE 設定用のベアメタルエージェントを選択します。
[Windows イメージを使用 (Use Windows Images) ]	選択できる Windows イメージのリストを表示する場合に、このチェックボックスをオンにします。

名前	説明
OS イメージの選択 (OS Image Selection)	<p>OS イメージのチェック ボックスをオンにします。[Windows イメージを使用 (Use Windows Images)] をオンにした場合、Windows イメージのリストが表示されます。[Windows イメージを使用 (Use Windows Images)] をオンにできなかった場合、Windows と CentOS のイメージのリストが表示されます。</p> <p>ベアメタルサーバをプロビジョニングするためのサービス リクエストを作成しているときに、Windows イメージを選択するように求められます。</p>
[ネットワーク ブート マネージャー (Network Boot Manager)] ドロップダウン リスト	<p>ドロップダウン リストからブート マネージャを選択します。次のいずれかを設定できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• [PXE]</li> <li>• [iPXE-BIOS]</li> <li>• [iPXE-EUFI]</li> </ul>
[IP 設定タイプ (IP Configuration Type)] ドロップダウン リスト	<p>ドロップダウン リストから IP 設定のタイプを選択します。次のいずれかを設定できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• [DHCP]</li> <li>• [静的(Static)]</li> </ul>

名前	説明
[ドメインマッピング (Domain Mapping) ] リスト	<p>このリストを展開して、特定のBMAまたはOSイメージにドメインをマッピングします。</p> <p>[+] をクリックしてドメインマッピングを追加します。次のフィールドに情報を指定する必要があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• [ドメイン名 (Domain Name) ] : マッピングするドメインの名前をオンにします。</li> <li>• [ターゲットBMA (Target BMA) ] : ドロップダウンリストからターゲットBMAを選択します。</li> <li>• [OS イメージ (OS Image) ] : OS イメージをオンにします。</li> </ul> <p>(注) このフィールドは、[アカウントタイプ (Account Type) ] ドロップダウンリストから [UCS セントラル (UCS Central) ] を選択した場合にのみ表示されます。</p>
ネットワーク管理	
[静的 IP プールのポリシーを使用 (Use Static IP Pool Policy) ] チェック ボックス	<p>ベアメタルサーバのプロビジョニング用の静的 IP プールのポリシーを選択する場合にオンにします。</p> <p>このチェックボックスをオンにした場合、静的 IP 範囲に指定された IP 範囲から IP アドレスがベアメタルサーバに自動的に割り当てられます。</p>
[サーバの IP アドレス (Server IP Address) ] フィールド	IP アドレスの範囲を指定します。
[サーバのネットマスク (Server Netmask) ] フィールド	サーバのネットマスクを指定します。
[サーバのゲートウェイ (Server Gateway) ] フィールド	サーバのゲートウェイ IP アドレスを指定します。
[ネームサーバ (Name Server) ] フィールド	ネームサーバの IP アドレスを指定します。

名前	説明
[管理VLAN (Management VLAN) ] フィールド	管理 VLAN を指定します。デフォルトでは、0 に設定されます。
システム パラメータ	
[サーバ ホスト名 (Server Host Name) ] フィールド	サーバのホスト名を指定します。
[ホスト名の検証ポリシー (Host Name Validation Policy) ] ドロップダウン リスト	ドロップダウンリストからポリシーを選択します。 サーバのホスト名は、このフィールドで選択したポリシーと照合して検証された後にベアメタルサーバに適用されます。
[パスワード (Password) ] フィールド	サーバのホスト名のパスワードを指定します。
[パスワードの確認 (Confirm Password) ] フィールド	サーバのホスト名のパスワードを確認します。
[タイムゾーン (Timezone) ] ドロップダウン リスト	サーバのタイムゾーンを設定します。
[コスト モデル (Cost Model) ] ドロップダウン リスト	サーバのコスト モデルを選択します。

**ステップ 5** [送信 (Submit) ] をクリックします。

#### 次の作業

ポリシーを検証することができます。

## ベアメタルサーバのプロビジョニングポリシーの検証

ベアメタルサーバのプロビジョニングポリシーに指定されたパラメータが正確であることを確認するには、この検証プロセスをポリシーで実行します。

#### はじめる前に

ベアメタルサーバのプロビジョニングポリシーを作成する必要があります。

## 手順

- 
- ステップ 1** [ポリシー (Policies)] > [物理インフラストラクチャ ポリシー (Physical Infrastructure Policies)] > [ベア メタル サーバ (Bare Metal Servers)] を選択します。
- ステップ 2** [ベア メタル サーバ (Bare Metal Servers)] ページで [ベア メタル サーバのプロビジョニング ポリシー (Bare Metal Server Provisioning Policy)] をクリックします。
- ステップ 3** ポリシーのリストからポリシーを選択します。
- ステップ 4** [その他のアクション (More Actions)] ドロップダウン リストから [検証 (Validate)] を選択します。  
検証プロセスが開始され、[ベア メタル サーバのプロビジョニング ポリシー (Bare Metal Server Provisioning Policy)] 画面の [ステータス (Status)] 列に結果が表示されます。
- 

## データ コレクション ポリシー

データ コレクション ポリシーを作成して、各 VMware アカウントが vCenter から取得できるパラメータを制御できます。データ コレクション ポリシーで指定される各パラメータは収集され、Cisco UCS Director の特定のトレンド レポートで使用されます。



- (注) VMware は、サポートされている唯一の仮想アカウント タイプです。VMware アカウントが追加されると、最初にデフォルトで [デフォルトのデータ コレクション ポリシー (default-data-collection-policy)] に関連付けられます。
- 

## 仮想アカウントのデータ コレクション ポリシーの設定

## 手順

- 
- ステップ 1** [ポリシー (Policies)] > [仮想/ハイパーバイザ ポリシー (Virtual/Hypervisor Policies)] > [サービスの提供 (Service Delivery)] を選択します。
- ステップ 2** [サービスの提供 (Service Delivery)] ページで [データ収集ポリシー (Data Collection Policy)] をクリックします。
- ステップ 3** [追加 (Add)] をクリックします。
- ステップ 4** [追加 (Add)] 画面で、次のフィールドに値を入力します。

名前	説明
[名前 (Name) ] フィールド	データ コレクション ポリシーの名前。 (注) この名前は、カタログの定義時に使用されます。
[説明 (Description) ] フィールド	ポリシーの説明。
[アカウント タイプ (Account Type) ] ドロップ ダウン リスト	VMware 仮想アカウントを選択します。

名前	説明
[リソース (Resource) ] ウィンドウ	<p>vCenter パラメータを含むデータ収集グループを選択します。たとえば、CPU などです。</p> <p>データ収集グループを編集するには、鉛筆アイコンをクリックします。データ収集を有効または無効にするには、[リソース エントリの編集 (Edit Resource Entry) ] 画面で、[コレクションを有効にする (Enable Collection) ] をオンまたはオフにします。</p> <p>Cisco UCS DirectorGUI のデータストア固有のパフォーマンス データを表示するには、次のリソースを選択してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• データストアのスループットはキロバイト/秒です。</li> <li>• データストアの数の平均読み取り</li> <li>• データストアの数の平均書き込み</li> <li>• ディスク合計遅延はミリ秒です。</li> </ul> <p>ディスク遅延のレポートでは、上記に付け加えて、vCenter サーバのパフォーマンス データ統計コレクションレベルを 3 に設定します。</p> <p>スループット レポートでは、上記に付け加えて、vCenter サーバのパフォーマンス データ統計コレクションレベルを 4 に設定します。</p> <p><b>重要</b> vCenter サーバで統計コレクションをレベル 2 以上に増加させると、vCenter サーバと Cisco UCS Director のパフォーマンスに影響します。</p> <p>詳細については、<a href="https://kb.vmware.com/selfservice/microsites/search.do?language=en_US&amp;cmd=displayKC&amp;externalId=2003885">https://kb.vmware.com/selfservice/microsites/search.do?language=en_US&amp;cmd=displayKC&amp;externalId=2003885</a> を参照してください。</p>

ステップ 5 [送信 (Submit) ] をクリックします。

## 仮想アカウントのデータ コレクション ポリシーの関連付け

### 手順

- 
- ステップ 1 [ポリシー (Policies) ]>[仮想/ハイパーバイザ ポリシー (Virtual/Hypervisor Policies) ]>[サービスの提供 (Service Delivery) ]を選択します。
  - ステップ 2 [サービスの提供 (Service Delivery) ] ページで [データ収集ポリシーの関連付け (Data Collection Policy Association) ] をクリックします。
  - ステップ 3 [データコレクションポリシーの関連付け (Data Collection Policy Association) ] タブを選択します。
  - ステップ 4 データ コレクション ポリシーを関連付ける仮想 (VMware) アカウントを含む行をクリックし、[編集 (Edit) ] をクリックします。
  - ステップ 5 [編集 (Edit) ] ダイアログボックスで、[ポリシー (Policy) ] ドロップダウンリストから設定したデータ コレクション ポリシーを選択します。
  - ステップ 6 [送信 (Submit) ] をクリックします。  
VMware アカウントにデータ コレクション ポリシーが関連付けられました。
- 

## グループの共有ポリシーについて

グループの共有ポリシーは、リソースのユーザと、ユーザが他のユーザと共有可能なものを、より詳細に制御できるようにします。このポリシーでは、ユーザは現在自分だけに割り当てられているリソースを表示し、またユーザが属するすべてのグループに割り当てられているリソースを表示できます。

グループを作成する場合は、グループの共有ポリシーを定義して、どのグループが読み取り/書き込み権限を持つかを決定できます。以降、ユーザがこのグループに追加されると、リソースに対するそのユーザのアクセス権は、グループの共有ポリシーによって決定されます。

## グループ共有ポリシーの作成

### 手順

- 
- ステップ 1 [管理 (Administration) ]>[ユーザとグループ (Users and Groups) ] を選択します。
  - ステップ 2 [ユーザとグループ (Users and Groups) ] ページで [グループ共有ポリシー (Group Share Policy) ] をクリックします。
  - ステップ 3 [追加 (Add) ] をクリックします。
  - ステップ 4 [グループ共有ポリシーの追加 (Add Group Share Policy) ] 画面で、次のフィールドに入力します。

名前	説明
[ポリシー名 (Policy Name) ] フィールド	グループ共有ポリシーの名前。
[ポリシーの説明 (Policy Description) ] フィールド	ポリシーの説明。
[MSP グループ共有ポリシー (MSP Group Share Policy) ] チェック ボックス	このポリシーを 1 つ以上の MSP 組織に適用する場合にオンにします。
[MSP 組織 (MSP Organizations) ] フィールド	[選択 (Select) ] をクリックして、このポリシーで定義されたリソースに対して読み取り/書き込み権限のある MSP 組織を選択します。  このフィールドは [MSP グループ共有ポリシー (MSP Group Share Policy) ] チェック ボックスがオンの場合にのみ使用可能です。
[顧客組織 (Customer Organizations) ] フィールド	[選択 (Select) ] をクリックして、このポリシーで定義されたリソースに対して読み取り/書き込み権限のある組織を選択します。

**ステップ 5** [送信 (Submit) ] をクリックします。

#### 次の作業

システムのユーザグループにこのグループ共有ポリシーを関連付けることができます。権限に基づいて、それらのグループ内のユーザは、リソースに対する読み取り/書き込み権限を継承します。

## ストレージポリシー

ストレージポリシーは、データストアの範囲、使用するストレージの種類、容量、遅延などの最小条件といったリソースを定義します。

ストレージポリシーでは、複数ディスクの追加ディスクポリシーを設定し、サービスリクエストの作成中に使用するデータストアを選択することもできます。



(注) Cisco UCS Director は、VM のプロビジョニングのためのサービス リクエストの作成中にデータストアを選択することをサポートしています。サービス リクエストの作成中にエンドユーザのデータストアの選択を有効または無効にできます。リストされるデータストアは、サービス リクエストの作成中に VDC に関連付けられたストレージポリシーで指定される範囲条件に依存します。

サービス リクエストの作成中にデータストアの選択機能を使用するには、VM のプロビジョニング用テンプレートに [システム (System) ] ディスク タイプが割り当てられている必要があります。これは、単一または複数のディスクを含むテンプレートに適用されます。

## 複数ディスク VM のストレージポリシー

Cisco UCS Director は、複数データストア上の複数ディスクでの VM のプロビジョニングをサポートしています。

ディスクはシステム、データ、データベース、切替、ログという 5 つのタイプに分類されます。最初にシステム ディスク ポリシーが設定され、他のディスクは必要に応じて設定できます。各ディスクタイプに対して個別にディスクポリシーを設定することも、各ディスクに対してデフォルトのシステム ディスク ポリシーを選択することもできます。



(注) 複数ディスクを含むテンプレートに対するストレージポリシーの作成の詳細については、[複数ディスクの VM プロビジョニング](#)、(379 ページ) を参照してください。

## ストレージポリシーの追加と設定

### 手順

- ステップ 1 [ポリシー (Policies) ] > [仮想/ハイパーバイザ ポリシー (Virtual/Hypervisor Policies) ] > [ストレージ (Storage) ] を選択します。
- ステップ 2 [ストレージ (Storage) ] ページで [VMware ストレージポリシー (VMware Storage Policy) ] をクリックします。
- ステップ 3 [追加 (Add) ] をクリックします。
- ステップ 4 [ストレージリソース割り当てポリシーの追加 (Add Storage Resource Allocation Policy) ] 画面で、次のフィールドに値を入力します。

名前	説明
ストレージポリシー : システムディスクポリシー (Storage Policy - System Disk Policy)	

名前	説明
[ポリシー名 (Policy Name) ] フィールド	リソース割り当てが行われるクラウドを入力します。
[ポリシーの説明 (Policy Description) ] フィールド	<p>ポリシーの説明を入力します。</p> <p>導入の適用範囲を絞り込むには、すべてのデータストアを使用するか、選択したデータストアを含めるか、または選択したデータストアを除外するかを選択します。</p>
[クラウド名 (CloudName) ] ドロップダウンリスト	<p>このリソース割り当てを行うためのクラウドアカウントを選択します。</p> <p>SRM のアカウントを選択した場合、[保護の有効化 (Enable Protection) ] チェック ボックスが表示されます。Site Recovery Manager 用の保護グループを有効にする方法の詳細については、『Cisco UCS Director VMware Management Guide [英語]』を参照してください。</p>
[ReadyClone の使用 (Use ReadyClone) ] チェック ボックス	<p>ReadyClones を使用して VM を導入することを確認します。</p> <p>このオプションは、選択したクラウドアカウントが HX クラウドの場合にのみ使用できます。</p>
システム ディスク スコープ	
[リンク済み複製の使用 (Use Linked Clone) ] チェック ボックス	<p>リンク済みの複製を使用する場合にオンにします。</p> <p>このチェック ボックスをオンにしない場合、設定は複製全体を使用します。</p>
[ストレージプロファイル (Storage Profile) ] ドロップダウンリスト	<p>関連付けられたストレージプロファイルの1つ以上の VM をプロビジョニングするには、ストレージプロファイルを選択します。</p>

名前	説明
[データストア/データストア クラスタ範囲 (Data Stores/Datastore Clusters Scope) ] ドロップダウン リスト	<p>導入の範囲を定義するには、次のいずれかのオプションを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• [すべて (All) ]</li> <li>• [選択したデータストアを含む (Include Selected Datastores) ]</li> <li>• [選択したデータストアを除外 (Exclude Selected Datastores) ]</li> <li>• 選択したデータストア クラスタを含む</li> <li>• 選択したデータストア クラスタを除外</li> </ul> <p>選択したオプションによっては、追加のフィールドが表示される場合があります。</p> <p>(注) 選択したオプションにより、VM ディスクの作成時にすべてのデータストアまたはデータストア クラスタのどちらを使用できるかが決まります。</p>
[選択済みのデータストア (Selected Data Stores) ] フィールド	[選択済みのデータストアを含める (Include Selected Datastore) ] または [選択済みのデータストアを除外する (Exclude Selected Datastore) ] を選択した場合、[選択済みのデータストア (Selected Data Stores) ] を展開し、適切なデータストアを選択します。
[共有データストアのみの使用 (Use Shared Data Store Only) ] チェック ボックス	共有データストアのみを使用する場合にオンにします。  このオプションは、選択したデータストアを含めるか除外するかを選択した場合にのみ使用できます。
[選択済みデータストア クラスタ (Selected Datastore Clusters) ] フィールド	[選択済みのデータストア クラスタを含める (Include Selected Datastore Clusters) ] または [選択済みのデータストア クラスタを除外する (Exclude Selected Datastore Clusters) ] を選択した場合、[選択済みのデータストア クラスタ (Selected Datastore Cluster) ] を展開し、適切なデータストア クラスタを選択します。

名前	説明
[SDRS ルールタイプの選択 (SDRS Rule Type) ] ドロップダウンリスト	選択したデータストアを含むか除外するかを選択した場合、次のいずれかの SDRS ルールタイプを選択します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• [VMDK を同時に管理する (Keep VMDKs Together) ] : フィルタリングされたクラスタで既存のルールを選択する必要があります。新しくプロビジョニングされた VM は VM のアンチアフィニティルールに追加されます。</li> <li>• [VMDK を分ける (Separate VMDKs) ] : 新しくプロビジョニングされた VM に複数のディスクが含まれている場合、新しい VM アフィニティルールはデータストア クラスタで作成されます。</li> </ul>
[SDRS ルールの選択 (Select SDRS Rule) ] フィールド	[VMDK を同時に管理する (Keep VMDKs Together) ] を選択した場合、ルールを適用する VM を選択する必要があります。
<b>ストレージオプション</b>	
[ローカルストレージの使用 (Use Local Storage) ] チェック ボックス	デフォルトでは、このオプションはオンになっています。ローカルストレージを使用しない場合にオフにします。
[NFSの使用 (Use NFS) ] チェック ボックス	デフォルトでは、このオプションはオンになっています。NFS ストレージを使用しない場合にオフにします。
[SANの使用 (Use SAN) ] チェック ボックス	デフォルトでは、このオプションはオンになっています。SAN ストレージを使用しない場合にオフにします。

名前	説明
[フィルタ条件 (Filter Conditions) ] チェックボックス	<p>1つ以上の条件をデータストアフィルタに追加したい場合、次の各要求条件を実行します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>適切なボックスをオンにします。</li> <li>ドロップダウンリストから必要なオプションを選択します。</li> <li>どのデータストア フィルタを実行する条件を入力します。</li> </ul> <p>これらの条件を満たしていないデータストアは検討から除外されます。複数の条件を選択する場合、すべての条件が一致する必要があります。</p>
[テンプレートのオーバーライド (Override Template) ] チェック ボックス	<p>テンプレートのプロパティをオーバーライドする場合にオンにします。シンプロビジョニングの使用やカスタムディスクサイズの設定など、カスタム設定を入力するオプションが提供されます。</p>
[シンプロビジョニングの使用 (Use Thin Provisioning) ] チェック ボックス	<p>VMストレージのプロビジョニング時にシンプロビジョニングを使用する場合にオンにします。</p> <p>シンプロビジョニングは、物理ストレージ容量の動的割り当てをイネーブルにし、VMストレージの使用率が向上します。</p> <p>このオプションは、[テンプレートのオーバーライド (Override Template) ]を選択した場合にのみ使用できます。</p>
[手動ディスク サイズ (Manual Disk Size) ] チェック ボックス	<p>VMのプロビジョニングに使用されるテンプレートのディスクサイズをオーバーライドするカスタム ディスク サイズを使用する場合にオンにします。</p> <p>このオプションは、[テンプレートのオーバーライド (Override Template) ]を選択した場合にのみ使用できます。</p>
<b>VM ライフサイクルのサイズ変更オプション</b>	

名前	説明
[ディスクのサイズ変更を許可 (Allow Resizing of Disk) ] チェック ボックス	プロビジョニングの前にVMのディスクサイズを選択するオプションをエンドユーザーに表示する場合にオンにします。
[ディスクの許容値(GB単位) (Permitted Values for Disk in GB) ] フィールド	VM のプロビジョニング中に選択したディスクサイズ値のカスタム範囲を指定します。たとえば、1、5、10、50、100、500、1024、5120、10240 などです。  このオプションは、[ディスクのサイズ変更を許可 (Allow Resizing of Disk) ] を選択した場合にのみ使用できます。
[スコープからのデータストアの選択をユーザーに許可します (Allow user to select datastores from scope) ] チェック ボックス	サービスリクエストの作成中にデータストアを選択するオプションをエンドユーザーに提供する場合にオンにします。

(注) OVF 導入にこのストレージポリシーを使用すると、導入される OVF VM はシンプロビジョニングされずに作成されます。

**ステップ 5** [次へ (Next) ] をクリックします。

**ステップ 6** [追加ディスク ポリシー (Additional Disk Policies) ] 画面で、次のいずれかを実行します。

- [ディスク ポリシー (Disk Policies) ] を展開し、システム ディスク ポリシーに設定されているものと同じディスク ポリシーをそのディスク タイプに使用しない場合に設定するディスク タイプを選択します。
- すべてのディスクの種類にシステム ディスク ポリシー オプションを使用するには、[次へ (Next) ] をクリックします。

(注) デフォルトでは、ディスクのディスク ポリシーは、[ストレージリソース割り当てポリシーの追加 (Add Storage Resource Allocation Policy) ] 画面で設定したシステム ディスク ポリシーと同じです。

**ステップ 7** 特定のディスク タイプのカスタム システム ディスク ポリシーを設定した場合は、次の操作を実行します。

- a) ディスク タイプを編集するには [編集] をクリックします。
- b) [ディスク ポリシー エントリの編集 (Edit Disk Policies Entry) ] 画面で、[システム ディスク ポリシーと同じ (Same As System Disk Policy) ] をオフにします。
- c) [エントリの編集 (Edit Entry) ] 画面で、次のフィールドに値を入力します。  
ここに表示されるすべてのフィールドは、[ストレージリソース割り当てポリシーの追加 (Add Storage Resource Allocation Policy) ] 画面に表示されるフィールドと同じです。

(注) この設定は、VM ディスクの作成時にどのデータストアがディスクのタイプに使用できるかを決定します。

- d) [送信 (Submit)] をクリックします。
- e) 他のディスク タイプを設定するには、必要に応じてこれらの手順を繰り返します。
- (注) その他のディスク ポリシーで作成されたストレージポリシーを使用するには、VM のプロビジョニングに使用される VDC とポリシーを関連付けます。

**ステップ 8** [次へ (Next)] をクリックします。

**ステップ 9** [ハードディスク ポリシー (Hard Disk Policy)] 画面で、VM のプロビジョニング時に作成する物理ディスクの数を指定します。

- a) [ディスク (Disks)] を展開し、次のフィールドに入力してディスクを追加します。

フィールド	説明
[ディスクラベル (Disk Label)] フィールド	追加するディスクを説明するラベルを入力します。
[ディスク サイズ (GB) (Disk Size (GB))] フィールド	ディスクのサイズを入力します。
[ディスク タイプ (Disk Type)] ドロップダウンリスト	ディスク タイプを選択します。 このドロップダウンリストに表示されるオプションは、先の手順で [システム ポリシーと同じ (Same as System Policy)] をオンにしたかどうかによって異なります。
コントローラ オプション	
[コントローラ タイプ (Controller Type)] ドロップダウンリスト	ドロップダウンリストから、コントローラ タイプを選択します。 ポートの応答可能性に基づいて、コントローラは、VM ディスクにマッピングされます。
[新しいコントローラのディスクを作成 (Create Disk on new Controller)] チェック ボックス	新しいコントローラを作成する場合にこのボックスをオンにします。 コントローラ タイプは、[コントローラ タイプ (Controller Type)] ドロップダウンリストで作成された選択肢に基づいています。
ディスク プロビジョニング オプション	

フィールド	説明
[ディスクプロビジョニングオプション (Disk Provisioning Options) ] ラジオ ボタン	<p>指定するプロビジョニングのタイプのオプションボタンをオンにします。次のいずれかを指定できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• [シンプロビジョニング (Thin Provision) ]</li> <li>• [シックプロビジョニング (Lazy Zeroed) (Thick Provision Lazy Zeroed) ]</li> <li>• [シックプロビジョニング (eager Zeroed) (Thick Provision eager Zeroed) ]</li> </ul>
<b>VM ライフサイクルのサイズ変更オプション</b>	
[ディスクのサイズ変更を許可 (Allow Resizing of Disk) ] チェック ボックス	プロビジョニングの前に VM ディスク サイズの編集を有効にする場合にオンにします。
[ディスクの許容値(GB単位) (Permitted Values for Disk in GB) ] フィールド	<p>VM のプロビジョニング中に選択したディスク サイズ値のカスタム範囲を指定します。たとえば、1、5、10、50、100、500、1024、5120、10240 などです。</p> <p>このオプションは、[ディスクのサイズ変更を許可] がオンの場合に表示されます。</p>
[スコープからのデータストアの選択をユーザーに許可します (Allow user to select datastores from scope) ] チェック ボックス	サービス リクエストの作成中にデータストアを選択するオプションをユーザーに表示する場合にオンにします。

**ステップ 10** [送信 (Submit) ] をクリックします。

(注)

- OVF 導入にストレージポリシーを使用すると、導入される OVF VM はシンプロビジョニングされずに作成されます。
- 追加ディスクポリシーを使用して作成されるストレージポリシーを使用するには、VM のプロビジョニングに使用される VDC とポリシーを関連付ける必要があります。
- ポリシーに設定された追加ディスクポリシーを使用する場合は、複数のディスク テンプレートのカタログ作成時に [単一データストアのすべてのディスクをプロビジョニングします (Provision all disks in a single database) ] を必ずオフにしてください。カタログの作成方法の詳細については、[カタログの管理](#)、(329 ページ) を参照してください。

## 仮想ストレージ カタログ

ストレージポリシーをカスタマイズするために仮想ストレージカタログを使用できます。仮想ストレージカタログを使用して、複数のストレージポリシーを選択し、カスタムストレージのエントリ名を指定できます。

ストレージカタログは、カタログの作成中にそれを有効化することにより、カタログにマッピングします。カタログを使用してサービス要求を出すとき、[ストレージ階層 (Storage Tier)] を選択することができます。

### 仮想ストレージ カタログの設定

#### 手順

- ステップ 1** [ポリシー (Policies)] > [仮想/ハイパーバイザ ポリシー (Virtual/Hypervisor Policies)] > [ストレージ (Storage)] を選択します。
- ステップ 2** [ストレージ (Storage)] ページで [仮想ストレージ カタログ (Virtual Storage Catalog)] をクリックします。
- ステップ 3** [追加 (Add)] をクリックします。
- ステップ 4** [カタログの追加 (Add Catalog)] 画面で、次のフィールドに値を入力します。

名前	説明
[カタログ名 (Catalog Name)] フィールド	カタログの名前。 この名前は、カタログ カスタム アクションの定義中に使用されます。
[カタログの説明 (Catalog Description)] フィールド	カタログの説明。
[クラウド名 (Cloud Name)] ドロップダウンリスト	クラウドアカウントを選択します。
[エントリ数の選択 (Choose No of Entries)] ドロップダウンリスト	エントリ数を選択します。指定できる範囲は 1 ~ 10 です。選択した内容に応じて、次のダイアログボックスにストレージエントリオプションが表示されます。

- ステップ 5** [Next] をクリックします。
- ステップ 6** [エントリの追加 (Add Entries)] 画面で、次のフィールドに値を入力します。

名前	説明
[ストレージ エントリ #1 (Storage Entry #1) ]	
[ストレージ エントリ名 (Storage Entry Name) ] フィールド	ストレージ エントリ の名前。
[ストレージ ポリシー (Storage Policy) ] ドロップ ダウン リスト	ストレージ ポリシー を選択 します。
[ストレージ エントリ #2 (Storage Entry #2) ]	
[ストレージ エントリ名 (Storage Entry Name) ] フィールド	2 番目の ポリシー のストレージ エントリ 名。
[ストレージ ポリシー (Storage Policy) ] ドロップ ダウン リスト	ストレージ ポリシー を選択 します。

**ステップ 7** [送信 (Submit) ] をクリック します。

#### 次の作業

- カタログの作成中に仮想ストレージ カタログをマッピング できます。  
「[カタログの管理](#)」を参照 してください。
- サービス リクエストの作成中にストレージ階層 オプションを表示 できます。  
「[セルフサービス プロビジョニングの使用 方法](#)」を参照 してください。

## クレデンシャル ポリシー

ポリシーは、システムまたはネットワーク リソースへのアクセスを制御する一連のルールから構成 されます。クレデンシャル ポリシーは、ユーザ アカウントのパスワードの要件とアカウント ロックアウトを定義 します。ユーザ アカウントに割り当てられたクレデンシャル ポリシーは、Cisco UCS Director での認証プロセスを制御 します。クレデンシャル ポリシーを追加した後、新しいポリシーをクレデンシャル タイプのデフォルトのポリシーとして割り当てるか、または個々のアプリケーションに割り当てる ことができます。

## クレデンシャルポリシーの設定

### 手順

- ステップ 1** [ポリシー (Policies) ]>[物理インフラストラクチャポリシー (Physical Infrastructure Policies) ]> [クレデンシャルポリシー (Credential Policies) ]を選択します。
- ステップ 2** [クレデンシャルポリシー (Credential Policies) ]ページで [クレデンシャルポリシー (Credential Policies) ]をクリックします。
- ステップ 3** [追加 (Add) ]をクリックします。
- ステップ 4** [クレデンシャルポリシーの追加 (Add Credential Policy) ]画面で、アカウントタイプをオンにします。
- ステップ 5** [選択 (Select) ]をクリックします。
- ステップ 6** [クレデンシャルポリシーの追加 (Add Credential Policy) ]画面で、次を含む必須フィールドに値を入力します。

名前	説明
[ポリシー名 (Policy Name) ]フィールド	ポリシーの一意の名前。
[説明 (Description) ]フィールド	ポリシーの説明。
[ユーザ名 (Username) ]フィールド	アカウントのユーザ名。
[パスワード (Password) ]フィールド	ユーザアカウントのパスワード。
[プロトコル (Protocol) ]ドロップダウンリスト	プロトコルを選択します。
[ポート (Port) ]フィールド	ポート番号。

この画面に表示されるフィールドは、ポリシーを作成するアカウントのタイプによって異なります。

- ステップ 7** [送信 (Submit) ]をクリックします。  
後でこのポリシーのクレデンシャルを変更した場合、それらの変更はポリシーで設定されたアカウントに自動的に適用されますこれらの変更は、Cisco UCS Director がこれらのアカウントに接続しようとしたときに適用されます。

# ネットワークポリシー

ネットワークポリシーには、ネットワーク設定、DHCP、スタティックIPなどのリソースに加え、このポリシーを使用してプロビジョニングされたVMに対して複数のvNICを追加するためのオプションも含まれています。

## スタティックIPプールポリシーの追加

ネットワークポリシーで使用できるスタティックIPプールポリシーを設定できます。（オプション）

### 手順

- ステップ1** [ポリシー (Policies)] > [仮想/ハイパーバイザポリシー (Virtual/Hypervisor Policies)] > [ネットワーク (Network)] を選択します。
- ステップ2** [ネットワーク (Network)] ページで [スタティックIPプールポリシー (Static IP Pool Policy)] をクリックします。
- ステップ3** [追加 (Add)] をクリックします。
- ステップ4** [静的IPプールポリシー情報 (Static IP Pool Policy Information)] 画面で、次のフィールドに値を入力します。

名前	説明
[ポリシー名 (Policy Name)] フィールド	IP プールポリシーの名前
[ポリシーの説明 (Policy Description)] フィールド	IP プールポリシーの説明
[IP オーバーラップの許可 (Allow IP Overlap)] ドロップダウンリスト	<p>IPの重複が許可されるかどうかを指定します。デフォルトでは、IPの重複は無効になっています。</p> <p>IPの重複を有効にすると、次のようになります。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• IPプールを作成し、重複したIPアドレスをプールの内部に保持することができます。</li> <li>• 2つのスタティックIPプールを作成し、プール間で重複したIPアドレスを保持することができます。</li> </ul>

名前	説明
[範囲 (Scope) ] ドロップダウン リスト	<p>重複 IP プールの範囲</p> <p>次のオプションがあります。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• [MSP 組織 (MSP Organization) ] このオプションは MSP を有効にした場合にのみ表示されます。</li> <li>• [グループ/お客様の組織 (Group/Customer Organization) ]</li> <li>• [コンテナ(Container)]</li> </ul> <p>(注) このオプションは、[IP オーバーラップの許可 (Allow IP Overlap) ] ドロップダウンリストから [はい (Yes) ] を選択した場合のみ表示されます。</p>
[ユーザ グループ ID (User Group ID) ] フィールド	[選択 (Select) ] を選択して、ポリシーのユーザグループをオンにします。システムで作成されたすべてのユーザまたはグループが表示されます。
[コンテナ ID (Container ID) ] フィールド	[選択 (Select) ] を選択してコンテナをオンにします。

**ステップ 5** [静的 IP プール (Static IP Pools) ] セクションを展開し、[+] をクリックして複数の静的 IP プールを追加して設定します。

**ステップ 6** [静的 IP プールへのエントリの追加 (Add Entry to Static IP Pools) ] 画面で、次のフィールドに値を入力します。

名前	説明
[静的IPプール (Static IP Pool) ] フィールド	<p>スタティック IP プール。</p> <p>10.5.0.1 - 10.5.0.50、10.5.0.100、10.5.1.20-10.5.1.70 などです。</p>
[サブネットマスク (Subnet Mask) ] フィールド	プールのサブネットマスク。255.255.255.0 などです。
[ゲートウェイ IP アドレス (Gateway IP Address) ] フィールド	このネットワークのデフォルトゲートウェイの IP アドレス。

名前	説明
[VLAN ID] フィールド	部門に使用する VLAN ID有効な VLAN ID の範囲を入力します。

**ステップ 7** [送信 (Submit) ] をクリックします。

**ステップ 8** [静的 IP ポリシー情報 (Static IP Policy Information) ] 画面で [送信 (Submit) ] をクリックします。

## IP サブネット プール ポリシーの設定

### 手順

**ステップ 1** [ポリシー (Policies) ] > [仮想/ハイパーバイザ ポリシー (Virtual/Hypervisor Policies) ] > [ネットワーク (Network) ] を選択します。

**ステップ 2** [ネットワーク (Network) ] ページで [IP サブネット プール ポリシー (IP Subnet Pool Policy) ] をクリックします。

**ステップ 3** [追加 (Add) ] をクリックします。

**ステップ 4** [IP サブネット プール ポリシー情報 (IP Subnet Pool Policy Information) ] 画面で、次のフィールドに入力します。

フィールド	説明
[ポリシー名 (Policy Name) ] フィールド	ポリシーの名前。
[ポリシーの説明 (Policy Description) ] フィールド	ポリシーの説明。
[ネットワーク スーパーネット アドレス (Network Supernet Address) ] フィールド	ネットワーク スーパーネット アドレス
[ネットワーク サブネット マスク (Network Subnet Mask) ] フィールド	ネットワーク スーパーネット マスク。
[要求サブネット数 (Number of Subnets Required) ] ドロップダウン リスト	組織に必要なサブネット数を選択します。
[ゲートウェイ アドレス (Gateway Address) ] ドロップダウン リスト	ゲートウェイ アドレス インデックスを選択します。

フィールド	説明
[IP オーバーラップの許可 (Allow IP Overlap) ] ドロップダウン リスト	<p>IPの重複が許可されるかどうかを指定します。デフォルトでは、IPの重複は無効になっています。</p> <p>IPの重複を有効にすると、次のようになります。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• IP プールを作成し、重複した IP アドレスをプールの内部に保持することができます。</li> <li>• 2つの IP サブネット プールを作成し、プール間で重複した IP アドレスを保持することができます。</li> </ul>
[範囲 (Scope) ] ドロップダウン リスト	<p>重複 IP サブネット プールの範囲。次のオプションがあります。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• [MSP 組織 (MSP Organization) ] このオプションは MSP を有効にした場合にのみ表示されます。</li> <li>• [グループ/お客様の組織 (Group/Customer Organization) ]</li> <li>• コンテナ</li> </ul> <p>(注) このオプションは、[IP オーバーラップの許可 (Allow IP Overlap) ] ドロップダウン リストから [はい (Yes) ] を選択した場合のみ表示されます。</p>

**重要** IP の重複を有効にして、ポリシーを作成する場合、最初に同じ IP 範囲で作成された他の IP サブネット プール ポリシーがあるかどうかを判断する必要があります。この他のポリシーが IP の重複を有効にしている場合、エラーなしで追加のポリシーを作成できます。ただし、事前に作成された IP サブネット ポリシーで、IP の重複を有効にして作成したポリシーと同じ IP 範囲を指定した場合は、実行できません。IP の重複を有効にせずにポリシーを作成した場合には、同じ挙動になります。

IP の重複を有効にせずにポリシーを作成した場合、最初に同じ IP 範囲で作成された他の IP サブネット プール ポリシーがあるかどうかを判断する必要があります。事前に作成されたプール ポリシーが IP の重複を有効にしていた場合、IP の重複を無効にして他のポリシーを作成するために同じ IP 範囲を指定することはできません。

**ステップ 5** [送信 (Submit) ] をクリックします。

## ネットワークポリシーの追加

### 手順

- ステップ 1** [ポリシー (Policies) ] > [仮想/ハイパーバイザ ポリシー (Virtual/Hypervisor Policies) ] > [ネットワーク (Network) ] を選択します。
- ステップ 2** [ネットワーク (Network) ] ページで [VMware ネットワーク ポリシー (VMware Network Policy) ] をクリックします。
- ステップ 3** [追加 (Add) ] をクリックします。
- ステップ 4** [ネットワーク ポリシー情報 (Network Policy Information) ] 画面で、次のフィールドに値を入力します。

名前	説明
[ポリシー名 (Policy Name) ] フィールド	ネットワーク ポリシーの名前。
[ポリシーの説明 (Policy Description) ] フィールド	ネットワーク ポリシーの説明。
[クラウド名 (CloudName) ] ドロップダウンリスト	ポリシーが適用されるクラウドアカウントを選択します。
[エンドユーザにオプションの NIC の選択を許可 (Allow end user to select optional NICs) ] チェック ボックス	サービスリクエストの導入設定の作成時に vNIC を選択できるようにする場合にオンにします。
[VM ネットワーク (VM Networks) ] フィールド	[VM ネットワーク (VM Networks) ] テーブルを展開し、VM ネットワークに新しいエントリを追加します。

- ステップ 5** 複数の vNIC を追加して設定するには、[VM ネットワーク (VM Networks) ] セクションで [追加 (Add) ] をクリックします。これらの vNIC は、このポリシーを使用してプロビジョニングされる VM に適用できます。

(注) VM アクションを使用してプロビジョニングまたは検出された VM の vNIC を追加または交換するには、vNIC を設定する必要があります。

- ステップ 6** [VM ネットワークへのエントリの追加 (Add Entry to VM Networks) ] 画面で、次のフィールドに値を入力します。

名前	説明
[NIC エイリアス (NIC Alias) ] フィールド	新しい NIC の名前。

名前	説明
[必須 (Mandatory) ] チェック ボックス	<p>[ネットワーク ポリシー情報 (Network Policy Information) ]画面の[エンドユーザにオプションの NIC の選択を許可 (Allow end user to select optional NICs) ]がオンの場合、このボックスはあらかじめオンになっています。[エンドユーザにオプションの NIC の選択を許可 (Allow end user to select optional NICs) ]ボックスがオンになっておらず、かつこのボックスがオンでない場合は、[NIC エイリアス (NIC Alias) ]フィールドはオプションです。</p> <p>(注) 少なくとも 1 つの NIC で [必須 (Mandatory) ] オプションが選択されている必要があります。[必須 (Mandatory) ] オプションが選択されている NIC は VM のプロビジョニングで使用されます。VM サービスリクエストの作成中にはユーザのオプションはありません。</p>
[エンドユーザによるポートグループ選択を許可 (Allow end user to choose portgroups) ] チェック ボックス	プロビジョニング時にエンドユーザがポートグループを選択できるようにする場合にオンにします。
[ポリシーレベルポートグループの表示 (Show policy level portgroups) ] チェック ボックス	このチェックボックスと共に [エンドユーザにポートグループの選択を許可 (Allow end users to choose portgroups) ] チェックボックスをオンにすると、ポリシー内の NIC で選択されたすべてのポートグループがリストされます。
[テンプレートからアダプタをコピーする (Copy Adapter from Template) ] チェック ボックス	<p>カスタム設定が不要な場合にオンにします。カスタム設定する場合は、このチェックボックスをオフにします。</p> <p>[アダプタのタイプ (Adapter Type) ] ドロップダウンリストは、このチェックボックスをオンにすると表示されません。</p>
[エンドユーザに IP アドレスのオーバーライドを許可 (Allow the end user to override IP Address) ] チェック ボックス	ユーザに IP アドレスのオーバーライドを許可する場合にオンにします。

名前	説明
[アダプタのタイプ (Adapter Type) ] ドロップ ダウンリスト	アダプタタイプを選択します。テンプレートで 使用可能なアダプタタイプと同じタイプがユー ザに必要な場合は、このオプションを選択しま す。  (注) [テンプレートからアダプタをコピー する (Copy Adapter from Template) ] オプションが選択されている場合は、 このオプションは表示されません。

**ステップ 7** [ポートグループ (Port Groups) ] セクションで、[追加 (Add) ] (+) をクリックします。[ポート  
グループへのエントリの追加 (Add Entry to Port Groups) ] 画面が表示されます。

**ステップ 8** [選択 (Select) ] をクリックして、ポートグループ名を選択します。

**ステップ 9** [IP アドレスのタイプの選択 (Select IP Address Type) ] ドロップダウンフィールドで、[DHCP] (デ  
フォルト) または [固定 (Static) ] を選択します。

a) [固定 (Static) ] を選択した場合は、[IPプールポリシー (IP Pool Policy) ] (デフォルト) また  
は [インラインIPプール (Inline IP Pool) ] を選択する必要があります。

[IPプールポリシー (IP Pool Policy) ] を選択した場合は、[静的IPプールを選択する (Select to  
choose a static IP pool) ] をクリックします。[選択 (Select) ] 画面で、事前設定された静的 IP  
プールのリストから選択します。事前設定されたスタティック IP プールが存在しない場合、  
詳細については「スタティック IP ポリシーの追加」を参照してください。

b) [インライン IP プール (Inline IP Pool) ] を選択する場合は、次のフィールドに値を入力しま  
す。

名前	説明
[静的IPプール (Static IP Pool) ] フィールド	スタティック IP プール。10.5.0.1 - 10.5.0.50、 10.5.0.100、10.5.1.20-10.5.1.70 などです。
[サブネットマスク (Subnet Mask) ] フィール ド	プールのサブネットマスク。255.255.255.0 な どです。
[ゲートウェイ IP アドレス (Gateway IP Address) ] フィールド	このネットワークのデフォルトゲートウェイ の IP アドレス。

名前	説明
[IP オーバーラップの許可 (Allow IP Overlap) ] ドロップダウン リスト	<p>IPの重複が許可されるかどうかを指定します。デフォルトでは、IP の重複は無効になっています。</p> <p>IP の重複を有効にすると、次のようになります。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• IP プールを作成し、重複した IP アドレスをプールの内部に保持することができます。</li> <li>• 2つのスタティック IP プールを作成し、プール間で重複した IP アドレスを保持することができます。</li> </ul>
[範囲 (Scope) ] ドロップダウン リスト	<p>重複 IP プールの範囲次のオプションがあります。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• [MSP 組織 (MSP Organization) ] このオプションは MSP を有効にした場合にのみ表示されます。</li> <li>• [グループ/お客様の組織 (Group/Customer Organization) ]</li> <li>• [コンテナ(Container)]</li> </ul> <p>(注) このオプションは、[IP オーバーラップの許可 (Allow IP Overlap) ] ドロップダウン リストから [はい (Yes) ] を選択した場合のみ表示されます。</p>
[ユーザ グループ ID (User Group ID) ] フィールド	[選択 (Select) ] を選択してユーザグループを確認します。システムで作成されたすべてのユーザまたはグループが表示されます。
[コンテナ ID (Container ID) ] フィールド	[選択 (Select) ] を選択してコンテナをオンにします。

- ステップ 10** [IPv6] をオンにして IPv6 を設定します。  
IPv4 設定で指定したフィールドと同じフィールドを設定する必要があります。

- ステップ 11 [送信 (Submit) ] をクリックします。
- ステップ 12 [VM ネットワークへのエントリの追加 (Add Entry to VM Networks) ] 画面で、[送信 (Submit) ] をクリックします。
- ステップ 13 [ネットワーク ポリシーの情報 (Network Policy Information) ] 画面で、[送信] をクリックします。

## ネットワークングプロビジョニングポリシー

ネットワーク プロビジョニング ポリシーは、オーケストレーションワークフローのタスクで使用されます。このポリシーは、レイヤ2のネットワーク設定、およびネットワーク内のスイッチに対するアクセスコントロールリスト (ACL) を定義します。

### ネットワーク プロビジョニング ポリシーの設定

#### 手順

- ステップ 1 [ポリシー (Policies) ] > [仮想/ハイパーバイザポリシー (Virtual/Hypervisor Policies) ] > [ネットワーク (Network) ] を選択します。
- ステップ 2 [ネットワーク (Network) ] ページで [ネットワークプロビジョニングポリシー (Network Provisioning Policy) ] をクリックします。
- ステップ 3 [追加 (Add) ] をクリックします。
- ステップ 4 [ポリシーの追加] 画面で、次のフィールドに値を入力します。

名前	説明
[全般情報 (General Information) ]	
[ポリシー名 (Policy Name) ] フィールド	ポリシーの名前。
[ポリシーの説明 (Policy Description) ] フィールド	ポリシーの説明。
[L2ネットワーク設定 (VLAN) ]	

名前	説明
[プライベート VLAN の使用 (Use Private VLAN) ] チェック ボックス	<p>オンにすると、次のフィールドにデータが自動的に取り込まれます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• [プライベートVLANタイプ (Private VLAN Type) ] : コミュニティ</li> <li>• [プライマリVLAN ID (Primary VLAN ID) ] : 0</li> <li>• [セカンダリVLANの範囲 - 開始ID (Secondary VLAN Range—Starting ID) ] : 500</li> <li>• [セカンダリVLANの範囲 - 終了ID (Secondary VLAN Range—Ending ID) ] : 1000</li> </ul>
[VLAN範囲 - 開始ID (VLAN Range - Starting ID) ] フィールド	VLAN の範囲の開始ID。500 はデフォルトの範囲開始 ID です。
[VLAN範囲 - 終了ID (VLAN Range - Ending ID) ] フィールド	VLAN の範囲の終了 ID。1000 はデフォルトの範囲終了 ID です。
[基本プロファイル名 (Base Profile Name) ] フィールド	VLAN ベース プロファイル名。1 つ以上のネストされたプロファイル割り当てを含むプロファイルです。
アクセス コントロール リスト	
[ACLタイプ (ACL Type) ] ドロップダウン リスト	デフォルトでは、[Simple] に設定されます。これは、現在使用可能な唯一のオプションです。
[ICMP を許可 (Allow ICMP) ] チェック ボックス	VLAN の ICMP を許可する場合にオンにします。

名前	説明
[TCPポートへの着信トラフィックを許可 (Permit Incoming Traffic to TCP Ports) ] フィールド	次のオプションを使用できます。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• FTP</li> <li>• SSH</li> <li>• Telnet</li> <li>• SMTP</li> <li>• POP3</li> <li>• HTTP</li> <li>• HTTPS</li> <li>• MySQL</li> </ul>
[UDPポートへの着信トラフィックを許可 (Permit Incoming Traffic to UDP Ports) ] フィールド	次のオプションを使用できます。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• SNMP</li> <li>• Syslog</li> </ul>

**ステップ 5** [送信 (Submit) ] をクリックします。

## VLAN プール ポリシー

VLAN プール ポリシーはポッドに対する VLAN の範囲を定義します。このポリシーは、ポリシーで指定された定義済み範囲からフリーの VLAN ID を生成するためにオーケストレーションワークフローで使用されます。

### VLAN プール ポリシーの設定

#### 手順

- ステップ 1** [ポリシー (Policies) ] > [仮想/ハイパーバイザ ポリシー (Virtual/Hypervisor Policies) ] > [ネットワーク (Network) ] を選択します。
- ステップ 2** [ネットワーク (Network) ] ページで [VLAN プール ポリシー (VLAN Pool Policy) ] をクリックします。
- ステップ 3** [追加 (Add) ] をクリックします。
- ステップ 4** [ポリシーの追加] 画面で、次のフィールドに値を入力します。

名前	説明
[ポッド (POD) ] ドロップダウン リスト	ポッドを選択できます。
[ポリシー名 (Policy Name) ] フィールド	ポリシー名。このポリシー名はオーケストレーション ワークフローで使用されます。
[ポリシーの説明 (Policy Description) ] フィールド	ポリシーの説明。
[VLAN範囲 (VLAN Range) ] フィールド	VLAN の範囲。たとえば、1,3,5—15 などです。

**ステップ 5** [送信 (Submit) ] をクリックします。

## システム ポリシー

システム ポリシーは、使用するテンプレート、タイムゾーン、OS 情報など、システムに固有の情報を定義します。

## システム ポリシーの設定



(注) システム ポリシーを使用して OVF を導入することによって仮想マシンをプロビジョニングする場合に値を入力する必要があるフィールドは、[VM名のテンプレート (VM Name Template) ] フィールドと [ホスト名のテンプレート (Host Name Template) ] フィールドのみです。システム ポリシーの残りのフィールドは入力する必要がありません。

### 手順

- ステップ 1** [ポリシー (Policies) ] > [仮想/ハイパーバイザ ポリシー (Virtual/Hypervisor Policies) ] > [サービスの提供 (Service Delivery) ] を選択します。
- ステップ 2** [サービスの提供 (Service Delivery) ] ページで [VMware システム ポリシー (VMware System Policy) ] をクリックします。
- ステップ 3** [追加 (Add) ] をクリックします。
- ステップ 4** [システム ポリシー情報 (System Policy Information) ] 画面で、次のフィールドに値を入力します。

名前	説明
[ポリシー名 (Policy Name) ] フィールド	ポリシーの名前。この名前は、カタログの定義時に使用されます。
[ポリシーの説明 (Policy Description) ] フィールド	ポリシーの説明。
[VM 名のテンプレート (VM Name Template) ] フィールド	使用する VM 名テンプレート。 Cisco UCS Director では VM 名の自動作成が可能です。VM 名は、一連の変数名を使用して自動的に作成できます。各変数は \$ {VARIABLE_NAME} のようにかっこで囲む必要があります。例： vm- $\{GROUP\_NAME\}$ -SR $\{SR\_ID\}$
[VM 名の一意性チェックの無効化 (Disable VM Name Uniqueness Check) ] チェック ボックス	VM プロビジョニング時の VM 名の一意性チェックを無効にする場合にオンにします。 VM 名の一意性チェックを無効にすると、Cisco UCS Director 全体にわたって VM 名の検証が無効化されるため、マルチテナントかつマルチドメインの環境に同じ VM 名を使用できます。 このフィールドをオフにした場合は VM 名の一意性チェックが実行されるため、別のフォルダまたはデータセンター内でプロビジョニングされる場合にのみ、同じ VM を使用できます。
[VM 名の検証ポリシー (VM Name Validation Policy) ] ドロップダウン リスト	VM 名の検証ポリシーが選択できます。このリストには、以前作成したポリシーが入力されます。

**ステップ 5** 次に示すオプションの [VM 名のテンプレート (VM Name Template) ] 機能から選択します。

名前	説明
[エンドユーザVM 名またはVMプレフィクス (End User VM Name or VM Prefix) ] チェック ボックス	VM プロビジョニングにサービスリクエストを作成するときにユーザが VM 名または VM プレフィクスを追加できるようにする場合にオンにします。
[導入後に電源をオンにします (Power On after deploy) ] チェック ボックス	このポリシーを使用して導入されたすべての VM の電源を自動的にオンにする場合にオンにします。

名前	説明
[ホスト名のテンプレート (Host Name Template) ] フィールド	一連の変数名を使用して自動的に作成できる VM ホスト名。各変数は <code>\${VARIABLE}</code> のようにかっこで囲む必要があります。
[ホスト名の一意性のチェックの無効化 (Disable Host Name Uniqueness Check) ] チェックボックス	<p>ゲスト OS のカスタマイズを使用して VM をプロビジョニングするときにホスト名の一意性チェックを無効にする場合にオンにします。</p> <p>ホスト名の一意性チェックを無効にすると、Cisco UCS Director 全体にわたってホスト名の検証が無効化されるため、マルチテナントかつマルチドメインの環境に同じホスト名を使用できます。</p> <p>このフィールドをオフにした場合はホスト名の一意性チェックが実行されるため、VM が別のテナント、ドメイン、またはワークグループ内でプロビジョニングされる場合にのみ、同じホスト名を使用できます。</p>
[ホスト名の検証ポリシー (Host Name Validation Policy) ] ドロップダウン リスト	ホスト名の検証ポリシーを選択します。このリストには、以前作成したポリシーが入力されます。

#### ステップ 6 次のフィールドに入力します。

名前	説明
[Linuxタイムゾーン (Linux Time Zone) ] ドロップダウン リスト	時間帯を選択します。
[Linux VM最大ブート待機時間 (Linux VM Max Boot Wait Time) ] ドロップダウン リスト	Linux VM の最大ブート待機時間を選択します。
[DNSドメイン (DNS Domain) ] フィールド	VM に使用する IP ドメイン。
[DNSサフィックスリスト (DNS Suffix List) ] フィールド	DNS ルックアップ用に設定する DNS サフィックス。複数のエントリを指定する場合は、カンマで区切ります。
[DNSサーバリスト (DNS Server List) ] フィールド	DNS サーバの IP アドレスのリスト。複数のエントリを指定する場合は、カンマで区切ります。

名前	説明
[VMイメージのタイプ (VM Image Type) ] ドロップダウンリスト	VM にインストールされているイメージの OS を選択します。次のいずれかを選択できます。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• Windows と Linux</li> <li>• Linux のみ</li> </ul>
Windows	
[製品ID (Product ID) ] フィールド	Windows 製品 ID またはライセンス キー。製品 ID またはライセンス キーはここに入力するか、または OS ライセンス プールで入力できます。OS ライセンス プールで入力したキーは、ここで入力するキーよりも優先されます。
[ライセンスの所有者名 (License Owner Name) ] フィールド	Windows ライセンスの所有者名。
[組織 (Organization) ] フィールド	VM で設定する組織名。
[ライセンスモード (License Mode) ] ドロップダウンリスト	[シート別 (per-seat) ] または [サーバ別 (per-server) ] を選択します。
[ライセンスユーザ数 (Number of License Users) ]	ライセンス ユーザまたは接続の数。
[WINSサーバリスト (WINS Server List) ] フィールド	WINS サーバの IP アドレス。複数のエントリを指定する場合は、カンマで区切ります。
[Windows VM最大ブート待機時間 (Windows VM Max Boot Wait Time) ] ドロップダウンリスト	Windows VM の最大ブート待機時間を選択します。
[一意のSIDの作成 (Create a unique SID) ] チェックボックス	システムに一意のSIDを作成する場合にオンにします。
[自動ログイン (Auto Logon) ] チェックボックス	自動ログインを有効にする場合にオンにします。
[自動ログイン回数 (Auto Logon Count) ] フィールド	自動ログオンの実行回数。
[管理者パスワード (Administrator Password) ] フィールド	管理者アカウントのパスワード。

名前	説明
[Windowsタイムゾーン (Windows Time Zone) ] ドロップダウンリスト	Windows VM に設定する必要があるタイムゾーンを選択します。
[ドメインまたはワークグループ (Domain/Workgroup) ] ドロップダウンリスト	[ドメイン (Domain) ]または[ワークグループ (Workgroup) ]を選択します。
[ワークグループ (Workgroup) ]フィールド	ワークグループの名前。 このオプションは、[ワークグループ (Workgroup) ]が[ドメインまたはワークグループ (Domain/Workgroup) ]ドロップダウンリストの値として選択されている場合に、表示されます。
[ドメイン (Domain) ]フィールド	Windows ドメインの名前。 (注) このオプションは、[ドメイン (Domain) ]が[ドメインまたはワークグループ (Domain/Workgroup) ]ドロップダウンリストの値として選択されている場合に、表示されます。
[ドメインユーザ名 (Domain Username) ]フィールド	Windows ドメイン管理者のユーザ名。 (注) このオプションは、[ドメイン (Domain) ]が[ドメインまたはワークグループ (Domain/Workgroup) ]ドロップダウンリストの値として選択されている場合に、表示されます。
[ドメインパスワード (Domain Password) ] フィールド	Windows ドメイン管理者のパスワード (注) このオプションは、[ドメイン (Domain) ]が[ドメインまたはワークグループ (Domain/Workgroup) ]ドロップダウンリストの値として選択されている場合に、表示されます。

名前	説明
[VMアノテーションの定義 (Define VM Annotation) ] チェック ボックス	

名前	説明
	<p>VM のアノテーションを指定する場合にオンにします。</p> <p>アノテーションの一部としてメモおよびカスタム属性を指定できます。このチェックボックスをオンにした場合は、次のフィールドに値を入力します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• [VM の注記 (VM Annotation) ] フィールド VM の説明を入力します。</li> <li>• カスタム属性 (Custom Attributes) [名前 (Name) ]、[タイプ (Type) ]、および [値 (Value) ] を指定するには、[追加 (Add) ] (+) をクリックします。</li> </ul> <p>以下は、追加できる [カスタム属性 (Custom Attributes) ] の一部です。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• \${VM_HOSTNAME}</li> <li>• \${VM_HOSTNAME_SHORT}</li> <li>• \${VM_HOSTNAME_DOMAIN}</li> <li>• \${VM_IPADDRESS}</li> <li>• \${VM_ID}</li> <li>• \${VM_NAME}</li> <li>• \${VM_STATE}</li> <li>• \${VM_STATE_DETAILS}</li> <li>• \${VM_PARENT}</li> <li>• \${VM_CLOUD}</li> <li>• \${VM_GROUP_NAME}</li> <li>• \${VM_GROUP_ID}</li> <li>• \${VM_VDC_NAME}</li> <li>• \${VM_VDC_ID}</li> <li>• \${VM_SR_ID}</li> <li>• \${VM_SCHED_TERM}</li> <li>• \${VM_TYPE}</li> <li>• \${VM_COMMENTS}</li> <li>• \${VM_CATALOG_ID}</li> </ul>

名前	説明
	<ul style="list-style-type: none"> <li>• \${ INITIATING_USER }</li> <li>• \${ SUBMITTER_EMAIL }</li> <li>• \${ SUBMITTER_FIRSTNAME }</li> <li>• \${ SUBMITTER_LASTNAME }</li> <li>• \${ SUBMITTER_GROUPNAME }</li> <li>• VM の作成の変数 : <ul style="list-style-type: none"> <li>◦ \${ SR_ID }</li> <li>◦ \${ GROUP_NAME }</li> <li>◦ \${ USER }</li> <li>◦ \${ APPCODE }</li> <li>◦ \${ COST_CENTER }</li> <li>◦ \${ UNIQUE_ID }</li> <li>◦ \${ LOCATION }</li> <li>◦ \${ PROFILE_NAME }</li> <li>◦ \${ COMMENTS }</li> <li>◦ \${ CATALOG_NAME }</li> <li>◦ \${ CLOUD_NAME }</li> </ul> </li> </ul> <p>(注) VM の注記として追加した情報は、 [VM の詳細 (VM Details) ] ページで その VM に対して表示されます。</p>

**ステップ 7** [送信 (Submit) ] をクリックします。

## OS ライセンス

Cisco UCS Director は、ユーザが Windows OS ライセンスを追加するためのオプションを提供しています。これらのライセンスは、カタログの作成時に Windows イメージにマッピングされます。VMware システム ポリシーで Windows イメージに対して Windows OS ライセンスを提供する、またはカタログの作成時に OS バージョン フィールドからキーを選択する、というオプションがあります。

## OS ライセンスの追加

### 手順

- ステップ 1** [ポリシー (Policies)] > [仮想/ハイパーバイザ ポリシー (Virtual/Hypervisor Policies)] > [サービスの提供 (Service Delivery)] を選択します。
- ステップ 2** [サービスの提供 (Service Delivery)] ページで [OS ライセンス (OS License)] をクリックします。
- ステップ 3** [追加 (Add)] をクリックします。
- ステップ 4** [ライセンスの詳細の追加 (Add License Details)] 画面で、次のフィールドに値を入力します。

名前	説明
[Windows のバージョン名 (Windows Version Name)] フィールド	Windows バージョン名。
[ライセンス (License)] フィールド	Windows 製品 ID またはライセンス キー。このフィールドは、KMS クライアントセットアップ キーを受け入れます。
[ライセンスの所有者名 (License Owner Name)] フィールド	Windows ライセンスの所有者名。
[組織 (Organization)] フィールド	VM で設定する組織名。
[ライセンスモード (License Mode)] ドロップダウンリスト	シート単位またはサーバ単位が選択できます。
[ライセンス取得済みのユーザ数 (Number of Licensed Users)] フィールド	ライセンス ユーザまたは接続の数。

- ステップ 5** [送信 (Submit)] をクリックします。

## エンドユーザセルフサービスポリシー

エンドユーザセルフサービスポリシーは、ユーザが VDC で実行できるアクションまたはタスクを制御します。このポリシーを作成するには、まずアカウントタイプ（たとえば VMware）を指定します。アカウントタイプを指定したら、続いてポリシーを作成します。ポリシーを作成したら、同じアカウントタイプを使用して作成した vDC に、そのポリシーを割り当てる必要があります。たとえば VMware 用のエンドユーザポリシーを作成した場合は、VMware vDC を作成する場

合にこのポリシーを指定できます。他のアカウントタイプ用に作成したポリシーを表示したり割り当てたりすることはできません。

Cisco UCS Director では、エンドユーザセルフサービスポリシーの作成に加えて、次のタスクを実行できます。

- [表示 (View) ] : ポリシーの概要を表示します。
- [編集 (Edit) ] : [エンドユーザポリシー (End User Policy) ] 画面が開き、説明またはエンドユーザセルフサービス オプションを変更できます。
- [複製 (Clone) ] : [エンドユーザポリシー (End User Policy) ] 画面が開き、既存のエンドユーザセルフサービスポリシーで定義されたパラメータを使用して追加のポリシーを作成できます。
- [削除 (Delete) ] : システムからポリシーを削除します。VDCが割り当てられているポリシーは削除できません。



**重要**

ユーザが VDC で実行できるタスクは、ユーザがマッピングされたロールと、VDC に割り当てられたエンドユーザのセルフサービスポリシーによって定義されます。最新リリースにアップグレードしている場合、VM 管理タスクを実行する権限は、いずれかの既存のエンドユーザのセルフサービスポリシーに保持されます。ただし、ユーザが属するユーザロールに定義されている権限が優先されます。

## エンドユーザポリシーの作成

### 手順

- ステップ 1** [ポリシー (Policies) ] > [仮想/ハイパーバイザポリシー (Virtual/Hypervisor Policies) ] > [サービスの提供 (Service Delivery) ] を選択します。
- ステップ 2** [サービスの提供 (Service Delivery) ] ページで [エンドユーザセルフサービスポリシー (End User Self-Service Policy) ] をクリックします。
- ステップ 3** [追加 (Add) ] をクリックします。
- ステップ 4** [エンドユーザポリシーの追加 (Add End User Policy) ] 画面で、ドロップダウンリストからアカウントタイプを選択します。
- ステップ 5** [送信 (Submit) ] をクリックします。
- ステップ 6** [エンドユーザポリシー (End User Policy) ] 画面で、次のフィールドに値を入力します。

名前	説明
[ポリシー名 (Policy Name) ] フィールド	ポリシーの名前。

名前	説明
[ポリシーの説明 (Policy Description) ] フィールド	ポリシーの説明。
[エンドユーザセルフサービスオプション (End User Self-Service Options) ] フィールド	このポリシーによって割り当てられている VDC でユーザが実行できるタスクの一覧です。 タスクのリストは、[アカウントタイプ (Account Type) ] によって異なります。

**ステップ 7** [送信 (Submit) ] をクリックします。

#### 次の作業

このエンドユーザ ポリシーを VDC に割り当てます。詳細については、[仮想データセンターの追加](#), (264 ページ) を参照してください。

## VM 管理ポリシーの設定

このポリシーは、VDC で VM を管理する方法を定義します。

#### 手順

- ステップ 1** [ポリシー (Policies) ] > [仮想/ハイパーバイザ ポリシー (Virtual/Hypervisor Policies) ] > [サービスの提供 (Service Delivery) ] を選択します。
- ステップ 2** [サービスの提供 (Service Delivery) ] ページで [VM 管理ポリシー (VM Management Policy) ] をクリックします。
- ステップ 3** [追加 (Add) ] をクリックします。
- ステップ 4** [VM 管理ポリシーの追加 (Add VM Management Policy) ] 画面で、次のフィールドに値を入力します。

フィールド	説明
[ポリシー名 (Policy Name) ] フィールド	ポリシーの一意の名前。
[ポリシーの説明 (Policy Description) ] フィールド	ポリシーの説明。
VMリース期限の通知設定	
[VMリース通知の設定 (Configure VM Lease Notification) ] チェック ボックス	リース時間が設定された VM の通知パラメータを設定する場合にオンにします。

フィールド	説明
[通知を送信する、VMリース期限の残り日数 (How many days before VM Lease expiry should notifications be sent) ] フィールド	<p>番号を入力します。</p> <p>この数値は、VM のリース期限が切れる何日前に電子メール通知がVMの所有者に送信されるかを示します。</p>
[通知の送信回数 (How many notifications should be sent) ] フィールド	<p>番号を入力します。</p> <p>この数値は、VM のリースの期限をユーザに通知する電子メール通知の送信回数を示します。</p>
[通知間隔 (Interval between notifications) ] ドロップダウンリスト	<p>ドロップダウンリストから数値を選択します。</p> <p>この数値は、送信される電子メールの通知間隔を定義します。</p>
非アクティブVM管理設定	
[非アクティブな VM を削除するまでの期間 (Delete after inactive VM days) ] フィールド	<p>番号を入力します。</p> <p>この数値は、非アクティブなVMがシステムから削除されるまでの日数を示します。</p> <p>(注) [vDC ポリシーに基づいた非アクティブな VM の削除 (Delete Inactive VMs Based on vDC Policy) ] オプションをプロパティ ペインで選択した場合のみ非アクティブVMは削除されます。このオプションは、[管理者 (Administration) ] &gt; [システム (System) ] &gt; [高度なコントロール (Advanced Controls) ] を選択した際に表示されます。</p>

フィールド	説明
<p>[期限切れVMを削除するまでの猶予期間 (Additional grace period for deleting expired VMs) ] フィールド</p>	<p>番号を入力します。</p> <p>この数値は、システムから非アクティブな VM を削除するまでシステムが待機する日数を示します。</p> <p>(注) [VM の非アクティブ日以降に削除 (Delete after inactive VM days) ] と [期限切れ削除 VM に猶予期間を追加 (Additional grace period for deleting expired Vms) ] フィールドで指定されている時間帯を超えた場合、Cisco UCS Directorにより検出された VM は削除され、また Cisco UCS Director によりプロビジョニングされた VM 用サービス リクエストはロールバックされます。これらのシステム用にプロビジョニングされた VM のロールバックされたサービス リクエスト (SR) 用の新しい電子メールテンプレートが導入されました。</p>
<p>[サービス リクエスト (SR) のロールバック作業が Cisco UCS Director によってプロビジョニングされた VM に失敗したときに実行されるアクション (Action to be taken when a service request (SR) rollback task fails for VMs provisioned through Cisco UCS Director) ] ドロップダウン リスト</p>	<p>サービス リクエスト (SR) のロールバック作業がプロビジョニングされた VM に失敗したときに実行されるアクションを Cisco UCS Director より選択します。次のいずれかのオプションを選択できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 通知を送信して VM を削除する</li> <li>• 通知を送信して VM を削除しない</li> </ul> <p>(注) VM の自動削除 E メール テンプレートで、[ロールバック SR ID (Rollback SR ID) ] という新しいフィールドが導入されました。このフィールドは、Cisco UCS Director によりプロビジョニングされた VM に入力され、Cisco UCS Director により検出された VM のパスワードは空白になります。</p>
<p>[VM削除通知の設定 (Configure VM Delete Notification) ] チェック ボックス</p>	<p>削除される VM に関する通知パラメータを設定する場合にオンにします。</p>

フィールド	説明
[VM削除の事前通知を送信する、削除前の日数 (How many days before VM deletion should notifications be sent) ] フィールド	番号を入力します。 この数値は、VM 削除の何日前に電子メール通知がユーザに送信されるかを示します。
[通知の送信回数 (How many notifications should be sent) ] フィールド	番号を入力します。 この数値は、ユーザに送信される電子メール通知の数を示します。
[通知間隔 (Interval between notifications) ] ドロップダウンリスト	ドロップダウンリストから数値を選択します。 この数値は、送信される電子メールの通知間隔を定義します。

**ステップ 5** [送信 (Submit) ] をクリックします。

#### 次の作業

このポリシーは仮想データセンターにマッピングできます。





# 第 10 章

## 仮想データセンターの管理

この章は、次の項で構成されています。

- [仮想データセンター](#), 263 ページ
- [VDC アクション](#), 264 ページ
- [仮想データセンター サービス プロファイル](#), 270 ページ

### 仮想データセンター

仮想データセンター (VDC) は、仮想リソース、動作の詳細、ルール、およびポリシーを組み合わせて特定のグループの要件を管理する論理グループです。

グループまたは組織は、複数の VDC、イメージ、テンプレート、およびポリシーを管理できます。組織は個々のグループに VDC レベルでクォータを割り当て、リソース制限を割り当てることができます。

また、VDC に固有の承認者を定義できます。特定の VDC に割り当てられた承認者は、ユーザからの VM プロビジョニング サービス要求をすべて承認する必要があります。



(注) Cisco UCS Director にはデフォルト VDC があり、検出された VM はすべてこのデフォルト VDC に属します。検出された VM は、Cisco UCS Director の外部で作成された VM か、または Cisco UCS Director がインストールされる前に VMware vCenter ですでに作成されていた VM です。Cisco UCS Director はこのような VM を自動的に検出し、デフォルト VDC に追加します。

サービス要求を使用してプロビジョニングされた VM を特定の VDC に関連付けることができます。サービス要求を作成するときに、この VM をプロビジョニングする VDC を選択できます。VM のプロビジョニング時には、特定のグループで利用可能な VDC のリストを表示し、必要な VDC を選択できます。

# VDC アクション

## 仮想データセンターの追加

### 手順

- ステップ 1** [ポリシー (Policies)] > [仮想/ハイパーバイザ ポリシー (Virtual/Hypervisor Policies)] > [仮想データセンター (Virtual Data Center)] を選択します。
- ステップ 2** [仮想データセンター (Virtual Data Centers)] ページで [VDC] をクリックします。
- ステップ 3** [追加 (Add)] をクリックします。
- ステップ 4** [VDCの追加 (VDCAdd)] 画面で、ドロップダウンリストからアカウントタイプを選択します。選択したアカウントタイプによって、[VDCの追加 (Add VDC)] 画面に表示されるクラウド名のリストが決定されます。
- ステップ 5** [送信 (Submit)] をクリックします。
- ステップ 6** [VDC の追加 (Add VDC)] 画面で、次のフィールドに入力します。

名前	説明
[VDC 名 (VDC Name)] フィールド	VDC の名前。 次のような特殊文字を使用できます。()&-_`~\$%^{}!'@ (注) 入力後、名前は編集できません。
[ロック済みの vDC (VDC Locked)] チェックボックス	今後の導入で VDC を使用できないようにするには、このチェックボックスをオンにします。今後の導入で VDC を使用できるようにするには、このチェックボックスをオフにします。
[vDC の説明 (VDC Description)] フィールド	VDC に固有の説明。
[グループ (Group)] ドロップダウンリスト	[選択 (Select)] をクリックして、VDC がセットアップされるグループのチェックボックスをオンにします。
[クラウド名 (Cloud Name)] ドロップダウンリスト	VDC の設定対象クラウドを選択します。 このドロップダウンリストで選択可能なオプションは、指定したアカウントタイプによって決まります。
承認者と連絡先	

名前	説明
[第1レベル承認者 (First Level Approver(s)) ] フィールド	第1レベルでサービスリクエストを承認する必要があるユーザ。  [選択 (Select) ]をクリックして、該当するユーザのチェックボックスをオンにします。複数のユーザを選択できます。
[第2レベル承認者 (Second Level Approver(s)) ] フィールド	第2レベルでサービスリクエストを承認する必要があるユーザ。  [選択 (Select) ]をクリックして、該当するユーザのチェックボックスをオンにします。複数のユーザを選択できます。
[すべてのユーザからの承認が必要 (Approval Required from all users) ] チェック ボックス	第1レベルおよび第2レベルの承認担当者として選択されたすべてのユーザからの承認を必要とする場合は、このチェックボックスをオンにします。
[承認依頼通知の数 (Number of Approval Requests Reminders) ] フィールド	サービスリクエストを承認するよう通知する電子メールを承認担当者に送信する回数。  デフォルトでは、サービスリクエストが承認または拒否されるまで、24時間ごとに1回通知電子メールを送信します。
[通知間隔 (時間) (Reminder Interval (Hours)) ] フィールド	承認担当者に通知電子メールを送信する時間間隔。  デフォルトでは、24時間ごとに1回通知電子メールを送信します。
[プロバイダーのサポート用電子メールアドレス (Provider Support Email Address) ] フィールド	連絡先またはユーザの電子メールアドレス。この VDC を使用した VM のプロビジョニングに関する通知を受信するユーザ。
[電子メールアドレスへの通知をコピー (Copy Notifications to Email Address) ] フィールド	この VDC に関する通知をコピーする2番目の連絡先の電子メールアドレス。
ポリシー	
[システムポリシー (System Policy) ] ドロップダウンリスト	VDC に適用できるシステムポリシーを選択します。
[コンピューティングポリシー (Computing Policy) ] ドロップダウンリスト	VDC に適用できるコンピューティングポリシーを選択します。

名前	説明
[ネットワーク ポリシー (Network Policy) ] ドロップダウン リスト	VDC に適用できるネットワーク ポリシーを選択します。
[ストレージポリシー (Storage Policy) ] ドロップダウン リスト	VDC に適用できるストレージポリシーを選択します。
[ISO イメージマッピングポリシー (ISO Image Mapping Policy) ] ドロップダウン リスト	VDC に適用する ISO イメージのマッピング ポリシーを選択します。
[コスト モデル (Cost Model) ] ドロップダウン リスト	VDC に適用できるコストモデルを選択します。
[コスト明細の表示を無効化 (Disable displaying cost details) ] チェック ボックス	<p>この VDC の以下のページで、コスト明細の表示を無効にするには、このチェック ボックスをオンにします。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• [サービス リクエストの作成 (Create Service Request) ] ウィザード</li> </ul> <p>[導入設定 (Deployment Configuration) ] ペイン、[カスタム仕様 (Custom Specification) ] ペイン、および [概要 (Summary) ] ペインにはコスト情報は表示されません。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 特定の VM アクション ページ : [VM サイズ変更 (VM resize) ]、[VM ディスクのサイズ変更 (Resize VM disk) ]、および [VM ディスクの作成 (Create VM disk) ]。</li> <li>• 電子メール通知</li> </ul>
[ユーザアクションポリシー (User Action Policy) ] ドロップダウン リスト	VM のプロビジョニング後のオーケストレーション ワークフローを実行するために使用するポリシーを選択します。選択されたワークフローは、VDC 内の VM に対するアクション ボタンとして表示されます。
[VM 管理ポリシー (VM Management Policy) ] ドロップダウン リスト	<p>VDC の VM 管理ポリシーを設定します。</p> <p>このポリシーは、VDC で VM を管理する方法を定義します。</p>

名前	説明
[ストレージの効率性の有効化 (Enable Storage Efficiency) ] チェック ボックス	RCUを使用してVMを複製する場合は、チェック ボックスをオンにします。  このオプションは、一部の VDC タイプでのみ使用できます。
[エンド ユーザ セルフサービス ポリシー (End User Self-Service Policy) ]	VDCのセルフサービスポリシーを選択します。このポリシーによって、VDCで実行できるタスクまたはアクションが定義されます。  (注) このドロップダウンリストには、作成する VDC に対応するアカウントタイプに関連するポリシーが表示されません。  ユーザが VDC で実行できるタスクは、ユーザがマッピングされたロールと、VDC に割り当てられたエンド ユーザのセルフサービス ポリシーによって定義されます。最新リリースにアップグレードしている場合、VM 管理タスクを実行する権限は、いずれかの既存のエンド ユーザのセルフサービス ポリシーに保持されます。ただし、ユーザが属するユーザ ロールに定義されている権限が優先されます。

**ステップ 7** [追加 (Add) ] をクリックします。

(注) VM のユーザは、次のタスクを実行できなくなりました。

- VM の移行
- スタック ビューの使用
- VM の割り当て

### 次の作業

追加した VDC は、ユーザ インターフェイスのオプションを選択して編集、複製、または削除できます。

## 仮想データセンターの表示

### 手順

- 
- ステップ 1 [ポリシー (Policies)] > [仮想/ハイパーバイザ ポリシー (Virtual/Hypervisor Policies)] > [仮想データセンター (Virtual Data Center)] を選択します。
  - ステップ 2 [仮想データセンター (Virtual Data Centers)] ページで VDC グループを選択します。
  - ステップ 3 [仮想データセンター (Virtual Data Centers)] ページで [VDC] をクリックします。
  - ステップ 4 表示する VDC を含む行を選択します。
  - ステップ 5 [表示 (View)] をクリックして、[VDC の詳細 (VDC Details)] 画面を開きます。
- 

## 仮想データセンターのアプリケーション カテゴリの管理

### 手順

- 
- ステップ 1 [ポリシー (Policies)] > [仮想/ハイパーバイザ ポリシー (Virtual/Hypervisor Policies)] > [仮想データセンター (Virtual Data Center)] を選択します。
  - ステップ 2 [仮想データセンター (Virtual Data Centers)] ページで VDC グループを選択します。
  - ステップ 3 [仮想データセンター (Virtual Data Centers)] ページで [VDC] をクリックします。
  - ステップ 4 編集する VDC を含む行を選択します。
  - ステップ 5 [カテゴリの管理 (Manage Categories)] をクリックします。
  - ステップ 6 [アプリケーションカテゴリの編集 (Edit App Category)] 画面で、システムポリシー、コンピューティングポリシー、ネットワークポリシー、またはストレージポリシーの変更を適用するために該当するフィールドをすべて編集します。コストモデルとスマート割り当てポリシーも変更できます。
  - ステップ 7 [保存 (Save)] をクリックします。
- 

## 複数の VDC へのアプリケーション カテゴリの割り当て

複数の VDC にアプリケーション カテゴリを割り当てることができます。

## 手順

- ステップ 1** [仮想 (Virtual) ] > [コンピューティング (Compute) ] を選択します。
- ステップ 2** [コンピューティング (Compute) ] ページでクラウドを選択します。
- ステップ 3** [コンピューティング (Compute) ] ページで [アプリケーションカテゴリ (Application Categories) ] をクリックします。
- ステップ 4** 1 つ以上の VDC に割り当てるアプリケーションカテゴリを含む行をクリックします。
- ステップ 5** [アプリケーションカテゴリの割り当て (Assign App Category) ] をクリックします。
- ステップ 6** [アプリケーションカテゴリの割り当て (Assign Application Category) ] 画面で、[+] をクリックして、複数の VDC にポリシーをマッピングします。  
[アプリケーションカテゴリ割り当て (Assign Application Category) ] 画面に、以前に VDC に割り当てられたすべてのアプリケーションカテゴリのリストが表示されます。割り当てられたアプリケーションカテゴリを選択し、VDC から編集、削除できます。
- ステップ 7** [複数の VDC にポリシーをマッピングするエントリを追加 (Add Entry to Map Policies to Multiple VDCs) ] 画面で、次のフィールドに値を入力します。

名前	説明
<b>ポリシー</b>	
[システムポリシー (System Policy) ] ドロップダウンリスト	ドロップダウンリストからシステムポリシーを選択します。
[コンピューティングポリシー (Computing Policy) ] ドロップダウンリスト	ドロップダウンリストからコンピューティングポリシーを選択します。
[ストレージポリシー (Storage Policy) ] ドロップダウンリスト	ドロップダウンリストからストレージポリシーを選択します。
[スマート割り当てポリシー (Smart Allocation Policy) ] ドロップダウンリスト	ドロップダウンリストからスマート割り当てポリシーを選択します。
[ネットワークポリシー (Network Policy) ] ドロップダウンリスト	ドロップダウンリストからネットワークポリシーを選択します。
[コストモデル (Cost Model) ] ドロップダウンリスト	ドロップダウンリストからコストモデルを選択します。  クラウドのすべてのコストモデルは、このドロップダウンリストに表示されます。
<b>VDC</b>	

名前	説明
[VDC の選択 (Select VDCs) ] フィールド	[選択 (Select) ] をクリックし、ポリシーをマッピングする VDC のチェック ボックスをオンにします。  (注) 選択したクラウドに含まれる VDC が表示されます。  選択した VDC にすでにマッピングされたポリシーがある場合、警告メッセージが表示されます。
[マッピングされた VDC にポリシーを上書きする (Overwrite policies for mapped VDCs) ] チェック ボックス	選択した VDC にマッピングされているポリシーを上書きする場合に、このチェック ボックスをオンにします。

**ステップ 8** [送信 (Submit) ] をクリックします。

**ステップ 9** [アプリケーションカテゴリの割り当て (Assign Application Category) ] 画面で、[送信 (Submit) ] をクリックします。

## 仮想データセンター サービス プロファイル

仮想データセンター サービス プロファイルは VDC に似ています。ただし、VDC サービス プロファイルを作成する必要があるのは、ゴールド、シルバー、およびブロンズの VDC などのワークフロー タスクから VDC を作成する場合だけです。

## 仮想データセンター サービス プロファイルの追加

### 手順

- ステップ 1** [ポリシー (Policies) ] > [仮想/ハイパーバイザ ポリシー (Virtual/Hypervisor Policies) ] > [仮想データセンター (Virtual Data Center) ] を選択します。
- ステップ 2** [仮想データセンター (Virtual Data Centers) ] ページで [VDC サービス プロファイル (VDC Service Profiles) ] をクリックします。
- ステップ 3** [追加 (Add) ] をクリックします。
- ステップ 4** [VDC サービス プロファイルの追加 (Add VDC Service Profile) ] 画面で、次のフィールドに値を入力します。

名前	説明
[vDC プロファイル名 (VDC Profile Name) ] フィールド	VDC プロファイルの名前。 入力後、名前は編集できません。
[ロック済みのvDC] チェックボックス	今後の導入で VDC を使用できないようにするには、このチェックボックスをオンにします。この VDC 内の既存の VM に対するアクションは無効になります。今後の導入で VDC を使用できるようにするには、このチェックボックスをオフにします。
[vDC の説明 (VDC Description) ] フィールド	VDC に固有の説明。
[グループ (Group) ] ドロップダウン リスト	VDC の設定対象グループを選択します。
[クラウド名 (CloudName) ] ドロップダウン リスト	VDC の設定対象クラウドを選択します。
承認者と連絡先	
[第 1 承認者のユーザ名 (First Approver User Name) ] フィールド	第 1 レベルでサービスリクエストを承認する必要があるユーザ。  [選択 (Select) ] をクリックして、該当するユーザのチェックボックスをオンにします。複数のユーザを選択できます。
[第 2 承認担当者のユーザ名 (Second Approver User Name) ] フィールド	第 2 レベルでサービスリクエストを承認する必要があるユーザ。  [選択 (Select) ] をクリックして、該当するユーザのチェックボックスをオンにします。複数のユーザを選択できます。
[すべてのユーザからの承認が必要 (Approval Required from all users) ] チェック ボックス	第 1 レベルおよび第 2 レベルの承認担当者として選択されたすべてのユーザからの承認を必要とする場合は、このチェックボックスをオンにします。
[承認依頼通知の数 (Number of Approval Requests Reminders) ] フィールド	サービスリクエストを承認するよう通知する電子メールを承認担当者に送信する回数。  デフォルトでは、サービスリクエストが承認または拒否されるまで、24 時間ごとに 1 回通知電子メールを送信します。

名前	説明
[通知間隔 (時間) (Reminder Interval (Hours)) ] フィールド	承認担当者に通知電子メールを送信する時間間隔。  デフォルトでは、24 時間ごとに 1 回通知電子メールを送信します。
[プロバイダーのサポート用電子メールアドレス (Provider Support Email Address) ] フィールド	連絡先またはユーザの電子メールアドレス。この VDC を使用した VM のプロビジョニングに関する通知を受信するユーザ。
[電子メールアドレスへの通知をコピー (Copy Notifications to Email Address) ] フィールド	この VDC に関する通知をコピーする 2 番目の連絡先の電子メール。
ポリシー	
[システム ポリシー (System Policy) ] ドロップダウン リスト	VDC サービス プロファイルに適用できるシステム ポリシーを選択します。
[コンピューティング ポリシー (Computing Policy) ] ドロップダウン リスト	VDC サービス プロファイルに適用できるコンピューティング ポリシーを選択します。
[ネットワーク ポリシー (Network Policy) ] ドロップダウン リスト	VDC サービス プロファイルに適用できるネットワーク ポリシーを選択します。
[ストレージポリシー (Storage Policy) ] ドロップダウン リスト	VDC サービス プロファイルに適用できるストレージポリシーを選択します。
[コスト モデル (Cost Model) ] ドロップダウン リスト	VDC サービス プロファイルに適用できるコスト モデルを選択します。
[サービスリクエストサマリーと電子メールページへのコストの表示を無効化 (Disable displaying cost in the SR summary and email page) ] チェックボックス	この VDC のサービスリクエストサマリーと電子メールページでのコストの表示を無効にするには、このチェックボックスをオンにします。
[ユーザアクションポリシー (User Action Policy) ] ドロップダウン リスト	VM のプロビジョニング後のオーケストレーションワークフローを実行するために使用するポリシーを選択します。選択されたワークフローは、VDC 内の VM に対するアクションボタンとして表示されます。
エンド ユーザ セルフサービス オプション	

名前	説明
[VM の電力管理 (VM Power Management) ] チェック ボックス	この VDC に属している VM に対してすべての VM 電源管理アクションを実行できるようにするには、このチェック ボックスをオンにします。
[VM のサイズ変更 (VM Resize) ] チェック ボックス	この VDC に属している VM に対して VM サイズ変更アクションを実行できるようにするには、このチェック ボックスをオンにします。
[VM スナップショット管理 (VM Snapshot Management) ] チェック ボックス	この VDC の VM に対してすべてのストレージスナップショットアクションを実行できるようにするには、このチェック ボックスをオンにします。
[VM の削除 (VM Deletion) ] チェック ボックス	この VDC の VM に対して VM 削除アクションを実行できるようにするには、このチェック ボックスをオンにします。
[VM ディスク管理] チェックボックス	この VDC の VM に対して VM ディスク管理を実行できるようにするには、このチェック ボックスをオンにします。
[VM ネットワーク管理 (VM Network Management) ] チェック ボックス	この VDC に属している VM に対してネットワーク管理を実行できるようにするには、このチェック ボックスをオンにします。
[非アクティブな VM を削除するまでの期間 (Delete after Inactive VM days) ] ドロップダウン リスト	非アクティブな VM を削除するまでの、非アクティブな状態の経過日数を選択します。非アクティブ状態の VM とは、電源がオンの状態ではない VM です。

**ステップ 5** [追加 (Add) ] をクリックします。





## 第 11 章

# リソース グループの管理

この章は、次の項で構成されています。

- [リソース グループ](#), 275 ページ
- [テナント](#), 304 ページ
- [提供サービス](#), 305 ページ
- [テナント プロファイル](#), 321 ページ

## リソース グループ

リソース グループを使用することで、アプリケーションの要件に応じてテナント向けに適切なリソースを選択することができます。提供サービス、テナントプロファイル、アプリケーションプロファイル、リソースグループなどの追加の概念はすべて必須です。これらのリソースグループの概念を使用することで、リソースの動的な選択に基づいてテナントをオンボーディングしたり、アプリケーションを導入したりできます。複数のテナントのリソースグループでリソースを共有することも、リソースを特定のテナント専用にすることもできます。

リソース グループは、リソースのプールです。各グループに物理インフラストラクチャリソース、仮想インフラストラクチャリソースを含めたり、物理インフラストラクチャリソースと仮想インフラストラクチャリソースを組み合わせたりできます。リソースグループを使用すると、最小限の手作業で Cisco UCS Director へのテナントのオンボーディングを実行できます。

インフラストラクチャ管理者またはシステム管理者は、リソース グループに物理アカウントまたは仮想アカウントを一度に 1 つずつ追加できます。また、リソース グループにポッドを追加して、そのポッド内のすべてのアカウントをそのリソース グループに追加できます。リソース グループへのポッドの割り当てに関する詳細については、[リソース グループへのポッドの追加](#)、(301 ページ) を参照してください。

アカウントをリソースグループに追加すると、デフォルトでそのリソースグループは、そのアカウントのオブジェクトのすべてのキャパシティと機能を、リソースグループエンティティのキャパシティおよび機能として通知します。Cisco UCS Director を使用すれば、リソースグループから特定の容量または機能を選択的に無効にできます。

## 環境変数

環境変数は、リソースごとに設定できます。これらの環境変数は、テナント オンボーディングとアプリケーションの導入のプロビジョニング中に使用されます。

仮想アカウントと物理アカウントの両方に対するデフォルトの環境変数は次のように設定することができます。さらに、環境変数を Cisco UCS Director に追加し、その環境変数をリソースグループで使用することもできます。環境変数の追加方法の詳細については、[カスタム環境変数の追加](#) (287 ページ) を参照してください。



(注) リストされた環境変数がすべてのワークフローに必要なというわけではありません。必須である環境変数のサブセットは、使用例と実行する具体的なワークフローによって異なります。

### 仮想コンピューティングの環境変数

環境変数	説明	サンプル値
コンテナの親フォルダ	新たに作成したコンテナを追加するフォルダ。	<i>APIC</i>
IP サブネット プールポリシー	APIC コンテナは Cisco UCS Director で定義された IP サブネットプールポリシーを使用します。コンテナ内部の階層ごとに、IP サブネットプールポリシーからの固有のサブネットアドレスが割り当てられます。この環境変数はコンテナ プロビジョニングに使用されます。	<i>IP-Pool</i>

### 仮想ストレージの環境変数

仮想ストレージには、環境変数は必要ありません。

## 仮想ネットワークの環境変数

環境変数	説明	サンプル値
VMware 用の VMM ドメイン	<p>VMware vCenter は、Virtual Machine Manager (VMM) ドメインを使用して設定された ACI-vCenter です。VMware vCenter が Cisco APIC に関連付けられている場合は、同じ名前の分散仮想スイッチ (DVS) が VMware vCenter に作成されます。この環境変数はテナントオンボーディングに使用されます。</p> <p>VXLAN モードで AVS をサポートするには、Cisco AV スイッチのある VMM ドメインを選択します。</p> <p>Cisco UCS Director は、VLAN および VXLAN の両方のモードで AVS をサポートします。VM は、VMM ドメインに割り当てられたプールから VLAN ID または VXLANID を取得します。</p>	<i>ACI-Bldg4-1-vCenter</i>
DV スイッチ	<p>要件に応じて DV スイッチまたは Cisco AV スイッチを選択します。</p> <p>DV スイッチは、vCenter アカウントで使用することができ、オンボーディング中に選択されたホストを接続するために使用されます。</p> <p>Cisco AV スイッチは、VXLAN モードで AVS をサポートするために使用されます。</p> <p>この環境変数はテナントオンボーディングに使用されます。</p>	<i>virt_switch</i>

## 物理コンピューティングの環境変数

環境変数	説明	サンプル値
UCS の物理ドメイン	Cisco UCS の物理ドメイン。この環境変数はベア メタル プロビジョニングに使用されます。	<i>Phys</i>
VLAN プール	アカウントの VLAN ID の割り当て元の VLAN プール。	<i>ACI3-Eng-VLAN-Pool</i>
iSCSI PXE のブート サービス プロファイル テンプレート。	ベア メタルをプロビジョニングするホスト サービス プロファイルの作成に使用されるテンプレート。この環境変数は NetApp ストレージシステムのベア メタル プロビジョニングに使用されます。	<i>DR_UCSM;org-root;org-root/l s-ACI-DR-Hosts</i>
フル幅ブレード用のサービス プロファイル テンプレート	サービス プロファイル テンプレートは、サービス プロファイルの作成に使用されます。サービス プロファイルが作成されると、ソフトウェアは、サービス プロファイル テンプレートに関連付けられたサーバ プールから空きサーバを識別して選択します。この環境変数は VNX テナント オンボーディングに使用されます。	<i>VNX_UCSM;org-root/l s-PSC-FullBlade-Template</i>
ハーフ幅ブレード用のサービス プロファイル テンプレート	サービス プロファイル テンプレートは、サービス プロファイルの作成に使用されます。サービス プロファイルが作成されると、ソフトウェアは、サービス プロファイル テンプレートに関連付けられたサーバ プールから空きサーバを識別して選択します。この環境変数は VNX テナント オンボーディングに使用されます。	<i>VNX_UCSM;org-root/l s-PSC-HalfBlade-Template</i>

環境変数	説明	サンプル値
IQN プール	Cisco UCS ドメイン内の iSCSI vNIC がイニシエータ修飾子として使用する iSCSI 修飾名 (IQN) を含む IQN プール。IQN プールはサービスプロファイル iSCSI ブートポリシーを作成するために使用されます。この環境変数は NetApp ストレージシステムのベアメタルプロビジョニングに使用されます。	<i>IQN_Pool</i>
ブートポリシー	物理コンピューティングアカウントのブートポリシー。この環境変数は VNX タイプアカウントに使用されます。	<i>VNX_UCSM;org-root;org-root//boot-policy-SAN_NEW</i>
VLAN	物理コンピューティングアカウントの VLAN。この環境変数は VNX タイプアカウントに使用されます。	<i>VNX_UCSM;fabric/lan/net-MGT-ACI-POOL</i>

## 物理ストレージ環境変数

環境変数	説明	サンプル値
NetApp 用の物理ドメイン	APIC への NetApp アカウントの接続に使用される物理ドメイン。この環境変数はテナントオンボーディングに使用されません。	topology/pod-1/paths-201/pathep-[eth1/36] <ul style="list-style-type: none"> <li>• Pod-1 : APIC アカウントのポッド ID。</li> <li>• Paths-201 : NetApp コントローラが接続されるリーフのノード ID。</li> <li>• Pathep-[eth1/36] : NetApp コントローラが接続されるポート。</li> </ul>

環境変数	説明	サンプル値
NetApp 静的パス	この静的パスは、NetApp クラスタ ノードが接続されている APIC のポートを定義します。この環境変数は、テナント オンボーディング中にエンドポイント グループ (EPG) にスタティック パスを追加するために使用されます。	<i>topology/pod-1/node-302/sys/cdp/inst/if-[eth1/47]adj-1</i>
VLAN プール	クラスタの vServer の作成に使用される VLAN プール。この環境変数はテナント オンボーディングに使用されます。	<i>Vlan_pool</i>
SP ポート	物理ストレージアカウントのストレージプロセッサ (SP) ポート。この環境変数は VNX タイプアカウントに使用されます。	<i>VNX-POD;VNX_BLOCK;A-0;50:06:01:60:88:60:1B:6A:50:06:01:60:08:60:1B:6A;VNX-POD;VNX_BLOCK;A-1;50:06:01:60:88:60:1B:6A:50:06:01:61:08:60:1B:6A</i>
複製ストレージグループ	物理ストレージアカウントの複製ストレージグループ。この環境変数は VNX タイプアカウントに使用されます。	
NFS VLAN プール	この環境変数は、VLAN プールの定義に使用されます。個々の VLAN は、このプールから物理ストレージアカウントに動的に割り当てられます。	<i>NetApp-vlan-pool</i>
SVM mgmt VLAN プール	ストレージ仮想マシン (SVM) の管理用の VLAN プール。	<i>NetApp-vlan-pool</i>
iSCSI_A VLAN プール	VLAN が iSCSI_A VLAN として選択される VLAN プール。	<i>NetApp-vlan-pool</i>
iSCSI_B VLAN プール	VLAN が iSCSI_B VLAN として選択される VLAN プール。	<i>NetApp-vlan-pool</i>
ノード 1 用の APIC vPC 静的パス	ノード 1 用の仮想ポート チャネル (vPC) の静的パス。	<i>topology/pod-1/path-101/pathep-[PGr-FAS-A]</i>

環境変数	説明	サンプル値
ノード 2 用の APIC vPC 静的パス	ノード 2 用の仮想ポートチャネル (vPC) の静的パス。	<i>topology/pod-1/path-101/pathep-[PGr-FAS-B]</i>
NFS IP サブネットプールポリシー	NFS のサブネット IP プールポリシー。	<i>ip_nfs_subnet_pool</i>
iSCSI_A IP サブネットプールポリシー	最初の iSCSI VLAN に使用される IP サブネットプールポリシー。	<i>NetApp_ISCSI_A_Subnet_pool</i>
iSCSI_B IP サブネットプールポリシー	2 番目の iSCSI VLAN に使用される IP サブネットプールポリシー。	<i>NetApp_ISCSI_B_Subnet_pool</i>
SVM mgmt IP サブネットプールポリシー	SVM の管理用のサブネット IP プールポリシー。	<i>netapp_svm_subnet_pool</i>
VMNet IP サブネットプールポリシー	VM ネットワークのサブネット IP プールポリシー。	<i>VMNet_IP_Subnet_pool_policy</i>
ノード 1 用の APIC VLAN プール	ノード 1 用の VLAN ID 割り当て元の APIC VLAN プール。	<i>NetApp-Pool</i>
ノード 2 用の APIC VLAN プール	ノード 2 用の VLAN ID 割り当て元の APIC VLAN プール。	<i>NetApp-Pool</i>
クラスタ ノード 1 ID	最初の Netapp C モードアカウント ノードの ID。	<i>ACI2-CMODE-01</i>
クラスタ ノード 2 ID	2 番目の Netapp C モードアカウント ノードの ID。	<i>ACI2-CMODE-02</i>
デフォルトのリカバリ ポイント	VNX アカウントに接続されているリカバリ ポイント。	<i>RP</i>
リカバリ ポイントのクラスタ ID	VNX アカウントに接続されているリカバリ ポイントの ID。	<i>RP@1649417791</i>

## 物理ネットワークの環境変数

環境変数	説明	サンプル値
IP プール	NetApp データストアとホスト VM カーネル間の IP アドレスの割り当てに使用される IP プール。この環境変数はテナント オンボーディングに使用されます。	<i>IP_pool</i>
PXE サーバの IP プール	Preboot eXecution Environment (PXE) サーバの IP プール。この環境変数はベア メタル プロビジョニングに使用されます。	<i>pxe_ip_new11</i>
BMA EPG エンティティ	Cisco UCS Director ベアメタル エージェントのエンドポイント グループ (EPG) エンティティ。この環境変数はベア メタル プロビジョニングに使用されます。	<i>VNX_APIC185@common@BMA-AP@PSC_BMA</i>
FI A への接続	FlexPod の物理セットアップを設定する場合、ファブリック相互接続 (FI) A - NXOS スイッチ 1 接続と、FI B - NXOS スイッチ 2 接続に VSAN が作成されます。BMA プロビジョニングでは、ゾーン分割が FI A - NXOS コントローラ用に設定されます。Cisco Nexus スイッチが Cisco UCS FIA に接続することを指定する場合は、この環境変数を選択します。この環境変数は、MDS スイッチに表示されます。	はい
LB の物理ドメイン	ロード バランサ サービスを使用するために必要な物理ドメイン。	<i>Phy_LB_Domain</i>
物理 LB パス	ロード バランサ サービスの物理パス。	<i>topology/pod-1/node-101/sys/cdp/inst/if-[eth1/12]/adj-1</i>

環境変数	説明	サンプル値
DPC 静的パス 1	最初の Direct Port Channel (DPC) の静的パス。	<i>topology/pod-1/paths-302/ pathep-[PC_Policy_1Gb]</i>
DPC の静的パス 2	2 番目の DPC の静的パス。	<i>topology/pod-1/paths-303/ pathep-[PC_Policy_1Gb]</i>
L3Out へのパス 1	ACI リーフから外部ルータへの最初の中継パス。	<i>topology/pod-1/protopaths- 103-104/pathep-[ifs-n3k-b_PolGrp]</i>
L3Out へのパス 2	ACI リーフから外部ルータへの 2 番目の中継パス。	<i>topology/pod-1/protopaths- 103-104/pathep-[ifs-n3k-a_PolGrp]</i>
L2 物理ドメイン	レイヤ 2 の物理ドメイン。この環境変数は、EPG の中継を設定するために使用されます。	<i>L2-2960</i>
IP サブネット プール ポリシー	サブ インターフェイスの IP アドレスの取得に使用されるプール ポリシー。	<i>lpsubnetpoolpolicy</i>
L3 VLAN プール	外部ルータと ACI ファブリック間の通信で使用する VLAN ID を取得するために使用されるプール。この環境変数は、外部ルーテッド ネットワークを設定するために使用されます。	<i>L3out_Pool</i>
L2 中継 VLAN プール	中継 EPG の VLAN ID を取得するために使用されるプール。この環境変数は、中継 EPG を作成するために使用されます。	<i>L2out_Pool</i>
ノード	APIC アカウントのリーフ ノード。この環境変数は、中継 EPG を作成するために使用されます。	<i>topology/pod-1/node-302</i>
ルーテッド サブインターフェイス パス	リーフ ノードの選択に基づくサブ インターフェイス ルーテッドパス。	<i>topology/pod-1/paths-303/pathep- [eth1/47], topology/pod-1/paths-303/pathep- [eth1/48], topology/pod-1/paths-302/pathep- [eth1/47] topology/pod-1/paths-302/pathep- [eth1/48]</i>

環境変数	説明	サンプル値
Nexus スイッチ	APIC アカウントの Nexus スイッチ。	<i>192.0.232.166, 192.0.232.167</i>
ループバック IP サブネット プール ポリシー	ループバックの IP アドレスの取得に使用されるプール ポリシー。	<i>loop_back_ip_pool_policy</i>
L3 ドメイン	APIC アカウントのレイヤ 3 ドメイン。この環境変数は、外部ルーテッドネットワークを設定するために使用されます。	<i>Phy_L3out_domain</i>
ルータ IP プール	外部レイヤ 3 ネットワークのルータにルータ ID を設定するための IP プール。この環境変数は、外部ルーテッドネットワークを設定するために使用されます。	<i>IP_pool</i>
LB クラスタ IP プール	ロードバランサ デバイス クラスタのクラスタ管理 IP アドレスを提供するための IP プール。	<i>IP_pool</i>
SVI パス	外部レイヤ 3 ネットワークのルータに APIC を接続するインターフェイス。この環境変数は、外部ルーテッドネットワークを設定するために使用されます。	<i>topology/pod-1/protopaths-101-102/ /pathep-[vpcPG_eclacifwi001-2_DATA</i>
SVI IP プール	APIC リーフのスイッチ仮想インターフェイス (SVI) を設定するためのサブネット。この環境変数は、外部ルーテッドネットワークを設定するために使用されます。	<i>IP_pool</i>



(注) 次の環境変数は、Cisco UCS Director リリース 5.4 ではサポートされません。IP Subnet Pool Policy、iSCSI PXE Boot Service Profile Template、IQN Pool、Replication Storage Group、PXE Server IP Pool、BMA EPG Entity、Physical domain for LB、Physical LB Path。

VNX テナントのオンボーディングに定義する必要がある環境変数は次のとおりです。

- 物理コンピューティング : Cisco UCS Manager
  - フル幅ブレード用のサービス プロファイル テンプレート
  - ハーフ幅ブレード用のサービス プロファイル テンプレート
- EMC VNX Unified
  - SP ポート
- VMware アカウント
  - DV スイッチ - 仮想ネットワーク
  - VMware 用の VMM ドメイン - 仮想ネットワーク
- APIC (物理ネットワーク)
  - DPC 静的パス 1 (L2 構成の場合)
  - DPC 静的パス 2 (L2 構成の場合)
  - L2 物理ドメイン (L2 構成の場合)
  - IP サブネット プール ポリシー (L3 構成の場合)
  - L3 VLAN プール (L3 構成の場合)
  - ルーテッド サブインターフェイス パス (L3 構成の場合)
  - ノード (L3 構成の場合)
  - Nexus スイッチ (L3 構成の場合)
  - ループバック IP サブネット プール ポリシー (L3 構成の場合)

Cisco UCS Director および FlexPod の Cisco 検証済みデザイン (CVD) に基づき、FlexPod テナントのオンボーディングに定義する必要がある環境変数は次のとおりです。

- APIC アカウント
  - IP プール
- NetApp
  - VLAN プール

- NetApp 用の物理ドメイン
  - NFS VLAN プール
  - SVM mgmt VLAN プール
  - ノード 1 用の APIC vPC 静的パス
  - ノード 2 用の APIC vPC 静的パス
  - NFS IP サブネット プール ポリシー
  - SVM mgmt IP サブネット プール ポリシー
  - VMNet IP サブネット プール ポリシー
  - ノード 1 用の APIC VLAN プール
  - ノード 2 用の APIC VLAN プール
  - クラスタ ノード 1 ID
  - クラスタ ノード 2 ID
  - iSCSI\_A VLAN プール
  - iSCSI\_B VLAN プール
  - iSCSI\_A IP サブネット プール ポリシー
  - iSCSI\_B IP サブネット プール ポリシー
- VMware アカウント
    - DV スイッチ
    - VMware 用の VMM ドメイン - 仮想ネットワーク

NetApp テナントのオンボーディング（廃止）に定義する必要がある環境変数は次のとおりです。

- APIC アカウント
  - IP プール
- NetApp
  - VLAN プール
  - NetApp 静的パス
  - NetApp 用の物理ドメイン
- 仮想ネットワーク
  - DV スイッチ
  - VMware 用の VMM ドメイン

## カスタム環境変数の追加

リソースグループおよびワークフローで使用する環境変数を定義することができます。ユーザ定義の環境変数のタイプはカスタムになります。

### 手順

- ステップ 1** [ポリシー (Policies)] > [リソースグループ (Resource Groups)] を選択します。
- ステップ 2** [リソースグループ (Resource Groups)] ページで [環境変数 (Environment Variables)] をクリックします。
- ステップ 3** 環境変数が含まれている行をクリックして [表示 (View)] をクリックし、環境変数の名前、変数タイプ、および ID タイプを表示します。
- ステップ 4** 環境変数を含んだ行をクリックして [削除 (Delete)] をクリックし、環境変数を削除します。削除できるのは、カスタムというカテゴリーの、ユーザ定義の環境変数のみです。
- ステップ 5** [追加 (Add)] をクリックします。
- ステップ 6** [リソースグループの環境変数 (Resource Group Environment Variable)] 画面で、次のフィールドに値を入力します。

名前	説明
[カスタム環境変数名 (Custom Environment Name)] フィールド	環境変数の名前。
[説明 (Description)] フィールド	環境変数の説明。
[リソースタイプ (Resource Type)] ドロップダウンリスト	<p>環境変数のリソースタイプとして、次のいずれかを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• VIRTUAL_COMPUTE</li> <li>• VIRTUAL_NETWORK</li> <li>• VIRTUAL_STORAGE</li> <li>• PHYSICAL_COMPUTE</li> <li>• PHYSICAL_STORAGE</li> <li>• PHYSICAL_NETWORK</li> </ul> <p>この環境変数は、選択したリソースタイプのカテゴリになります。</p>

名前	説明
[入力タイプ (Input Type) ] フィールド	[入力タイプ (Input Type) ]を展開し、ユーザが環境変数に使用する変数タイプをオンにします。変数のタイプはテキスト、変数リスト (LoV)、複数選択、テーブル、およびポップアップテーブルにできます。

- ステップ 7** [送信 (Submit) ] をクリックします。  
追加されたカスタム 環境変数のリストが、[環境変数 (Environment Variables) ] ページに表示されます。このカスタム環境変数は、リソース グループに追加することができます。

## リソース グループの追加

### はじめる前に

IP サブネット プール ポリシーと VLAN プール ポリシーが定義され、環境内でそのポリシーが使用されることを確認します。リソース グループの追加時に、[環境変数にエントリを追加 (Add Entry to Environment Variables) ] 画面でポリシーを追加することもできます。

### 手順

- ステップ 1** [ポリシー (Policies) ] > [リソース グループ (Resource Groups) ] を選択します。
- ステップ 2** [リソース グループ (Resource Groups) ] ページで [リソース グループ (Resource Groups) ] をクリックします。
- ステップ 3** リソースグループを含む行をクリックし、[表示 (View) ] をクリックすると、リソースグループの名前と説明が表示されます。
- ステップ 4** リソースグループを含む行をクリックし、[詳細の表示 (View Details) ] をクリックすると、リソースグループに関連付けられたリソースが表示されます。  
リソースグループ内のリソースの ID、ポッド、アカウント名、カテゴリ、アカウントタイプ、リソースタイプ、およびリソース名が表示されます。
- ステップ 5** リソースを含む行をクリックし、[詳細の表示 (View Details) ] をクリックすると、リソースの容量と機能が表示されます。
- ステップ 6** [追加 (Add) ] をクリックします。
- ステップ 7** [リソースグループの作成 (Create Resource Group) ] 画面で、次のフィールドに値を入力します。

[名前 (Name) ]	説明
[名前 (Name) ] フィールド	リソース グループの名前。

[名前 (Name) ]	説明
[説明 (Description) ] フィールド	リソースグループの説明。
[DRの有効化 (Enable DR) ] チェックボックス	ディザスタリカバリサービスサポートをリソースグループに有効にする場合にオンにします。  (注) ディザスタリカバリのサービスは、使用例と実行するワークフローに基づいて有効化されます。
[アカウントプライオリティ (Accounts Priority) ] ドロップダウンリスト	このフィールドは、[DRの有効化 (Enable DR) ] がオンになっている場合にのみ表示されます。デフォルトでは、[プライマリ (Primary) ] が選択され、リソースグループはプライマリに設定されます。セカンダリとしてリソースグループを設定する場合は、[セカンダリ (Secondary) ] を選択します。
[DRS リソースグループ (ADRS Resource Group) ] ドロップダウンリスト	災害時にフェールオーバーとデータの回復を実行するには、リソースグループをディザスタリカバリサービスリソースグループとして選択します。

(注) ディザスタリカバリサービスをサポートするには、プライマリリソースグループとセカンダリリソースグループのそれぞれに同じ数のアカウントが必要です。

**ステップ 8** [次へ (Next) ] をクリックします。

**ステップ 9** (任意) [仮想コンピューティング (Virtual Compute) ] 画面で、仮想コンピューティングアカウントと、対象の機能および容量を選択します。

a) [仮想アカウント (Virtual Accounts) ] を展開し、[+] アイコンをクリックして仮想アカウントを追加します。

b) [仮想アカウントへのエントリの追加 (Add Entry to Virtual Accounts) ] 画面で、[アカウント (Accounts) ] を展開し、使用する仮想アカウントをオンにして [検証 (Validate) ] をクリックします。

(注) アカウントリストから、VMware アカウント、または Hyper-V アカウントのいずれかを選択できます。選択した仮想アカウントに応じて、環境変数、機能、および容量を選択する必要があります。必要な環境変数がドロップダウンリストにない場合は、新しい環境変数を作成できます。環境変数の作成方法の詳細については、[カスタム環境変数の追加](#)、(287 ページ) を参照してください。

c) [環境変数 (Environment Variables) ] を展開し、[+] アイコンをクリックします。

1 [環境変数へのエントリの追加 (Add Entry to Environment Variables) ] 画面で、[名前 (Name) ] ドロップダウンリストから環境変数を選択します。

- 2 [必要な値 (Required Value) ]フィールドで、選択した環境変数に基づく値を選択します。  
[名前 (Name) ]ドロップダウンリストから [IP サブネットプール ポリシー (IP Subnet Pool Policy) ]を選択して [必要な値 (Required Value) ]を展開し、使用するポリシーをオンにします。[+] アイコンをクリックして、ポリシーを追加することもできます。
  - 3 [送信 (Submit) ]をクリックします。
- d) [選択された機能 (Selected Capabilities) ]フィールドには、選択された仮想アカウントの機能がデフォルトで表示されます。  
[編集 (Edit) ]アイコンをクリックすると表示される編集ウィンドウで、機能のチェックをオフにすると、その機能を無効にすることができます。[削除 (Delete) ]アイコンをクリックすると、リストからその機能を削除できます。
  - e) [選択された容量 (Selected Capacities) ]フィールドには、選択された仮想アカウントの容量がデフォルトで表示されます。  
[編集 (Edit) ]アイコンをクリックすると表示される編集ウィンドウで、容量のチェックをオフにすると、その容量を無効にすることができます。[削除 (Delete) ]アイコンをクリックすると、リストからその容量を削除できます。
  - f) [仮想アカウントへのエントリの追加 (Add Entry to Virtual Accounts) ]画面で、[送信 (Submit) ]をクリックします。  
(注) リソース グループに追加されたアカウントは、他のリソース グループに追加したり、Cisco UCS Director から削除したりできません。

**ステップ 10** [次へ (Next) ]をクリックします。

- ステップ 11** [仮想ストレージ (Virtual Storage) ]画面で、[仮想アカウント (Virtual Accounts) ]を展開し、仮想コンピューティングアカウントと目的の機能および容量を含む行をクリックします。
- a) [+] アイコンをクリックして、仮想アカウントを追加します。
  - b) [仮想アカウントへのエントリの追加 (Add Entry to Virtual Accounts) ]画面で、[アカウント (Accounts) ]を展開し、使用する仮想アカウントをオンにして [検証 (Validate) ]をクリックします。  
(注) アカウントリストから、VMware アカウント、または Hyper-V アカウントのいずれかを選択できます。選択した仮想アカウントに応じて、環境変数、機能、および容量を選択する必要があります。必要な環境変数がドロップダウンリストにない場合は、新しい環境変数を作成できます。環境変数の作成方法の詳細については、[カスタム環境変数の追加](#)、(287 ページ) を参照してください。
  - c) [環境変数 (Environment Variables) ]を展開し、[+] アイコンをクリックします。
    - 1 [環境変数へのエントリの追加 (Add Entry to Environment Variables) ]画面で、[名前 (Name) ]ドロップダウンリストから環境変数を選択します。
    - 2 [必要な値 (Required Value) ]フィールドで、選択した環境変数に基づく値を選択します。
    - 3 [送信 (Submit) ]をクリックします。
  - d) [選択された機能 (Selected Capabilities) ]フィールドには、選択された仮想アカウントの機能がデフォルトで表示されます。

[編集 (Edit) ]アイコンをクリックすると表示される編集ウィンドウで、機能のチェックをオフにすると、その機能を無効にすることができます。[削除 (Delete) ]アイコンをクリックすると、リストからその機能を削除できます。

- e) [選択された容量 (Selected Capacities) ]フィールドには、選択された仮想アカウントの容量がデフォルトで表示されます。  
[編集 (Edit) ]アイコンをクリックすると表示される編集ウィンドウで、容量のチェックをオフにすると、その容量を無効にすることができます。[削除 (Delete) ]アイコンをクリックすると、リストからその容量を削除できます。
- f) [仮想アカウントへのエントリの追加 (Add Entry to Virtual Accounts) ]画面で、[送信 (Submit) ]をクリックします。  
(注) リソースグループに追加されたアカウントは、他のリソースグループに追加したり、Cisco UCS Director から削除したりできません。

**ステップ 12** [次へ (Next) ]をクリックします。

**ステップ 13** [仮想ネットワーク (Virtual Network) ]画面で、[仮想アカウント (Virtual Accounts) ]を展開し、仮想ネットワークアカウントと目的の機能および容量を含む行をクリックします。

- a) [+]アイコンをクリックして、仮想アカウントを追加します。
- b) [仮想アカウントへのエントリの追加 (Add Entry to Virtual Accounts) ]画面で、[アカウント (Accounts) ]を展開し、使用する仮想アカウントをオンにして[検証 (Validate) ]をクリックします。  
(注) アカウントリストから、VMware アカウント、または Hyper-V アカウントのいずれかを選択できます。選択した仮想アカウントに応じて、環境変数、機能、および容量を選択する必要があります。必要な環境変数がドロップダウンリストにない場合は、新しい環境変数を作成できます。環境変数の作成方法の詳細については、[カスタム環境変数の追加](#)、(287 ページ) を参照してください。
- c) [環境変数 (Environment Variables) ]を展開し、[+]アイコンをクリックします。
- 1 [環境変数へのエントリの追加 (Add Entry to Environment Variables) ]画面で、[名前 (Name) ]ドロップダウンリストから環境変数を選択します。
  - 2 [必要な値 (Required Value) ]フィールドで、環境に使用するために選択した環境変数に基づいて値をオンにします。
  - 3 [送信 (Submit) ]をクリックします。
- d) [選択された機能 (Selected Capabilities) ]フィールドには、選択された仮想アカウントの機能がデフォルトで表示されます。  
[編集 (Edit) ]アイコンをクリックすると表示される編集ウィンドウで、機能のチェックをオフにすると、その機能を無効にすることができます。[削除 (Delete) ]アイコンをクリックすると、リストからその機能を削除できます。
- e) [選択された容量 (Selected Capacities) ]フィールドには、選択された仮想アカウントの容量がデフォルトで表示されます。  
[編集 (Edit) ]アイコンをクリックすると表示される編集ウィンドウで、容量のチェックをオフにすると、その容量を無効にすることができます。[削除 (Delete) ]アイコンをクリックすると、リストからその容量を削除できます。

- f) [仮想アカウントへのエントリの追加 (Add Entry to Virtual Accounts) ]画面で、[送信 (Submit) ]をクリックします。

(注) リソース グループに追加されたアカウントは、他のリソース グループに追加したり、Cisco UCS Director から削除したりできません。

**ステップ 14** [次へ (Next) ]をクリックします。

**ステップ 15** (任意) [物理コンピューティング (Physical Compute) ]画面で、[コンピューティング アカウント (Compute Accounts) ]を展開し、物理コンピューティングアカウントと目的の機能および容量を含む行をクリックします。

- a) [+] アイコンをクリックして、コンピューティング アカウントを追加します。
- b) [コンピューティング アカウントへのエントリの追加 (Add Entry to Compute Accounts) ]画面で、使用するコンピューティング アカウントをオンにして [検証 (Validate) ]をクリックします。
- c) [環境変数 (Environment Variables) ]を展開し、[+] アイコンをクリックします。
  - 1 [環境変数へのエントリの追加 (Add Entry to Environment Variables) ]画面で、[名前 (Name) ] ドロップダウン リストから環境変数を選択します。
  - 2 [必要な値 (Required Value) ] フィールドを展開し、選択した環境変数に基づく値をオンにします。[名前 (Name) ] ドロップダウン リストから [VLAN プール (Vlan pool) ] を選択した場合は、[必要な値 (Required Value) ] を展開し、使用するポリシーをオンにします。[+] アイコンをクリックして、ポリシーを追加することもできます。
  - 3 [送信 (Submit) ] をクリックします。
- d) [選択された機能 (Selected Capabilities) ]を展開し、使用するリソースとリソース機能を含む行をクリックします。
- e) [選択された容量 (Selected Capacities) ]を展開し、使用するリソースとリソース容量を含む行をクリックします。
- f) [コンピューティング アカウントへのエントリの追加 (Add Entry to Compute Accounts) ]画面で、[送信 (Submit) ] をクリックします。

(注) リソース グループに追加されたアカウントは、他のリソース グループに追加したり、Cisco UCS Director から削除したりできません。

**ステップ 16** [次へ (Next) ]をクリックします。

**ステップ 17** (任意) [物理ストレージ (Physical Storage) ]画面で、[ストレージアカウント (Storage Accounts) ]を展開し、物理ストレージアカウントおよび目的の機能と容量を含む行をクリックします。

- a) [+] アイコンをクリックして、ストレージアカウントを追加します。
- b) [ストレージアカウントへのエントリの追加 (Add Entry to Storage Accounts) ]画面で、使用するストレージアカウントをオンにして [検証 (Validate) ] をクリックします。
- c) [環境変数 (Environment Variables) ]を展開し、[+] アイコンをクリックします。
  - 1 [環境変数へのエントリの追加 (Add Entry to Environment Variables) ]ダイアログボックスで、[名前 (Name) ] ドロップダウン リストから環境変数を選択します。
  - 2 [必要な値 (Required Value) ] を展開し、選択した環境変数に基づく値をオンにします。[名前 (Name) ] ドロップダウン リストから [VLAN プール (Vlan pool) ] を選択した場合は、

[必要な値 (Required Value)] を展開し、使用するポリシーをオンにします。[+] アイコンをクリックして、ポリシーを追加することもできます。

**3** [送信 (Submit)] をクリックします。

ストレージデバイスの IP アドレスとサブネット マスクは、ポリシーで指定された IP アドレス範囲内にする必要があります。

- d) [選択された機能 (Selected Capabilities)] を展開し、使用するリソースとリソース機能を含む行をクリックします。
- e) [選択された容量 (Selected Capacities)] を展開し、使用するリソースとリソース容量を含む行をクリックします。
- f) [ストレージアカウントへのエントリの追加 (Add Entry to Storage Accounts)] 画面で、[送信 (Submit)] をクリックします。  
(注) リソースグループに追加されたアカウントは、他のリソースグループに追加したり、Cisco UCS Director から削除したりできません。

**ステップ 18** [次へ (Next)] をクリックします。

**ステップ 19** (任意) [物理ネットワーク (Physical Network)] 画面で、[ネットワーク アカウント (Network Accounts)] を展開し、物理ネットワーク アカウントおよび目的の機能と容量を含む行をクリックします。

- a) [+] アイコンをクリックして、ネットワーク アカウントを追加します。
- b) [ネットワーク アカウントへのエントリの追加 (Add Entry to Network Accounts)] 画面で、ストレージアカウントを選択します。
- c) [環境変数 (Environment Variables)] を展開し、[+] アイコンをクリックします。
  - 1 [環境変数へのエントリの追加 (Add Entry to Environment Variables)] 画面で、[名前 (Name)] ドロップダウンリストから環境変数を選択します。
  - 2 [必要な値 (Required Value)] を展開し、選択した環境変数に基づく値をオンにします。[名前 (Name)] ドロップダウンリストから [IP プール (IP Pool)] を選択した場合は、[必要な値 (Required Value)] を展開し、使用するポリシーをオンにします。
  - 3 [送信 (Submit)] をクリックします。
- d) [選択された機能 (Selected Capabilities)] を展開し、[+] アイコンをクリックします。
  - 1 [選択された機能へのエントリの追加 (Add Entry to Selected Capabilities)] 画面で、[リソースの選択 (Select Resource)] ドロップダウンリストから [MDS での FC 機能 (FC Capability on MDS)] または [ゾーン サポート (Zone Support)] を選択します。
  - 2 [リソース機能 (Resource Capability)] フィールドで、選択したリソースに応じて表示される値のリストから値を選択します。
  - 3 [送信 (Submit)] をクリックします。
- e) [選択された容量 (Selected Capacities)] を展開し、使用するリソースとリソース容量を含む行をクリックします。

- f) [ネットワーク アカウントへのエントリの追加 (Add Entry to Network Accounts) ] 画面で、[送信 (Submit) ] をクリックします。

(注) リソース グループに追加されたアカウントは、他のリソース グループに追加したり、Cisco UCS Director から削除したりできません。

**ステップ 20** [次へ (Next) ] をクリックします。

**ステップ 21** [L4L7 デバイス (L4L7 Devices) ] 画面で、ファイアウォールの仕様およびロード バランサの仕様を選択します。

- a) [ファイアウォール仕様 (Firewall Specification) ] を展開し、[+] アイコンをクリックします。  
[ファイアウォール仕様へのエントリの追加 (Add Entry to Firewall Specification) ] 画面で、次のフィールドに値を入力します。

[名前 (Name) ]	説明
[ファイアウォールタイプ (Firewall Type) ] ドロップダウンリスト	ファイアウォール タイプとして [仮想 (VIRTUAL) ] または [物理 (PHYSICAL) ] を選択します。
ファイアウォール タイプとして [仮想 (VIRTUAL) ] を選択した場合は、次のフィールドが表示されます。	
[仮想アカウント (Virtual Accounts) ] フィールド	[仮想アカウント (Virtual Accounts) ] を展開し、使用する仮想アカウントをオンにします。
[VM 導入ポリシー] ドロップダウン リスト	VM 導入ポリシーを選択します。[+] アイコンをクリックして、VM 導入ポリシーを追加します。VM 展開ポリシーの追加方法の詳細については、『 <a href="#">Cisco UCS Director Application Container Guide</a> 』の「Adding an ASAv VM Deployment Policy」の項を参照してください。
[ファイアウォール管理ポートグループ (Firewall Management Port Group) ] フィールド	[ファイアウォール管理ポート グループ (Firewall Management Port Group) ] を展開し、使用する vCenter のポートグループをオンにします。管理インターフェイスは、ASAv の導入時に選択したポートグループに配置されます。
[管理 IP プール (Management IP Pool) ] フィールド	[管理 IP プール (Management IP Pool) ] をクリックし、管理 IP アドレスの割り当てに使用する IP プールをオンにします。

[名前 (Name) ]	説明
[通常の HA IP プール (Regular HA IP Pool) ] フィールド	[通常の HA IP プール (Regular HA IP Pool) ] を展開し、プールから IP アドレスを割り当てる IP プール (プライベート IP 範囲) をオンにします。このプールは、プライマリ ASA デバイスとセカンダリ ASA デバイスの間のフェールオーバー リンクとして使用されます。このプールは、レイヤ 4 からレイヤ 7 のサービス ポリシーでファイアウォール HA が有効になっている場合に使用されます。
[ステートフル HA IP プール (Stateful HA IP Pool) ] フィールド	[ステートフル HA IP プール (Stateful HA IP Pool) ] を展開し、プールから IP アドレスを割り当てる IP プール (プライベート IP 範囲) をオンにします。このプールは、プライマリ Cisco ASA デバイスとセカンダリ Cisco ASA デバイスの間のステートリンクとして使用されます。このプールは、レイヤ 4 からレイヤ 7 のサービス ポリシーでステートフルフェールオーバーが有効になっている場合に使用されます。ステートフル HA IP プールと通常の HA IP プールは、ネットワーク IP の競合を避けるために、異なるサブネットに配置する必要があります。
ファイアウォールタイプとして [物理 (PHYSICAL) ] を選択した場合は、次のフィールドが表示されます。	
[APIC アカウント (Apic Accounts) ] フィールド	[APIC アカウント (APIC Accounts) ] を展開し、使用する APIC アカウントをオンにします。
[マルチ コンテキストの有効化 (Multi Context Enabled) ] チェック ボックス	Cisco ASA デバイスでマルチ コンテキスト設定が有効になっている場合は、[マルチコンテキストの有効化 (Multi Context Enabled) ] をオンにします。
[ファイアウォール クラスタ IP (Firewall Cluster IP) ] フィールド	このフィールドは、[マルチコンテキストの有効化 (Multi Context Enabled) ] がオンになっている場合のみ表示されます。物理 Cisco ASA デバイスの IP アドレス。この IP アドレスは、管理コンテキスト IP アドレスとして設定されます。

[名前 (Name) ]	説明
[クラスタ ユーザ名 (Cluster Username) ] フィールド	このフィールドは、[マルチコンテキストの有効化 (Multi Context Enabled) ]がオンになっている場合にのみ表示されます。ASAにアクセスする際にAPICが使用するクラスタのユーザ名。
[クラスタのパスワード (Cluster Password) ] フィールド	このフィールドは、[マルチコンテキストの有効化 (Multi Context Enabled) ]がオンになっている場合にのみ表示されます。ASAにアクセスする際にAPICが使用するクラスタのパスワード。
[ファイアウォール/コンテキスト IP (Firewall/Context IP) ] フィールド	ファイアウォールデバイスに到達するために使用される IP アドレス。[マルチコンテキストの有効化 (Multi Context Enabled) ]チェックボックスがオンになっている場合、このフィールドでは、導入時に設定する仮想 ASA デバイスのユーザコンテキスト IP アドレスが収集されます。
[ポート (Port) ] フィールド	ファイアウォール デバイスのポート番号。
[ユーザ名 (Username) ] フィールド	ファイアウォールデバイスへのアクセスに使用されるユーザ名。[マルチコンテキストの有効化 (Multi Context Enabled) ]がオンになっている場合、このフィールドではユーザコンテキストのユーザ名が収集されます。
[パスワード (Password) ] フィールド	ファイアウォールデバイスへのアクセスに使用されるパスワード。[マルチコンテキストの有効化 (Multi Context Enabled) ]がオンになっている場合、このフィールドではユーザコンテキストのパスワードが収集されます。
[物理ドメイン (Physical Domain) ] フィールド	[物理ドメイン (Physical Domain) ]を展開し、使用する物理ドメインをオンにします。[+]アイコンをクリックして、物理ドメインを追加します。
[静的パス (Static Path) ] フィールド	[静的パス (Static Path) ]を展開し、使用する静的パスをオンにします。Cisco UCS Directorでは、テーブルにVPCやリーフなどのパスタイプが表示されます。

[名前 (Name) ]	説明
[ポート チャンネル名 (Port Channel Name) ] フィールド	リーフに接続されている Cisco ASA デバイスのポート チャンネル インターフェイス (Po1、Port-channel1 など)。
[チャンネル グループ ID (Channel Group Id) ] フィールド	チャンネルグループの一意的 ID。このフィールドは、[マルチ コンテキストの有効化 (Multi Context Enabled) ] がオフになっている場合にのみ表示されます。
[ポート チャンネル メンバー インターフェイス (Port Channel Member Interfaces) ] フィールド	<p>ポートチャンネルメンバーのインターフェイスの名前。このフィールドは、[マルチコンテキストの有効化 (Multi Context Enabled) ] がオフになっている場合にのみ表示されます。</p> <p>(注) スペースなしでインターフェイス名を入力します。インターフェイスが複数ある場合は、インターフェイス名をコンマで区切って入力します。</p>

- b) [送信 (Submit) ] をクリックします。

(注) Cisco ASA デバイスでマルチ コンテキストが有効になっている場合は、ファイアウォールの指定を繰り返して、各コンテキストの詳細を追加します。

- c) [ロードバランサ仕様 (Load Balancer Specification) ] を展開し、[+] アイコンをクリックします。[ロードバランサ仕様へのエントリの追加 (Add Entry to Load Balancer Specification) ] 画面で、次のフィールドに値を入力します。

[名前 (Name) ]	説明
[ロードバランサタイプ (Load Balancer Type) ] ドロップダウンリスト	ロード バランサ タイプとして [仮想 (Virtual) ] または [物理 (Physical) ] を選択します。
[仮想アカウント (Virtual Accounts) ] フィールド	このフィールドは、ロードバランサのタイプを [仮想 (Virtual) ] と選択した場合に表示されます。[仮想アカウント (Virtual Accounts) ] を展開し、使用する仮想アカウントをオンにします。
[APIC アカウント (Apic Accounts) ] フィールド	このフィールドは、ロードバランサのタイプを [物理 (Physical) ] と選択した場合に表示されます。[APIC アカウント (APIC Accounts) ] を展開し、使用する APIC アカウントをオンにします。

[名前 (Name) ]	説明
[ロード バランサ IP (Load Balancer IP) ] フィールド	NetScaler デバイスに到達するために使用される IP アドレス。
[ポート (Port) ] フィールド	NetScaler デバイスのポート番号。
[ロードバランサゲートウェイ (Load Balancer Gateway) ] フィールド	NetScaler デバイスのゲートウェイ IP アドレス。
[ユーザ名 (Username) ] フィールド	NetScaler デバイスへのアクセスに使用されるユーザ名。
[パスワード (Password) ] フィールド	NetScaler デバイスへのアクセスに使用されるパスワード。
[機能プロファイル (Function Profile) ] フィールド	これはオプションです。[機能プロファイル (Function Profile) ] を展開し、使用する機能プロファイルをオンにします。
[VM (VMs) ] フィールド	このフィールドは、ロードバランサのタイプを [仮想 (Virtual) ] と選択した場合には表示されます。[VM (VMs) ] を展開し、使用する VM をオンにします。
[物理ドメイン (Physical Domain) ] フィールド	このフィールドは、ロードバランサのタイプを [物理 (Physical) ] と選択した場合には表示されます。[物理ドメイン (Physical Domain) ] を展開し、使用する物理ドメインをオンにします。[+] アイコンをクリックして、物理ドメインを追加します。
[インターフェイス (Interface) ] フィールド	このフィールドは、ロードバランサのタイプを [物理 (Physical) ] と選択した場合には表示されます。デバイス クラスタ設定で使用されるインターフェイス (たとえば LA_1) 。
[静的パス (Static Path) ] フィールド	このフィールドは、ロードバランサのタイプを [物理 (Physical) ] と選択した場合には表示されます。[静的パス (Static Path) ] を展開し、使用する静的パスをオンにします。

d) [送信 (Submit) ] をクリックします。

**ステップ 22** [送信 (Submit) ] をクリックします。

## リソースグループの編集

リソースグループの編集では、リソースグループへのアカウントの追加、リソースグループに追加したアカウントの編集、リソースグループからアカウントの削除が可能です。リソースグループからアカウントを削除できるのは、アカウントがテナントプロファイルなどの他のリソースグループオブジェクトに関連付けられていない場合だけです。

### 手順

- ステップ 1** [ポリシー (Policies) ] > [リソースグループ (Resource Groups) ] を選択します。
- ステップ 2** [リソースグループ (Resource Groups) ] ページで [リソースグループ (Resource Groups) ] をクリックします。
- ステップ 3** 編集するリソースグループを含む行をクリックします。
- ステップ 4** [編集 (Edit) ] をクリックします。
- ステップ 5** [リソースグループの編集 (Edit Resource Group) ] 画面で、リソースグループの次のフィールドに値を入力します。

[名前 (Name) ]	説明
[名前 (Name) ] フィールド	リソースグループの名前。
[説明 (Description) ] フィールド	リソースグループの説明。
[DR の有効化 (Enable DR) ] チェックボックス	ディザスタリカバリサービスサポートをリソースグループに有効にする場合にオンにします。  (注) ディザスタリカバリのサービスは、使用例と実行するワークフローに基づいて有効化されます。
[アカウントプライオリティ (Accounts Priority) ] ドロップダウンリスト	このフィールドは、[DR の有効化 (Enable DR) ] がオンになっている場合にのみ表示されます。デフォルトでは、[プライマリ (Primary) ] が選択され、リソースグループはプライマリに設定されます。セカンダリとしてリソースグループを設定する場合は、[セカンダリ (Secondary) ] を選択します。

[名前 (Name) ]	説明
[DRS リソース グループ (ADRS Resource Group) ] ドロップダウン リスト	災害時にフェールオーバーとデータの回復を実行するには、リソース グループをディザスタリカバリ サービス リソース グループとして選択します。

**ステップ 6** [次へ (Next) ] をクリックします。

**ステップ 7** (任意) [仮想コンピューティング (Virtual Compute) ] 画面に、リソース グループに追加された仮想コンピューティングのアカウントが表示されます。[仮想アカウント (Virtual Accounts) ] を展開してアカウントの行をクリックし、[編集 (edit) ] アイコンをクリックしてアカウントの環境変数、機能、および容量を編集します。[追加 (add) ] アイコンを使用してアカウントを追加したり、[削除 (delete) ] アイコンを使用してアカウントを削除したりできます。

**ステップ 8** [次へ (Next) ] をクリックします。

**ステップ 9** [仮想ストレージ (Virtual Storage) ] 画面に、リソース グループに追加された仮想ストレージのアカウントが表示されます。[仮想アカウント (Virtual Accounts) ] を展開してアカウントの行をクリックし、[編集 (edit) ] アイコンをクリックしてアカウントの環境変数、機能、および容量を編集します。[追加 (add) ] アイコンを使用してアカウントを追加したり、[削除 (delete) ] アイコンを使用してアカウントを削除したりできます。

**ステップ 10** [次へ (Next) ] をクリックします。

**ステップ 11** [仮想ネットワーク (Virtual Network) ] 画面に、リソース グループに追加された仮想ネットワークのアカウントが表示されます。[仮想アカウント (Virtual Accounts) ] を展開してアカウントの行をクリックし、[編集 (edit) ] アイコンをクリックしてアカウントの環境変数、機能、および容量を編集します。[追加 (add) ] アイコンを使用してアカウントを追加したり、[削除 (delete) ] アイコンを使用してアカウントを削除したりできます。

**ステップ 12** [次へ (Next) ] をクリックします。

**ステップ 13** [物理コンピューティング (Physical Compute) ] 画面に、リソース グループに追加された物理コンピューティングのアカウントが表示されます。[コンピューティング アカウント (Compute Accounts) ] を展開してアカウントの行をクリックし、[編集 (edit) ] アイコンをクリックしてアカウントの環境変数、機能、および容量を編集します。[追加 (add) ] アイコンを使用してアカウントを追加したり、[削除 (delete) ] アイコンを使用してアカウントを削除したりできます。

**ステップ 14** [次へ (Next) ] をクリックします。

**ステップ 15** [物理ストレージ (Physical Storage) ] 画面に、リソース グループに追加された物理ストレージのアカウントが表示されます。[ストレージアカウント (Storage Accounts) ] を展開してアカウントの行をクリックし、[編集 (edit) ] アイコンをクリックしてアカウントの環境変数、機能、および容量を編集します。[追加 (add) ] アイコンを使用してアカウントを追加したり、[削除 (delete) ] アイコンを使用してアカウントを削除したりできます。

**ステップ 16** [次へ (Next) ] をクリックします。

**ステップ 17** [物理ネットワーク (Physical Network) ] 画面に、リソース グループに追加された物理ネットワークのアカウントが表示されます。[ネットワークアカウント (Network Accounts) ] を展開してアカウントの行をクリックし、[編集 (edit) ] アイコンをクリックしてアカウントの環境変数、機能、

および容量を編集します。[追加 (add) ] アイコンを使用してアカウントを追加したり、[削除 (delete) ] アイコンを使用してアカウントを削除したりできます。

**ステップ 18** [次へ (Next) ] をクリックします。

**ステップ 19** [L4L7 デバイス (L4L7 Devices) ] 画面で、必要に応じてファイアウォールの仕様およびロードバランサの仕様を編集します。

**ステップ 20** [送信 (Submit) ] をクリックします。

## リソースグループへのポッドの追加

ポッドのすべてのアカウントをリソースグループに追加するには、そのポッド自体をリソースグループに追加します。



(注) マルチドメイン マネージャ アカウントがポッドに関連付けられている場合は、[リソースグループへのポッドの追加 (Add Pod to Resource Group) ] オプションを使用して、リソースグループにマルチドメイン マネージャ アカウントを追加することもできます。

### 手順

**ステップ 1** [ポリシー (Policies) ] > [リソースグループ (Resource Groups) ] を選択します。

**ステップ 2** [リソースグループ (Resource Groups) ] ページで [リソースグループ (Resource Groups) ] をクリックします。

**ステップ 3** [リソースグループへのポッドの追加 (Add Pod to Resource Group) ] をクリックします。

**ステップ 4** [リソースグループ (Resource Group) ] 画面で、次のフィールドに値を入力します。

名前	説明
[選択 (Select) ] ドロップダウン リスト	次のいずれかを実行します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• [既存のリソース グループ (Existing Resource Group) ] : 既存のリソース グループにポッドを追加します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>◦ [名前 (Name) ] ドロップダウン リスト : リソースグループを選択します。</li> </ul> </li> <li>• [新しいリソースグループの追加 (Add New Resource Group) ] : 新しいリソースグループを作成して、新しく追加されたリソースグループにポッドを追加します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>◦ [名前 (Name) ] フィールド : リソースグループの名前。</li> <li>◦ [説明 (Description) ] フィールド : リソースグループの説明。</li> </ul> </li> </ul>
[ポッド (Pod) ] フィールド	[ポッド (Pod) ] を展開し、リソースグループに追加するポッドをオンにします。

ステップ 5 [送信 (Submit) ] をクリックします。

## リソース グループのタグの管理

リソースグループにタグを追加したり、割り当てられたタグを編集したり、リソースグループからタグを削除したりできます。



(注) [タグの管理 (Manage Tag) ] ダイアログボックスには、作成時に割り当てられたタグ付け可能なエンティティに基づいてタグが表示されます。タグの作成方法の詳細については、『[Cisco UCS Director Administration Guide](#)』を参照してください。

リソースは、リソース機能に基づいてグループ分けする必要があります。リソースをグループ分けするためにタグを使用します。適切なパターンでリソースをグループ分けできるように、各リソースのタイプ、容量、品質、および機能に基づいてタグ ライブラリを作成できます。

## 手順

- ステップ 1** [ポリシー (Policies)] > [リソースグループ (Resource Groups)] を選択します。
- ステップ 2** [リソースグループ (Resource Groups)] ページで [リソースグループ (Resource Groups)] をクリックします。
- ステップ 3** 関連付けられているタグを管理するリソースグループを含む行をクリックします。
- ステップ 4** [その他のアクション (More Actions)] ドロップダウンリストから [タグの管理 (Manage Tags)] を選択します。
- ステップ 5** [タグの管理 (Manage Tags)] 画面で [タグ (Tag)] を展開し、[+] アイコンをクリックしてタグを追加します。  
または、[リソースグループ (Resource Groups)] ページで [タグの追加 (Add Tags)] をクリックします。

- a) [タグへのエントリの追加 (Add Entry to Tag)] 画面で、次のフィールドに値を入力します。

名前	説明
[タグ名 (Tag Name)] ドロップダウンリスト	タグの名前を選択します。
[タグ値 (Tag Value)] ドロップダウンリスト	タグの値を選択します。

- b) [送信 (Submit)] をクリックします。

- ステップ 6** [タグの管理 (Manage Tags)] 画面で、編集するタグが含まれた行をクリックし、鉛筆アイコンをクリックします。

- a) [タグエントリの編集 (Edit Tag Entry)] 画面で、次のフィールドに値を入力します。

名前	説明
[タグ名 (Tag Name)] ドロップダウンリスト	タグの名前を選択します。
[タグ値 (Tag Value)] ドロップダウンリスト	タグの値を選択します。

- b) [送信 (Submit)] をクリックします。

- ステップ 7** [タグの管理 (Manage Tags)] 画面で、削除するタグが含まれた行をクリックし、削除アイコンをクリックします。  
または、[リソースグループ (Resource Groups)] ページで [タグの削除 (Delete Tags)] をクリックします。

- a) [タグエントリの削除 (Delete Tag Entry)] 画面で、[タグ名 (Tag Name)] を展開し、削除するタグをオンにして [送信 (Submit)] をクリックします。

- ステップ 8** [送信 (Submit)] をクリックします。

## リソース グループの削除



(注) 使用中のリソース グループは削除できません。

### 手順

- ステップ 1 [ポリシー (Policies) ] > [リソース グループ (Resource Groups) ] を選択します。
- ステップ 2 [リソース グループ (Resource Groups) ] ページで [リソース グループ (Resource Groups) ] をクリックします。
- ステップ 3 削除するリソース グループを含む行をクリックします。
- ステップ 4 [削除 (Delete) ] をクリックします。  
[リソース グループの削除 (Delete Resource Group) ] 画面が表示されます。
- ステップ 5 [送信 (Submit) ] をクリックします。

## テナント

テナントは、Cisco UCS Director 内のリソースを使用し、アプリケーションを展開および管理する顧客です。

顧客が Cisco UCS Director にアプリケーションを導入する場合、顧客はテナントとしてオンボーディングされており、APIC 使用例のワークフローを使用してアプリケーションを展開するインフラストラクチャが提供されています。

Cisco UCS Director でオンボードされたテナントのリストを表示するには、[ポリシー (Policies) ] > [リソースグループ (Resource Groups) ] の順に選択します。テナントを含んだ行をクリックし、[詳細の表示 (View Details) ] をクリックしてテナントのサービス オファリングを表示します。サービス オファリングを含んだ行をクリックし、[詳細の表示 (View Details) ] をクリックしてテナントのリソース グループを表示します。



(注) ディザスタ リカバリ サポートがテナントで有効になっている場合は、プライマリ サイトとディザスタ リカバリ サイトのリソース グループが表示されます。

テナントやコンテナで使用するために利用できるリソース エンティティ、予約リソース、およびリソースを表示するには、リソースグループを含む行をクリックし、[詳細の表示 (View Details) ] をクリックします。次の情報が表示されます。

- [リソースのエンティティ (Resource Entity) ] : リソースグループ内のエンティティの詳細が表示されます。詳細には、リソースのエンティティの名前、タイプ、コンポーネント、リ

ソースグループ、テナントリソース割り当てタイプ、アプリケーションリソース割り当てタイプ、コンテナおよび状態が含まれます。

- [テナントリソースの制限 (Tenant Resource Limits) ]: テナント内の仮想リソースと物理リソースの両方の可用性が表示されます。テナントのオンボーディング時に予約されたリソースとともに、使用済みおよび使用可能なリソース値が表示されます。[VDCの制限 (VDCs Limit) ]列は、テナント用に予約されたコンテナの最大数を指定します。[使用可能なVDCの数 (Available Number of VDCs) ]列には、プロビジョニングに使用可能なコンテナの数が表示されます。物理リソースの制限には、テナントのオンボーディングの一環として予約されたブレードとともに、ベアメタルのプロビジョニングに使用されたブレードの数が表示されます。
- [コンテナリソースの制限 (Container Resource Limits) ]: コンテナ内の仮想リソースおよび物理リソースの両方の可用性が表示されます。コンテナの作成時に設定されたリソース制限が使用済みおよび使用可能なリソースとともに表示されます。



---

(注) リソース制限なしでコンテナを作成すると、仮想リソースの値に[未設定 (Not Set) ]と表示されます。

---

- [プライベートネットワーク (Private Network) ]: テナント用に作成されたプライベートネットワークが表示されます。プライベートネットワークを含む行をクリックし、[詳細の表示 (View Details) ]をクリックしてプライベートネットワークのスーパーネットおよびサブネットのプールを表示します。[スーパーネット (Supernets) ]画面には、階層に使用できるスーパーネットのリストが表示されます。[サブネット (Subnets) ]画面には、コンテナ展開時にロードバランサの設定に使用されたサブネットワークのプールが表示されます。

テナント固有、およびコンテナ固有のリソースの制限は、VMおよびBMのプロビジョニングに役立ちます。

## 提供サービス

提供サービスは、アプリケーションのプロビジョニングに必要なリソースを定義します。各提供サービスには、以下のリソース階層に必要なキャパシティおよび機能を表す1つまたは複数のサービスクラスを含める必要があります。

- 仮想コンピューティング
- 仮想ストレージ
- 仮想ネットワーク
- 物理コンピューティング
- 物理ストレージ
- 物理ネットワーク

- レイヤ 4 からレイヤ 7 のサービス

提供サービスを定義するときに、リソース グループの用途を次のいずれかとして指定できます。

- [共有 (Shared) ]: アプリケーションまたはテナント間でリソースを共有します。
- [専用 (Dedicated) ]: リソースは 1 つのアプリケーションまたはテナント専用になります。

提供サービスで定義された容量、機能、およびリソース タグに基づいて、リソース グループがフィルター処理され、一致するリソース グループがテナントのオンボーディングやアプリケーションの導入における今後の処理用として選択されます。

## 提供サービスの追加

### はじめる前に

リソースのいずれかでタグベースのリソース選択が必要な場合は、タグライブラリでタグが作成され、それぞれのオブジェクトと関連付けられていることを確認します。これにより、サービスクラスのリソース タグを定義する際にタグがリストされるようになります。タグの作成方法の詳細については、『[Cisco UCS Director Administration Guide](#)』を参照してください。

### 手順

- ステップ 1** [ポリシー (Policies) ] > [リソース グループ (Resource Groups) ] を選択します。
- ステップ 2** [リソース グループ (Resource Groups) ] ページで [サービスの提供 (Service Offering) ] をクリックします。
- ステップ 3** 提供サービスを含む行をクリックして [表示 (View) ] をクリックすると、そのサービスの名前、説明、およびサービス クラスを表示できます。
- ステップ 4** 提供サービスを含む行をクリックして [詳細の表示 (View Details) ] をクリックすると、そのサービス クラスを表示できます。
- ステップ 5** サービスクラスを含む行をクリックして [詳細の表示 (View Details) ] をクリックすると、機能、容量、およびサービス クラスのリソース グループ タグを表示します。
- ステップ 6** [追加 (Add) ] をクリックします。
- ステップ 7** [サービス オファリングの追加 (Add Service Offering) ] 画面で、次のフィールドに値を入力します。

名前	説明
[名前 (Name) ] フィールド	提供サービスの名前。
[説明 (Description) ] フィールド	提供サービスの説明。

名前	説明
<p>[必須サービスクラス要件のオーバーライド (Override Mandatory Service Class Requirement) ] チェックボックス</p>	<p>オンになっている場合、トポロジーに従って、サービスクラスで最小1つから最大6つまでのリソースタイプを定義することができます。</p> <p>オフになっている場合、ユーザはサービスクラスに対して6つのリソースタイプ（物理コンピューティング、物理ストレージ、物理ネットワーク、仮想コンピューティング、仮想ストレージ、仮想ネットワーク）のすべてを定義する必要があります。ユーザが仮想および物理インフラストラクチャのすべてのリソースタイプを定義していなくても、Cisco UCS Directorは定義されたリソースタイプとともに、欠落しているリソースタイプも探します。</p> <p>(注) APIC アカウントおよび VMware アカウントを使用したテナント オンボーディングに使用される提供サービスを作成するには、このチェックボックスをオンにし、4つのリソースタイプ（物理ネットワーク、仮想コンピューティング、仮想ストレージ、および仮想ネットワーク）のサービスクラスで提供サービスを作成します。テナントプロファイルの作成時に、この提供サービスを選択する必要があります。このテナントプロファイルを使用して、APIC アカウントと VMware アカウントを使用するテナントがオンボーディングされます（たとえば、プライベートネットワークを備えたテナントのオンボーディング）。</p>

**ステップ 8** [次へ (Next) ] をクリックします。

**ステップ 9** [サービスクラス (Service Class) ] 画面で [サービスクラス (Service Class) ] を展開し、[+] アイコンをクリックして、サービス オファリングで提供する必要のあるサービスクラスを定義します。

**ステップ 10** [サービスクラスへのエントリの追加 (Add Entry to Service Class) ] 画面で、次のフィールドに値を入力します。

名前	説明
[名前 (Name) ] フィールド	サービスクラスの名前。

名前	説明
[説明 (Description) ]フィールド	サービス クラスの説明。
[テナントのリソース割り当てのタイプ (Resource Allocation type for Tenant) ] ドロップダウン リスト	<p>テナントのリソース割り当てのタイプを選択します。</p> <p>次のいずれかを設定できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• [専用 (Dedicated) ] : テナントごとに専用リソースを確保します。</li> <li>• [共有 (Shared) ] : テナント間でリソースを共有します。</li> </ul>
[アプリケーションのリソース割り当てのタイプ (Resource Allocation type for Application) ] ドロップダウン リスト	<p>アプリケーションのリソース割り当てのタイプを選択します。</p> <p>次のいずれかを設定できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• [専用 (Dedicated) ] : アプリケーションごとに専用リソースを確保します。</li> <li>• [共有 (Shared) ] : アプリケーション間でリソースを共有します。</li> </ul>
[リソース タイプ (Resource Type) ] ドロップダウン リスト	<p>サービスクラスに追加するリソースのタイプを選択します。次のいずれかを設定できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• [Virtual_Compute]</li> <li>• [Virtual_Storage]</li> <li>• [Virtual_Network]</li> <li>• [Physical_Compute]</li> <li>• [Physical_Storage]</li> <li>• [Physical_Network]</li> </ul> <p>[必須サービスクラス要件のオーバーライド (Override Mandatory Service Class Requirement) ] がオフになっている場合にのみ、最小で2つのリソースタイプ (物理または仮想のコンピューティングと物理または仮想のネットワーク) 、あるいは、最大で6つのリソースタイプ (仮想コンピューティング、仮想ストレージ、仮想ネットワーク、物理コンピューティング、物理ストレージ、物理ネットワーク) をサービスクラスの追加時に定義できます。</p>

名前	説明
[リソース タグ (Resource Tag) ] フィールド	<p>[リソース タグ (Resource Tag) ] を展開し、使用するリソース タグを含む行をクリックします。タグライブラリに関する詳細については、『<a href="#">Cisco UCS Director Administration Guide</a>』を参照してください。</p> <p>(注) 仮想ストレージサービスクラスレベルに、複数のタグ値 (たとえば、gold、silver、bronze) を持つデータストア タグを追加できます。</p> <p>(注) 仮想コンピューティングサービスクラスレベルに、複数のタグ値を持つ ESXi クラス タグを追加できます。</p> <p><b>重要</b> このテーブルで定義されたタグで変更できるのは、必須の値のみです。このテーブルに新しいタグを追加することはできません。タグの作成方法の詳細については、『<a href="#">Cisco UCS Director Administration Guide</a>』の「Tag Library」の項を参照してください。</p>
[リソース機能 (Resource Capability) ] フィールド	<p>デフォルトでは、選択したリソースのタイプに応じて、VMware および Hyper-V に適用可能な機能が表示されます。[編集 (Edit) ] アイコンを使用すると、リソース機能の値を編集できます。[削除 (Delete) ] アイコンを使用すると、提供サービスからリソース機能を削除できます。</p> <p><b>重要</b> このテーブルには、リソース タイプに関連するすべてのリソース機能が、デフォルト値 false で取り込まれます。機能の値は変更することができます。</p>

名前	説明
[リソース機能 (Resource Capability) ]フィールド	<p>提供サービスの使用可能なリソース容量。</p> <p>リソース容量を追加するには、[リソース機能 (Resource Capability) ]を展開し、[追加 (Add) ]アイコンをクリックして、VMwareおよびHyper-Vアカウントに適用可能な容量のリストから、容量タイプを選択します。選択した容量タイプに応じて容量が表示されます。条件に適合する容量を選択して、必要な容量の値を設定します。</p> <p>リソースの容量を削除するには、[削除 (Delete) ]アイコンをクリックします。容量の値を変更するには、[編集 (Edit) ]アイコンをクリックします。</p>

(注) このタグは、リソース機能および容量とともに、リソースグループ内のリソースをフィルタリングするために使用されます。

**ステップ 11** [送信 (Submit) ]をクリックします。  
サービスクラス情報がテーブルに追加されます。提供サービスには、複数のサービスクラスを定義できます。

**ステップ 12** [送信 (Submit) ]をクリックします。

## 提供サービスの複製

### はじめる前に

タグライブラリでタグが作成され、それぞれのオブジェクトと関連付けられていることを確認します。これにより、サービスクラスのリソースタグを定義する際にタグがリストされるようになります。タグの作成方法の詳細については、『[Cisco UCS Director Administration Guide](#)』を参照してください。

## 手順

- ステップ 1** [ポリシー (Policies)] > [リソースグループ (Resource Groups)] を選択します。
- ステップ 2** [リソースグループ (Resource Groups)] ページで [サービスの提供 (Service Offering)] をクリックします。
- ステップ 3** 複製するサービス オファリングを含む行をクリックします。
- ステップ 4** [提供サービスの複製 (Clone Service Offering)] をクリックします。
- ステップ 5** [サービス オファリングの複製 (Clone Service Offering)] 画面で、次のフィールドに値を入力します。

名前	説明
[名前 (Name)] フィールド	提供サービスの名前。
[説明 (Description)] フィールド	提供サービスの説明。

名前	説明
[必須サービスクラス要件のオーバーライド (Override Mandatory Service Class Requirement) ] チェックボックス	<p>オンになっている場合、トポロジーに従って、サービスクラスで最小1つから最大6つまでのリソース タイプを定義することができます。</p> <p>オフになっている場合、ユーザはサービスクラスに対して6つのリソースタイプ（物理コンピューティング、物理ストレージ、物理ネットワーク、仮想コンピューティング、仮想ストレージ、仮想ネットワーク）のすべてを定義する必要があります。ユーザが仮想および物理インフラストラクチャのすべてのリソースタイプを定義していなくても、Cisco UCS Director は定義されたリソースタイプとともに、欠落しているリソース タイプも探します。</p> <p>(注) APIC アカウントおよび VMware アカウントを使用したテナント オンボーディングに使用される提供サービスを作成するには、このチェックボックスをオンにし、4つのリソース タイプ（物理ネットワーク、仮想コンピューティング、仮想ストレージ、および仮想ネットワーク）のサービス クラスで提供サービスを作成します。テナント プロファイルの作成時に、この提供サービスを選択する必要があります。このテナント プロファイルを使用して、APIC アカウントと VMware アカウントを使用するテナントがオンボーディングされます（たとえば、プライベート ネットワークを備えたテナントのオンボーディング）。</p>

**ステップ 6** [Next] をクリックします。

**ステップ 7** [サービス クラス (Service Class) ] 画面で [サービス クラス (Service Class) ] を展開し、[+] アイコンをクリックして、サービス オファリングで提供する必要のあるサービス クラスを定義します。

**ステップ 8** [サービス クラスへのエントリの追加 (Add Entry to Service Class) ] 画面で、次のフィールドに値を入力します。

名前	説明
[名前 (Name) ] フィールド	サービス クラスの名前。

名前	説明
[説明 (Description) ] フィールド	サービス クラスの説明。
[テナントのリソース割り当てのタイプ (Resource Allocation type for Tenant) ] ドロップダウン リスト	<p>テナントのリソース割り当てのタイプを選択します。</p> <p>次のいずれかを設定できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• [専用 (Dedicated) ] : テナントごとに専用リソースを確保します。</li> <li>• [共有 (Shared) ] : テナント間でリソースを共有します。</li> </ul>
[アプリケーションのリソース割り当てのタイプ (Resource Allocation type for Application) ] ドロップダウン リスト	<p>アプリケーションのリソース割り当てのタイプを選択します。</p> <p>次のいずれかを設定できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• [専用 (Dedicated) ] : アプリケーションごとに専用リソースを確保します。</li> <li>• [共有 (Shared) ] : アプリケーション間でリソースを共有します。</li> </ul>
[リソースタイプ (Resource Type) ] ドロップダウンリスト	<p>サービスクラスに追加するリソースのタイプを選択します。次のいずれかを設定できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• [Virtual_Compute]</li> <li>• [Virtual_Storage]</li> <li>• [Virtual_Network]</li> <li>• [Physical_Compute]</li> <li>• [Physical_Storage]</li> <li>• [Physical_Network]</li> </ul> <p>[必須サービスクラス要件のオーバーライド (Override Mandatory Service Class Requirement) ] がオフになっている場合にのみ、最小で2つのリソースタイプ (物理または仮想のコンピューティングと物理または仮想のネットワーク) 、あるいは、最大で6つのリソースタイプ (仮想コンピューティング、仮想ストレージ、仮想ネットワーク、物理コンピューティング、物理ストレージ、物理ネットワーク) をサービスクラスの追加時に定義できます。</p>

名前	説明
[リソース タグ (Resource Tag) ] フィールド	<p>[リソース タグ (Resource Tag) ] を展開し、使用するリソース タグを含む行をクリックします。タグライブラリに関する詳細については、『<a href="#">Cisco UCS Director Administration Guide</a>』を参照してください。</p> <p>(注) 仮想ストレージサービスクラスレベルに、複数のタグ値 (たとえば、gold、silver、bronze) を持つデータストア タグを追加できます。</p> <p>(注) 仮想コンピューティングサービスクラスレベルに、複数のタグ値を持つ ESXi クラス タグを追加できます。</p> <p><b>重要</b> このテーブルで定義されたタグで変更できるのは、必須の値のみです。このテーブルに新しいタグを追加することはできません。タグの作成方法の詳細については、『<a href="#">Cisco UCS Director Administration Guide</a>』の「Tag Library」の項を参照してください。</p>
[リソース機能 (Resource Capability) ] フィールド	<p>デフォルトでは、選択したリソースのタイプに応じて、VMware および Hyper-V に適用可能な機能が表示されます。[編集 (Edit) ] アイコンを使用すると、リソース機能の値を編集できます。[削除 (Delete) ] アイコンを使用すると、提供サービスからリソース機能を削除できます。</p> <p><b>重要</b> このテーブルには、リソース タイプに関連するすべてのリソース機能が、デフォルト値 false で取り込まれます。機能の値は変更することができます。</p>

名前	説明
[リソース機能 (Resource Capability) ] フィールド	<p>提供サービスの使用可能なリソース容量。</p> <p>リソース容量を追加するには、[リソース機能 (Resource Capability) ] を展開し、[追加 (Add) ] アイコンをクリックして、VMware および Hyper-V アカウントに適用可能な容量のリストから、容量タイプを選択します。選択した容量タイプに応じて容量が表示されます。条件に適合する容量を選択して、必要な容量の値を設定します。</p> <p>リソースの容量を削除するには、[削除 (Delete) ] アイコンをクリックします。容量の値を変更するには、[編集 (Edit) ] アイコンをクリックします。</p>

**ステップ 9** (任意) 設定済みのサービス クラスの値を編集するには、鉛筆アイコンをクリックします。

**ステップ 10** (任意) サービス オファリングから設定済みのサービス クラスを削除するには、[ごみ箱 (trash) ] アイコンをクリックします。

**ステップ 11** [送信 (Submit) ] をクリックします。

## 提供サービスの編集



(注) リソース グループやテナント プロファイルにマップされた提供サービスは編集しないでください。リソースグループやテナントプロファイルにマップされた提供サービスを編集すると、提供サービスを使用してオンボーディングされたテナントに影響が及びます。

### はじめる前に

タグ ライブラリでタグが作成され、それぞれのオブジェクトと関連付けられていることを確認します。これにより、サービス クラスのリソース タグを定義する際にタグがリストされるようになります。タグの作成方法の詳細については、『[Cisco UCS Director Administration Guide](#)』を参照してください。

## 手順

- ステップ 1** [ポリシー (Policies)] > [リソース グループ (Resource Groups)] を選択します。
- ステップ 2** [リソース グループ (Resource Groups)] ページで [サービスの提供 (Service Offering)] をクリックします。
- ステップ 3** 編集するサービス オファリングを含む行をクリックします。
- ステップ 4** [編集 (Edit)] をクリックします。
- ステップ 5** [サービス オファリングの変更 (Modify Service Offering)] 画面で、次のフィールドに値を入力します。

名前	説明
[名前 (Name)] フィールド	提供サービスの名前。
[説明 (Description)] フィールド	提供サービスの説明。

名前	説明
[必須サービスクラス要件のオーバーライド (Override Mandatory Service Class Requirement) ] チェックボックス	<p>オンになっている場合、トポロジーに従って、サービスクラスで最小1つから最大6つまでのリソースタイプを定義することができます。</p> <p>オフになっている場合、ユーザはサービスクラスに対して6つのリソースタイプ（物理コンピューティング、物理ストレージ、物理ネットワーク、仮想コンピューティング、仮想ストレージ、仮想ネットワーク）のすべてを定義する必要があります。ユーザが仮想および物理インフラストラクチャのすべてのリソースタイプを定義していなくても、Cisco UCS Directorは定義されたリソースタイプとともに、欠落しているリソースタイプも探します。</p> <p>(注) APIC アカウントおよび VMware アカウントを使用したテナント オンボーディングに使用される提供サービスを作成するには、このチェックボックスをオンにし、4つのリソースタイプ（物理ネットワーク、仮想コンピューティング、仮想ストレージ、および仮想ネットワーク）のサービスクラスで提供サービスを作成します。テナント プロファイルの作成時に、この提供サービスを選択する必要があります。このテナント プロファイルを使用して、APIC アカウントと VMware アカウントを使用するテナントがオンボーディングされます（たとえば、プライベート ネットワークを備えたテナントのオンボーディング）。</p>

**ステップ 6** [Next] をクリックします。

**ステップ 7** [サービス クラス (Service Class) ] 画面で [サービス クラス (Service Class) ] を展開し、[+] アイコンをクリックして、サービス オファリングで提供する必要のあるサービス クラスを定義します。

**ステップ 8** [サービス クラスへのエントリの追加 (Add Entry to Service Class) ] 画面で、次のフィールドに値を入力します。

名前	説明
[名前 (Name) ] フィールド	サービス クラスの名前。

名前	説明
[説明 (Description) ]フィールド	サービス クラスの説明。
[テナントのリソース割り当てのタイプ (Resource Allocation type for Tenant) ] ドロップダウン リスト	<p>テナントのリソース割り当てのタイプを選択します。</p> <p>次のいずれかを設定できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• [専用 (Dedicated) ] : テナントごとに専用リソースを確保します。</li> <li>• [共有 (Shared) ] : テナント間でリソースを共有します。</li> </ul>
[アプリケーションのリソース割り当てのタイプ (Resource Allocation type for Application) ] ドロップダウン リスト	<p>アプリケーションのリソース割り当てのタイプを選択します。</p> <p>次のいずれかを設定できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• [専用 (Dedicated) ] : アプリケーションごとに専用リソースを確保します。</li> <li>• [共有 (Shared) ] : アプリケーション間でリソースを共有します。</li> </ul>
[リソース タイプ (Resource Type) ] ドロップダウン リスト	<p>サービスクラスに追加するリソースのタイプを選択します。次のいずれかを設定できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• [Virtual_Compute]</li> <li>• [Virtual_Storage]</li> <li>• [Virtual_Network]</li> <li>• [Physical_Compute]</li> <li>• [Physical_Storage]</li> <li>• [Physical_Network]</li> </ul> <p>[必須サービスクラス要件のオーバーライド (Override Mandatory Service Class Requirement) ] がオフになっている場合にのみ、最小で2つのリソースタイプ (物理または仮想のコンピューティングと物理または仮想のネットワーク) 、あるいは、最大で6つのリソースタイプ (仮想コンピューティング、仮想ストレージ、仮想ネットワーク、物理コンピューティング、物理ストレージ、物理ネットワーク) をサービスクラスの追加時に定義できます。</p>

名前	説明
[リソース タグ (Resource Tag) ] フィールド	<p>[リソース タグ (Resource Tag) ] を展開し、使用するリソース タグを含む行をクリックします。タグライブラリに関する詳細については、『<a href="#">Cisco UCS Director Administration Guide</a>』を参照してください。</p> <p>(注) 仮想ストレージサービスクラスレベルに、複数のタグ値 (たとえば、gold、silver、bronze) を持つデータストア タグを追加できます。</p> <p>(注) 仮想コンピューティングサービスクラスレベルに、複数のタグ値を持つ ESXi クラス タグを追加できます。</p> <p><b>重要</b> このテーブルで定義されたタグで変更できるのは、必須の値のみです。このテーブルに新しいタグを追加することはできません。タグの作成方法の詳細については、『<a href="#">Cisco UCS Director Administration Guide</a>』の「Tag Library」の項を参照してください。</p>
[リソース機能 (Resource Capability) ] フィールド	<p>デフォルトでは、選択したリソースのタイプに応じて、VMware および Hyper-V に適用可能な機能が表示されます。[編集 (Edit) ] アイコンを使用すると、リソース機能の値を編集できます。[削除 (Delete) ] アイコンを使用すると、提供サービスからリソース機能を削除できます。</p> <p><b>重要</b> このテーブルには、リソース タイプに関連するすべてのリソース機能が、デフォルト値 false で取り込まれます。機能の値は変更することができます。</p>

名前	説明
[リソース機能 (Resource Capability) ]フィールド	<p>提供サービスの使用可能なリソース容量。</p> <p>リソース容量を追加するには、[リソース機能 (Resource Capability) ]を展開し、[追加 (Add) ]アイコンをクリックして、VMwareおよびHyper-Vアカウントに適用可能な容量のリストから、容量タイプを選択します。選択した容量タイプに応じて容量が表示されます。条件に適合する容量を選択して、必要な容量の値を設定します。</p> <p>リソースの容量を削除するには、[削除 (Delete) ]アイコンをクリックします。容量の値を変更するには、[編集 (Edit) ]アイコンをクリックします。</p>

ステップ9 [送信 (Submit) ]をクリックします。

## 提供サービスの削除



(注) 使用中の提供サービスは削除できません。

### 手順

- ステップ1 [ポリシー (Policies) ]>[リソース グループ (Resource Groups) ]を選択します。
- ステップ2 [リソース グループ (Resource Groups) ]ページで[サービスの提供 (Service Offering) ]をクリックします。
- ステップ3 削除するサービス オファリングを含む行をクリックします。
- ステップ4 [削除 (Delete) ]をクリックします。
- ステップ5 [サービス オファリング (Service Offering) ]画面で、[削除 (Delete) ]をクリックします。

# テナント プロファイル

テナント プロファイルは、1つ以上のリソースグループと1つ以上の提供サービスとのペアリングを表します。各テナントプロファイルは、インフラストラクチャの要件およびアプリケーションの要件の特性を定義します。

顧客とアプリケーションの考えられる組み合わせに対応したテナントプロファイルを作成することができます。テナントプロファイルを複数の提供サービスに関連付け、各提供サービスに対してリソースグループを選択できます。テナントプロファイルは複数のテナントで共有できます。

## テナント プロファイルの追加

### はじめる前に

テナントプロファイルに対してDRサービスのサポートが有効になっている場合は、次の条件に合うリソースが、特定の提供サービス用のリソースグループを選択する際に表示されます。

- DR サービスが有効になっている。
- リソースグループがプライマリとして設定されている。
- プライマリリソースグループが、セカンダリリソースグループとマッピングされている。
- プライマリおよびセカンダリのリソースグループに、同じ数のアカウントがある。
- テナントに必要なリソースが、プライマリリソースグループとセカンダリリソースグループの両方で使用できる。

DRサービスを有効化する方法およびリソースグループをプライマリまたはセカンダリとして設定する方法の詳細については、[リソースグループの追加](#)、(288 ページ) を参照してください。

### 手順

- ステップ 1** [ポリシー (Policies)] > [リソースグループ (Resource Groups)] を選択します。
- ステップ 2** [リソースグループ (Resource Groups)] ページで [テナントプロファイル (Tenant Profile)] をクリックします。
- ステップ 3** テナントプロファイルを含む行をクリックして [表示 (View)] をクリックすると、リソース制限がタグに追加されたテナントプロファイルの名前、説明、およびサービスオファリングが表示されます。
- ステップ 4** テナントプロファイルを含む行をクリックし、[詳細の表示 (View Details)] をクリックすると、テナントプロファイルに関連付けられたテナントが表示されます。テナントプロファイル内のテナントに割り当てられた名前、リソースグループ、提供サービス、APIC アカウント、サービス要求 ID、および顧客が表示されます。

- ステップ 5** テナントを含む行をクリックして [詳細の表示 (View Details)] をクリックすると、サービス オファリングが表示されます。
- ステップ 6** サービス オファリングを含む行をクリックして [詳細の表示 (View Details)] をクリックすると、テナントのリソース エンティティが表示されます。
- ステップ 7** [追加 (Add)] をクリックします。
- ステップ 8** [テナント プロファイルの追加 (Add Tenant Profile)] 画面で、次のフィールドに値を入力します。

名前	説明
[名前 (Name)] フィールド	テナント プロファイルの名前。 一度指定したら、プロファイルの名前を編集することはできません。
[説明 (Description)] フィールド	テナント プロファイルの説明。
[DR の有効化 (Enable DR)] チェックボックス	ディザスタ リカバリ サービス サポートをテナント プロファイルに有効にする場合にオンにします。オンにすると、テナントにはプライマリ リソースグループとセカンダリ リソースグループの両方からリソースが割り当てられます。
[提供サービス (Service Offering)] フィールド	テナント プロファイルに関連付ける提供サービス。  [サービス オファリング (Service Offering)] を展開して使用するサービス オファリングをオンにし、[検証 (Validate)] をオンにします。提供サービスは、適合するリソースグループの利用状況に応じて表示されます。新しい提供サービスを作成するには、[+] アイコンをクリックします。提供サービスの作成方法の詳細については、 <a href="#">提供サービスの追加, (306 ページ)</a> を参照してください。  (注) 提供サービスのリストではなくエラーメッセージが表示された場合は、そのエラーメッセージに従ってアクションを実行します。詳細については、 <a href="#">提供サービス リストのトラブルシューティング, (323 ページ)</a> を参照してください。

名前	説明
[リソースグループの選択 (Resource Group Selection) ] ドロップダウン リスト	<p>テナント プロファイル用のリソースグループの選択方法を選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• [管理者の選択 (Admin Selection) ] : リソースグループが管理者によって選択されます。</li> <li>• [リソースグループ タグ ベースの選択 (Resource Group Tag based selection) ] : リソースグループがタグに基づいて選択されます。</li> </ul>

**ステップ 9** [Next] をクリックします。

**ステップ 10** [リソースグループ (Resource Group) ] を展開して [追加 (Add) ] (+) アイコンをクリックし、特定のサービス オファリングのリソースグループを選択します。テナント プロファイル用に選択した提供サービスごとに、リソースグループを選択できます。テナント プロファイルの指定要件を満たすリソースグループが表示されます。

(注) 提供サービスで定義されたリソース要件を満たすリソースグループが存在しない場合は、Cisco UCS Director にリソースグループが表示されません。

**ステップ 11** [送信 (Submit) ] をクリックします。

## 提供サービス リストのトラブルシューティング

テナントプロファイルを作成する際に、テナントプロファイルは複数の提供サービスに関連付けられます。提供サービスのリストは、適合するリソースグループの利用状況に応じて表示されません。提供サービスのリストではなくエラーメッセージが表示された場合は、そのエラーメッセージに従ってアクションを実行します。

たとえば、「ホストが UCS サーバ上でマウントされていません (Host is not mounted on UCS servers)」というエラーメッセージが表示された場合は、次の点をチェックします。

### 手順

	コマンドまたはアクション	目的
<b>ステップ 1</b>	Cisco UCS サーバが Cisco UCS Director によって管理されていることを確認します。Cisco UCS サーバのステータスを確認するには、[物理 (Physical) ] > [コンピューティング (Compute) ] を選択し、Cisco UCS Manager アカウ	

	コマンドまたはアクション	目的
	ントを選択して [UCS 検出済みサーバ (UCS Discovered Servers) ] タブをクリックします。	
ステップ 2	vCenter アカウントと Cisco UCS Manager アカウントは同じリソースグループ内にあり、vCenter アカウント内のホストは Cisco UCS Manager アカウントにマウントされていることを確認します。	
ステップ 3	Cisco UCS Director で使用可能な Cisco UCS Manager アカウントに一意の IP アドレスが設定されていることを確認します。同じ IP アドレスのアカウントが複数存在する場合は、リソースグループに属していないアカウントの 1 つを削除します。	

## テナント プロファイルの複製

### 手順

- ステップ 1 [ポリシー (Policies) ] > [リソース グループ (Resource Groups) ] を選択します。
- ステップ 2 [リソース グループ (Resource Groups) ] ページで [テナント プロファイル (Tenant Profile) ] をクリックします。
- ステップ 3 複製するテナント プロファイルを含む行をクリックします。
- ステップ 4 [複製 (Clone) ] をクリックします。
- ステップ 5 [テナント プロファイルの複製 (Clone Tenant Profile) ] 画面で、次のフィールドに値を入力します。

名前	説明
[名前 (Name) ] フィールド	テナント プロファイルの名前。
[説明 (Description) ] フィールド	テナント プロファイルの説明。

名前	説明
[提供サービス (Service Offering) ] フィールド	<p>テナントプロファイルに関連付ける提供サービス。</p> <p>[サービス オファリング (Service Offering) ] を展開して使用するサービス オファリングをオンにし、[検証 (Validate) ] をクリックします。提供サービスは、適合するリソースグループの利用状況に応じて表示されます。新しい提供サービスを作成するには、[+] アイコンをクリックします。提供サービスの作成方法の詳細については、<a href="#">提供サービスの追加, (306 ページ)</a> を参照してください。</p> <p>(注) 提供サービスのリストではなくエラーメッセージが表示された場合は、そのエラーメッセージに従ってアクションを実行します。詳細については、<a href="#">提供サービス リストのトラブルシューティング, (323 ページ)</a> を参照してください。</p>
[リソース グループの選択 (Resource Group Selection) ] ドロップダウン リスト	<p>テナント プロファイル用のリソース グループの選択方法を選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• [管理者の選択 (Admin Selection) ] : リソースグループが管理者によって選択されます。</li> <li>• [リソース グループ タグ ベースの選択 (Resource Group Tag based selection) ] : リソースグループがタグに基づいて選択されます。</li> </ul>

**ステップ 6** [Next] をクリックします。

**ステップ 7** [リソース グループ (Resource Group) ] を展開して [追加 (Add) ] (+) アイコンをクリックし、特定のサービス オファリングのリソース グループを選択します。テナントプロファイル用に選択した提供サービスごとに、リソース グループを選択できます。テナントプロファイルの指定要件を満たすリソース グループが表示されます。

(注) 提供サービスで定義されたリソース要件を満たすリソースグループが存在しない場合は、Cisco UCS Director にリソースグループが表示されません。

**ステップ 8** [送信 (Submit) ] をクリックします。

## テナント プロファイルの編集

### 手順

- ステップ 1** [ポリシー (Policies) ] > [リソース グループ (Resource Groups) ] を選択します。
- ステップ 2** [リソース グループ (Resource Groups) ] ページで [テナント プロファイル (Tenant Profile) ] をクリックします。
- ステップ 3** 編集するテナント プロファイルを含む行をクリックします。
- ステップ 4** [編集 (Edit) ] をクリックします。
- ステップ 5** [テナント プロファイルの変更 (Modify Tenant Profile) ] 画面で、次のフィールドに値を入力します。

名前	説明
[名前 (Name) ] フィールド	テナント プロファイルの名前。 一度指定したら、プロフィールの名前を編集することはできません。
[説明 (Description) ] フィールド	テナント プロファイルの説明。
[提供サービス (Service Offering) ] フィールド	テナント プロファイルに関連付ける提供サービス。  [サービス オファリング (Service Offering) ] を展開して使用するサービス オファリングをオンにし、[検証 (Validate) ] をクリックします。提供サービスは、適合するリソース グループの利用状況に応じて表示されます。新しい提供サービスを作成するには、[+] アイコンをクリックします。提供サービスの作成方法の詳細については、 <a href="#">提供サービスの追加, (306 ページ)</a> を参照してください。  (注) 提供サービスのリストではなくエラーメッセージが表示された場合は、そのエラーメッセージに従ってアクションを実行します。詳細については、 <a href="#">提供サービス リストのトラブルシューティング, (323 ページ)</a> を参照してください。

名前	説明
[リソースグループの選択 (Resource Group Selection) ] ドロップダウンリスト	<p>テナントプロフィール用のリソースグループの選択方法を選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• [管理者の選択 (Admin Selection) ] : リソースグループが管理者によって選択されます。</li> <li>• [リソースグループタグベースの選択 (Resource Group Tag based selection) ] : リソースグループがタグに基づいて選択されます。</li> </ul>

**ステップ 6** [Next] をクリックします。

**ステップ 7** [リソースグループ (Resource Group) ] を展開して [追加 (Add) ] (+) アイコンをクリックし、特定のサービス オファリングのリソースグループを選択します。テナントプロフィール用に選択した提供サービスごとに、リソースグループを選択できます。テナントプロフィールの指定要件を満たすリソースグループが表示されます。

(注) 提供サービスで定義されたリソース要件を満たすリソースグループが存在しない場合は、Cisco UCS Director にリソースグループが表示されません。

**ステップ 8** [送信 (Submit) ] をクリックします。

## テナントプロフィールの削除



(注) 使用中のテナントプロフィールは削除できません。

### 手順

**ステップ 1** [ポリシー (Policies) ] > [リソースグループ (Resource Groups) ] を選択します。

**ステップ 2** [リソースグループ (Resource Groups) ] ページで [テナントプロフィール (Tenant Profile) ] をクリックします。

**ステップ 3** 削除するテナントプロフィールを含む行をクリックします。

**ステップ 4** [削除 (Delete) ] をクリックします。確認後にテナントのプロファイルが削除されます。





# 第 12 章

## カタログの管理

---

この章は、次の項で構成されています。

- [カタログ管理について](#), 329 ページ
- [カタログの公開](#), 331 ページ
- [詳細カタログの公開について](#), 341 ページ
- [詳細カタログの公開](#), 341 ページ
- [ベア メタル サーバ カタログの作成](#), 343 ページ
- [フォルダ内のカタログの並べ替え](#), 346 ページ
- [展開するホストへのアクセス](#), 347 ページ
- [カタログ フォルダの並べ替え](#), 347 ページ

## カタログ管理について

事前定義されたカタログ項目を使用して仮想マシン (VM) およびベア メタル (BM) のセルフプロビジョニングができます。システム管理者のみがカタログを作成できます。カタログでは、VM をバインドするクラウドの名前およびグループの名前などのパラメータを定義します。

次のフォルダはデフォルトで使用可能になっています。それらは編集したり削除したりすることはできません。

- 標準
- 詳細設定
- サービス コンテナ
- ベア メタル

カタログ管理に役立つものとして、Cisco UCS Director ではフォルダ内の類似カタログをグループ化できます。カタログの作成時には、前に作成したフォルダに追加するか、新しいフォルダの作成を選択できます。フォルダはカタログが含まれている場合にのみ表示されます。

[カタログ (Catalog) ] ページの [フォルダの管理 (Manage Folder) ] オプションでは、次のタスクを実行できます。

- フォルダの編集：ユーザが作成したフォルダの名前や、すべてのフォルダを表すフォルダアイコンを変更します。デフォルト フォルダの名前は変更できません。
- フォルダの削除：Cisco UCS Director からフォルダを削除します。このフォルダにカタログが含まれていると、これらのカタログはカタログ タイプに基づいてデフォルトで使用可能なフォルダに自動的に移動されます。  
デフォルト フォルダは削除できません。
- フォルダのリストの並び替え：フォルダが [カタログ (Catalog) ] ページに表示される順序を変更します。デフォルトでは、フォルダはアルファベット順に表示されます。

**重要**

Cisco UCS Director を最新バージョンにアップグレードした場合は、以前のバージョンで作成されたすべてのカタログはカタログ タイプに基づいて、使用可能なフォルダにデフォルトでグループ化されます。

デフォルトでは、カタログがタイル ビュー形式で表示されます。テーブル ビュー形式でカタログを表示することもできます。テーブルビュー形式とタイルビュー形式を切り替えるには、画面右端のオプションを使用します。テーブル ビュー形式では、すべてのフォルダを展開するか、または折りたたむオプションを使用できます。

[カタログ (Catalog) ] ページでは、サービス リクエストを作成できます。[サービス リクエストの作成 (Create Service Request) ] をクリックして、[標準カタログタイプを使用したサービス リクエストの作成](#)、(350 ページ) に記載されている手順を実行します。



- (注) [カタログ (Catalogs) ] オプションをメニューバーに表示させると、カタログ関連のすべてのオプションに簡単にアクセスできます。インターフェイスの右上にあるユーザ名をクリックし、[ユーザ情報 (User Information) ] ダイアログ ボックスの [カタログ (Catalogs) ] タブを選択し、[カタログの有効化 (Enable Catalogs) ] チェック ボックスをオンにします。

# カタログの公開

## 手順

- ステップ1 [ポリシー (Policies)] > [カタログ (Catalogs)] を選択します。
- ステップ2 [カタログ (Catalogs)] ページで、[追加 (Add)] をクリックします。
- ステップ3 [カタログの追加 (Add Catalog)] 画面で、追加するカタログタイプを選択します。次のいずれかを設定できます。

- [標準 (Standard)] : クラウドリストにあるイメージを使用して VM プロビジョニングのためのカタログを作成する場合に使用します。
- [詳細 (Advanced)] : カatalog項目などのオーケストレーションワークフローを公開する場合に使用します。
- [サービスコンテナ (Service Container)] : カatalog項目としてアプリケーションコンテナを公開する場合に使用します。
- [ベアメタル (Bare Metal)] : ベアメタルサーバのプロビジョニング用のカタログを作成するために使用します。

ベアメタルカタログの作成方法については、[ベアメタルサーバカタログの作成 \(343 ページ\)](#) を参照してください。

- ステップ4 [送信 (Submit)] をクリックします。
- ステップ5 [カタログの追加 (Add Catalog)] の [基本情報 (Basic Information)] 画面で、次を含む必須フィールドに値を入力します。

名前	説明
[カタログ名 (Catalog Name)] フィールド	カタログの名前を入力します。 (注) 作成後にカタログ名は変更できません。
[カタログの説明 (Catalog Description)] フィールド	カタログの説明を入力します。
[カタログタイプ (Catalog Type)] ドロップダウンリスト	以前選択したカタログのタイプを表示します。カタログタイプを変更するには、この手順をキャンセルしてから再開する必要があります。
[カタログアイコン (Catalog Icon)] ドロップダウンリスト	このカタログに関連付けるイメージのアイコンをリストから選択します。このアイコンは、このカタログを使用してサービスリクエストを作成するときに表示されます。

名前	説明
[すべてのグループに適用 (Applied to all groups) ] チェック ボックス	すべてのグループがこのカタログを使用できるようにする場合に、このボックスをオンにします。他のグループの使用を拒否するには、このチェック ボックスをオフのままにします。
[サポートの問い合わせ先の電子メールアドレス (Support Contact Email Address) ] フィールド	このカタログ項目を使用してサービスリクエストが作成された際に通知が送信されるサポート担当者の電子メールアドレスを入力します。
[選択されたグループ (Selected Groups) ] リスト	特定のユーザグループを選択する場合に、リストを展開して、このチェック ボックスをクリックします。オンにしたグループは、新しい VM をプロビジョニングするときにこのカタログを使用します。  [Validate] をクリックします。
[エンド ユーザへ公開 (Publish to end users) ] チェック ボックス	デフォルトでは、このボックスはオンになっています。このカタログがエンドユーザに表示されないようにするには、このボックスをオフにします。このボックスをオフにしなかった場合、このカタログはエンドユーザに表示されます。
[クラウド名 (Cloud Name) ] ドロップダウン リスト	VM プロビジョニング用のイメージがあるクラウドを選択します。
[ISO マウント用の新しい VM のプロビジョニング (Provision new VM for ISO mounting) ] チェック ボックス	選択されたイメージから新しい VM を複製する場合に、このボックスをオンにします。このチェック ボックスをオンにしない場合、空の VM が作成されます。

名前	説明
[イメージ (Image) ] リスト	<p>このカタログを使用してVMをプロビジョニングするときに使用するイメージのタイプ (イメージを構成する Windows ファイル、Linux ファイル、およびその他のファイルなどの既存のテンプレート) を選択し、[検証 (Validate) ] をクリックします。</p> <p>グループ管理者である場合や、カタログを作成する権限のあるグループのユーザである場合は、属しているグループに割り当てられたイメージがこのフィールドに表示されます。</p> <p>自身が MSP 管理者である場合は、属している MSP 組織とその MSP 組織内のグループに割り当てられたイメージがこのフィールドに表示されます。</p>
[コンテンツ ライブラリ VM テンプレートを使用した新しい VM のプロビジョニング (Provision new VM using Content Library VM Template) ] チェック ボックス	<p>コンテンツ ライブラリ VM テンプレートを使用して新しいVMがプロビジョニングされていることを確認する場合に、このボックスをチェックします。</p> <p>このオプションを選択した場合、[イメージ (Image) ] リストは非表示になります。</p>
[コンテンツ ライブラリ VM テンプレート (Content Library VM Template) ] リスト	<p>コンテンツ ライブラリ VM テンプレートを選択します。</p>
[Windows ライセンス プール (Windows License Pool) ] フィールド	<p>Windows ライセンスを入力します。</p> <p>(注) このフィールドは、Windows イメージが選択されて場合にのみ表示されます。このオプションは、RHEV KVM コネクタではサポートされません。</p>

名前	説明
<p>[ReadyClone の使用 (Use ReadyClone) ] チェック ボックス</p>	<p>VM が ReadyClones を使用して導入されるようにする場合に、このボックスをオンにします。</p> <p>このボックスをオンにすると、[リンク済み複製の使用 (Use Linked Clone) ] チェック ボックスと [単一データストアのすべてのディスクをプロビジョニングします (Provision all disks in single datastore) ] のチェック ボックスは編集できなくなります。</p> <p>(注) このチェック ボックスは次の場合は表示されません。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 選択したイメージが HX データストア上にない。</li> <li>2. VM に複数のディスクがある。</li> </ol>
<p>[リンク済み複製の使用 (Use Linked Clone) ] チェック ボックス</p>	<p>リンク済みの複製を使用する場合にこのボックスをオンにします。</p> <p>リンクされた複製かフル複製かは、ストレージポリシーで選択したリンクされた複製によって異なります。</p> <p>(注) このフィールドは、スナップショットイメージが選択されている場合にのみ表示されます。</p>
<p>[単一データストアのすべてのディスクをプロビジョニング (Provision all disks in single datastore) ] チェック ボックス</p>	<p>単一データストアのすべてのディスクをプロビジョニングする場合にこのボックスをオンにします。ストレージポリシーで各ディスクに対して設定されているデータストアを使用することも選択できます。</p> <p>複数ディスク ストレージ ポリシーの作成の詳細については、<a href="#">ポリシーの管理, (209ページ)</a> を参照してください。</p> <p>(注) このフィールドは、選択したテンプレートに複数のディスクがある場合にのみ表示されます。このオプションは、RHEV KVM コネクタではサポートされません。</p>

名前	説明
[サービス コンテナ テンプレート名 (Service Container Template Name) ] ドロップダウン リスト	リストからテンプレートを選択します。 (注) このフィールドは、選択したカタログ タイプが [サービス コンテナ (Service Container) ] である場合にのみ表示されます。
[フォルダの選択 (Select Folder) ] ドロップダウン リスト	このカタログの作成先となるフォルダを選択します。 (注) ドロップダウン リストには、デフォルトで使用可能なフォルダの名前が含まれます。使用可能なフォルダを選択するか、または [フォルダの新規作成 (Create New Folder) ] をクリックします。  [新しいフォルダの追加 (Add New Folder) ] 画面で [フォルダ名 (Folder Name) ] にフォルダ名を入力し、[フォルダ アイコン (Folder Icon) ] を選択して [追加 (Add) ] をクリックします。
[ベア メタル サーバ プロビジョニング ポリシー (Bare Metal Server Provisioning Policy) ] ドロップダウン リスト	(注) このフィールドは、選択したカタログ タイプが [ベア メタル (Bare Metal) ] である場合にのみ表示されます。
[サービス リクエストのサポート用電子メール (Configure Service Request Support Email) ] のチェック ボックス	ユーザがサービス リクエストのステータスの送信にサポート用電子メールを設定できるようにする場合に、このボックスをオンにします。

**ステップ 6** [次へ (Next) ] をクリックします。

**ステップ 7** [カタログの追加 (Add Catalog) ] の [アプリケーションの詳細 (Application Details) ] 画面で、次を含む必須フィールドに値を入力します。

名前	説明
[カテゴリ (Category) ] リスト	リストを展開して VDC カテゴリを選択し、[選択 (Select) ] をクリックします。

名前	説明
[オーバーライド (Override) ] チェック ボックス	サービス リクエストを使用した VM のプロビジョニング時に、選択したカテゴリをユーザがオーバーライドできるようにする場合に、このボックスをオンにします。
[サポートの問い合わせ先の電子メールアドレス (Support Contact Email Address) ] フィールド	このカタログ項目を使用してサービスリクエストが作成されたときに通知が送信される連絡先の電子メールアドレスを入力します。
[OSの指定 (Specify OS) ] ドロップダウン リスト	VMのプロビジョニング時に、VMにインストールされる OS のタイプを選択します。  (注) このオプションは、RHEV KVM コネクタではサポートされません。
[他のOSの指定 (Specify Other OS) ] フィールド	[OSの指定 (Specify OS) ] ドロップダウン リストで選択できない OS を入力します。  (注) このオプションは、RHEV KVM コネクタではサポートされません。
[アプリケーションの指定 (Specify Applications) ] チェック ボックス	プロビジョニング時に VM にインストールするアプリケーションを指定する場合に、該当するボックスをオンにします。  (注) このオプションは、RHEV KVM コネクタではサポートされません。
[他のアプリケーションの指定 (Specify Other Applications) ] フィールド	[アプリケーションの指定 (Specify Applications) ] チェック ボックスから使用できない他のアプリケーションを入力します。  (注) このオプションは、RHEV KVM コネクタではサポートされません。

名前	説明
[アプリケーションコード (Application Code) ] フィールド	<p>VM名に使用するアプリケーションコードを入力します。</p> <p>アプリケーションコードは1～4文字です (例: W2K3、DB、WS)。VM名のシステムポリシーでアプリケーションコードを使用するには、変数 <code>\${APPCODE}</code> を使用します。</p> <p>たとえばVM名のテンプレートが <code>vm-\${GROUP_NAME}-\${APPCODE}</code> の場合、システムポリシーを使用してプロビジョニングされたVMの名前は <code>vm-groupname-W2K3</code> になります。</p> <p>(注) このオプションは、RHEV KVM コネクタではサポートされません。</p>

**ステップ 8** [次へ (Next) ] をクリックします。

**ステップ 9** [カタログの追加 (Add Catalog) ] の [ユーザ クレデンシャル (User credentials) ] 画面で、次を含む必須フィールドに値を入力します。

(注) このオプションは、RHEV KVM コネクタではサポートされません。

名前	説明
[クレデンシャル オプション (Credential Options) ] ドロップダウン リスト	<p>ユーザに対し、VM アクセス クレデンシャル (共有) の取得を許可するか、または禁止するかを選択します。次のオプションを使用できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>共有しない</li> <li>パスワードリセット後に共有する</li> <li>テンプレート クレデンシャルを共有する</li> </ul> <p>管理者が Cisco UCS Director 外部の別のユーザにクレデンシャルをプライベートに送信する場合は、[共有しないでください (Do not share) ] オプションを選択します。</p>
[ユーザ ID (User ID) ] フィールド	<p>ユーザ ID を入力します。</p> <p>(注) このフィールドは、[クレデンシャル オプション (Credential Options) ] で共有されているときのみ使用できます。</p>

名前	説明
[パスワード (Password) ] フィールド	<p>パスワードを入力します。</p> <p>(注) このフィールドは、[クレデンシャルオプション (Credential Options) ]で共有されているときのみ使用できます。</p>

**ステップ 10** [次へ (Next) ]をクリックします。

**ステップ 11** [カタログの追加 (Add Catalog) ]の[カスタマイズ (Customization) ]画面で、次を含む必須フィールドに値を入力します。

名前	説明
[自動ゲストカスタマイズの有効化 (Automatic Guest Customization Enable) ]チェック ボックス	<p>自動ゲストカスタマイズを有効にする場合に、このボックスをオンにします。</p> <p>このチェック ボックスをオンにしない場合、Cisco UCS Director では DNS、ネットワーク、およびゲスト OS プロパティが設定されません。</p>
[プロビジョニング後のカスタム アクションの有効化 (Post Provisioning Custom Actions Enable) ]チェック ボックス	<p>VMのプロビジョニング後にオーケストレーションワークフローを有効にする場合に、このボックスをオンにします。</p>
[ワークフロー (Workflow) ]ドロップダウン リスト	<p>プロビジョニング用に定義されたワークフローを選択します。</p> <p>(注) このフィールドは、[プロビジョニング後のカスタム アクションの有効化 (Post Provisioning Custom Actions Enable) ]がオンの場合に表示されます。</p>
[仮想ストレージカタログの有効化 (Virtual Storage Catalog Enable) ]チェック ボックス	<p>仮想ストレージカタログからストレージ エンティティを選択する場合に、このボックスをオンにします。</p>
[仮想ストレージカタログ (Virtual Storage Catalog) ]ドロップダウン リスト	<p>カタログからストレージ エントリを選択します。</p> <p>(注) このフィールドは、[仮想ストレージカタログの有効化 (Virtual Storage Catalog Enable) ]がオンの場合に表示されます。</p>
コスト計算	

名前	説明
[請求期間 (Charge Duration) ] ドロップダウンリスト	[毎時 (Hourly) ]または[毎月 (Monthly) ]を選択します。
[アクティブな VM アプリケーションのコスト (USD) (Active VM Application Cost USD) ] フィールド	テンプレートに含まれているアプリケーションコストを入力します。 (注) このオプションは、RHEV KVM コネクタではサポートされません。
[非アクティブな VM アプリケーションのコスト (USD) (Inactive VM Application Cost USD) ] フィールド	非アクティブな状態の VM のこのカタログにかかる毎時または毎月のコストを入力します。 (注) このオプションは、RHEV KVM コネクタではサポートされません。
VM ライフサイクル設定	
[リース時間 (Lease Time) ] チェック ボックス	リース時間 (日数と時間数) を定義する場合に、このボックスをオンにします。
[日数 (Days) ] フィールド	これを行うには、日数を入力します。 (注) このフィールドは、[リース時間 (Lease Time) ] がオンになっている場合に表示されます。
[時間 (Hours) ] フィールド	時間数を入力します。 (注) このフィールドは、[リース時間 (Lease Time) ] がオンになっている場合に表示されます。
[エンドユーザのリース設定を非表示 (Hide end user lease configuration) ] チェック ボックス	サービスユーザによって VM のリース時間が設定されないようにするには、このボックスをオンにします。
[VM のプロビジョニング後のエンドユーザを非表示 (Hide end user VM provision later) ] チェック ボックス	サービスユーザによって、後から VM がプロビジョニングされないようにするには、このボックスをオンにします。

**ステップ 12** [次へ (Next) ] をクリックします。

**ステップ 13** [カタログの追加 (Add Catalog) ] の [VM アクセス (VM Access) ] 画面で、次を含む必須フィールドに値を入力します。

名前	説明
[Web アクセス設定の有効化 (Web Access Configuration Enable) ] チェック ボックス	VM への Web アクセスを有効にする場合に、このボックスをオンにします。デフォルトでは、このチェック ボックスはオフになっており、Web からの VM へのアクセスは無効になっています。
[URL] フィールド	VM の URL を入力します。  (注) このフィールドは、[Web アクセス設定の有効化 (Web Access Configuration Enable) ] がオンの場合に表示されません。
[ラベル (Label) ] フィールド	この URL に定義されたラベルを入力します。  (注) このフィールドは、[Web アクセス設定の有効化 (Web Access Configuration Enable) ] がオンの場合に表示されません。
[リモート デスクトップのアクセス設定の有効化 (Remote Desktop Access Configuration Enable) ] チェック ボックス	VM へのリモート アクセスを有効にする場合に、このボックスをオンにします。デフォルトでは、このチェック ボックスはオフになっており、リモートデスクトップからの VM へのアクセスは無効になっています。
[サーバ (Server) ] フィールド	サーバのリモート アクセス用 IP アドレスを入力します。  (注) このフィールドは、[リモートデスクトップのアクセス設定の有効化 (Remote Desktop Access Configuration Enable) ] がオンの場合に表示されません。
[ポート (Port) ] フィールド	サーバのリモートアクセス用ポート番号を入力します。  (注) このフィールドは、[リモートデスクトップのアクセス設定の有効化 (Remote Desktop Access Configuration Enable) ] がオンの場合に表示されません。

名前	説明
[ラベル (Label) ]フィールド	このリモートアクセスに定義されたラベルを入力します。  (注) このフィールドは、[リモートデスクトップのアクセス設定の有効化 (Remote Desktop Access Configuration Enable) ]がオンの場合に表示されません。
[VMRC コンソール設定の有効化 (VMRC Console Configuration Enable) ]チェック ボックス	VMRC コンソールが VM にアクセスできるようにする場合に、このボックスをオンにします。デフォルトでは、このチェックボックスはオフになっており、VMRC コンソールからの VM へのアクセスは無効になっています。

**ステップ 14** [次へ (Next) ]をクリックします。

**ステップ 15** [カタログの追加 (Add Catalog) ]の [概要 (Summary) ]画面に表示されたカタログ情報を確認します。

**ステップ 16** [送信 (Submit) ]をクリックします。

## 詳細カタログの公開について

高度なカタログタイプを選択すると、ワークフローカタログをプロビジョニングできます。エンドユーザはサービス要求中にこれらのカタログとワークフローを実行できます。詳細カタログ項目は、グループ名やワークフローなどのパラメータを定義して作成します。

## 詳細カタログの公開

### 手順

**ステップ 1** [ポリシー (Policies) ]>[カタログ (Catalogs) ]を選択します。

**ステップ 2** [カタログ (Catalog) ]ページで、[追加 (Add) ]をクリックします。

**ステップ 3** [カタログの追加 (Catalog Add) ]画面で、[カタログタイプ (Catalog Type) ]ドロップダウンリストから [詳細 (Advanced) ]を選択します。

**ステップ 4** [送信 (Submit) ]をクリックします。

**ステップ 5** [カタログの追加 (Add Catalog) ]画面で、次を含む必須フィールドに値を入力します。

名前	説明
<b>[基本情報 (Basic Information) ] ペイン</b>	
[カタログ名 (Catalog Name) ] フィールド	カタログの名前。
[カタログの説明 (Catalog Description) ] フィールド	カタログの説明。
[カタログタイプ (Catalog Type) ]	[詳細 (Advanced) ] を選択します。
[カタログアイコン (Catalog Icon) ] ドロップダウン リスト	このカタログに関連付けるイメージのアイコンを選択します。アイコンは、このカタログを使用してサービスリクエストを作成するときに表示されます。
[すべてのグループに適用 (Applied to all groups) ] チェック ボックス	すべてのグループがこのカタログを使用できるようにするには、このチェックボックスをオンにします。デフォルトでは、このチェックボックスはオフになっているため、すべてのグループがこのカタログを使用できないことを意味します。
[サポートの問い合わせ先の電子メールアドレス (Support Contact Email Address) ] フィールド	サポート担当者の電子メールアドレス。
選択済みグループ (Selected Groups)	<p>[選択 (Select) ] をクリックし、以下の操作を行います。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 (任意) [すべてオン (Check All) ] をクリックしてすべてのカテゴリを選択するか、または [すべてオフ (Check None) ] をクリックしてすべてのカテゴリを選択解除します。</li> <li>2 [項目の選択 (Select Items) ] ダイアログ ボックスで、追加するグループをオンにします。オンにしたグループは、新しい VM をプロビジョニングするときにこのカタログを使用できます。</li> <li>3 [選択 (Select) ] をクリックして、カテゴリの選択を終了します。</li> </ol>

名前	説明
[エンドユーザへ公開 (Publish to end users) ] チェックボックス	デフォルトで、このチェックボックスはオンになっており、カタログがエンドユーザに提供されることを意味します。このカタログがエンドユーザに表示されないようにするには、このチェックボックスをオフにします。
[フォルダの選択 (Select Folder) ]ドロップダウンリスト	このカタログを作成するフォルダを選択します。  (注) ドロップダウンリストには、すでに利用可能なフォルダの名前が表示されています。利用可能なフォルダを選択するか、+アイコンをクリックして新しいフォルダを作成します。  新しいフォルダを作成するためには、[新しいフォルダの追加 (Add New Folder) ]ダイアログボックスで、フォルダ名を指定し、そのフォルダのアイコンを選択します。
[サービスリクエストサポートの電子メールの設定 (Configure Service Request Support Email) ]フィールド	サービスリクエストステータスの電子メールを送信する必要がある電子メールアドレスを指定する場合にこのチェックボックスをオンにします。

- ステップ 6 [次へ (Next) ]をクリックします。
- ステップ 7 [vApp ワークフロー (vApp Workflow) ]ペインで、[ワークフローの選択 (Workflow Select) ]をクリックします。
- ステップ 8 [選択 (Select) ]ペインで、適切なワークフローの横のチェックボックスをオンにします。
- ステップ 9 [選択 (Select) ]をクリックします。
- ステップ 10 [サマリー (Summary) ]ページのカatalog情報を確認します。
- ステップ 11 [送信 (Submit) ]をクリックします。

## ベアメタルサーバカタログの作成

はじめる前に

ベアメタルプロビジョニングポリシーを作成する必要があります。

手順

- ステップ 1 [ポリシー (Policies)] > [カタログ (Catalogs)] を選択します。
- ステップ 2 [カタログ (Catalog)] ページで、[追加 (Add)] をクリックします。
- ステップ 3 [カタログの追加 (Add Catalog)] 画面で、カタログタイプとして [ベアメタル (Bare Metal)] を選択します。
- ステップ 4 [送信 (Submit)] をクリックします。
- ステップ 5 [カタログの追加 (Add Catalog)] 画面で、次を含む必須フィールドに値を入力します。

[名前 (Name)]	説明
[基本情報 (Basic Information)] ペイン	
[カタログ名 (Catalog Name)] フィールド	カatalogの名前を入力します。 (注) 一度作成されたカタログ名は変更できません。
[カタログの説明 (Catalog Description)] フィールド	カatalogの説明を入力します。
[カタログタイプ (Catalog Type)] ドロップダウンリスト	このフィールドは編集できません。ベアメタルが表示されます。
[カタログアイコン (Catalog Icon)] ドロップダウンリスト	このカタログに関連付けるイメージのアイコンをリストから選択します。このアイコンは、このカタログを使用してサービスリクエストを作成するときに表示されます。
[すべてのグループに適用 (Applied to all groups)] チェックボックス	すべてのグループがこのカタログを使用できるようにするには、このチェックボックスをオンにします。他のグループの使用を拒否するには、このチェックボックスをオフのままにします。
[サポートの問い合わせ先の電子メールアドレス (Support Contact Email Address)] フィールド	サポート担当者の電子メールアドレスを指定します。 これらのユーザは、カタログを使用したベアメタルサーバのプロビジョニングのステータスに関する電子メール通知を受け取ります。 (注) また、この通知メールはベアメタルサーバのプロビジョニングを開始したユーザにも送信されます。

[名前 (Name) ]	説明
[選択されたグループ (Selected Groups) ]チェックボックスリスト	[選択した項目 (Select Items) ]ダイアログボックスに含まれているグループのチェックボックスをオンにします。オンにしたグループは、新しいベアメタルサーバをプロビジョニングするときにこのカタログを使用します。
[エンドユーザへ公開 (Publish to end users) ]チェックボックス	デフォルトでは、このチェックボックスはオンになっています。このカタログがエンドユーザに表示されないようにするには、このチェックボックスをオフにします。このチェックボックスをオフにしない場合、このカタログはシステムのエンドユーザに表示されます。
[フォルダの選択 (Select Folder) ]ドロップダウンリスト	このカタログの作成先となるフォルダを選択します。  (注) ドロップダウンリストには、デフォルトで使用可能なフォルダの名前が含まれます。利用可能なフォルダを選択するか、+アイコンをクリックして新しいフォルダを作成します。  新しいフォルダを作成するためには、[新しいフォルダの追加 (Add New Folder) ]ダイアログボックスで、フォルダ名を指定し、そのフォルダのアイコンを選択します。
[ベアメタルサーバプロビジョニングポリシー (Bare Metal Server Provisioning Policy) ]ドロップダウンリスト	ベアメタルプロビジョニングポリシーを選択します。
[サービスリクエストのサポート用電子メール (Configure Service Request Support Email) ]のチェックボックス	デフォルトでは、このチェックボックスはオフになっています。サービスリクエストのステータスを電子メールで送信する場合、電子メールアドレスを指定するには、このチェックボックスをオンにします。

**ステップ 6** [次へ (Next) ]をクリックします。

**ステップ 7** ベアメタルワークフローペインで、[選択 (Select) ]をクリックし、ベアメタルサーバのプロビジョニングワークフローを選択します。  
ベアメタルのワークフローを作成するには、最低限、次の一連のタスクを含める必要があります。

- ベア メタル プロビジョニング ラッパー
- UCS サーバを選択 (Select UCS Server)
- [テンプレートからの UCS サービス プロファイルの作成 (Create UCS Service Profile from Template) ]
- [UCS サービス プロファイルの関連付け (Associate UCS Service Profile) ]
- BMA 選択を使用した PXE ブートのセットアップ (Setup PXE Boot With BMA Selection)
- UCS サーバの電源オン (Power On UCS Server)
- [PXE ブートのモニタ (Monitor PXE Boot) ]
- [UCS サービス プロファイルブート ポリシーの変更 (Modify UCS Service Profile Boot Policy) ]
- UCS サーバの電源オン (Power On UCS Server)
- グループへのUCSサーバの割り当て (Assign UCS Server to Group)

**ステップ 8** [次へ (Next) ] をクリックします。

**ステップ 9** [概要 (Summary) ] ペインのカタログ情報を確認します。

**ステップ 10** [送信 (Submit) ] をクリックします。

---

### 次の作業

このカタログを使用して、ベア メタル サーバ用のサービス リクエストを作成できます。

## フォルダ内のカタログの並べ替え

デフォルトでは、フォルダ内のカタログはアルファベット順に表示されますが、順番をカスタマイズできます。

### 手順

---

**ステップ 1** [ポリシー (Policies) ] > [カタログ (Catalogs) ] を選択します。

**ステップ 2** [カタログ (Catalog) ] ページで、フォルダを展開し、そのフォルダ内のカタログを表示します。

**ステップ 3** リストからカタログを選択します。

**ステップ 4** [上へ移動 (Move Up) ] または [下へ移動 (Move Down) ] オプションを選択して、カタログの順序を並べ替えます。

---

## 展開するホストへのアクセス

カタログ項目を選択して、展開可能なホストを評価し、除外されたホストの理由を入力できます。この評価をすべての設定済み VDC で実行するか、または特定の VDC で実行するかを選択できます。

### 手順

- ステップ 1 [ポリシー (Policies) ] > [カタログ (Catalogs) ] を選択します。
- ステップ 2 [カタログ (Catalog) ] ページで、アクセスするカタログ エントリを選択します。
- ステップ 3 [導入可能性に関するアセスメント (Deployability Assessment) ] をクリックします。
- ステップ 4 [vDC の選択 (Select vDC) ] 画面で、次を含む必須フィールドに値を入力します

フィールド	説明
[すべてのVDCでアセスメントを実行する (Run Assessment Across all VDCs) ] チェック ボックス	デフォルトではチェック ボックスがオンになっており、このカタログ項目がすべての VDC で評価されることを意味します。特定の VDC を選択する場合は、このチェック ボックスをオフにします。
[VDC の選択 (Select VDC) ] フィールド	[選択 (Select) ] をクリックし、カタログ項目の評価対象とする VDC のチェック ボックスをオンにします。  リストには、選択されたカタログのユーザ グループに関連付けられたすべての VDC が表示されます。

- ステップ 5 [送信 (Submit) ] をクリックします。
- ステップ 6 [導入可能性に関するアセスメント (Deployability Assessment) ] レポートを確認した後、[閉じる (Close) ] をクリックします。

## カタログ フォルダの並べ替え

デフォルトでは、カタログ フォルダはアルファベット順に表示されますが、順番をカスタマイズできます。

## 手順

---

- ステップ1 [ポリシー (Policies)] > [カタログ (Catalogs)] を選択します。
  - ステップ2 [フォルダの管理 (Manage Folder)] をクリックします。
  - ステップ3 [マネージャ フォルダ (Manager Folder)] 画面で、カタログ フォルダを選択し、フォルダの順序を変更する矢印を使用します。
  - ステップ4 [送信 (Submit)] をクリックします。
-



## 第 13 章

# セルフサービス プロビジョニングの使用方 法

---

この章は、次の項で構成されています。

- [Self-Service プロビジョニング, 349 ページ](#)
- [サービス リクエスト, 350 ページ](#)
- [サービス リクエスト ワークフローと詳細, 363 ページ](#)
- [サービス リクエストのスケジュール設定について, 368 ページ](#)
- [サービス リクエストの再送信について, 368 ページ](#)
- [その他のサービス リクエスト機能, 369 ページ](#)
- [サービス リクエストの承認プロセス, 374 ページ](#)
- [サービス リクエストの予算作成, 376 ページ](#)

## Self-Service プロビジョニング

セルフサービス プロビジョニングを使用して仮想マシン (VM) またはアプリケーションをプロビジョニングできます。セルフサービス プロビジョニングを使用し、VM またはアプリケーションをプロビジョニングするには、最初にサービス リクエストを作成する必要があります。この操作によって、次の内容を含む VM 作成のワークフローが開始されます。

- 予算の検証
- 動的なリソース割り当て
- 承認
- プロビジョニング
- ライフサイクルセットアップ

- サービス リクエストのステータスに関する通知

## サービス リクエスト

セルフサービス プロビジョニング機能を使用してサービス リクエストを作成し、仮想マシン (VM)、サービス、またはアプリケーションをプロビジョニングできます。サービス リクエストプロセスではVM作成用のプロビジョニングワークフローを作成しますが、これには次のアクションが含まれます。

- 予算の検証
- 動的なリソース割り当て
- 承認
- プロビジョニング
- ライフサイクルの設定および通知



(注) [導入設定 (Deployment Configuration)] 画面でCPU コアの数やメモリ割り当てを変更すると、総コストが自動的に更新されて表示されます。

VM をプロビジョニングする、またはオーケストレーションワークフローを実行するには、最初にサービス リクエストを作成する必要があります。必要に応じて、VM をプロビジョニングするかワークフローを実行する前に、1～2人の管理者または指定されたユーザに承認を要求することができます。VM はただちに承認することも、オリジナルのリクエストから90日以内に承認するようにスケジュールすることもできます。

## 標準カタログタイプを使用したサービス リクエストの作成

### 手順

- ステップ 1 [組織 (Organizations)] > [サービス リクエスト (Service Requests)] を選択します。
- ステップ 2 [サービス リクエスト (Services Requests)] ページで、[サービス リクエスト (Service Requests)] をクリックします。
- ステップ 3 [リクエストの作成 (Create Request)] をクリックします。
- ステップ 4 [リクエストの作成 (Create Request)] 画面で、カタログタイプとして[標準 (Standard)] を選択します。
- ステップ 5 [送信 (Submit)] をクリックします。
- ステップ 6 [サービス リクエストの作成 (Create Service Request)] 画面で、次のフィールドに値を入力します。

[名前 (Name) ]	説明
<b>[カタログの選択リクエスト (Catalog Selection Request) ] 画面</b>	
[VM所有者 (VM Ownership) ]	
[顧客組織 (Customer Organization) ] ラジオ ボタン	VM をプロビジョニングする対象の顧客組織を選択するには、このオプションボタンを選択します。
[顧客組織 (Customer Organizations) ] フィールド	<p>[選択 (Select) ] をクリックして VM をプロビジョニングする顧客組織を選択します。</p> <p>有効な vDC のある顧客組織が表示されます。</p> <p>(注) このフィールドが表示されるのは、[顧客組織 (Customer Organizations) ] オプション ボタンをオンにした場合のみです。</p> <p>[サービス リクエストの作成 (Create Service Request) ] を [カタログ (Catalog) ] 画面から選択した場合に表示されるグループリストは、左側のペインで選択したユーザグループによって異なります。</p>
[ユーザ (User) ] ラジオ ボタン	このラジオ ボタンを選択して VM をプロビジョニングするユーザを選択します。
[ユーザ (User) ] フィールド	<p>[選択 (Select) ] をクリックして VM をプロビジョニングするユーザを選択します。このリストには、ユーザへのリソース割り当てを許可するグループからのユーザが表示されます。</p> <p>(注) 現在、特定のエンドユーザに割り当てることができるのは、VMware クラウド内の VM だけです。</p> <p>[サービス リクエストの作成 (Create Service Request) ] を [カタログ (Catalog) ] 画面から選択した場合に表示されるユーザリストは、左側のペインで選択したユーザグループによって異なります。</p>
VM アクセス共有	

[名前 (Name) ]	説明
[アクセス権限のあるユーザ (Users with Access Privilege) ] フィールド	<p>[選択 (Select) ]をクリックして、VM 情報へのアクセスのみを許可するユーザを選択します。</p> <p>選択したユーザには、VM へのアクセスのみが許可されます。管理タスクを実行することはできません。</p>
[管理権限のあるユーザ (Users with Manage Privilege) ] フィールド	<p>[選択 (Select) ]をクリックして、VM の管理のみを許可するユーザを選択します。</p> <p>選択したユーザは、VM の管理タスクを実行できます。</p>
[カタログタイプ (Catalog Type) ] ドロップダウン リスト	<p>カタログタイプを表示します。次のいずれかを設定できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 標準 (Standard)</li> <li>• 詳細設定 (Advanced)</li> <li>• [サービス コンテナ (Service Container) ]</li> <li>• [VDI]</li> </ul> <p>(注) [詳細 (Advanced) ]は、オーケストレーション ワークフローのために使用されます。</p>
[カタログの選択 (Select Catalog) ] ドロップダウン リスト	<p>VM のプロビジョニングに使用されるカタログを選択します。</p> <p>[カタログ (Catalog) ] 画面で [サービス リクエストの作成 (Create Service Request) ] を選択した場合は、カタログを選択できません。</p>
[導入アセスメントの実行 (Perform deployment assessment) ] チェック ボックス	<p>サービス リクエストの送信前に予算割り当て、リソース、リソース利用状況のアセスメントを実行するには、このチェック ボックスをオンにします。このチェック ボックスをオンにすると、アセスメントの概要は [導入アセスメント (Deployment Assessment) ] ペインに表示されます。</p> <p><b>重要</b> このオプションは、VMware カタログと、ISO ベースではないカタログに対してのみ表示されます。</p>

**ステップ 7** [次へ (Next) ] をクリックします。

**ステップ 8** [プロビジョニング設定 (Provisioning Configuration) ] 画面で、次のフィールドに値を入力します。

[名前 (Name) ]	説明
[vDC の選択 (Select vDC) ] ドロップダウン リスト	サービス リクエストの vDC を選択します。
[VM 名 (VM Name) ] フィールド	VM の名前を指定します。 名前を指定しない場合、システムは自動的に VM の名前を生成します。
[ゲスト OS (Guest OS) ] フィールド	[選択 (Select) ] をクリックして、サービス リクエストのゲスト OS を選択します。
[vCPU 数 (Number of vCPUs) ] ドロップダウン リスト	ドロップダウンリストから vCPU 数を選択します。  このフィールドは、VMware コンピューティング ポリシーを作成するときに、[VM のサイズ変更を許可 (Allow Resizing of VM) ] をオンにした場合にのみ入力および編集ができます。
[メモリ (Memory) ] ドロップダウン リスト	ドロップダウンリストからメモリ容量を選択します。  このフィールドは、VMware コンピューティング ポリシーを作成するときに、[VM のサイズ変更を許可 (Allow Resizing of VM) ] をオンにした場合にのみ入力および編集ができます。
[カテゴリ (Category) ] フィールド	[選択 (Select) ] をクリックし、カタログの作成時に指定のものとは異なるアプリケーションカテゴリを選択します。

**ステップ 9** [次へ (Next) ] をクリックします。

**ステップ 10** [導入設定 (Deployment Configuration) ] 画面で、次のフィールドに値を入力します。

[名前 (Name) ]	説明
[VDC の選択 (Select VDC) ] ドロップダウン リスト	VM がプロビジョニングされる VDC。 VDC は管理者によって定義されます。
[VM 名または VM プレフィクス (VM Name or VM Prefix) ] フィールド	VM 名またはプレフィクス。

[名前 (Name) ]	説明
[コメント (Comment) ]フィールド	導入の設定に関するコメント。
[プロビジョニング (Provision) ] ドロップダウン リスト	<p>[今すぐ (Now) ]または[あとで (Later) ]のいずれかを選択します。</p> <p>[今すぐ (Now) ]を選択することで、今後90日以内であればいつでもプロビジョニングを設定できます。[あとで (Later) ]を選択すると、日付選択用のカレンダー、時間と分のドロップダウンリスト、およびAMまたはPMのオプション ボタンが表示されます。</p>
[日数 (Days) ] カレンダー	<p>この日数が経過すると VM が終了します。</p> <p>(注) このオプションは、[次の期間後にVMの電源をオフにする (Power OFF the VM After) ]がオンの場合に表示されます。</p>
[時間 (Hours) ] ドロップダウン リスト	<p>選択した時間が経過すると VM が終了します。</p> <p>(注) このオプションは、[次の期間後にVMの電源をオフにする (Power OFF the VM After) ]がオンの場合に表示されます。</p>
[分 (Minutes) ] ドロップダウン リスト	<p>選択した時間 (分単位) が経過すると VM が終了します。</p> <p>(注) このオプションは、[次の期間後にVMの電源をオフにする (Power OFF the VM After) ]がオンの場合に表示されます。</p>
[リース時間 (Lease Time) ] チェック ボックス	VMのリース時間が設定されていることを表示する場合にオンにします。
<p>デフォルトのコスト計算期間の設定</p> <p><b>重要</b> VDCを追加または変更するときに [コスト詳細情報の表示の無効化 (Disable displaying cost details) ] チェック ボックスをオンにした場合、この情報は表示されません。</p>	
[請求期間 (Charge Duration) ] ドロップダウン リスト	デフォルト コストを計算する期間を選択します。デフォルトでは、この期間は [毎月 (Monthly) ] に設定されています。

[名前 (Name) ]	説明
[月 (Month) ] フィールド	コスト計算に含める月数を指定します。 (注) このフィールドは、[請求期間 (Charge Duration) ] ドロップダウンリストから [毎月 (Monthly) ] を選択した場合のみ表示されます。
[日 (Day) ] フィールド	コスト計算に含める日数を指定します。 (注) このフィールドは、[請求期間 (Charge Duration) ] ドロップダウンリストから [毎日 (Daily) ] を選択した場合のみ表示されます。
[時間 (Hours) ] フィールド	コスト計算に含める時間数を指定します。 (注) このフィールドは、[請求期間 (Charge Duration) ] ドロップダウンリストから [毎時 (Hourly) ] を選択した場合のみ表示されます。

**ステップ 11** [次へ (Next) ] をクリックします。

**ステップ 12** [カスタム仕様 (Custom Specification) ] 画面で、次のフィールドに値を入力します。

[名前 (Name) ]	説明
[CPU コア (CPU Cores) ] ドロップダウン リスト	プロビジョニングされる VM の CPU コアを選択します。 (注) このリストは、[コンピューティングポリシー (Computing Policy) ] 画面でサイズ変更オプションを選択した場合に開きます。

[名前 (Name) ]	説明
[ソケットあたりのコア数 (Cores Per Socket) ] ドロップダウン リスト	<p>プロビジョニングされる VM のソケットあたりのコア数を選択します。ソケットあたりの使用可能なコア数は、VM コンピューティングポリシーで指定されます。</p> <p>表示される値は、VM コンピューティングポリシーと選択された CPU の数に基づきます。[ソケットあたりのコア数 (Cores Per Socket) ] ドロップダウン リストの値は、CPU カウントの約数です。たとえば、CPU カウントが 4 で、VM コンピューティングポリシーに指定されたコアあたりに許可されるソケット数が 1、2、3、および 4 の場合、[ソケットあたりのコア数 (Cores Per Socket) ] ドロップダウン リストに 1、2、および 4 が使用可能なオプションとして表示されます。</p>
[メモリ (Memory) ] ドロップダウン リスト	<p>プロビジョニングされる VM のメモリ量を選択します。</p> <p>(注) このリストは、[コンピューティングポリシー (Computing Policy) ] 画面でサイズ変更オプションを選択した場合に開きます。</p>
[概算SRコスト予測 (Approximate SR Cost Estimate) ] フィールド	<p>[デフォルトのコスト計算期間の設定 (Default Cost Computation Period Settings) ] フィールドに入力した値に基づいて、概算 SR コストが表示されます。</p> <p><b>重要</b> VDC を追加または変更するときに [コスト詳細情報の表示の無効化 (Disable displaying cost details) ] をオンにした場合、この情報は表示されません。</p>

[名前 (Name) ]	説明
[ストレージ階層 (Storage Tier) ] ドロップダウンリスト	<p>プロビジョニングされる VM のストレージエントリをカスタマイズするオプションを選択します。</p> <p>(注) このカスタム リストは、選択されたカタログの作成時に仮想ストレージカタログが有効であった場合に開きます。</p> <p>仮想ストレージ カatalogの作成の詳細については、<a href="#">ポリシー, (209 ページ)</a> を参照してください。カタログの作成時にこのオプションを有効化した場合の詳細については、<a href="#">カタログ管理について, (329 ページ)</a> を参照してください。</p>
[ディスクのデータストア (Disk Datastores) ] テーブル	<p>VM のプロビジョニングに望ましいハードディスクのサイズを選択します。使用可能なデータストアのリストは、ストレージポリシーで指定されたスコープ条件によって異なります。ストレージポリシーでこのオプションを有効または無効にできます。</p> <p>ディスクをテーブルから選択し、データストアを選択するには、鉛筆アイコンをクリックします。</p> <p>(注) ストレージポリシー内の [ディスクのサイズ変更を許可 (Allow Resizing of Disk) ] オプションを有効にした場合は、ディスクのサイズを編集できます。</p>

- ステップ 13** ディスクのデータストアを選択するには、ディスクをリストから選択し、[鉛筆 (Pencil) ] アイコンをクリックします。
- ステップ 14** [選択 (Export Report) ] をクリックして、使用可能なデータストアを表示します。
- ステップ 15** リストからデータストアを選択し、[選択 (Select) ] をクリックします。
- ステップ 16** [送信 (Submit) ] をクリックします。
- ステップ 17** (任意) 複数のディスクを含むテンプレートの場合は、各ディスクのデータストアを選択します。
- ステップ 18** [カスタム仕様 (Custom Specification) ] 画面で、[選択 (Select) ] をクリックして使用可能な VM ネットワークを表示します。

(注) このオプションは、このVMプロビジョニングのサービス リクエストで選択されたVDCに関連するネットワーク ポリシーで、[エンドユーザにオプションのNICの選択を許可 (Allow end user to select optional NICs)] または [エンドユーザによるポートグループ選択を許可 (Allow end user to choose portgroups)] がオンの場合にのみ使用できます。詳細については、[ネットワーク ポリシーの追加](#)、(241 ページ) を参照してください。

**ステップ 19** VM ネットワークをリストから選択し、[選択 (Select)] をクリックします。

**ステップ 20** [次へ (Next)] をクリックします。

**ステップ 21** [カスタム ワークフロー (Custom Workflow)] 画面の詳細を入力します。

(注) カスタム ワークフローの入力は、VM のプロビジョニング用に選択されたカタログの [プロビジョニング後のカスタム アクション (Post Provisioning Custom Actions)] が有効な場合に適用されます。このシナリオでは、プロビジョニング後のワークフローで、ユーザはカスタム入力を指定できます。

**ステップ 22** [Next] をクリックします。

(注) 使用可能なデータストアのリストは、ストレージ ポリシーで指定されたスコープ条件によって異なります。各ディスク カテゴリ (システム、データ、データベース、切替、ログ) に対してデータストアを1つだけ選択できます。

**ステップ 23** [導入アセスメントの実行 (Perform deployment assessment)] をオンにした場合は、[導入アセスメント (Deployment Assessment)] 画面に表示されたアセスメント レポートを確認します。このアセスメント レポートがエラーを特定した場合、前のペインに戻り、要求を送信する前に、エラーを修正する必要があります。アセスメント レポートにエラーが表示されない場合、[次へ (Next)] をクリックします。

**ステップ 24** サービス リクエストの概要を確認します。

**ステップ 25** [送信 (Submit)] をクリックします。

## 詳細カタログタイプを使用したサービス リクエストの作成

サービス リクエストの作成時に詳細カタログタイプを選択すると、オーケストレーション ワークフローを実行できます。詳細カタログを作成する場合の手順は、標準カタログを作成する場合とほぼ同じです。

## 手順

- ステップ 1 [組織 (Organizations) ] > [サービス リクエスト (Service Requests) ] を選択します。
- ステップ 2 [サービス リクエスト (Services Requests) ] ページで、[サービス リクエスト (Service Requests) ] をクリックします。
- ステップ 3 [リクエストの作成 (Create Request) ] をクリックします。
- ステップ 4 [リクエストの作成 (Create Request) ] 画面で、カタログタイプとして [詳細 (Advanced) ] を選択します。
- ステップ 5 [送信 (Submit) ] をクリックします。
- ステップ 6 [カタログの選択 (Catalog Selection) ] 画面で、[グループ (Group) ]、[カタログタイプ (Catalog Type) ] ([詳細 (Advanced) ])、および [カタログ (Catalog) ] ([ワークフロー (workflow) ]) を選択します。
- ステップ 7 [次へ (Next) ] をクリックします。
- ステップ 8 [カスタム ワークフロー (Custom Workflow) ] 画面で、カスタム ワークフローの入力値を入力します。
- ステップ 9 [次へ (Next) ] をクリックします。
- ステップ 10 サービス リクエストの概要を確認します。
- ステップ 11 [送信 (Submit) ] をクリックします。

## カタログタイプを使用したサービス リクエストの作成 : ベア メタル

### はじめる前に

ベア メタル カatalog、およびプロビジョニング ポリシーを作成している必要があります。

## 手順

- ステップ 1 [組織 (Organizations) ] > [サービス リクエスト (Service Requests) ] を選択します。
- ステップ 2 [サービス リクエスト (Services Requests) ] ページで、[サービス リクエスト (Service Requests) ] をクリックします。
- ステップ 3 [リクエストの作成 (Create Request) ] をクリックします。
- ステップ 4 [リクエストの作成 (Create Request) ] 画面で、カタログタイプとして [ベア メタル (Bare Metal) ] を選択します。
- ステップ 5 [送信 (Submit) ] をクリックします。
- ステップ 6 [サービス リクエストの作成 (Create Service Request) ] 画面で、次を含む必須フィールドに値を入力します。

名前	説明
[カタログの選択 (Catalog Selection) ] ペイン	
[グループの選択 (Select Group) ] ドロップダウン リスト	システムにすでに存在するグループのリストからユーザ グループを選択します。
[カタログタイプ (Catalog Type) ] ドロップダウン リスト	このフィールドは編集できません。ベアメタルが表示されます。
[カタログの選択 (Select Catalog) ] ドロップダウン リスト	ドロップダウンリストからカタログを選択します。作成したベアメタルカタログのリストが表示されます。
[導入アセスメントの実行 (Perform Deployment Assessment) ] チェック ボックス	指定した情報を使用して導入アセスメントを実行する場合にオンにします。

**ステップ 7** [次へ (Next) ] をクリックします。

**ステップ 8** [ベアメタル導入設定 (Bare Metal Deployment Configuration) ] 画面で、次を含む必須フィールドに値を入力します  
次の表に、Cisco UCS Manager アカウントに表示されるフィールドのリストを示します。

名前	説明
[サーバ (Server) ] ドロップダウン リスト	<p>ベアメタルプロビジョニングポリシーの作成時に [ユーザにサーバの選択を許可する (Allow Users to Select Servers) ] をオンにした場合、このドロップダウンリストを使用してサーバのプロビジョニングを実行するサーバを選択できます。</p> <p>サーバを選択した後に、CPU、メモリ、ストレージの詳細情報などのリソース情報が表示されます。この情報は、ベアメタルサーバのプロビジョニングポリシーの作成時に [サーバリソースをユーザに表示 (Show Server Resources to User) ] をオンにした場合にのみ表示されます。</p> <p>(注) [ユーザにサーバの選択を許可する (Allow Users to Select Servers) ] をオンにしなかった場合はこのフィールドを編集できません。プロビジョニングポリシーに指定されている基準に一致するサーバ名が読み込まれません。</p>

名前	説明
[請求期間 (Charge Duration) ] ドロップダウン リスト	デフォルト コストを計算する期間を選択します。デフォルトでは、この期間は [毎月 (Monthly) ] に設定されています。
[月 (Month) ] フィールド	コスト計算に含める月数を指定します。 (注) このフィールドは、[請求期間 (Charge Duration) ] ドロップダウン リストから [毎月 (Monthly) ] を選択した場合のみ表示されます。
[日 (Day) ] フィールド	コスト計算に含める日数を指定します。 (注) このフィールドは、[請求期間 (Charge Duration) ] ドロップダウン リストから [毎日 (Daily) ] を選択した場合のみ表示されます。
[時間 (Hours) ] フィールド	コスト計算に含める時間数を指定します。 (注) このフィールドは、[請求期間 (Charge Duration) ] ドロップダウン リストから [毎時 (Hourly) ] を選択した場合のみ表示されます。
[概算SRコスト予測 (Approximate SR Cost Estimate) ] フィールド	コスト予測を表示するには、[SR コスト予測のコンピューティング (Compute SR Cost Estimate) ] オプションをクリックします。このコスト予測は、この画面で入力した情報に基づいて計算されます。

**注目** コスト モデルがプロビジョニング ポリシーと関連付けられていない場合は、[請求期間 (Charge Duration) ] フィールドや [概算 SR コスト予測 (Approximate SR Cost Estimate) ] フィールドなどのコスト関連のすべてのフィールドは表示されません。コスト モデルがポリシーに関連付けられている場合、これらのフィールドは表示されます。

Cisco UCS Central アカウントにサービス リクエストを作成する場合は、次を含む必須フィールドに値を入力します。

名前	説明
[ドメイングループ (Domain Group) ] ドロップダウン リスト	ドメイングループを選択できます。使用可能なグループは、ベア メタル サーバのプロビジョニング ポリシーで選択したドメイングループによって特定されます。

名前	説明
[ドメイン名 (Domain Name) ] ドロップダウン リスト	このリストには、ベア メタル サーバのプロビジョニングポリシーで選択したドメイン名が表示されます。
[サーバ (Server) ] ドロップダウン リスト	このリストには、選択したドメイン名で使用可能なサーバが表示されます。
[CPU] フィールド	CPU の詳細を表示します。
[メモリ (Memory) ] フィールド	メモリ情報を表示します。
[ストレージ (Storage) ] フィールド	ストレージ関連の情報を表示します。 このフィールドは編集できません。
[OS イメージ (OS image) ] ドロップダウン リスト	ドロップダウン リストから OS イメージを選択します。  このフィールドは、ベア メタル サーバのプロビジョニングポリシーで指定されたドメインマッピングパラメータに基づいて読み込まれます。デフォルトでは、ターゲット BMA とポリシーで選択した OS イメージがプロビジョニングに使用されます。ただし、ポリシーに何らかのドメインマッピングパラメータを指定した場合は、マッピングされたドメインで選択した OS イメージがデフォルトのイメージよりも優先されます。

**ステップ 9** [カスタム ワークフロー (Custom Workflow) ] 画面で、サービス プロファイル名を指定します。

**ステップ 10** [次へ (Next) ] をクリックします。

**ステップ 11** サービス リクエストの導入アセスメントの概要を確認します。  
この情報は、[カタログの選択 (Catalog Selection) ] 画面で [導入アセスメントの実行 (Perform Deployment Assessment) ] をオンにした場合にのみ表示されます。

**ステップ 12** サービス リクエストの概要を確認します。

**ステップ 13** [送信 (Submit) ] をクリックします。

### 次の作業

[送信 (Submit)] をクリックすると、ワークフローがトリガーされ、ベア メタル サーバがプロビジョニングされます。ワークフローが完了すると、選択したグループにベア メタルサーバが表示されます。さらに、サーバのチャージバック期間が開始されます。

サーバのコスト モデルを変更する場合は、ベア メタルのプロビジョニング ポリシーでコスト モデルの選択を編集する必要があります。

## サービス リクエスト ワークフローと詳細

サービス リクエストの作成した後、そのステータスとワークフローの確認、リクエストのキャンセル、リクエストの再送信などを実行できます。これらの操作は、サービス リクエスト リストの上部のツールバー ボタンを使って制御できます。

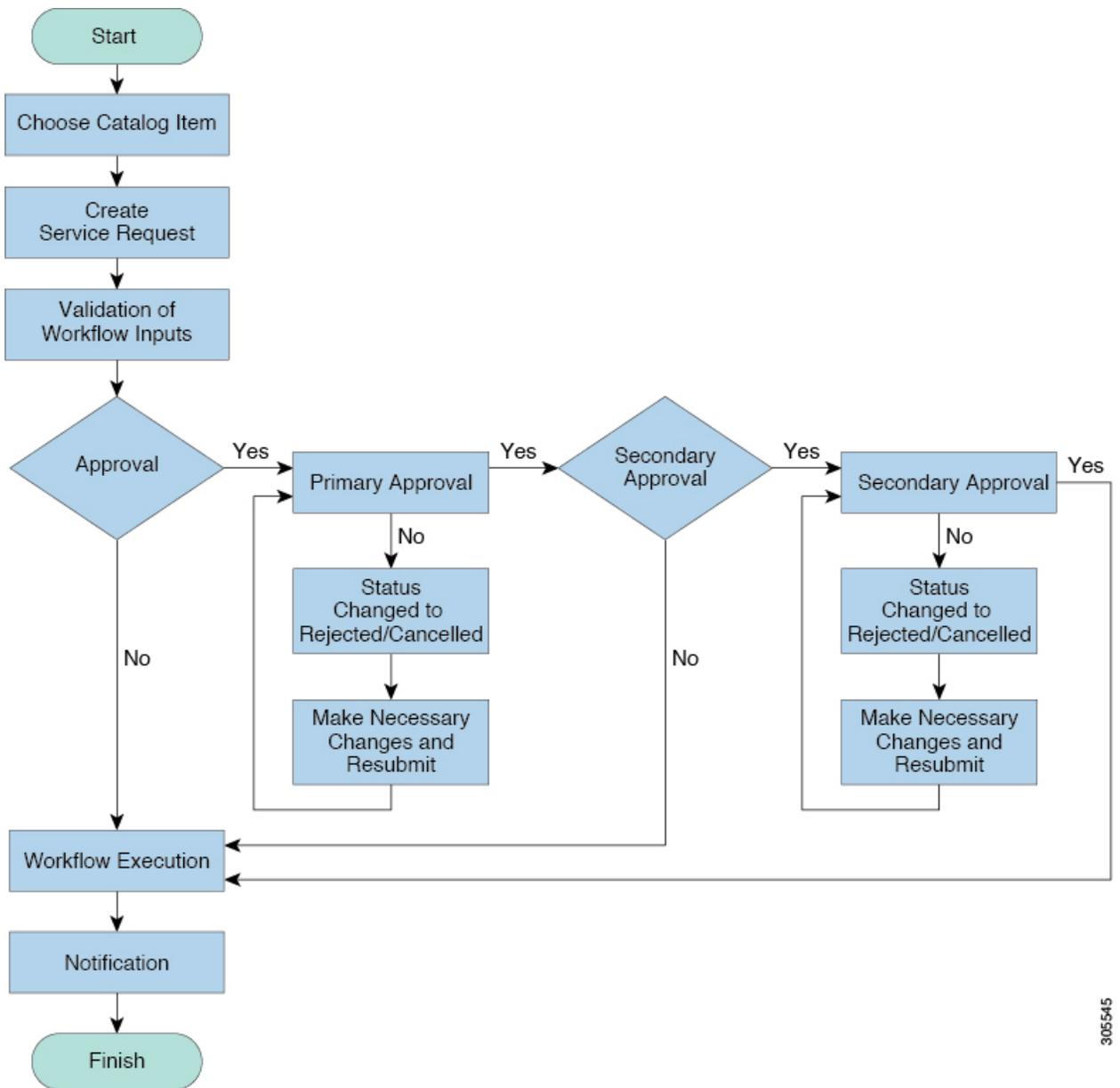
### サービス リクエスト ワークフロー

[ワークフローステータス (Workflow Status)] ボックスには、サービス リクエストおよびワークフロー ステップの詳細が表示されます。VM をプロビジョニングする一般的なサービス リクエストのワークフローには次のステップが含まれます。

- 1 開始：ユーザによるサービス リクエストの開始。
- 2 リソースの割り当て：仮想コンピューティングなどの必要なリソースがVMに割り当てられます。
- 3 承認：必要に応じてVMプロビジョニングが承認されます。このステップ時に、VMプロビジョニング用に選択されたカタログで定義された承認者に電子メールが送信されます。
- 4 プロビジョニング：VMが作成されプロビジョニングされます。
- 5 ライフサイクルスケジュールのセットアップ：セットアップ、スケジュール時間、および終了の時間を含むライフサイクルのスケジューリングが設定されます。
- 6 通知：VMが作成されプロビジョニングされたことが電子メールでユーザに通知されます。

以下は、ワークフローの示す図です。

図 4: カタログ サービス リクエストのワークフロー



305545

オプションのサービス リクエスト ワークフロー ステップには、次に示す予算の監視とリソース制限のチェックが含まれます。

- 予算の監視：管理者はグループに対して予算化を有効にする必要があります。このステップは、新しい VM をプロビジョニングするための十分な予算があるかどうかを判別します。

- リソース制限の検査：管理者はグループに対するリソース制限を有効にする必要があります。この手順では、新しいVMをプロビジョニングするための十分なリソースがそのグループで使用可能かどうかを判別します。

グループのサービス リクエストの読み取りアクセス許可が割り当てられているユーザは、サービス リクエストの進行状況を確認できます。

## サービス リクエスト 詳細

サービス リクエストの詳細には、サービス リクエストの概要、所有権、カタログ情報、および現在のステータスの項目が含まれます。

名前	説明
<b>概要</b>	
[要求 ID (Request ID) ]	サービス リクエスト ID 番号。
[要求タイプ (Request Type) ]	リクエストのタイプ（この場合は VM の作成）。
[VDC]	VM がプロビジョニングされる VDC。
[画像(Image)]	VM がプロビジョニングされるイメージ
[リクエスト日時 (Request Time) ]	サービス リクエストの作成時点。
[リクエストのステータス (Request Status) ]	サービス リクエストのステータス ([完了 (Complete) ]、[キャンセル (Canceled) ]、[失敗 (Failed) ] など)。
[説明(Comments)]	任意のコメント。
<b>[所有権(Ownership)]</b>	
[グループ(Group)]	サービス リクエストを開始したユーザが属するグループ。
[送信ユーザ (Initiating User) ]	サービス リクエストを開始したユーザ。
[期間 (時間) (Duration(Hours)) ]	VM がアクティブな期間。この時間を定義した場合は、指定した時間の経過後に VM が削除されます。

名前	説明
[予定時刻 (Scheduled Time) ]	VM がプロビジョニングされる時刻。この値を定義した場合、VM はスケジュール設定された日付の午前6時にプロビジョニングされます。定義しない場合は、サービスリクエストのワークフローステップが完了する際にVMがプロビジョニングされます。
<b>カタログ情報</b>	
[VDC所有者の電子メール (VDC Owner Email) ]	VDC の作成時に管理者が指定した電子メール ID。
[承認ユーザ (Approving Users) ]	VMプロビジョニングのサービスリクエストを承認する必要があるユーザ (定義されている場合)。
[カタログ名 (Catalog Name) ]	VMプロビジョニングの起点となるカタログ項目の名前。
[カタログの説明 (Catalog Description) ]	カタログ項目の説明。
[サービスリクエストコスト (Service Request Cost) ]	VMプロビジョニングのコスト (見積) 。このコストはカタログ項目に対して定義されているコストモデルに基づいています。

各ワークフローステップのステータスを確認できます。警告メッセージやエラーメッセージ、リクエストの時刻などの詳細も表示されます。ワークフローステップは、それぞれのステータスを示すため色分けされています。

カラーコード	説明
グレー	ステップは未完了です。
グリーン	ステップは正常に完了しました。
赤	ステップは失敗しました。失敗の理由も示されます。
青	ステップを完了するために追加の入力が必要です。たとえば、サービスリクエストに対して承認者が定義されている場合、リクエストが承認されるまではこのステップは完了しません。



(注) 承認者は [承認 (Approvals) ] タブで割り当てられたサービス リクエストを表示できます。

## サービス リクエストのワークフロー ステータスの表示

### 手順

- ステップ 1 [組織 (Organizations) ] > [サービス リクエスト (Service Requests) ] を選択します。
- ステップ 2 ユーザ グループを選択します。  
デフォルトは [すべてのユーザ グループ (All User Groups) ] で、すべてのサービス リクエストが表示されます。
- ステップ 3 [サービス リクエスト (Services Requests) ] ページで、[サービス リクエスト (Service Requests) ] をクリックします。
- ステップ 4 ワークフローを表示するサービス リクエストを含む行をクリックします。
- ステップ 5 [詳細の表示 (View Details) ] をクリックし、[ワークフロー ステータス (Workflow Status) ] をクリックして、サービス リクエストの詳細とステータスを確認します。

## サービス リクエストのログ詳細の表示

### 手順

- ステップ 1 [組織 (Organizations) ] > [サービス リクエスト (Service Requests) ] を選択します。
- ステップ 2 ユーザ グループを選択します。  
デフォルトは [すべてのユーザ グループ (All User Groups) ] で、すべてのサービス リクエストが表示されます。
- ステップ 3 [サービス リクエスト (Services Requests) ] ページで、[サービス リクエスト (Service Requests) ] をクリックします。
- ステップ 4 レポートをエクスポートするサービス リクエストを含む行をクリックします。
- ステップ 5 [詳細の表示 (View Details) ] をクリックし、[ログ (Log) ] をクリックします。

## サービス リクエストのスケジュール設定について

遅延プロビジョニングを使用して、VMプロビジョニングのスケジュールを後日に設定できます。デフォルトプロビジョニングは、スケジュールされた日付の午前8:30に実行されます。日付が設定されると、ワークフローのVMプロビジョニングステータスは変更を表示します。

## サービス リクエストのスケジュール設定

### 手順

- ステップ 1 [組織 (Organizations)] > [サービス リクエスト (Service Requests)] を選択します。
- ステップ 2 [サービス リクエスト (Services Requests)] ページで、[サービス リクエスト (Service Requests)] をクリックします。
- ステップ 3 [リクエストの作成 (Create Request)] をクリックします。
- ステップ 4 グループ、カタログ タイプ、カタログを選択します。標準カタログ タイプを使用したサービス リクエストの作成、(350 ページ) を参照してください。
- ステップ 5 [次へ (Next)] をクリックします。
- ステップ 6 [プロビジョニング (Provision)] フィールドで[後で (Later)] オプションを選択し、[サービス リクエスト (Service Request)] 画面でプロビジョニングの日付を選択します。
- ステップ 7 [概要 (Summary)] 画面が表示されるまで [次へ] をクリックします。
- ステップ 8 [送信 (Submit)] をクリックします。

## サービス リクエストの再送信について

失敗したサービスリクエストを再送信できます。サービスリクエストは、次に示す理由で失敗することがあります。

- VM がプロビジョニングされるグループの予算制限 (管理者により定義) を超過した。
- VM がプロビジョニングされるグループに対するリソース制限 (管理者が定義している場合) を超過した場合。
- サービスリクエストの関連情報が欠けている場合、プロビジョニングが失敗する可能性があります。

サービスリクエストを再送信すると、前回の送信で失敗したワークフローステップからプロセスが再開されます。たとえば、サービス リクエストがリソース割り当てワークフロー (ステップ 2) で失敗した場合、このサービス リクエストを再送信すると、そのステップからプロセスが開始されます。

## サービス リクエストの再送信

### 手順

- 
- ステップ 1** [組織 (Organizations) ]>[サービス リクエスト (Service Requests) ]を選択します。
  - ステップ 2** ユーザ グループを選択します。  
デフォルトは [すべてのユーザ グループ (All User Groups) ]で、すべてのサービス リクエストが表示されます。
  - ステップ 3** [サービス リクエスト (Services Requests) ] ページで、[サービス リクエスト (Service Requests) ] をクリックします。
  - ステップ 4** 再送信するサービス リクエストを含む行をクリックします。
  - ステップ 5** [リクエストの再送信 (Resubmit Request) ] をクリックします。
- 

## その他のサービス リクエスト機能

### サービス リクエストのキャンセル

システムの管理者は、作成されたすべてのサービス リクエストをキャンセルできます。MSP 管理者またはグループ管理者である場合、自身が作成、または管理しているグループ メンバーのユーザが作成した、サービス リクエストをキャンセルできます。

### 手順

- 
- ステップ 1** [組織 (Organizations) ]>[サービス リクエスト (Service Requests) ]を選択します。
  - ステップ 2** ユーザ グループを選択します。  
デフォルトは [すべてのユーザ グループ (All User Groups) ]で、すべてのサービス リクエストが表示されます。
  - ステップ 3** [サービス リクエスト (Services Requests) ] ページで、[サービス リクエスト (Service Requests) ] をクリックします。
  - ステップ 4** キャンセルするサービス リクエストを含む行をクリックします。
  - ステップ 5** [リクエストのキャンセル (Cancel Request) ] をクリックします。
  - ステップ 6** [送信 (Submit) ] をクリックして、サービス リクエストをキャンセルします。
-

## サービス リクエストのロールバック

サービス リクエストがオーケストレーション ワークフローまたはフェンスド コンテナの導入を使用して作成されている場合は、サービス リクエストをロールバックできます。

### 手順

---

- ステップ 1 [組織 (Organizations)] > [サービス リクエスト (Service Requests)] を選択します。
  - ステップ 2 ユーザ グループを選択します。  
デフォルトは [すべてのユーザ グループ (All User Groups)] で、すべてのサービス リクエストが表示されます。
  - ステップ 3 [サービス リクエスト (Services Requests)] ページで、[サービス リクエスト (Service Requests)] をクリックします。
  - ステップ 4 ロールバックするサービス リクエストを含む行をクリックします。
  - ステップ 5 [その他のアクション (More Actions)] ドロップダウンリストから [リクエストのロールバック (Rollback Request)] を選択します。
  - ステップ 6 [サービス リクエストのロールバック (Rollback Service Request)] 画面で、ロールバックする必要があるサービス リクエストのタスクを選択します。  
デフォルトでは、サービス リクエストのすべてのタスクがオンになっています。
  - ステップ 7 (任意) [ロールバック タスクが失敗した場合、ロールバックを中止 (Abort rollback, if any rollback task fails)] をオンにします。
  - ステップ 8 [送信 (Submit)] をクリックします。
- 

## サービス リクエストのアーカイブ

### 手順

---

- ステップ 1 [組織 (Organizations)] > [サービス リクエスト (Service Requests)] を選択します。
- ステップ 2 ユーザ グループを選択します。  
デフォルトは [すべてのユーザ グループ (All User Groups)] で、すべてのサービス リクエストが表示されます。

- ステップ 3** [サービス リクエスト (Services Requests) ] ページで、[サービス リクエスト (Service Requests) ] をクリックします。
- ステップ 4** アーカイブするサービス リクエストを含む行をクリックします。
- ステップ 5** [アーカイブ (Archive) ] をクリックします。
- ステップ 6** [リクエストのアーカイブ (Archive Request) ] 画面で、[アーカイブ (Archive) ] をクリックします。  
[サービス リクエスト (Service Requests) ] ページで、[アーカイブ済みのサービス リクエスト (Archived Service Requests) ] をクリックし、アーカイブ済みのすべてのリクエストを表示します。

### 次の作業

このアーカイブ済みのサービス リクエストを後で使用する必要がある場合、再付与が可能です。詳細については、[アーカイブ済みのサービス リクエストの回復](#)、(374 ページ) を参照してください。

## サービス リクエストの削除

Cisco UCS Director からアーカイブ済みのサービス リクエストを削除できます。削除されたサービス リクエストは Cisco UCS Director から永久に削除されます。

2 つの方法のいずれかで削除するアーカイブ済みのサービス リクエストを入力することもできます。

- [アーカイブ済みのサービス リクエスト (Archived Service Requests) ] 画面でサービス リクエストを選択し、[リクエストの削除 (Delete Requests) ] をクリックします。
- [リクエストの消去 (Purge Requests) ] を選択し、アーカイブされたサービス リクエストの ID を入力します。

いずれの方法でも、指定されたサービス リクエストを恒久的に削除します。唯一の違いは、データの入力方法です。

アーカイブ済みのサービス リクエストのみ削除できます。アーカイブ サービス リクエストについての詳細は、『[Cisco UCS Director Administration Guide](#)』の最新リリースを参照してください。アクティブなサービス要求をアーカイブすることができないため、進行中であるか、または進行中の子サービス要求を含むサービス リクエストは削除できません。

また、進行中であるか、失敗したロールバックがあるサービス リクエストは削除できません。例えば、サービス リクエスト (SR) 100 のロールバックの送信、サービス リクエスト (SR) 101 のロールバックの生成などです。SR 101 の実行中は、SR 100 は削除できません。さらに SR 101 が失敗した場合、SR 100 は削除できません。

サービス リクエストを削除するには、次の手順を実行します。

## 手順

- 
- ステップ 1** [組織 (Organizations)] > [サービス リクエスト (Service Requests)] を選択します。
- ステップ 2** [サービス リクエスト (Services Requests)] ページで [アーカイブされたサービス リクエスト (Archived Service Requests)] をクリックします。
- ステップ 3** キーボードを使用するか、[アーカイブ済みのサービス リクエスト (Archived Service Requests)] レポートからサービス リクエストを選択することのみサービス リクエストの ID を入力できます。
- サービス リクエスト ID を入力するには、次の手順に進みます。サービス リクエストを選択する場合は、次のようにします。
- 削除するサービス リクエストを選択します。  
(注) システムの他のアプリケーションとして複数のアイテムを選択できます。例えば、Windows では、Ctrl キーを押しながら他のアイテムを選択するか、Shift で複数のアイテムを選択します。  
サービス リクエストを1つ以上選択すると、[リクエストの削除 (Delete Request)] アイコンが表示されます。
  - [リクエストの削除 (Delete Request)] をクリックします。
  - [リクエストの削除 (Delete Request)] 画面で、[削除 (Delete)] をクリックします。
- ステップ 4** サービス リクエストを入力するには、次の手順を実行します。
- [消去リクエスト (Purge Requests)] をクリックします。
  - [リクエストの削除 (Delete Request)] 画面の [SR ID (SR IDs)] で、削除するサービス リクエストの ID を入力します。ID の範囲を指定する場合にはハイフンを使用し、範囲か、個別の ID を区切るためにはカンマを使用します。例えば、101-111、113、116-118 などです。
  - [削除 (Delete)] をクリックします。
- 

## 特定グループのサービス リクエストの表示

### 手順

- 
- ステップ 1** [組織 (Organizations)] > [サービス リクエスト (Service Requests)] を選択します。
- ステップ 2** ユーザ グループを選択します。  
デフォルトは [すべてのユーザ グループ (All User Groups)] で、すべてのサービス リクエストが表示されます。
- ステップ 3** [サービス リクエスト (Services Requests)] ページで、[サービス リクエスト (Service Requests)] をクリックします。
-

選択したユーザ グループのすべてのサービス リクエストが表示されます。

## グループ用サービス リクエスト履歴の検索

### 手順

- 
- ステップ 1 [組織 (Organizations) ] > [サービス リクエスト (Service Requests) ] を選択します。
  - ステップ 2 [サービス リクエスト (Services Requests) ] ページで、[サービス リクエスト (Service Requests) ] をクリックします。
  - ステップ 3 [検索と置換 (Search and Replace) ] をクリックします。
  - ステップ 4 [検索と置換 (Search and Replace) ] 画面で、検索フィールドに検索条件を入力します。次の情報を入力する必要があります。
    - アセット ID
    - アセットタイプ
    - 新しいアセット フォーム
    - サービス リクエストの選択
  - ステップ 5 [送信 (Submit) ] をクリックします。
- 

## グループ用サービス リクエストのレポートのエクスポート

### 手順

- 
- ステップ 1 [組織 (Organizations) ] > [サービス リクエスト (Service Requests) ] を選択します。
  - ステップ 2 [サービス リクエスト (Service Requests) ] ページでユーザ グループを選択します。
  - ステップ 3 [サービス リクエスト (Services Requests) ] ページで、[サービス リクエスト (Service Requests) ] をクリックします。
  - ステップ 4 [レポートのエクスポート (Export Report) ] をクリックします。
  - ステップ 5 [レポートのエクスポート (Export Report) ] 画面で、レポート形式を選択します。レポートの形式は、PDF、CSV、XLS です。
  - ステップ 6 [レポートの生成 (Generate Report) ] をクリックします。レポートが生成された後、[ダウンロード (Download) ] オプションが表示されます。
  - ステップ 7 レポートを開いて、システムに保存するために、[ダウンロード (Download) ] をクリックします。
-

## アーカイブ済みのサービス リクエストの回復

### 手順

- 
- ステップ 1 [組織 (Organizations) ] > [サービス リクエスト (Service Requests) ] を選択します。
  - ステップ 2 [サービス リクエスト (Services Requests) ] ページで [アーカイブされたサービス リクエスト (Archived Service Requests) ] をクリックします。
  - ステップ 3 回復するサービス リクエストを含む行をクリックします。
  - ステップ 4 [アーカイブ解除 (Unarchive) ] をクリックします。
- 

## サービス リクエストの承認プロセス

VM をプロビジョニングする前に、サービス リクエストは VDC 内で指名された指定承認者により承認される必要があります。1つのグループに対して 1人または2人の承認者を定義できます。

- 作成されたサービス リクエスト ワークフローには、承認者の名前を表示する VM 承認を必要とするステップがあります。
- サービス リクエスト通知電子メールが承認者に送信されます。承認者は [承認 (Approvals) ] タブですべての保留中のリクエストを確認できます。
- 承認が認可された後 VM のプロビジョニングが開始されます。



(注) 承認者の定義の詳細については、[仮想データセンター](#)、(263 ページ) を参照してください。

---

## サービス リクエストの承認

### 手順

- 
- ステップ 1 [組織 (Organizations) ] > [マイ承認 (My Approvals) ] を選択します。
  - ステップ 2 承認するサービス リクエストを含む行をクリックします。
  - ステップ 3 (任意) 詳細を確認するため、[詳細の表示 (View Details) ] をクリックします。ワークフローと入力/出力情報を確認できます。確認し終わったら、[閉じる (Close) ] をクリックします。

- ステップ 4 [承認 (Approve) ] をクリックします。
  - ステップ 5 必要に応じて、[サービス リクエスト (Service Request) ] 画面でコメントを追加します。
  - ステップ 6 [承認 (Approve) ] をクリックします。
- 

## サービス リクエストの拒否

### 手順

---

- ステップ 1 [組織 (Organizations) ] > [マイ承認 (My Approvals) ] を選択します。
  - ステップ 2 拒否するサービス リクエストを含む行をクリックします。
  - ステップ 3 (任意) [詳細の表示 (View Details) ] をクリックして詳細を確認した後、[閉じる (Close) ] をクリックします。
  - ステップ 4 [却下 (Reject) ] をクリックします。
  - ステップ 5 必要に応じて、[サービス リクエスト (Service Request) ] 画面でコメントを追加します。
  - ステップ 6 [却下 (Reject) ] をクリックします。
- 

## サービス リクエストの承認情報の表示

### 手順

---

- ステップ 1 [組織 (Organizations) ] > [マイ承認 (My Approvals) ] を選択します。
  - ステップ 2 [承認記録 (My Approvals) ] をクリックします。  
すでに完了している承認と、保留中の承認がリストされます。
- 

## サービス リクエスト承認履歴の検索

### 手順

---

- ステップ 1 [組織 (Organizations) ] > [マイ承認 (My Approvals) ] を選択します。
- ステップ 2 [承認記録 (My Approvals) ] をクリックします。  
すでに完了している承認と、保留中の承認がリストされます。

- ステップ 3** [検索 (Search) ] フィールドに、検索語を入力します。  
検索条件に一致するサービス リクエストが表示されます。
- 

## サービス リクエスト承認のレポートのエクспорт

### 手順

---

- ステップ 1** [組織 (Organizations) ] > [マイ承認 (My Approvals) ] を選択します。
- ステップ 2** レポートをエクспортするサービス リクエストを含む行をクリックします。
- ステップ 3** [レポートのエクспорт (Export Report) ] をクリックします。
- ステップ 4** [レポートのエクспорт (Export Report) ] 画面で、レポート形式を選択します。  
レポートの形式は、PDF、CSV、XLS です。
- ステップ 5** [レポートの生成 (Generate Report) ] をクリックします。  
レポートが生成された後、[ダウンロード (Download) ] オプションが表示されます。
- ステップ 6** レポートを開いて、システムに保存するために、[ダウンロード (Download) ] をクリックします。
- 

## サービス リクエストの予算作成

### 今月の利用可能な予算の表示

#### 手順

---

- ステップ 1** [組織 (Organizations) ] > [サービス リクエスト (Service Requests) ] を選択します。
- ステップ 2** [サービス リクエスト (Service Requests) ] ページでユーザ グループを選択します。
- ステップ 3** [サービス リクエスト (Service Requests) ] ページで [現在の月予算の可用性 (Current Month Budget Availability) ] をクリックします。
-

## 予算エントリの表示

### 手順

- 
- ステップ 1 [組織 (Organizations) ] > [概要 (Summary) ] を選択します。
  - ステップ 2 [概要 (Summary) ] ページでユーザ グループを選択します。
  - ステップ 3 [概要 (Summary) ] ページで [予算エントリ (Budget Entries) ] をクリックします。
- 

## 予算エントリの追加

### 手順

- 
- ステップ 1 [組織 (Organizations) ] > [概要 (Summary) ] を選択します。
  - ステップ 2 [概要 (Summary) ] ページでユーザ グループを選択します。
  - ステップ 3 [概要 (Summary) ] ページで [予算エントリ (Budget Entries) ] をクリックします。
  - ステップ 4 [追加 (Add) ] をクリックします。
  - ステップ 5 [予算エントリの追加 (Add Budget Entry) ] 画面で、次のフィールドに値を入力します。

名前	説明
[エントリ名 (Entry Name) ] フィールド	予算エントリの名前。
[予算額 (Budget Amount) ] フィールド	1 カ月あたりの予算額。
[年 (Year) ] ドロップダウン リスト	年を選択します。
[月 (Month) ] ドロップダウン リスト	月を選択します。
[リピートエントリ (Repeat Entries) ] ドロップ ダウン リスト	同じ予算額を繰り返す月の数を選択します。

- ステップ 6 [追加 (Add) ] をクリックします。
-





## 第 14 章

# 複数ディスクの VM プロビジョニング

この章は、次の項で構成されています。

- [複数ディスクの VM プロビジョニングについて, 379 ページ](#)
- [複数ディスクの VM プロビジョニングの手順の概要, 380 ページ](#)
- [複数ディスクを含むテンプレートについて, 380 ページ](#)
- [ディスク カテゴリの割り当て, 380 ページ](#)
- [ストレージ ポリシーの定義, 381 ページ](#)
- [カタログの作成, 389 ページ](#)
- [VM ディスクの作成, 399 ページ](#)

## 複数ディスクの VM プロビジョニングについて

Cisco UCS Director では、テンプレートからの複数ディスクの仮想マシン (VM) プロビジョニングがサポートされています。選択した 1 つまたは複数のデータストアで VM ディスク プロビジョニングを設定できます。また、テンプレートでの追加ディスクごとに個別のディスク ポリシーを設定できます。

Cisco UCS Director では、ディスクは次のカテゴリに分類されています。

- システム
- データ
- データベース
- 切替
- ログ



(注) Cisco UCS Director で定義されているディスクのカテゴリは、ディスクのラベリング専用です。

## 複数ディスクの VM プロビジョニングの手順の概要

### 手順

- ステップ 1 複数のディスクを使用している 1 つのテンプレートの可用性を検証します。
- ステップ 2 ディスクのカテゴリを割り当てます。
- ステップ 3 ストレージポリシーを定義します。
- ステップ 4 テンプレートカタログを作成します。

## 複数ディスクを含むテンプレートについて

複数ディスクの仮想マシン (VM) をプロビジョニングするには、複数のディスクを含むテンプレート (イメージ) が使用可能である必要があります。VM のプロビジョニングに複数のディスクを含むテンプレートを使用する前に、個々のディスクに対するディスクカテゴリを割り当てる必要があります。

## ディスク カテゴリの割り当て

### 手順

- ステップ 1 [仮想 (Virtual)] > [コンピューティング (Compute)] を選択します。
- ステップ 2 [コンピューティング (Compute)] ページでクラウドを選択します。
- ステップ 3 [コンピューティング (Compute)] ページで [イメージ (Images)] をクリックします。
- ステップ 4 複数のディスクがあるテンプレートを含む行をクリックし、[詳細の表示 (View Details)] をクリックします。
- ステップ 5 [ディスク (Disks)] をクリックします。
- ステップ 6 ディスクを選択します。
- ステップ 7 ディスクタイプを割り当てるディスクを含む行をクリックして [ディスクタイプの割り当て (Assign Disk Type)] をクリックします。
- ステップ 8 [ディスクタイプの割り当て (Assign Disk Type)] 画面で、ドロップダウンリストからディスクタイプを選択します。

次のいずれかを設定できます。

- システム
- データ
- データベース
- 切替
- ログ

ステップ 9 [送信 (Submit) ] をクリックします。

## ストレージポリシーの定義

ストレージポリシーは、データストアの範囲、使用するストレージの種類、容量、遅延の最小条件といったリソースを定義します。このポリシーを使用すると、複数のディスクに対して追加のディスクポリシーを設定することや、サービスリクエストの作成中にエンドユーザがデータストアを選択できるようにすることもできます。

Cisco UCS Director は、複数データストア上の複数ディスクでの VM のプロビジョニングをサポートしています。システム、データ、データベース、切替、およびログの 5 つのディスクタイプがあります。システムディスクポリシーは最初に設定され、他のディスクは必要に応じて後で設定されます。ディスクタイプ別にディスクポリシーを設定することも、デフォルトのシステムディスクポリシーを選択することも可能です。

追加のディスクのポリシーを使用する場合は、複数ディスクテンプレートに対してカタログを作成する際に、[単一データストアのすべてのディスクをプロビジョニングします (Provision all disks in a single datastore) ] オプションを必ずオフにしてください。カタログの作成方法の詳細については、[カタログの追加](#)、(389 ページ) を参照してください。

また、Cisco UCS Director は、VM プロビジョニングに対するサービスリクエストの作成中のデータストアの選択をサポートしています。この機能は、エンドユーザのデータストアの選択を有効または無効にするオプションを提供します。サービスリクエストの作成時に VDC を指定した際に、ストレージポリシーで定義されている範囲条件により、どの選択されたデータストアを表示するかを判別します。



(注) ストレージポリシーに指定されているデータストア容量が小数点以下に 2 つの値 (小数第 2 位) を取る 10 進値に equals 条件を使用している場合、VMware VM プロビジョニングは失敗します。10 進値を含む容量を指定する場合は、小数点以下の 1 つの値 (小数第 1 位) に切り上げます。

『[Cisco UCS Director Troubleshooting Guide](#)』を参照してください。

## ストレージポリシーの作成

### 手順

- ステップ 1** [ポリシー (Policies)] > [仮想/ハイパーバイザ ポリシー (Virtual/Hypervisor Policies)] > [ストレージ (Storage)] を選択します。
- ステップ 2** [ストレージ (Storage)] ページで [VMware ストレージポリシー (VMware Storage Policy)] をクリックします。
- ステップ 3** [追加 (Add)] をクリックします。
- ステップ 4** [ストレージリソース割り当てポリシーの追加 (Add Storage Resource Allocation Policy)] の [システムディスクポリシー (System Disk Policy)] 画面で、次のフィールドに値を入力します。

名前	説明
[ポリシー名 (Policy Name)] フィールド	リソース割り当てが発生するクラウドを選択します。
[ポリシーの説明 (Policy Description)] フィールド	ポリシーの説明。 導入の範囲を限定する場合は、すべてのデータストア、選択したデータストアのみ、もしくは、選択した以外のデータストアを導入するのを選択します。
[クラウド名 (Cloud Name)] ドロップダウンリスト	このリソース割り当てを行うためのクラウドアカウントを選択します。  SRM のアカウントを選択した場合、[保護の有効化 (Enable Protection)] チェックボックスが表示されます。Site Recovery Manager 用の保護グループを有効にする方法の詳細については、『Cisco UCS Director VMware Management Guide [英語]』を参照してください。
システム ディスク スコープ	
[リンク済み複製の使用 (Use Linked Clone)] チェックボックス	リンクの複製を使用するには、チェックボックスをオンにします。  このチェックボックスをオンにしない場合、構成はフル複製を使用します。
[ストレージプロファイル (Storage Profile)] ドロップダウンリスト	関連付けられたストレージプロファイルの1つ以上のVMをプロビジョニングするには、ストレージプロファイルを選択します。

名前	説明
[データストア/データストアクラスタ範囲 (Data Stores/Data Store Clusters Scope) ] ドロップダウンリスト	<p>導入の範囲を定義するには、次のいずれかのオプションを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• [すべて (All) ]</li> <li>• [選択したデータストアを含む (Include Selected Datastores) ]</li> <li>• [選択したデータストアを除外 (Exclude Selected Datastores) ]</li> <li>• [選択したデータストア クラスタを含む (Include Selected Datastore Clusters)]</li> <li>• [選択したデータストア クラスタを除外 (Exclude Selected Datastore Clusters)]</li> </ul> <p>どのオプションを選択するかによって、追加のフィールドが表示される場合があります。</p> <p>(注) 選択したオプションにより、VM ディスクの作成時にすべてのデータストアまたはデータストア クラスタのどちらを使用できるかが決まります。</p>
[選択済みのデータストア (Selected Data Stores) ] フィールド	<p>[選択済みのデータストアを含める (Include Selected Datastore) ] または [選択済みのデータストアを除外する (Exclude Selected Datastore) ] を選択する場合、[選択 (Select) ] をクリックし、適切なデータストアを選択します。</p>
[共有データストアのみの使用 (Use Shared Data Store Only) ] チェック ボックス	<p>共有データストアのみを使用するには、このチェック ボックスをクリックします。</p> <p>このオプションは、選択したデータストアを含むか除外するかを選択した場合のみ使用可能です。</p>
[選択済みデータストア クラスタ (Selected Datastore Clusters) ] フィールド	<p>[選択済みのデータストア クラスタを含める (Include Selected Datastore Clusters) ] または [選択済みのデータストア クラスタを除外する (Exclude Selected Datastore Clusters) ] を選択する場合、[選択 (Select) ] をクリックし、適切なデータストア クラスタを選択します。</p>

名前	説明
[SDRS ルールタイプの選択 (SDRS Rule Type) ] ドリップダウンリスト	<p>選択したデータストアを含むか除外するかを選択した場合、次のいずれかの SDRS ルールタイプを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• [VMDK を同時に管理する (Keep VMDKs Together) ]: フィルタリングされたクラスターで既存のルールを選択する必要があります。新しくプロビジョニングされた VM は VM のアンチアフィニティルールに追加されます。</li> <li>• [VMDK を分ける (Separate VMDKs) ]: 新しくプロビジョニングされた VM に複数のディスクが含まれている場合、新しい VM アフィニティルールはデータストア クラスターで作成されます。</li> </ul>
[SDRS ルールの選択 (Select SDRS Rule) ] フィールド	[VMDK を同時に管理する (Keep VMDKs Together) ]を選択した場合、ルールを適応したい VM を選択する必要があります。
<b>ストレージ オプション</b>	
[ローカルストレージの使用 (Use Local Storage) ] チェック ボックス	デフォルトでは、このフィールドはオンです。ローカルストレージを使用しない場合は、このチェック ボックスをオフにします。
[NFSの使用 (Use NFS) ] チェック ボックス	デフォルトでは、このフィールドはオンです。NFS ストレージを使用しない場合は、チェック ボックスをオフにします。
[VMFS の使用 (Use VMFS) ] チェック ボックス	デフォルトでは、このフィールドはオンです。VMFS ストレージを使用しない場合は、チェック ボックスをオフにします。
[SANの使用 (Use SAN) ] チェック ボックス	デフォルトでは、このフィールドはオンです。SAN ストレージを使用しない場合は、チェック ボックスをオフにします。

名前	説明
[フィルタ条件 (Filter Conditions) ] チェックボックス	<p>1つ以上の条件をデータストアフィルタに追加したい場合、次の各要求条件を実行します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 該当するチェック ボックスをクリックします。</li> <li>• ドロップダウンリストから必要なオプションを選択します。</li> <li>• どのデータストア フィルタを実行する条件を入力します。</li> </ul> <p>これらの条件を満たしていないデータストアは検討から除外されます。複数の条件を選択する場合、すべての条件が一致する必要があります。</p> <p>(注) ストレージポリシーに指定されているデータストア容量が小数点以下に2つの値 (小数第2位) を取る 10 進値に equals 条件を使用している場合、VMware VM プロビジョニングは失敗します。10 進値を含む容量を指定する場合は、小数点以下の1つの値 (小数第1位) に切り上げます。</p> <p>たとえば、値が 10.25 GB の場合は、データストアレポートに 10.3 GB と表示されます。すべてのオプションについて、10.3未満の値であり、小数点の後の1つの値に丸めた 10.2 GB、10.1 GB、10 GB などの値を指定する必要があります。</p>
[テンプレートのオーバーライド (Override Template) ] チェック ボックス	<p>テンプレートのプロパティをオーバーライドするには、このチェック ボックスをオンにします。シンプロビジョニングの使用やカスタムディスクサイズの設定など、カスタム設定を入力するオプションが提供されます。</p>

名前	説明
[シンプロビジョニングの使用 (Use Thin Provisioning) ] チェック ボックス	<p>VM ストレージのプロビジョニングの際にシンプロビジョニングを使用するには、このチェック ボックスをオンにします。</p> <p>シンプロビジョニングは、物理ストレージ容量の動的割り当てをイネーブルにし、VM ストレージの使用率が向上します。</p> <p>このオプションは、[テンプレートのオーバーライド (Override Template) ] を選択した場合にのみ表示されます。</p>
[手動ディスクサイズ (Manual Disk Size) ]	<p>カスタムディスクサイズは、VM のプロビジョニングに使用されるテンプレートのディスクサイズをオーバーライドします。</p> <p>このオプションは、[テンプレートのオーバーライド (Override Template) ] を選択した場合にのみ表示されます。</p>
<b>VM ライフサイクルのサイズ変更オプション</b>	
[ディスクのサイズ変更を許可 (Allow Resizing of Disk) ] チェック ボックス	<p>プロビジョニングする前に、VM のディスクサイズを選択するオプションをエンドユーザーに表示する場合はチェック ボックスをオンにします。</p>
[ディスクの許容値(GB単位) (Permitted Values for Disk in GB) ] フィールド	<p>VM のプロビジョニング中に選択したディスクサイズ値のカスタム範囲を指定します。たとえば、1、5、10、50、100、500、1024、5120、10240 などです。</p> <p>このオプションは、[ディスク サイズの変更許可 (Allow Resizing of Disk) ] を選択した場合にのみ表示されます。</p>
[スコープからのデータストアの選択をユーザーに許可します (Allow user to select datastores from scope) ] チェック ボックス	<p>このチェック ボックスをオンにすると、エンドユーザーはサービスリクエストの作成中にデータストアを選択できるようになります。</p>

**ステップ 5** [次へ (Next) ] をクリックします。

**ステップ 6** [追加ディスク ポリシー (Additional Disk Policies) ] 画面で、次のいずれかを実行します。

- システム ディスク ポリシーにおいてディスク タイプに同じディスク ポリシーを設定したくない場合、設定したいディスク タイプを選択します。

- すべてのディスクの種類にシステム ディスク ポリシー オプションを使用するには、[次へ (Next) ] をクリックします。

(注) デフォルトでは、ディスクのディスク ポリシーは、[ストレージリソース割り当てポリシーの追加 (Add Storage Resource Allocation Policy) ] 画面で設定したシステムディスクポリシーと同じです。

**ステップ 7** 特定のディスク タイプのカスタム システム ディスク ポリシーを設定した場合は、次の操作を実行します。

- 編集するポリシーを含む行をクリックし、[編集 (Edit) ] をクリックしてディスク タイプを編集します。
- [ポリシー エントリの編集 (Edit Policies Entry) ] 画面で、[システム ディスク ポリシーと同じ (Same as System Disk Policy) ] をオフにします。
- [エントリの編集 (Edit Entry) ] 画面で、次のフィールドに値を入力します。  
ここに表示されるすべてのフィールドは、[ストレージリソース割り当てポリシーの追加 (Add Storage Resource Allocation Policy) ] 画面に表示されるフィールドと同じです。

(注) この設定は、VM ディスクの作成時にどのデータストアがディスクのタイプに使用できるかを決定します。

- [送信 (Submit) ] をクリックします。
- 他のディスク タイプを設定するには、必要に応じてこれらの手順を繰り返します。

(注) その他のディスク ポリシーで作成されたストレージポリシーを使用するには、VM のプロビジョニングに使用される VDC とポリシーを関連付けます。

**ステップ 8** [次へ (Next) ] をクリックします。

**ステップ 9** [ハードディスク ポリシー (Hard Disk Policy) ] 画面では、VM のプロビジョニング時に作成する物理ディスクの数を指定できます。

- [追加 (Add) ] をクリックして、ディスクを追加し、次のフィールドに値を入力します。

フィールド	説明
[ディスクラベル (Disk Label) ] フィールド	追加するディスクを説明するラベル。
[ディスク サイズ (GB) (Disk Size (GB)) ] フィールド	ディスクのサイズ。
[ディスク タイプ (Disk Type) ] ドロップダウン リスト	ディスク タイプを選択します。 このドロップダウンリストに表示されるオプションは、[システム ポリシーと同様 (Same as System Policy) ] チェック ボックスを先の手順で選択したかによって異なります。
コントローラ オプション	

フィールド	説明
[コントローラ タイプ (Controller Type) ] ドロップダウン リスト	ドロップダウンリストから、コントローラタイプを選択します。  ポートの応答可能性に基づいて、コントローラは、VM ディスクにマッピングされます。
[新しいコントローラのディスクを作成 (Create Disk on new Controller) ] チェック ボックス	新しいコントローラを作成する場合に、このチェック ボックスをオンにします。  コントローラ タイプは、[コントローラ タイプ (Controller Type) ] ドロップダウン リストで作成された選択肢に基づいています。
ディスク プロビジョニング オプション	
[ディスク プロビジョニング オプション (Disk Provisioning Options) ] ラジオ ボタン	指定したいプロビジョニングのラジオ ボタンをチェックします。次のいずれかを指定できます。  <ul style="list-style-type: none"> <li>• [シン プロビジョニング (Thin Provision) ]</li> <li>• [シック プロビジョニング (Lazy Zeroed) (Thick Provision Lazy Zeroed) ]</li> <li>• [シック プロビジョニング (eager Zeroed) (Thick Provision eager Zeroed) ]</li> </ul>
VM ライフサイクルのサイズ変更オプション	
[ディスクのサイズ変更を許可 (Allow Resizing of Disk) ] チェック ボックス	このチェック ボックスをオンにすると、プロビジョニングする前に、VM ディスク サイズを選択できるようになります。
[ディスクの許容値(GB単位) (Permitted Values for Disk in GB) ] フィールド	このオプションは、[ディスクのサイズ変更を許可] がオンの場合に表示されます。  VM のプロビジョニング中に選択したディスク サイズ値のカスタム範囲を指定します。たとえば、1、5、10、50、100、500、1024、5120、10240 などです。
[スコープからのデータストアの選択をユーザに許可します (Allow user to select datastore from scope) ] チェック ボックス	このチェック ボックスをオンにすると、ユーザはサービス リクエストの作成中にデータストアを選択できるようになります。

**ステップ 10** [送信 (Submit) ] をクリックします。

(注) 追加ディスク ポリシーを使用して作成されるストレージポリシーを使用するには、VM のプロビジョニングに使用される VDC とポリシーを関連付ける必要があります。

ポリシーに設定された追加ディスク ポリシーを使用する場合は、複数のディスク テンプレートのカタログ作成時に [単一データストアのすべてのディスクをプロビジョニングします (Provision all disks in a single database) ] を必ずオフにしてください。カタログの作成方法の詳細については、[カタログの管理](#)、(329 ページ) を参照してください。

## カタログの作成

### カタログの追加

#### 手順

**ステップ 1** [ポリシー (Policies) ] > [カタログ (Catalogs) ] を選択します。

**ステップ 2** [カタログ (Catalogs) ] ページで、[追加 (Add) ] をクリックします。

**ステップ 3** [カタログの追加 (Add Catalog) ] 画面で、追加するカタログ タイプを選択します。次のいずれかを設定できます。

- [標準 (Standard) ] : クラウドリストにあるイメージを使用して VM プロビジョニングのためのカタログを作成する場合に使用します。
- [詳細 (Advanced) ] : カatalog項目などのオーケストレーション ワークフローを公開する場合に使用します。
- [サービスコンテナ (Service Container) ] : カatalog項目としてアプリケーションコンテナを公開する場合に使用します。
- [ベア メタル (Bare Metal) ] : ベア メタル サーバのプロビジョニング用のカタログを作成するために使用します。

ベアメタルカタログの作成方法については、[ベアメタルサーバカタログの作成](#)、(343 ページ) を参照してください。

**ステップ 4** [送信 (Submit) ] をクリックします。

**ステップ 5** [カタログの追加 (Add Catalog) ] の [基本情報 (Basic Information) ] 画面で、次を含む必須フィールドに値を入力します。

名前	説明
[カタログ名 (Catalog Name) ] フィールド	カタログの名前を入力します。  (注) 作成後にカタログ名は変更できません。
[カタログの説明 (Catalog Description) ] フィールド	カタログの説明を入力します。
[カタログタイプ (Catalog Type) ] ドロップダウン リスト	以前選択したカタログのタイプを表示します。カタログタイプを変更するには、この手順をキャンセルしてから再開する必要があります。
[カタログアイコン (Catalog Icon) ] ドロップダウン リスト	このカタログに関連付けるイメージのアイコンをリストから選択します。このアイコンは、このカタログを使用してサービスリクエストを作成するときに表示されます。
[すべてのグループに適用 (Applied to all groups) ] チェック ボックス	すべてのグループがこのカタログを使用できるようにする場合に、このボックスをオンにします。他のグループの使用を拒否するには、このチェック ボックスをオフのままにします。
[サポートの問い合わせ先の電子メールアドレス (Support Contact Email Address) ] フィールド	このカタログ項目を使用してサービスリクエストが作成された際に通知が送信されるサポート担当者の電子メールアドレスを入力します。
[選択されたグループ (Selected Groups) ] リスト	特定のユーザグループを選択する場合に、リストを展開して、このチェックボックスをクリックします。オンにしたグループは、新しい VM をプロビジョニングするときにこのカタログを使用します。  [Validate] をクリックします。
[エンドユーザへ公開 (Publish to end users) ] チェック ボックス	デフォルトでは、このボックスはオンになっています。このカタログがエンドユーザに表示されないようにするには、このボックスをオフにします。このボックスをオフにしなかった場合、このカタログはエンドユーザに表示されます。
[クラウド名 (Cloud Name) ] ドロップダウン リスト	VM プロビジョニング用のイメージがあるクラウドを選択します。

名前	説明
[ISO マウント用の新しい VM のプロビジョニング (Provision new VM for ISO mounting) ] チェック ボックス	選択されたイメージから新しい VM を複製する場合に、このボックスをオンにします。このチェック ボックスをオンにしない場合、空の VM が作成されます。
[イメージ (Image) ] リスト	<p>このカタログを使用して VM をプロビジョニングするときに使用するイメージのタイプ (イメージを構成する Windows ファイル、Linux ファイル、およびその他のファイルなどの既存のテンプレート) を選択し、[検証 (Validate) ] をクリックします。</p> <p>グループ管理者である場合や、カタログを作成する権限のあるグループのユーザである場合は、属しているグループに割り当てられたイメージがこのフィールドに表示されます。</p> <p>自身が MSP 管理者である場合は、属している MSP 組織とその MSP 組織内のグループに割り当てられたイメージがこのフィールドに表示されます。</p>
[コンテンツ ライブラリ VM テンプレートを使用した新しい VM のプロビジョニング (Provision new VM using Content Library VM Template) ] チェック ボックス	<p>コンテンツ ライブラリ VM テンプレートを使用して新しい VM がプロビジョニングされていることを確認する場合に、このボックスをチェックします。</p> <p>このオプションを選択した場合、[イメージ (Image) ] リストは非表示になります。</p>
[コンテンツ ライブラリ VM テンプレート (Content Library VM Template) ] リスト	コンテンツ ライブラリ VM テンプレートを選択します。
[Windows ライセンス プール (Windows License Pool) ] フィールド	<p>Windows ライセンスを入力します。</p> <p>(注) このフィールドは、Windows イメージが選択されて場合にのみ表示されます。このオプションは、RHEV KVM コネクタではサポートされません。</p>

名前	説明
[ReadyClone の使用 (Use ReadyClone) ] チェック ボックス	<p>VM が ReadyClones を使用して導入されるようにする場合に、このボックスをオンにします。</p> <p>このボックスをオンにすると、[リンク済み複製の使用 (Use Linked Clone) ] チェック ボックスと [単一データストアのすべてのディスクをプロビジョニングします (Provision all disks in single datastore) ] のチェック ボックスは編集できなくなります。</p> <p>(注) このチェック ボックスは次の場合は表示されません。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 選択したイメージが HX データストア上にない。</li> <li>2. VM に複数のディスクがある。</li> </ol>
[リンク済み複製の使用 (Use Linked Clone) ] チェック ボックス	<p>リンク済みの複製を使用する場合にこのボックスをオンにします。</p> <p>リンクされた複製かフル複製かは、ストレージポリシーで選択したリンクされた複製によって異なります。</p> <p>(注) このフィールドは、スナップショットイメージが選択されている場合にのみ表示されます。</p>
[単一データストアのすべてのディスクをプロビジョニング (Provision all disks in single datastore) ] チェック ボックス	<p>単一データストアのすべてのディスクをプロビジョニングする場合にこのボックスをオンにします。ストレージポリシーで各ディスクに対して設定されているデータストアを使用することも選択できます。</p> <p>複数ディスク ストレージ ポリシーの作成の詳細については、<a href="#">ポリシーの管理, (209ページ)</a> を参照してください。</p> <p>(注) このフィールドは、選択したテンプレートに複数のディスクがある場合にのみ表示されます。このオプションは、RHEV KVM コネクタではサポートされません。</p>

名前	説明
[サービス コンテナ テンプレート名 (Service Container Template Name) ] ドロップダウン リスト	リストからテンプレートを選択します。 (注) このフィールドは、選択したカタログ タイプが [サービス コンテナ (Service Container) ] である場合にのみ表示されます。
[フォルダの選択 (Select Folder) ] ドロップダウン リスト	このカタログの作成先となるフォルダを選択します。 (注) ドロップダウン リストには、デフォルトで使用可能なフォルダの名前が含まれます。使用可能なフォルダを選択するか、または [フォルダの新規作成 (Create New Folder) ] をクリックします。  [新しいフォルダの追加 (Add New Folder) ] 画面で [フォルダ名 (Folder Name) ] にフォルダ名を入力し、[フォルダ アイコン (Folder Icon) ] を選択して [追加 (Add) ] をクリックします。
[ベア メタルサーバ プロビジョニング ポリシー (Bare Metal Server Provisioning Policy) ] ドロップダウン リスト	(注) このフィールドは、選択したカタログ タイプが [ベア メタル (Bare Metal) ] である場合にのみ表示されます。
[サービス リクエストのサポート用電子メール (Configure Service Request Support Email) ] のチェック ボックス	ユーザがサービス リクエストのステータスの送信にサポート用電子メールを設定できるようにする場合に、このボックスをオンにします。

**ステップ 6** [次へ (Next) ] をクリックします。

**ステップ 7** [カタログの追加 (Add Catalog) ] の [アプリケーションの詳細 (Application Details) ] 画面で、次を含む必須フィールドに値を入力します。

名前	説明
[カテゴリ (Category) ] リスト	リストを展開して VDC カテゴリを選択し、[選択 (Select) ] をクリックします。

名前	説明
[オーバーライド (Override) ] チェック ボックス	サービス リクエストを使用した VM のプロビジョニング時に、選択したカテゴリをユーザがオーバーライドできるようにする場合に、このボックスをオンにします。
[サポートの問い合わせ先の電子メールアドレス (Support Contact Email Address) ] フィールド	このカタログ項目を使用してサービスリクエストが作成されたときに通知が送信される連絡先の電子メールアドレスを入力します。
[OSの指定 (Specify OS) ] ドロップダウン リスト	VMのプロビジョニング時に、VMにインストールされる OS のタイプを選択します。  (注) このオプションは、RHEV KVM コネクタではサポートされません。
[他のOSの指定 (Specify Other OS) ] フィールド	[OSの指定 (Specify OS) ] ドロップダウン リストで選択できない OS を入力します。  (注) このオプションは、RHEV KVM コネクタではサポートされません。
[アプリケーションの指定 (Specify Applications) ] チェック ボックス	プロビジョニング時に VM にインストールするアプリケーションを指定する場合に、該当するボックスをオンにします。  (注) このオプションは、RHEV KVM コネクタではサポートされません。
[他のアプリケーションの指定 (Specify Other Applications) ] フィールド	[アプリケーションの指定 (Specify Applications) ] チェック ボックスから使用できない他のアプリケーションを入力します。  (注) このオプションは、RHEV KVM コネクタではサポートされません。

名前	説明
[アプリケーションコード (Application Code) ] フィールド	<p>VM名に使用するアプリケーションコードを入力します。</p> <p>アプリケーションコードは1～4文字です (例: W2K3、DB、WS)。VM名のシステムポリシーでアプリケーションコードを使用するには、変数 <code>\${APPCODE}</code> を使用します。</p> <p>たとえば VM 名のテンプレートが <code>vm-\${GROUP_NAME}-\${APPCODE}</code> の場合、システムポリシーを使用してプロビジョニングされた VM の名前は <code>vm-groupname-W2K3</code> になります。</p> <p>(注) このオプションは、RHEV KVM コネクタではサポートされません。</p>

**ステップ 8** [次へ (Next) ] をクリックします。

**ステップ 9** [カタログの追加 (Add Catalog) ] の [ユーザ クレデンシャル (User credentials) ] 画面で、次を含む必須フィールドに値を入力します。

(注) このオプションは、RHEV KVM コネクタではサポートされません。

名前	説明
[クレデンシャル オプション (Credential Options) ] ドロップダウン リスト	<p>ユーザに対し、VM アクセス クレデンシャル (共有) の取得を許可するか、または禁止するかを選択します。次のオプションを使用できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>共有しない</li> <li>パスワードリセット後に共有する</li> <li>テンプレート クレデンシャルを共有する</li> </ul> <p>管理者が Cisco UCS Director 外部の別のユーザにクレデンシャルをプライベートに送信する場合は、[共有しないでください (Do not share) ] オプションを選択します。</p>
[ユーザ ID (User ID) ] フィールド	<p>ユーザ ID を入力します。</p> <p>(注) このフィールドは、[クレデンシャル オプション (Credential Options) ] で共有されているときのみ使用できます。</p>

名前	説明
[パスワード (Password) ] フィールド	パスワードを入力します。  (注) このフィールドは、[クレデンシャル オプション (Credential Options) ] で共有されているときのみ使用できません。

**ステップ 10** [次へ (Next) ] をクリックします。

**ステップ 11** [カタログの追加 (Add Catalog) ] の [カスタマイズ (Customization) ] 画面で、次を含む必須フィールドに値を入力します。

名前	説明
[自動ゲストカスタマイズの有効化 (Automatic Guest Customization Enable) ] チェック ボックス	自動ゲストカスタマイズを有効にする場合に、このボックスをオンにします。  このチェック ボックスをオンにしない場合、Cisco UCS Director では DNS、ネットワーク、およびゲスト OS プロパティが設定されません。
[プロビジョニング後のカスタム アクションの有効化 (Post Provisioning Custom Actions Enable) ] チェック ボックス	VM のプロビジョニング後にオーケストレーション ワークフローを有効にする場合に、このボックスをオンにします。
[ワークフロー (Workflow) ] ドロップダウン リスト	プロビジョニング用に定義されたワークフローを選択します。  (注) このフィールドは、[プロビジョニング後のカスタム アクションの有効化 (Post Provisioning Custom Actions Enable) ] がオンの場合に表示されません。
[仮想ストレージ カタログの有効化 (Virtual Storage Catalog Enable) ] チェック ボックス	仮想ストレージ カタログからストレージ エンティティを選択する場合に、このボックスをオンにします。
[仮想ストレージ カタログ (Virtual Storage Catalog) ] ドロップダウン リスト	カタログからストレージ エントリを選択します。  (注) このフィールドは、[仮想ストレージ カタログの有効化 (Virtual Storage Catalog Enable) ] がオンの場合に表示されます。
コスト計算	

名前	説明
[請求期間 (Charge Duration) ] ドロップダウンリスト	[毎時 (Hourly) ] または [毎月 (Monthly) ] を選択します。
[アクティブな VM アプリケーションのコスト (USD) (Active VM Application Cost USD) ] フィールド	テンプレートに含まれているアプリケーションコストを入力します。 (注) このオプションは、RHEV KVM コネクタではサポートされません。
[非アクティブな VM アプリケーションのコスト (USD) (Inactive VM Application Cost USD) ] フィールド	非アクティブな状態の VM のこのカタログにかかる毎時または毎月のコストを入力します。 (注) このオプションは、RHEV KVM コネクタではサポートされません。
VM ライフサイクル設定	
[リース時間 (Lease Time) ] チェック ボックス	リース時間 (日数と時間数) を定義する場合に、このボックスをオンにします。
[日数 (Days) ] フィールド	これを行うには、日数を入力します。 (注) このフィールドは、[リース時間 (Lease Time) ] がオンになっている場合に表示されます。
[時間 (Hours) ] フィールド	時間数を入力します。 (注) このフィールドは、[リース時間 (Lease Time) ] がオンになっている場合に表示されます。
[エンドユーザのリース設定を非表示 (Hide end user lease configuration) ] チェック ボックス	サービスユーザによって VM のリース時間が設定されないようにするには、このボックスをオンにします。
[VM のプロビジョニング後のエンドユーザを非表示 (Hide end user VM provision later) ] チェック ボックス	サービスユーザによって、後から VM がプロビジョニングされないようにするには、このボックスをオンにします。

**ステップ 12** [次へ (Next) ] をクリックします。

**ステップ 13** [カタログの追加 (Add Catalog) ] の [VM アクセス (VM Access) ] 画面で、次を含む必須フィールドに値を入力します。

名前	説明
[Web アクセス設定の有効化 (Web Access Configuration Enable) ] チェック ボックス	VM への Web アクセスを有効にする場合に、このボックスをオンにします。デフォルトでは、このチェック ボックスはオフになっており、Web からの VM へのアクセスは無効になっています。
[URL] フィールド	VM の URL を入力します。 (注) このフィールドは、[Web アクセス設定の有効化 (Web Access Configuration Enable) ] がオンの場合に表示されます。
[ラベル (Label) ] フィールド	この URL に定義されたラベルを入力します。 (注) このフィールドは、[Web アクセス設定の有効化 (Web Access Configuration Enable) ] がオンの場合に表示されます。
[リモート デスクトップのアクセス設定の有効化 (Remote Desktop Access Configuration Enable) ] チェック ボックス	VM へのリモート アクセスを有効にする場合に、このボックスをオンにします。デフォルトでは、このチェック ボックスはオフになっており、リモートデスクトップからの VM へのアクセスは無効になっています。
[サーバ (Server) ] フィールド	サーバのリモート アクセス用 IP アドレスを入力します。 (注) このフィールドは、[リモートデスクトップのアクセス設定の有効化 (Remote Desktop Access Configuration Enable) ] がオンの場合に表示されます。
[ポート (Port) ] フィールド	サーバのリモートアクセス用ポート番号を入力します。 (注) このフィールドは、[リモートデスクトップのアクセス設定の有効化 (Remote Desktop Access Configuration Enable) ] がオンの場合に表示されます。

名前	説明
[ラベル (Label) ] フィールド	このリモートアクセスに定義されたラベルを入力します。  (注) このフィールドは、[リモートデスクトップのアクセス設定の有効化 (Remote Desktop Access Configuration Enable) ] がオンの場合にのみ表示されます。
[VMRC コンソール設定の有効化 (VMRC Console Configuration Enable) ] チェック ボックス	VMRC コンソールが VM にアクセスできるようにする場合に、このボックスをオンにします。デフォルトでは、このチェックボックスはオフになっており、VMRC コンソールからの VM へのアクセスは無効になっています。

**ステップ 14** [次へ (Next) ] をクリックします。

**ステップ 15** [カタログの追加 (Add Catalog) ] の [概要 (Summary) ] 画面に表示されたカタログ情報を確認します。

**ステップ 16** [送信 (Submit) ] をクリックします。

## VM ディスクの作成

[VM ディスクの作成 (Create VM Disk) ] を使用して、プロビジョニング済みの VM または検出された VM にカスタム サイズの追加ディスクを追加できます。

### 手順

**ステップ 1** [仮想 (Virtual) ] > [コンピューティング (Compute) ] を選択します。

**ステップ 2** [コンピューティング (Compute) ] ページでクラウドを選択します。

**ステップ 3** [コンピューティング (Compute) ] ページで [VM (VMs) ] をクリックします。

**ステップ 4** VM ディスクを作成する VM を含む行をクリックします。

**ステップ 5** [その他のアクション (More Actions) ] ドロップダウン リストから [VM ディスクの作成 (Create VM Disk) ] を選択します。

**ステップ 6** [VM ディスクの作成 (Create VM Disk) ] 画面で、次のフィールドに値を入力します。

名前	説明
[VM 名 (VM Name) ] フィールド	VM の名前。 一度入力すると、VM の名前は編集できません。
[新しいディスクサイズ(GB) (New Disk Size (GB)) ] フィールド	VM のディスク サイズ (GB 単位) 。
[ディスクタイプの選択 (Select Disk Type) ] ドロップダウンリスト	ディスクタイプを選択します。次のいずれかを設定できます。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• [システム(System)]</li> <li>• [切替 (Swap) ]</li> <li>• [データ(Data)]</li> <li>• [データベース(Database)]</li> <li>• [ログ(Log)]</li> </ul>
[データストア/データストア クラスタの選択 (Select Datastore/Datastore Cluster) ] ドロップダウンリスト	VM のディスクがデータストアまたはデータストアクラスタから作成されている場合に指定します。
[データストアの選択 (Select Datastore) ] フィールド	[選択 (Select) ] をクリックして、VM ディスクの作成に使用するデータストアを選択します。  (注) 使用可能なデータストアは VDC に関連付けられたストレージポリシーによって異なります。ストレージポリシーで指定された条件に合ったデータストアのみ VM ディスクに使用できます。  このフィールドは、VM のディスクをデータストアから作成するように指定している場合にのみ使用できます。

名前	説明
[データストアクラスタの選択 (Select Datastore Cluster) ] フィールド	<p>[選択 (Select) ] をクリックして、VM ディスクの作成に使用するデータストアクラスタを選択します。</p> <p>(注) 使用可能なデータストア クラスタは VDC に関連付けられたストレージポリシーによって異なります。ストレージポリシーで指定された条件に合ったデータストア クラスタのみ VM ディスクに使用できます。</p> <p>このフィールドは、VM のディスクをデータストアクラスタから作成するように指定している場合にのみ使用できます。</p>
[Thin プロビジョニング (Thin Provision) ] チェック ボックス	<p>VM にシンプロビジョニングされたディスクを追加する場合に、このチェックボックスをオンにします。</p> <p>(注) シンプロビジョニングは、物理ストレージ容量の動的割り当てをイネーブルにし、VM ストレージの使用率が向上します。</p>
[新規ディスクコストの計算 (Compute New Disk Cost) ] フィールド	<p>このオプションは、ダイアログボックスで指定および表示した情報に基づいて新しいディスクコストを計算します。</p>

**ステップ 7** [作成 (Create) ] をクリックします。





# 第 15 章

## チャージバック モジュールの使用方法

---

この章は、次の項で構成されています。

- [チャージバック機能について](#), 403 ページ
- [予算ポリシー](#), 404 ページ
- [コストモデル](#), 406 ページ
- [VDC を編集してコストモデルを含める](#), 413 ページ
- [パッケージベースのコストモデル](#), 416 ページ
- [ストレージ階層コストモデル](#), 419 ページ
- [階層へのデータストアの割り当てについて](#), 419 ページ
- [チャージバック レポート](#), 420 ページ
- [変更レコードについて](#), 425 ページ
- [チャージバックの計算](#), 426 ページ

### チャージバック機能について

Cisco UCS Director のチャージバック モジュールによって、仮想インフラストラクチャのコストを詳細に把握することができます。また、コストモデルを定義して部門内や組織内のポリシーに割り当てることができます。リソースのコストを正確に計算するため、仮想マシン (VM) の測定データを頻繁に収集します。



---

**注目** チャージバック モジュールは、アプリケーション コンテナ内にある物理サーバでのみサポートされます。

---

以下に、チャージバック モジュールの機能を示します。

- 柔軟性：組織の要件に応じて、固定費、一時コスト、配賦コスト、使用コスト、およびこれらのコストの組み合わせを提供します。
- 再利用可能なコストモデル：標準化されたコストモデルまたはテンプレートを使用してVMにコストモデルを割り当てます。これらのテンプレートは、新しい環境にコストモデルを迅速に適用します。
- レポート作成：仮想インフラストラクチャのコストとリソースの使用状況のさまざまな概要レポートと比較レポートを生成します。レポートは、PDF、CSV、およびXLS形式でエクスポートされ、Webブラウザで表示できます。
- 上位5つのレポート：VMコスト、CPU、メモリ、ストレージ、ネットワークのコストが高い上位5つの組織またはグループのレポートをモニタします。
- ダッシュボード：組み込みダッシュボードと多彩なグラフィカルウィジェットにより、VMの計測情報とチャージバックをリアルタイムにモニタして分析します。

## 予算ポリシー

リソース全体のアカウントリングはチャージバック モジュールによって処理されます。チャージバックに加えて、個別のグループまたは組織を予算ポリシーに関連付ける必要があります。予算ポリシーでは、予算の監視と予算超過を有効または無効にできます。

## 予算ポリシーの設定

### 手順

- ステップ 1 [管理 (Administration)] > [ユーザとグループ (Users and Groups)] を選択します。
- ステップ 2 [ユーザとグループ (Users and Groups)] ページで [ユーザとグループ (Users and Groups)] をクリックします。
- ステップ 3 グループを選択し、[予算ポリシー (Budget Policy)] をクリックします。
- ステップ 4 [予算ポリシー (Budget Policy)] 画面で、次を含む必須フィールドに値を入力します

名前	説明
[予算の監視の有効化 (Enable Budget Watch)] チェック ボックス	オンにすると、グループの予算使用状況が監視されます。オフにすると、このグループのすべての予算エントリは無視されます。
[予算超過を許容 (Allow Over Budget)] チェック ボックス	オンにすると、グループメンバーに対しプロビジョニングされた予算の超過が許可されます。オフにすると、予算をすべて消化した場合に、新たな予算が追加されるまではリクエストがすべて却下されます。

**ステップ 5** [保存 (Save) ] をクリックします。

## タグベース コスト モデルの作成

コンテナを通じてプロビジョニングされたすべての VM では、タグベース コスト モデル機能がサポートされています。

### 手順

- ステップ 1** [ポリシー (Policies) ] > [仮想/ハイパーバイザ ポリシー (Virtual/Hypervisor Policies) ] > [サービスの提供 (Service Delivery) ] を選択します。
- ステップ 2** [サービスの提供 (Service Delivery) ] ページで [タグ ベースのコスト モデル (Tag Based Cost Model) ] をクリックします。
- ステップ 3** [追加 (Add) ] をクリックし、新しいコスト モデルを作成します。
- ステップ 4** [タグ ベースのコスト モデルの追加 (Add Tag Based Cost Model) ] 画面で、次を含む必須フィールドに値を入力します。

フィールド	説明
[コスト モデル名 (Cost Model Name) ] フィールド	コスト モデルの名前。
[コスト モデルの説明 (Cost Model Description) ]	コスト モデルの説明。
[タグ名 (Tag Name) ] ドロップダウン リスト	ドロップダウン リストから VM タグを選択します。  指定したタグのコストは、このドロップダウン リストで選択した VM タグに制限されます。タグベース コスト モデルは、選択した VM タグに制限されます。

**ステップ 5** コスト モデルにタグ コストを追加するには、[+] 記号をクリックします。

**ステップ 6** [タグ コストへのエントリの追加 (Add Entry to Tag Costs) ] 画面で、次を含む必須フィールドに値を入力します。

フィールド	説明
[VMタグ (VM Tag) ] ドロップダウン リスト	ドロップダウンリストからタグの値を選択します。 このドロップダウンリストには、選択したタグ名に指定できる値が表示されます。
[固定コスト (Fixed Cost) ] フィールド	タグの時間あたりの固定コスト。
[一括での支払いのコスト (One Time Cost) ] フィールド	タグの一括での支払いの固定コスト。
[通常のチャージバックにVMを含める (Include VM in Regular Chargeback) ] チェック ボックス	VMの通常のコストモデルと共にタグベースコストモデルを含める場合は、このチェックボックスをオンにします。

**ステップ7** [送信 (Submit) ] をクリックします。

**ステップ8** [タグ ベース コスト モデルの追加 (Add Tag Based Cost Model) ] 画面で、[送信 (Submit) ] をクリックします。

**ステップ9** [OK] をクリック

## コストモデル

コストモデルは、仮想リソース、および物理リソースのユニットレベルのコストを定義するのに使用されます。これらのコストは、仮想インフラストラクチャおよび物理リソース内の VM のチャージバック計算に使用されます。コストモデルは、線形モデルのコストの定義を提供します。

特定のリソースのコストは、VM または物理リソース内のそのリソースに割り当てられているユニットの数で計算されます。たとえば、1 GB の RAM のコストはコストモデル内で定義されません。このユニットコストが特定の VM の RAM のコストの決定に使用されます。

1 回限りのプロビジョニングコスト、アクティブまたは非アクティブの VM のコスト、および CPU やメモリのリソースのプロビジョニング、予約、または使用コストを定義できます。これらの値は、使用状況に基づいて VM のコストの計算に使用されます。

さらに、物理インフラストラクチャ内のベア メタル サーバのコストモデルを作成することもできます。



- (注) コストモデルを VDC またはアプリケーション コンテナにマッピングできます。コストモデルをアプリケーションコンテナにマッピングする方法の詳細については、『*Cisco UCS Director Application Container Guide*』を参照してください。このマニュアルは、次の URL から入手できます。

<http://www.cisco.com/c/en/us/support/servers-unified-computing/ucs-director/products-installation-and-configuration-guides-list.html>

## コストモデルの作成

### 手順

- ステップ 1** [ポリシー (Policies)] > [仮想/ハイパーバイザ ポリシー (Virtual/Hypervisor Policies)] > [サービスの提供 (Service Delivery)] を選択します。
- ステップ 2** [サービスの提供 (Service Delivery)] ページで [コストモデル (Cost Model)] をクリックします。
- ステップ 3** [追加 (Add)] をクリックします。
- ステップ 4** [コストモデルの追加 (Add Cost Model)] 画面で、次を含む必須フィールドに値を入力します。

名前	説明
[コストモデル名 (Cost Model Name)] フィールド	コストモデルの名前。
[コストモデルの説明 (Cost Model Description)] フィールド	コストモデルの説明。
[コストモデルタイプ (Cost Model Type)] ドロップダウンリスト	コストモデルのタイプを選択します。 [標準 (Standard)] は線形コストモデルを示します。[詳細 (Advanced)] はパッケージまたはスクリプトに基づくコストモデルを示します。高度なコストモデルの説明と使用方法については、「 <a href="#">パッケージベースのコストモデル</a> 」を参照してください。該当する場合は [HyperV] も選択できます。

名前	説明
[請求期間 (Charge Duration) ] ドロップダウンリスト	<p>どのコストをVMリソースに定義する間隔とするか選択します。次のいずれかのオプションを使用できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• [毎時 (Hourly) ] : リソースのコストを時間単位で指定する場合。</li> <li>• [毎日 (Daily) ] : リソースのコストを日単位で指定する場合。</li> <li>• [毎週 (Weekly) ] : リソースのコストを週単位で指定する場合。</li> <li>• [毎月 (Monthly) ] : リソースのコストを月単位で指定する場合。</li> <li>• [毎年 (Yearly) ] : リソースのコストを年単位で指定する場合。</li> </ul>
仮想マシンコストパラメータ	
固定コスト (通貨 : USD)	
[一括での支払いのコスト (One Time Cost) ] フィールド	VMのプロビジョニングの1回限りの固定コスト。
VMコスト (通貨 : USD)	
[アクティブなVMのコスト (Active VM Cost) ] フィールド	アクティブ状態のVMの時間あたりのコスト。
[非アクティブなVMのコスト (Inactive VM Cost) ] フィールド	非アクティブ状態のVMの時間あたりのコスト。
[CPUチャージユニット (CPU Charge Unit) ] ドロップダウンリスト	CPUのチャージユニット (GHzまたはコア) を選択します。

名前	説明
<p>[プロビジョニング済みCPUのコスト (Provisioned CPU Cost) ]フィールド</p>	<p>プロビジョニングされた CPU の 1 CPU チャージあたりおよび1時間あたりのコスト。システムは、VM用にプロビジョニングされたCPUのパーセンテージを計算します。</p> <p>(注) CPUチャージユニットがGHzの場合のコスト。</p> <p>[使用済みCPUコスト (Used CPU Cost) ]フィールドに値を入力する場合は、このフィールドは空白にしてください。</p>
<p>[予約済みCPUコスト (Reserved CPU Cost) ]フィールド</p>	<p>1時間あたり、GHzあたりの予約CPUのコスト。</p> <p>VMに対して実際に予約されたCPUの額（プロビジョニングされたCPUのコスト計算を含む）が考慮されます。予約CPUの追加コスト（プロビジョニングコスト以外）がある場合は、ここに入力します。たとえば、プロビジョニングコストが1ドルで、予約コストが1.4ドルの場合、追加の予約額を指定する必要があります。この例ではこれは1.4ドル-1ドル=0.4ドルです。</p> <p>(注) CPUチャージユニットがGHzの場合はコストです。</p> <p>[使用済みCPUコスト (Used CPU Cost) ]フィールドに値を入力する場合は、このフィールドは空白にしてください。</p>
<p>[使用済みCPUコスト (Used CPU Cost) ]フィールド</p>	<p>1時間あたり、GHzあたりの使用CPUのコスト。コストは実際のCPU使用量に基づいています。</p> <p>このコストでは、プロビジョニングコストと予約コストは考慮されません。[使用済みCPUコスト (Used CPU Cost) ]フィールドに値を入力する場合は、プロビジョニングコストと予約コストのフィールドは空白のままにしておきます。</p> <p>(注) CPUチャージユニットがGHzの場合はコストです。</p>

名前	説明
[プロビジョニング済みメモリのコスト (Provisioned Memory Cost) ] フィールド	1 時間あたり、GB あたりのプロビジョニングされたメモリのコスト。
[予約済みメモリコスト (Reserved Memory Cost) ] フィールド	1 時間あたり、GB あたりの予約されたメモリのコスト。
[使用済みメモリコスト (Used Memory Cost) ] フィールド	1 時間あたり、GB あたりの使用メモリのコスト。
[受信済みネットワークデータのコスト (Received Network Data Cost) ] フィールド	1 時間あたり、GB あたりの受信データのコスト。
[転送済みネットワークデータのコスト (Transmitted Network Data Cost) ] フィールド	1 時間あたり、GB あたりの送信データのコスト。
[コミット済みストレージコスト (Committed Storage Cost) ] フィールド	1 時間あたり、GB あたりのコミットされたストレージのコスト。
[コミットされていないストレージのコスト (Uncommitted Storage Cost) ] フィールド	1 時間あたり、GB あたりのコミットされていないストレージのコスト。未使用だがプロビジョニングされているストレージは、コミットされていないストレージとして定義されます。
[タグベースコストモデル (Tag Based Cost Model) ] ドロップダウン リスト	タグベース コスト モデルを選択します。 このリストには、作成したすべてのタグベースコストモデルが表示されます。
物理サーバコストパラメータ	
固定コスト (通貨 : USD)	
[一括での支払いのコスト (One Time Cost) ] フィールド	サーバのプロビジョニングの 1 回限りの固定コスト。
[CPU チャージユニット (CPU Charge Unit) ] ドロップダウン リスト	CPU のチャージユニット (GHz またはコア) を選択します。

名前	説明
[プロビジョニング済みCPUのコスト (Provisioned CPU Cost) ]フィールド	1時間あたり、CPUチャージユニットあたりのプロビジョニングされたCPUのコスト。サーバに対してプロビジョニングされたCPUのパーセンテージが考慮されます。  (注) CPUチャージユニットがGHzの場合はコストです。  [使用済みCPUコスト (Used CPU Cost) ]フィールドに値を入力する場合は、このフィールドは空白にしてください。
[プロビジョニング済みメモリのコスト (Provisioned Memory Cost) ]フィールド	プロビジョニングされたメモリの1GBあたりおよび1時間あたりのコスト。
[使用済みメモリコスト (Used Memory Cost) ]フィールド	使用メモリの1GBあたりおよび1時間あたりのコスト。
[コミット済みストレージコスト (Committed Storage Cost) ]フィールド	コミットされたストレージの1GBあたりおよび1時間あたりのコスト。
[完全長ブレードのコスト (Full Length Blade Cost) ]フィールド	フルレンジブレードサーバの1時間あたりのコスト。  (注) このフィールドは、[HyperV]がコストモデルタイプとして選択されている場合は表示されません。
[ハーフ長ブレードのコスト (Half Length Blade Cost) ]フィールド	ハーフレンジブレードサーバの1時間あたりのコスト。  (注) このフィールドは、[HyperV]がコストモデルタイプとして選択されている場合は表示されません。

**ステップ5** [追加 (Add) ]をクリックします。

## ベアメタルコストモデルの作成

### 手順

- ステップ 1** [ポリシー (Policies) ]>[物理インフラストラクチャポリシー (Physical Infrastructure Policies) ]>[ベアメタルサーバ (Bare Metal Servers) ]を選択します。
- ステップ 2** [ベアメタルサーバ (Bare Metal Servers) ]ページで[ベアメタルコストモデル (Bare Metal Cost Model) ]をクリックします。
- ステップ 3** [追加 (Add) ]をクリックします。
- ステップ 4** [ベアメタルのコストモデルの追加 (Add Bare Metal Cost Model) ]画面で、次を含む必須フィールドに値を入力します。

名前	説明
[コストモデル名 (Cost Model Name) ]フィールド	コストモデルの名前。
[コストモデルの説明 (Cost Model Description) ]フィールド	コストモデルの説明。
[請求期間 (Charge Duration) ]ドロップダウンリスト	ドロップダウンリストから請求期間を選択します。時間単位、日単位、週単位、月単位、年単位のいずれかです。
[一括での支払いのコスト (One Time Cost) ]フィールド	ベアメタルサーバのプロビジョニングの1回限りの固定コスト。
[CPUチャージユニット (CPU Charge Unit) ]ドロップダウンリスト	CPUのチャージユニットを選択します。GHzまたはコアのいずれかです。
[CPUコスト (CPU Cost) ]フィールド	1時間あたり、CPUチャージユニットあたりのCPUのコスト。
[メモリコスト (Memory Cost) ]フィールド	1時間あたり、GBあたりのメモリのコスト。
[使用済みメモリコスト (Used Memory Cost) ]フィールド	1時間あたり、GBあたりの使用メモリのコスト。
[ストレージコスト (Storage Cost) ]フィールド	1時間あたり、GBあたりのストレージのコスト。
[フル幅ブレードのコスト (Full Width Blade Cost) ]フィールド	1時間あたりのフル幅ブレードサーバのコスト。

名前	説明
[ハーフ幅ブレードのコスト (Half Width Blade Cost) ] フィールド	1 時間あたりのハーフ幅ブレードサーバのコスト。

**ステップ 5** [送信 (Submit) ] をクリックします。

**次の作業**

ベア メタル サーバのプロビジョニング ポリシーを作成する場合、このコスト モデルを選択できます。

## VDC を編集してコスト モデルを含める

新しく作成したコスト モデルを割り当てるよう、既存の VDC を追加または編集することができます。既存の VDC を編集するか、新しい VDC を作成して、その VDC にコスト モデルを割り当てることができます。

コスト モデルが VDC に割り当てられると、その VDC 内のすべての VM は、高度なコスト モデルに基づいてチャージされます。標準タイプのコスト モデルを持つ VDC 内のすべての VM は、引き続き標準のコスト モデルに従ってチャージされます。

## VDC へのコスト モデルの追加

**手順**

- ステップ 1** [ポリシー (Policies) ] > [仮想/ハイパーバイザ ポリシー (Virtual/Hypervisor Policies) ] > [仮想データセンター (Virtual Data Center) ] を選択します。
- ステップ 2** [仮想データセンター (Virtual Data Centers) ] ページで [vDC] をクリックします。
- ステップ 3** コスト モデルを追加する VDC を選択します。
- ステップ 4** [追加 (Add) ] をクリックします。
- ステップ 5** [vDC の追加 (Add vDC) ] 画面で、アカウントタイプを選択してから [送信 (Submit) ] をクリックします。
- ステップ 6** [vDC の追加 (Add vDC) ] 画面で、次を含む必須フィールドに値を入力します

名前	説明
[VDC 名 (VDC Name) ] フィールド	VDC の名前。

名前	説明
[ロック済みの vDC (VDC Locked) ] チェックボックス	<p>デフォルトで、このチェックボックスはオフになっており、VDCが将来の導入に使用できることを意味します。</p> <p>今後の導入で VDC を使用できないようにするには、このチェックボックスをオンにします。この VDC 内の既存の VM に対するアクションは無効になります。今後の導入で VDC を使用できるようにするには、このチェックボックスをオフにします。</p>
[vDC の説明 (VDC Description) ] フィールド	VDC に固有の説明。
[グループ (Group) ] ドロップダウン リスト	VDC の設定対象グループを選択します。
[クラウド名 (Cloud Name) ] ドロップダウン リスト	VDC の設定の対象となるクラウドを選択します。
[保護の有効化 (Enable Protection) ] チェックボックス	SRM を有効にするには、チェック ボックスをオンにします。
[承認者と連絡先 (Approvers and Contacts) ]	
[第 1 レベルの承認者 (First Level Approvers) ] リスト	<p>第1レベルでサービスリクエストを承認する必要があるユーザ。</p> <p>リストを展開してユーザのチェック ボックスをオンにします。複数のユーザを選択できます。</p>
[第 2 レベルの承認者 (Second Level Approvers) ] リスト	<p>第2レベルでサービスリクエストを承認する必要があるユーザ。</p> <p>リストを展開してユーザのチェック ボックスをオンにします。複数のユーザを選択できます。</p>
[すべてのユーザからの承認が必要 (Approval Required from all users) ] チェック ボックス	第1レベルおよび第2レベルの承認担当者として選択されたすべてのユーザからの承認を必要とする場合は、このチェック ボックスをオンにします。
[承認依頼通知の数 (Number of Approval Requests Reminders) ] フィールド	<p>サービスリクエストを承認するよう通知する電子メールを承認担当者に送信する回数。</p> <p>デフォルトでは、サービスリクエストが承認または拒否されるまで、24時間ごとに1回通知電子メールを送信します。</p>

名前	説明
[通知間隔 (時間) (Reminder Interval (Hours)) ] フィールド	承認担当者に通知電子メールを送信する時間間隔。 デフォルトでは、24 時間ごとに 1 回通知電子メールを送信します。
[プロバイダーのサポート用電子メールアドレス (Provider Support Email Address) ] フィールド	連絡先またはユーザの電子メールアドレス。この VDC を使用した VM のプロビジョニングに関する通知を受信するユーザ。
[電子メールアドレスへの通知をコピー (Copy Notifications to Email Address) ] フィールド	この VDC に関する通知のコピーを受信する 2 番目の連絡先の電子メール。
ポリシー	
[システム ポリシー (System Policy) ] ドロップダウン リスト	VDC に適用できるシステム ポリシーを選択します。
[コンピューティング ポリシー (Computing Policy) ] ドロップダウン リスト	VDC に適用できるコンピューティングポリシーを選択します。
[ネットワーク ポリシー (Network Policy) ] ドロップダウン リスト	VDC に適用できるネットワーク ポリシーを選択します。
[ストレージポリシー (Storage Policy) ] ドロップダウン リスト	VDC に適用できるストレージポリシーを選択します。
[コスト モデル (Cost Model) ] ドロップダウン リスト	VDC に適用できるコストモデルを選択します。
[サービスリクエストサマリーと電子メールページへのコストの表示を無効化 (Disable displaying cost in the SR summary and email page) ] チェックボックス	この VDC の SR サマリーと電子メールページでのコストの表示を無効にするには、このチェックボックスをオンにします。
[ユーザアクションポリシー (User Action Policy) ] ドロップダウン リスト	VM のプロビジョニング後にオーケストレーションワークフローの実行に使用するポリシーを選択します。選択されたワークフローは、VDC 内の VM に対するアクションボタンとして表示されます。
エンド ユーザ セルフサービス ポリシー	

名前	説明
[VM の電力管理 (VM Power Management) ] チェック ボックス	チェック ボックスをオンにすると、その VDC に属している VM に対して、すべての VM 電源管理アクションが有効になります。

(注) エンドユーザセルフサービス ポリシーには、VM のサイズ変更、VM スナップショット管理、VM の削除、VM ディスク管理、VM ネットワーク管理が含まれます。詳細については、[仮想データセンターの追加](#)、(264 ページ) を参照してください。

ステップ 7 [追加 (Add) ] をクリックします。

## VDC を編集してコスト モデルに含める

### 手順

- ステップ 1 [ポリシー (Policies) ] > [仮想/ハイパーバイザ ポリシー (Virtual/Hypervisor Policies) ] > [仮想データセンター (Virtual Data Center) ] を選択します。
- ステップ 2 [仮想データセンター (Virtual Data Centers) ] ページで [VDC] をクリックします。
- ステップ 3 コスト モデルに追加する VDC を選択します。
- ステップ 4 [カテゴリの管理 (Manage Categories) ] をクリックします。
- ステップ 5 編集するカテゴリを選択します。
- ステップ 6 [編集 (Edit) ] をクリックします。
- ステップ 7 [アプリケーションカテゴリの編集 (Edit App Category) ] 画面で、ドロップダウンリストから [コストモデル (Cost Model) ] および [ポリシーの導入 (Deploy Policy) ] を選択します。
- ステップ 8 [保存 (Save) ] をクリックします。

## パッケージベースのコスト モデル

パッケージベースのコストモデルでは、システムリソースのコストを個別の定義としてではなく、パッケージとして定義することができます。要件に基づいて、さまざまなパッケージを選択できます。このタイプのコストモデルは、非線形モデルに適しています。



(注) Cisco UCS Director は、CPU メモリ (サーバ) パッケージの定義をサポートしています。

このタイプのコストモデルでは、定義は、利用可能なリソースパッケージに基づいています。モデルの形式は以下のとおりです。

C-M:X

C は CPU コアの数です。

M はメモリ (GB) です。

X は C と M の月間コストの組み合わせです。

たとえば、2-4:200 のエントリを持つパッケージは、CPU コアが 2、メモリが 4 GB、およびこのパッケージの月間コストが 200 ドルであることを意味します。

次の形式を使用して、複数のパッケージを定義できます：C1-M1:X1,C2-M2:X2,,,,,,CN-MN:YN

たとえば、次のようにします：1-1:50,1-2:70,1-4:90,2-4:150,2-6:170,2-8:190,4-8:350,4-12:380,4-16:400  
最初のエントリ 1-1:50 は、コア CPU が 1、メモリが 1 GB で、月間コストが 50 ドルのパッケージです。



(注) これらのエントリは、コストパッケージの要件に合わせて随時に編集できます。

## パッケージベースのコストモデルの作成

### 手順

- ステップ 1 [ポリシー (Policies)] > [仮想/ハイパーバイザポリシー (Virtual/Hypervisor Policies)] > [サービスの提供 (Service Delivery)] を選択します。
- ステップ 2 [サービスの提供 (Service Delivery)] ページで [コストモデル (Cost Model)] をクリックします。
- ステップ 3 [追加 (Add)] をクリックします。
- ステップ 4 [コストモデルの追加 (Add Cost Model)] 画面で、コストモデルの名前と説明を入力します。
- ステップ 5 [コストモデルタイプ (Cost Model Type)] フィールドで、[詳細 (Advanced)] を選択します。
- ステップ 6 [高度なコストモデル (Advanced Cost Model)] フィールドに、次に示すスクリプトを貼り付けます。

```
/******
```

```
var CPU_MEMORY_COST =
```

```
"1-2:81,1-4:95,1-8:109,2-4:162,2-6:176,2-8:189,2-16:378,4-12:352,4-16:378";
```

```
var oneTimeCost = 150;
```

```
/******
```

/\* 上記のようにコストパッケージを定義します。

コストパッケージは次の形式で指定できます：

C-M:X。

C は CPU コアの数です。

M はメモリ (GB) です。

X は C と M の月間コストの組み合わせです。

たとえば 2-4: 162 は、CPU コアの数=2、メモリ=4 GB、このパッケージのコストは 1 ヶ月あたり 162 ドルであることを示します。\*/

```
/* 複数のパッケージを定義するときは、次の形式で定義します：C1-M1:X1,C2-M2:X2,
.....,CN-MN:YN
```

標準パッケージは、スクリプトの先頭で CPU\_MEMORY\_COST 変数を使用して定義されています。

コストパッケージ要件に合わせてこの変数を編集できます。\*/

/\* 参考：使用するストレージコストはストレージ階層コストモデル定義に基づいています。\*/

/\* 以下のスクリプトは編集しないでください\*/

```
computeChargeback(data);
function computeChargeback(data)
{
var map = chargeBackAPI.getCPUMemCostModelMap(CPU_MEMORY_COST);
var cpuCores = data.getVmMeter().getCpuCores();
var memory = data.getVmMeter().getAllocMemGB();
var serverCost = chargeBackAPI.getCostForItem(map,cpuCores, memory);
serverCost = serverCost / (24 * 30);
var storageTierCost = chargeBackAPI.getStorageCostForItem(data.getVmMeter().getVmId());
var storageGB = (data.getVmMeter().getCommittedDiskGB()) +
(data.getVmMeter().getUncommittedDiskGB());
var committedDiskGBCost = (data.getVmMeter().getCommittedDiskGB()) * storageTierCost;
var unCommittedDiskGBCost = (data.getVmMeter().getUncommittedDiskGB()) * storageTierCost;
var storageCost = (storageGB * storageTierCost) / (24 * 30);
var totalVMCost = serverCost + storageCost;
var cb = data.getCbSummary();
cb.setCpuCores(cpuCores);
cb.setMemory(memory);
cb.setServerCost(serverCost);
cb.setCommittedDiskGB(data.getVmMeter().getCommittedDiskGB());
cb.setCommittedDiskGBCost(committedDiskGBCost);
cb.setUncommittedDiskGB(data.getVmMeter().getUncommittedDiskGB());
cb.setUncommittedDiskGBCost(unCommittedDiskGBCost);
cb.setTotalCost(totalVMCost);
}
/*****/
```

**ステップ 7** [追加 (Add)] をクリックします。

(注) コストモデルが定義されている場合は、このコストモデルに基づいて VM のチャージバックを開始するために VDC にコストモデルを割り当てます。

## ストレージ階層コストモデル

階層形式のストレージに関して複数のコストを定義するためにストレージ階層コストモデルを使用できます。現在のストレージタイプには、ローカルストレージ、NFS、SAN、NASに含まれていますが、これらに限定されません。各ストレージコストはさまざまです。ストレージ使用コストの計算にこの差異を組み込むことができます。

このモデルを使用して異なる階層に異なるコストを定義した後、これらの階層に既存のデータストアを割り当てることができます。この階層コストモデルを使用して、コスト面で類似するデータストアタイプをグループ化できます。

各階層にGB毎、月毎の値のコストを割り当てする必要があります。たとえば、\$0.50を階層に割り当てると、この階層内のすべてのデータストアは、1ヵ月1GBあたり\$0.50課金されます。デフォルトでは、4階層がすでに作成されているので、それらにコストを割り当てする必要があります。

### 階層へのコストの割り当て

#### 手順

- ステップ1 [ポリシー (Policies)] > [仮想/ハイパーバイザポリシー (Virtual/Hypervisor Policies)] > [サービスの提供 (Service Delivery)] を選択します。
- ステップ2 [サービスの提供 (Service Delivery)] ページで [ストレージ階層コストモデル (Storage Tier Cost Model)] をクリックします。
- ステップ3 編集する階層を選択します。
- ステップ4 [編集 (Edit)] をクリックします。
- ステップ5 [ディスクコスト (GB) /月 (Disk Cost (GB)/Month)] フィールドを編集します。
- ステップ6 [送信 (Submit)] をクリックします。

### 階層へのデータストアの割り当てについて

データストアを階層に割り当てることにより、その階層に定義されたコストを使用して、そのデータストア内のストレージのコストを計算できます。

データストア内のVMに対するチャージバックを計算するとき、データストアを割り当てた階層によってコストが決定されます。データストアに階層が割り当てられていない場合、詳細 (スクリプトベース) コストモデルの使用時に、そのデータストアのストレージコストは考慮されません。

標準のコストモデルでは、フォームのリソースのコストを定義します。階層コストが割り当て済みで、かつその階層にデータストアが割り当てられている場合は、ストレージ階層のコストが考

慮されます。ただし、階層がデータストアに割り当てられていない場合、そのデータストアの下の VM のストレージコストはコストモデルフォームのストレージコストエントリから削除されます。



(注) 階層へのデータストアの割り当ては、標準のコストモデルのみに適用されます。

## 階層ヘータストアの割り当て

### 手順

- ステップ 1 [仮想 (Virtual) ] > [ストレージ (Storage) ] を選択します。
- ステップ 2 [ストレージ (Storage) ] ページでクラウドを選択します。
- ステップ 3 [ストレージ (Storage) ] ページで [データストアキャパシティレポート (Datastore Capacity Report) ] をクリックします。
- ステップ 4 階層を割り当てるデータストアを選択します。
- ステップ 5 [階層の割り当て (Assign Tier) ] をクリックして [ストレージ階層 (Storage Tier) ] 画面を表示します。  
現在、階層ベースのコストは VMware クラウドアカウントでのみサポートされています。
- ステップ 6 ドロップダウンリストから階層を選択します。
- ステップ 7 [送信 (Submit) ] をクリックします。

## チャージバック レポート

チャージバックは、未使用のリソースも含め全てのリソースに対して組織が支払う金額に関する情報を提供します。この機能を使用して、リソースの消費量とコストを最適化できます。システムリソースのアカウントリングは月次使用率をベースにすることが可能です。CPU やメモリの使用率といったリソースが監視および計測されます。

チャージバック レポートはコストモデルタイプに基づいています。チャージバックは、表形式のレポート、サマリー、グラフィカルレポートおよびウィジェットの形式で計算され、ユーザーインターフェイス内で表示されます。

チャージバックサマリーデータは、日次および月次間隔でのみ保存されます。したがって、[チャージバック (Chargeback) ] メニューオプションを使用して日、時間単位のコストのトレンドレポートを生成することはできません。週次および月次の期間のトレンドレポートのみが生成できます。[クラウドセンス (CloudSense) ] 内で使用可能な [レポートビルダー (Report Builder) ] メニューを使用して、他のトレンドのレポートに加えて、これらのトレンドに関するレポートを生

成できます。[レポートビルダー (Report Builder) ] オプションを使用する際のより詳細な情報は、[カスタム レポート テンプレートのレポートビルダー、\(483 ページ\)](#) を参照してください。

**重要**

月次のトレンドレポートを生成しているときに、その月の第1日目から現在の日付までのデータが計算されます。たとえば、3月5日にトレンドレポートを生成する場合、そのレポートには3月1日から3月5日までのデータが含まれます。

**(注)**

コンテナを通じて VM をプロビジョニングした場合は、タグベースのコストモデルを関連付けて、それらのコストを通常のチャージバック計算と以降のレポートに含めることができます。

以下に、利用可能なレポートタイプを示します。

**• 表示**

- 今月のサマリー：今月のサマリー コスト レポート (VM、CPU、ストレージコストなど)。
- 前月のサマリー：前月のサマリー コスト レポート (VM、CPU、ストレージコストなど)。
- 月間リソース アカウンティングの詳細：月単位のリソース アカウンティングの詳細 (CPU およびメモリの使用状況の統計情報)。
- VM レベル リソース アカウンティングの詳細：VM レベルのリソース アカウンティングの詳細。
- VM レベルのチャージバックの詳細：チャージバック機能と VM 使用率計算に適用できる課金です。

**• エクスポート (Export)**

- 月次リソース アカウンティングの詳細のエクスポート：これらのレポートは、表形式でエクスポートできます。
- VM レベル リソース アカウンティングの詳細のエクスポート：これらのレポートは、表形式でエクスポートできます。
- VM レベル チャージバックの詳細のエクスポート：チャージバック レポートは、表としてエクスポートできます。

**重要**

グループまたは特定の仮想データセンター (VDC) 用にこれらのレポートを生成できます。これらのレポートには、仮想リソースおよび物理サーバに関する情報が含まれています。

## 今月のサマリーの表示

[今月のサマリー (Current Month Summary) ] タブを選択すると、このグループに属するすべての VM と物理サーバの今月のチャージバックの詳細を確認できます。

### 手順

---

- ステップ 1 [組織 (Organizations) ] > [チャージバック (Chargeback) ] を選択します。
  - ステップ 2 [チャージバック (Chargeback) ] ページでユーザ グループを選択します。
  - ステップ 3 [チャージバック (Chargeback) ] ページで [当月の要約 (Current Month Summary) ] をクリックします。
- 

## 前月のサマリーの表示

[前月のサマリー (Previous Month Summary) ] タブを選択すると、このグループに属するすべての VM と物理サーバの前月のチャージバックの詳細を確認できます。

### 手順

---

- ステップ 1 [組織 (Organizations) ] > [チャージバック (Chargeback) ] を選択します。
  - ステップ 2 [チャージバック (Chargeback) ] ページでユーザ グループを選択します。
  - ステップ 3 [チャージバック (Chargeback) ] ページで [前月の要約 (Previous Month Summary) ] をクリックします。
- 

## 月間リソース アカウンティング情報の表示

### 手順

---

- ステップ 1 [組織 (Organizations) ] > [チャージバック (Chargeback) ] を選択します。
  - ステップ 2 グループまたは仮想データセンター (VDC) を選択します。
  - ステップ 3 [チャージバック (Chargeback) ] ページで [リソース アカウンティング (Resource Accounting) ] をクリックします。
-

## VM レベルのリソース アカウンティングの詳細の表示

[リソース アカウンティングの詳細 (Resource Accounting Details) ] タブを使用すると、各 VM リソースの使用率の詳細を表示できます。

### 手順

- 
- ステップ 1 [組織 (Organizations) ] > [チャージバック (Chargeback) ] を選択します。
  - ステップ 2 グループまたは仮想データセンター (VDC) を選択します。
  - ステップ 3 [チャージバック (Chargeback) ] ページで [リソース アカウンティングの詳細 (Resource Accounting Details) ] をクリックします。
- 

## VM レベルのチャージバックの詳細の表示

[チャージバック (Chargeback) ] タブを使用すると、選択したグループまたは VDC のチャージバック レポートを表示できます。

通常の VM チャージバック計算にタグベースのコストモデルを含める必要があると指定した場合は、レポートに [固定コスト (Fixed Costs) ] 列が表示されます。この列には、タグ ベースのコストモデルで示したコストが取得されます。

### 手順

- 
- ステップ 1 [組織 (Organizations) ] > [チャージバック (Chargeback) ] を選択します。
  - ステップ 2 グループまたは仮想データセンター (VDC) を選択します。
  - ステップ 3 [チャージバック (Chargeback) ] ページで [チャージバック (Chargeback) ] をクリックします。
-

## 月間リソース アカウンティングの詳細のエクスポート

### 手順

- 
- ステップ 1** [組織 (Organizations)] > [チャージバック (Chargeback)] を選択します。
- ステップ 2** [チャージバック (Chargeback)] ページで [リソース アカウンティング (Resource Accounting)] をクリックします。
- ステップ 3** [レポートのエクスポート (Export Report)] アイコンをクリックします。
- ステップ 4** [レポートのエクスポート (Export Report)] 画面で、形式を選択します。次のいずれかのオプションを使用できます。
- PDF
  - CSV
  - XLS
- ステップ 5** [レポートの生成 (Generate Report)] をクリックします。レポートが生成された後、[ダウンロード (Download)] オプションが表示されます。
- ステップ 6** 別のブラウザでレポートを開くには、[ダウンロード (Download)] をクリックします。レポートが別のブラウザで開いた後、システムに保存することができます。
- 

## VM レベルのリソース アカウンティングの詳細のエクスポート

### 手順

- 
- ステップ 1** [組織 (Organizations)] > [チャージバック (Chargeback)] を選択します。
- ステップ 2** [チャージバック (Chargeback)] ページで [リソース アカウンティングの詳細 (Resource Accounting Details)] をクリックします。
- ステップ 3** [レポートのエクスポート (Export Report)] アイコンをクリックします。
- ステップ 4** [レポートのエクスポート (Export Report)] 画面で、形式を選択します。次のいずれかのオプションを使用できます。
- PDF
  - CSV
  - XLS
- ステップ 5** [レポートの生成 (Generate Report)] をクリックします。

レポートが生成された後、[ダウンロード (Download) ] オプションが表示されます。

- ステップ 6** 別のブラウザでレポートを開くには、[ダウンロード (Download) ] をクリックします。レポートが別のブラウザで開いた後、システムに保存することができます。

## VM レベルのチャージバックの詳細のエクスポート

### 手順

- ステップ 1** [組織 (Organizations) ] > [チャージバック (Chargeback) ] を選択します。
- ステップ 2** [チャージバック (Chargeback) ] ページで [チャージバック (Chargeback) ] をクリックします。
- ステップ 3** ツールバーの右側で、[レポートのエクスポート (Export Report) ] アイコンをクリックします。
- ステップ 4** [レポートのエクスポート (Export Report) ] 画面で、形式を選択します。次のいずれかのオプションを使用できます。
- PDF
  - CSV
  - XLS
- ステップ 5** [レポートの生成 (Generate Report) ] をクリックします。レポートが生成された後、[ダウンロード (Download) ] オプションが表示されます。
- ステップ 6** 別のブラウザでレポートを開くには、[ダウンロード (Download) ] をクリックします。レポートが別のブラウザで開いた後、システムに保存することができます。

## 変更レコードについて

変更管理データベース (CMDB) 内の変更レコードを使用して、システムの変更を追跡および管理できます。通常、これらのレコードは、VM、サービス リクエスト、グループなどのあらゆるリソースに対するイベント タイプ (ADD、DELETE、および MODIFY) を示します。

変更レコードには、リソース タイプ (VM) に関する情報 (リソース名、変更タイプ、変更時刻、説明など) が表示されます。VM のサイズを変更した際、変更レコードにサイズ変更されたリソースに関する情報が表示されます。これには元のリソースの規模とサイズ変更された値についての情報が含まれます。この情報は、[変更レコード (Change Records) ] タブで表示できます。

## 変更レコードへのアクセス

### 手順

- 
- ステップ1 [管理 (Administration)] > [統合 (Integration)] を選択します。
- ステップ2 [統合 (Integration)] ページで [変更レコード (Change Records)] をクリックします。
- 

## チャージバックの計算

VM の総コストの計算には次のものが含まれます。

総コスト = アクティブな VM のコストまたは非アクティブな VM のコスト + 一括での支払いのコスト + CPU のコスト + メモリ コスト + ディスク コスト + CPU 予約コスト + メモリ予約コスト + CPU 使用コスト + CPU コアのコスト + メモリ使用コスト + 受信ネットワーク使用コスト + 転送ネットワーク使用コスト + アプリケーション コスト

VM がタグに関連付けられていて、コストモデルとタグベースのコストモデルが VDC に関連付けられている場合、チャージバック計算には次の要素が引き出されます。

- [通常のチャージバックにVMを含める (Include VM in Regular Chargeback)] チェック ボックスがオフの場合は、タグベースのコストだけが計算されます。

総コスト - 固定コスト + 一括での支払いのコスト

- [通常のチャージバックにVMを含める (Include VM in Regular Chargeback)] チェック ボックスをオンにすると、タグベースのコストと通常のチャージバック計算を含む総コストが計算されます。

総コスト = アクティブな VM のコストまたは非アクティブな VM のコスト + 一括での支払いのコスト + CPU コスト + メモリ コスト + ディスク コスト + CPU 予約済みコスト + メモリ予約済みコスト + CPU 使用済みコスト + CPU コア コスト + メモリ使用済みコスト + 受信済みネットワークの使用済みコスト + 送信済みネットワークの使用済みコスト + アプリケーション コスト + 固定費



- (注) VM の一括での支払いのコストは、タグベースのコストモデルで指定されたコストによって決定されます。タグベースのコストモデルで一括での支払いのコストを指定していない場合、このコストは通常のコストモデルから導き出されます。

物理サーバの総コストの計算には次のものが含まれます。

総コスト = 一括での支払いのコスト + CPU コスト + メモリ コスト + メモリ使用コスト + コミット済みディスクコスト + CPU コア コスト + フルブレードコスト + ハーフブレードコスト。

VM のコスト計算は 1 時間単位でのみ実行されます。VM のコストを計算する他のオプションはありません。各リソースのコストはコストモデルで定義されている値に基づいて計算されます。コスト計算は次のコストに基づいています。

コスト	コストの説明
アクティブな VM のコスト	アクティブな VM のコストのコストモデルで定義されている値。
非アクティブな VM のコスト	非アクティブな VM のコストのコストモデルで定義されている値。
一括での支払いのコスト	一括での支払いのコストのコストモデルで定義されている値。
CPU コスト	CPU 使用量 (プロビジョニング済み) X プロビジョニング済み CPU コストのコストモデルで定義されているコスト。CPU のチャージユニットは GHz です。
メモリ コスト	メモリ使用量 (プロビジョニング済み) X プロビジョニング済みメモリ コストのコストモデルで定義されているコスト。メモリのチャージユニットは GB です。
ディスク コスト	コミット済みストレージ X コストモデルで定義されているコミット済みストレージコスト + コミットされていないストレージ X コストモデルで定義されているコミットされていないストレージのコストストレージのチャージユニットは GB です。
CPU 予約コスト	予約済み CPU X 予約済み CPU コストのコストモデルで定義されているコスト。1
メモリ予約コスト	予約済みメモリ X 予約済みメモリ コストのコストモデルで定義されているコスト。2
CPU 使用コスト	使用済み CPU X 使用済み CPU コストのコストモデルで定義されているコスト。1
CPU コア コスト	使用済み CPU コア X CPU コア コストのコストモデルで定義されているコスト。CPU のチャージユニットはコアです。
メモリ使用コスト	使用済みメモリ X 使用済みメモリ コストのコストモデルで定義されているコスト。2

コスト	コストの説明
受信ネットワーク使用コスト	受信ネットワーク使用率 (KB) / (1024.0 X 1024.0) X 受信済みネットワークデータのコストの コスト モデルで定義されているコスト。 ネットワークのチャージユニットはGBです。
転送ネットワーク使用コスト	転送ネットワーク使用率 (KB) / (1024.0 X 1024.0) X 転送済みネットワークデータのコストの コスト モデルで定義されているコスト。5
アプリケーション コスト	アクティブな VM 時間 X アクティブな VM アプリケーションコストのカタログで定義されているコスト+非アクティブな VM 時間 X 非アクティブな VM アプリケーションコストのカタログで定義されているコスト。
フル レングス ブレード コスト	フル レングス ブレード サーバの 1 時間あたりのコスト。このコストは、物理サーバのみに適用されます。  これは、アプリケーションコンテナの一部である物理サーバに対してのみ適用されます。
ハーフ レングス ブレード コスト	ハーフ レングス ブレード サーバの 1 時間あたりのコスト。このコストは、物理サーバのみに適用されます。  これは、アプリケーションコンテナの一部である物理サーバに対してのみ適用されます。
固定コスト USD	VM について決定された、1 時間あたりの固定コスト。  これは、VM の通常のコストモデルに加えてタグベースのコストモデルを含めることを指定した場合のみ適用されます。



# 第 16 章

## システムのモニタリングとレポート作成

---

この章は、次の項で構成されています。

- [ダッシュボード](#), 429 ページ
- [要約](#), 431 ページ
- [インベントリ管理](#), 432 ページ
- [リソース プール](#), 433 ページ
- [クラスタ \(Clusters\)](#), 434 ページ
- [イメージ \(Images\)](#), 434 ページ
- [ホスト ノード](#), 436 ページ
- [仮想マシン \(VM\)](#), 436 ページ
- [トポロジ](#), 437 ページ
- [アセスメント](#), 438 ページ
- [レポート](#), 438 ページ

### ダッシュボード

Cisco UCS Director では、ユーザ インターフェイスで [ダッシュボード (Dashboard)] オプションを有効にすることができます。[ダッシュボード (Dashboard)] 画面で、重要なレポートやアクセス頻度の多いレポートのウィジェットを追加できます。[ダッシュボード (Dashboard)] オプションを有効にすると、このウィンドウはユーザ インターフェイスからログインしたときに最初に表示されます。[ダッシュボード (Dashboard)] を有効にすると、追加のダッシュボードを作成したり、必要がなくなった場合はそれらを削除することができます。詳細については、[追加ダッシュボードの作成](#)、(430 ページ) および [ダッシュボードの削除](#)、(430 ページ) を参照してください。

## ダッシュボードの有効化

### 手順

- 
- ステップ 1 ヘッダーで、[ユーザ (user) ] アイコンをクリックし、[プロフィールの編集 (Edit My Profile) ] を選択します。
  - ステップ 2 [プロフィールの編集 (Edit My Profile) ] 画面で、[ダッシュボード (Dashboard) ] セクションまで下方へスクロールします。
  - ステップ 3 [ダッシュボードの有効化 (Enable Dashboard) ] をオンにします。
  - ステップ 4 [保存 (Save) ] をクリックします。  
ログアウト時およびログイン時に最初に表示される画面が[ダッシュボード (Dashboard) ] になります。
  - ステップ 5 ダッシュボードをすぐに表示するには、[閉じる (Close) ] をクリックします。
- 

### 次の作業

ダッシュボードにウィジェットがない場合は、ユーザインターフェイスのサマリーレポートにアクセスし、[ダッシュボードに追加 (Add to Dashboard) ] を選択します。

## 追加ダッシュボードの作成

### はじめる前に

ユーザインターフェイスで[ダッシュボード (Dashboard) ] を有効にしておく必要があります。

### 手順

- 
- ステップ 1 Cisco UCS Director ユーザインターフェイスにログインします。  
デフォルトの[ダッシュボード (Dashboard) ] 画面が表示されます。
  - ステップ 2 デフォルトのダッシュボード名の横に表示された下向きの矢印をクリックし、[ダッシュボードの作成 (Create Dashboard) ] を選択します。
  - ステップ 3 ダッシュボードの名前を入力します。
  - ステップ 4 [送信 (Submit) ] をクリックします。
- 

## ダッシュボードの削除

デフォルトのダッシュボードは削除できません。

## 手順

- 
- ステップ 1** Cisco UCS Director ユーザ インターフェイスにログインします。デフォルトの [ダッシュボード (Dashboard)] 画面が表示されます。
  - ステップ 2** ドロップダウン リストをクリックし、作成したダッシュボードのリストを表示します。
  - ステップ 3** ダッシュボード名の横に表示される [X] マークをクリックします。
  - ステップ 4** ダッシュボードを削除することを確認します。
- 

## レポート ウィジェットの追加

### はじめる前に

このタスクを完了するには、アプライアンスにログインする必要があります。

### 手順

- 
- ステップ 1** 目的のオプションを選択し、ダッシュボードに追加するサマリー レポートに移動します。たとえば、VM 関連のサマリー レポートを追加する場合は、[仮想 (Virtual)] > [コンピューティング (Compute)] を選択して [概要 (Summary)] をクリックします。
  - ステップ 2** [概要 (Summary)] 画面で、ダッシュボードに追加するレポートまで下方にスクロールします。
  - ステップ 3** レポートの右上隅で、[設定 (Settings)]、[ダッシュボードに追加 (Add to Dashboard)] の順にクリックします。
- 

## ウィジェット データの更新

[ダッシュボード (Dashboard)] オプションを有効にすると、このページのウィジェットに更新間隔を設定できます。自動更新は最低 5 分から最大 60 分間隔で発生します。

間隔を設定するには、ダッシュボードの [自動更新 (Automatic Refresh)] ボタンを [オン (ON)] に設定する必要があります。

## 要約

[概要 (Summary)] 画面でシステム インベントリを管理することができます。このウィンドウではさまざまな表、図、およびマップレポートを利用できるほか、インベントリ ライフサイクル活動の管理に役立ちます。

各レポートは、ウィジェットとして表示されます。レポートを表示しないようにカスタマイズできます。

## 仮想マシン、クラウド、およびシステムのサマリー情報

### 手順

- 
- ステップ 1 [仮想 (Virtual) ]>[コンピューティング (Compute) ]を選択します。
  - ステップ 2 [コンピューティング (Compute) ]ページで、[概要 (Summary) ]をクリックします。すべての情報がテーブル、グラフ、チャートの形式で表示されます。
- 

## サマリー レポート ウィジェットのカスタマイズ

### 手順

- 
- ステップ 1 [仮想 (Virtual) ]>[コンピューティング (Compute) ]を選択します。
  - ステップ 2 [コンピューティング (Compute) ]ページで、[概要 (Summary) ]をクリックします。
  - ステップ 3 レポートのドロップダウンアイコンをクリックして使用可能なレポートを表示します。
  - ステップ 4 ウィジェットを、[ダッシュボード (Dashboard) ]をクリック アンド ドラッグします。
  - ステップ 5 [他のレポートを表示 (Show more reports) ]ドロップダウンリストで、追加するレポートの名前をオンにします。
- 

## インベントリ管理

[ダッシュボード (Dashboard) ]を使用して、システムインベントリをモニタできます。[ダッシュボード (Dashboard) ]には、管理運営に対するシステム全体のレベルのインフラストラクチャ情報が表示されます。

## システム インベントリの詳細情報へのアクセス

### 手順

- 
- ステップ 1** [仮想 (Virtual) ]>[コンピューティング (Compute) ]を選択します。
- ステップ 2** [コンピューティング (Compute) ]ページでクラウドを選択します。
- ステップ 3** 詳細情報を表示するオプションを選択します。  
次に、各クラウドに表示される一部のレポート オプションのリストを示します。
- 要約
  - ポーリング
  - VDC
  - クラスタ
  - ホスト ノード
  - リソース プール
  - VM
  - VM アクション リクエスト
  - イベント
  - アセスメント
  - アプリケーション カテゴリ
  - データセンター
  - SRM サイト
- 

## リソース プール

[リソースプール (Resource Pools) ]画面にはホスト ノード レベルでのリソースの詳細が表示されます。これらの詳細には、CPU 設定予約、CPU 制限値、使用済み CPU、使用済みメモリが含まれます。

## リソースの詳細情報へのアクセス

### 手順

- 
- ステップ 1 [仮想 (Virtual) ] > [コンピューティング (Compute) ] を選択します。
  - ステップ 2 [コンピューティング (Compute) ] ページでクラウドを選択します。
  - ステップ 3 [コンピューティング (Compute) ] ページで [リソース プール (Resource Pools) ] をクリックします。
- 

選択されたクラウドのリソースプールがすべて表示されます。リソースプールを選択するか、[詳細の表示 (View Details) ] をクリックし各リソース プールの詳細情報を表示できます。

## クラスタ (Clusters)

ポッドにクラスタが含まれている場合、[クラスタ (Clusters) ] 画面には、クラスタ関連のすべての情報が表示されます。

## クラスタへのアクセス

### 手順

- 
- ステップ 1 [仮想 (Virtual) ] > [コンピューティング (Compute) ] を選択します。
  - ステップ 2 [コンピューティング (Compute) ] ページでクラウドを選択します。
  - ステップ 3 [コンピューティング (Compute) ] ページで [クラスタ (Clusters) ] をクリックします。
- 

選択したクラウドアカウントで使用可能な全てのクラスタが表示されます。特定のクラスタの選択して、[詳細の表示 (View Details) ] をクリックします。

## イメージ (Images)

[イメージ (Images) ] 画面には、使用可能なすべてのイメージ ID、およびその詳細情報が表示されます。これらのイメージにはゲスト OS、CPU、メモリ、およびプロビジョニングされているストレージが含まれます。これらのイメージ ID を使用して、新しい仮想マシン (VM) をプロビジョニングできます。自身がグループ管理者または MSP 管理者の場合は、グループに割り当てられているイメージがこの [イメージ (Images) ] 画面上に表示されます。

特定の VMware クラウド アカウントを選択し、[イメージ (Images)] 画面をクリックすると、イメージをグループまたはユーザに割り当てることができます。特定のグループまたはユーザに割り当てられたイメージがそのグループの管理者がシステムにログインした際に表示されます。

## イメージへのアクセス

### 手順

- 
- ステップ 1 [仮想 (Virtual)] > [コンピューティング (Compute)] を選択します。
  - ステップ 2 [コンピューティング (Compute)] ページでクラウドを選択します。
  - ステップ 3 [コンピューティング (Compute)] ページで [イメージ (Images)] をクリックします。
- 

選択したクラウドの関連イメージのリストが表示されます。特定のイメージを選択して、[詳細の表示 (View Details)] をクリックします。

## ユーザまたはグループへの VM イメージの割り当て

管理者として、ユーザまたはグループに特定の VM イメージを割り当てることができます。カタログの作成などの VM のプロビジョニング タスクを実行したときに表示されるイメージがフィルタが割り当てられます。

### 手順

- 
- ステップ 1 [仮想 (Virtual)] > [コンピューティング (Compute)] を選択します。
  - ステップ 2 [コンピューティング (Compute)] ページでクラウドを選択します。
  - ステップ 3 [コンピューティング (Compute)] ページで [イメージ (Images)] をクリックします。
  - ステップ 4 グループに割り当てるイメージを含む行を選択します。
  - ステップ 5 [イメージをグループに割り当て (Assign Image to Group)] をクリックします。
  - ステップ 6 [イメージをグループに割り当て (Assign Image to Group)] 画面で、[グループ ID (Group ID)] フィールドを展開してイメージを割り当てるグループの名前をオンにします。
  - ステップ 7 個々のユーザにイメージを割り当てるには、次のフィールドに値を入力します。

名前	説明
[ユーザに割り当て (Assign to Users)] チェックボックス	特定のユーザにイメージを割り当てる場合にオンにします。
[ユーザ (User)] フィールド	このフィールドを展開し、イメージを割り当てるユーザの名前をオンにします。

ステップ 8 [送信 (Submit)] をクリックします。

---

## ホストノード

[ホストノード (Host Nodes)] 画面には、インフラストラクチャで使用できるすべての物理ホストノードが表示されます。この画面には、インストールされている ESX/ESXi バージョン、アクティブな VM、電源の状態などの詳細情報のリストが表示されます。

## ホストノードへのアクセス

はじめる前に

このタスクを完了するには、アプライアンスにログインする必要があります。

手順

---

- ステップ 1 [仮想 (Virtual)] > [コンピューティング (Compute)] を選択します。
  - ステップ 2 [コンピューティング (Compute)] ページで [ホストノード (Host Nodes)] をクリックします。
  - ステップ 3 表示するホストノードを含んだ行をクリックし、[詳細の表示 (View Details)] をクリックします。
- 

## 仮想マシン (VM)

[VM (VMs)] 画面には、選択したクラウドのすべての VM と各 VM の詳細情報が表示されます。

## VM へのアクセス

手順

---

- ステップ 1 メニューバーで、[仮想 (Virtual)] > [コンピューティング (Compute)] の順に選択します。
  - ステップ 2 [コンピューティング (Compute)] ページで [VM (VMs)] をクリックします。
- 

すべてのクラウドアカウントのすべての仮想マシンが表示されます。VM クライアントの起動または VM の電源オフなどの VM の追加タスクを実行できます。詳細については、[VM アクションの管理](#)、(447 ページ) を参照してください。

## グループレベルVMへのアクセス

### 手順

- 
- ステップ1 [組織 (Organizations) ]>[仮想リソース (Virtual Resources) ]を選択します。
  - ステップ2 [仮想リソース (Virtual Resources) ]ページでユーザグループを選択します。
  - ステップ3 [仮想リソース (Virtual Resources) ]ページで、[VM]をクリックします。
- 

選択済みグループのすべての仮想マシンが表示されます。VMクライアントの起動またはVMの電源オフなどのVMの追加タスクを実行できます。詳細については、[VMアクションの管理](#)、(447 ページ) を参照してください。

## トポロジ

[トポロジ (Topology) ]画面にはVMware クラウドトポロジが表示されます。表示モードタイプには、[階層 (Hierarchical) ]、[同心 (Concentric) ]、[円形 (Circular) ]、および[強制的実行 (Force Directed) ]の4つがあります。表示モードによって、項目のスペース設定、距離、半径、厳密性、および強制距離を調整できます。

## トポロジタイプへのアクセス

### はじめる前に

このタスクを完了するには、アプライアンスにログインする必要があります。

### 手順

- 
- ステップ1 [仮想 (Virtual) ]>[コンピューティング (Compute) ]を選択します。
  - ステップ2 [コンピューティング (Compute) ]ページでクラウドを選択します。
  - ステップ3 [コンピューティング (Compute) ]ページで[トポロジ (Topology) ]をクリックします。
  - ステップ4 [ホストノード - データストア トポロジ (Hostnode-Datastore Topology) ]または[ホストノード - VM トポロジ (Hostnode-VM Topology) ]を選択します。
  - ステップ5 [接続の表示 (View Connectivity) ]をクリックします。  
トポロジが新しいウィンドウに表示されます。  
(注) すべてのトポロジタイプが表示されるわけではありません。
-

# アセスメント

[アセスメント (Assessment)] 画面には、クラウドアカウントのクラウド対応状況や仮想化のベストプラクティスなどのアセスメント レポートが表示されます。

## 評価へのアクセス

### はじめる前に

このタスクを完了するには、アプライアンスにログインする必要があります。

### 手順

- 
- ステップ1 [仮想 (Virtual)] > [コンピューティング (Compute)] を選択します。
  - ステップ2 [コンピューティング (Compute)] ページでクラウドを選択します。
  - ステップ3 [コンピューティング (Compute)] ページで [アセスメント (Assessment)] をクリックします。
  - ステップ4 ドロップダウンリストから、レポートをフィルタリングするレポートタイプを選択します。
- 

## レポート

Cisco UCS Director は、仮想インフラストラクチャおよびシステムリソースをモニタすることができます。これらはシステムのパフォーマンスに関する情報を提供するさまざまなレポートを表示します。

以下にレポートのタイプを示します。

- システム情報に関する表形式のレポート。概要、ホストノード、新しいVM、および削除されたVMが含まれます。
- 棒グラフおよび円グラフによる比較。アクティブなVMと非アクティブなVM、プロビジョニングされたCPUとキャパシティの比較などが表示されます。
- システムリソースに関するトレンドグラフ。CPUのトレンド、メモリのトレンド、VMの追加および削除などが含まれます。
- その他のレポートには、グループ、VDC、ホストノード、およびVMレベルの上位5つのレポートがあります。上位5つのレポートは、VMの数が最も多いグループ、CPU使用率が最大のグループ、VMの数が最も多いVDC、CPU使用率が最大のホストノードなどです。
- マップレポートは、ヒートマップまたは色分けされたマップの形式でシステムリソース情報を表示します。

特定のアカウント（たとえば KVM アカウントなど）について、追加の傾向レポートを利用することもできます。傾向レポートには、選択した期間内のデータが表示されます。

## レポートへのアクセス

### 手順

- 
- ステップ 1** [仮想 (Virtual) ] > [コンピューティング (Compute) ] を選択します。
  - ステップ 2** [コンピューティング (Compute) ] ページでクラウドを選択します。
  - ステップ 3** 表示するレポートの名前 ([マップ (Map) ]、[上位 5 つ (Top 5) ]、または [他のレポート (More Reports) ]) をクリックします。
-





## 第 17 章

# ライフサイクルの管理

この章は、次の項で構成されています。

- [VM の電源設定の管理, 441 ページ](#)
- [VM スナップショットの管理, 442 ページ](#)
- [仮想マシンのリース時間の設定, 446 ページ](#)
- [VM アクションの管理, 447 ページ](#)
- [VM へのタグの適用, 475 ページ](#)
- [ISO イメージを CD/DVD ドライブとしてマウント, 476 ページ](#)
- [CD/DVD ドライブとしての ISO イメージのマウント解除, 476 ページ](#)

## VM の電源設定の管理

はじめる前に

このタスクを完了するには、アプライアンスにログインする必要があります。

手順

- ステップ 1 [仮想 (Virtual) ] > [コンピューティング (Compute) ] を選択します。
- ステップ 2 [コンピューティング (Compute) ] ページでクラウドを選択します。
- ステップ 3 [コンピューティング (Compute) ] ページで [VM (VMs) ] をクリックします。
- ステップ 4 アクションを実行する VM を含む行をクリックします。
- ステップ 5 アクションを選択すると、[VM タスク (VM Task dialog) ] 画面が表示されます。

名前	説明
[VM 名 (VM Name) ] フィールド (表示専用)	アクションの実行対象である VM の名前。

名前	説明
[電源オフ (Power Off) ] フィールド (表示専用)	VM の電源をオフにするタスク。
[電源オン (Power On) ] フィールド (表示専用)	VM の電源をオンにするタスク。
[一時停止 (Suspend) ] フィールド (表示専用)	VM を一時停止状態にするタスク。
[ゲストのシャットダウン (Shutdown Guest) ] フィールド (表示専用)	VM でゲスト OS をシャットダウンするタスク。
[スタンバイ (Standby) ] フィールド (表示専用)	VM をスタンバイ状態にするタスク。 (注) RHEV KVM コネクタではサポートされていません。
[リセット (Reset) ] フィールド (表示専用)	VM のハードリセットを実行するタスク。 (注) RHEV KVM コネクタではサポートされていません。
[リブート (Reboot) ] フィールド (表示専用)	VM のソフトリブートを実行するタスク。 (注) RHEV KVM コネクタではサポートされていません。
[コメント (Comments) ] フィールド	VM を特定するために、コメントを入力します。
[アクションのスケジュール設定 (Schedule Action) ] オプション ボタン	特定の日に、後でまたは今すぐ VM の電源をオンにするタスク。

ステップ 6 [続行 (Proceed) ] をクリックします。

## VM スナップショットの管理

この手順では、次のタスクが含まれています。

- スナップショットの作成：すべての VM リソースの現在の状態のスナップショットを作成できます。
- スナップショットへの復帰：VM がクラッシュや誤作動（例えば OS が破損）した場合、VM の最新スナップショットへ復帰することができます。VM のスナップショットが複数ある場合、特定のスナップショットに戻すことができます。

- ゴールドスナップショットとしてマーク付け：VMの特定のスナップショットをゴールドスナップショットとしてマークできます。この機能は、そのスナップショットが誤って削除されないよう保護します。
- スナップショットの削除：必要に応じてスナップショットを削除できます。ゴールドスナップショットは、削除する前にマークを解除する必要があります。
- すべてのスナップショットの削除：VMのすべてのスナップショットを削除できます。ただし、ゴールドスナップショットを含む場合、すべてのスナップショットの削除はできません。先にゴールドスナップショットのマークを外してから、すべてのスナップショットの削除を実行してください。

## VM スナップショットの作成

### 手順

- ステップ 1** [仮想 (Virtual) ] > [コンピューティング (Compute) ] を選択します。
- ステップ 2** [コンピューティング (Compute) ] ページでクラウドを選択します。
- ステップ 3** [コンピューティング (Compute) ] ページで [VM (VMs) ] をクリックします。
- ステップ 4** スナップショットを作成する VM を含む行をクリックします。
- ステップ 5** [その他のアクション (More Actions) ] ドロップダウンリストから [スナップショットの作成 (Create Snapshot) ] を選択します。
- ステップ 6** [仮想マシンのスナップショットの作成 (Create Virtual Machine Snapshot) ] 画面で、次のフィールドに値を入力します。

名前	説明
[スナップショット名 (Snapshot Name) ] フィールド	スナップショットの名前。
[スナップショットの説明 (Snapshot Description) ] フィールド	スナップショットの説明。
[スナップショットメモリ (Snapshot Memory) ] チェック ボックス	スナップショットの VM のメモリを組み込む場合にこのチェック ボックスをオンにします。

名前	説明
[ゲストのファイルシステムを休止 (Quiesce Guest File System) ] チェック ボックス	<p>休止モードでスナップショットを作成する場合は、このチェック ボックスをオンにします。</p> <p>(注) ファイルシステムを休止すると、物理または仮想マシンのディスク上のデータがバックアップに適した状態になります。このプロセスには、オペレーティングシステムのメモリ内キャッシュから、ディスクまたはその他の高レベルのアプリケーション固有のタスクにバッファをフラッシュするなどのアクションが含まれる場合があります。このオプションを使用するには、VMware ツールを VM にインストールする必要があります。</p>

ステップ 7 [続行 (Proceed) ] をクリックします。

## スナップショットへの復帰

### はじめる前に

このタスクを完了するには、アプライアンスにログインする必要があります。

### 手順

- ステップ 1 [仮想 (Virtual) ] > [コンピューティング (Compute) ] を選択します。
- ステップ 2 [コンピューティング (Compute) ] ページでクラウドを選択します。
- ステップ 3 [コンピューティング (Compute) ] ページで [VM (VMs) ] をクリックします。
- ステップ 4 スナップショットの復帰先となる VM を含む行を選択します。
- ステップ 5 [その他のアクション (More Actions) ] ドロップダウンリストから [スナップショットの復帰 (Revert Snapshot) ] を選択します。
- ステップ 6 [スナップショット タスクの復帰 (Revert Snapshot Task) ] 画面で、目的のスナップショットの名前をオンにします。
- ステップ 7 [続行 (Proceed) ] をクリックします。

## ゴールデンスナップショットのマーキング

### 手順

- 
- ステップ 1 [仮想 (Virtual) ] > [コンピューティング (Compute) ] を選択します。
  - ステップ 2 [コンピューティング (Compute) ] ページでクラウドを選択します。
  - ステップ 3 [コンピューティング (Compute) ] ページで [VM (VMs) ] をクリックします。
  - ステップ 4 ゴールデンとしてスナップショットをマーキングする VM を含む行をクリックします。
  - ステップ 5 [その他のアクション (More Actions) ] ドロップダウンリストから [ゴールデンスナップショットのマーキング (Mark Golden Snapshot) ] を選択します。
  - ステップ 6 [ゴールデンスナップショットタスクのマーキング (Mark Golden Snapshot Task) ] 画面で、目的のスナップショットの名前をオンにします。
  - ステップ 7 [ゴールデンスナップショットとしてマーキング (Mark Golden Snapshot Task) ] をオンにします。
  - ステップ 8 [続行 (Proceed) ] をクリックします。
- 

## スナップショットの削除

### 手順

- 
- ステップ 1 [仮想 (Virtual) ] > [コンピューティング (Compute) ] を選択します。
  - ステップ 2 [コンピューティング (Compute) ] ページでクラウドを選択します。
  - ステップ 3 [コンピューティング (Compute) ] ページで [VM (VMs) ] をクリックします。
  - ステップ 4 スナップショットを削除する VM を含む行をクリックします。
  - ステップ 5 [その他のアクション (More Actions) ] ドロップダウンリストから [スナップショットの削除 (Delete Snapshot) ] を選択します。
  - ステップ 6 [スナップショットタスクの削除 (Delete Snapshot Task) ] 画面で、目的のスナップショットの名前をオンにします。
  - ステップ 7 選択したスナップショットの子のスナップショットを削除するには、[子の削除 (Delete Children) ] をオンにします。
  - ステップ 8 [続行 (Proceed) ] をクリックします。
-

## すべてのスナップショットの削除

### 手順

- 
- ステップ 1 [仮想 (Virtual) ] > [コンピューティング (Compute) ] を選択します。
  - ステップ 2 [コンピューティング (Compute) ] ページでクラウドを選択します。
  - ステップ 3 [コンピューティング (Compute) ] ページで [VM (VMs) ] をクリックします。
  - ステップ 4 すべてのスナップショットを削除する VM を含む行をクリックします。
  - ステップ 5 [その他のアクション (More Actions) ] ドロップダウンリストから [すべてのスナップショットの削除 (Delete All Snapshots) ] を選択します。
  - ステップ 6 [VM スナップショット タスク (VM Snapshot Task) ] 画面で、任意でコメントを入力します。
  - ステップ 7 [続行 (Proceed) ] をクリックします。
- 

## 仮想マシンのリース時間の設定

ユーザは、選択した仮想マシン (VM) のリース有効時間を設定できます。リース時間が期限切れになると、VM の電源はオフになります。リース時間の終了は、カレンダーの選択です。

### 手順

- 
- ステップ 1 [仮想 (Virtual) ] > [コンピューティング (Compute) ] を選択します。
  - ステップ 2 [コンピューティング (Compute) ] ページでクラウドを選択します。
  - ステップ 3 [コンピューティング (Compute) ] ページで [VM (VMs) ] をクリックします。
  - ステップ 4 リース時間を設定する VM を含む行をクリックします。
  - ステップ 5 [その他のアクション (More Actions) ] ドロップダウンリストから [リース時間の設定 (Configure Lease Time) ] を選択します。
  - ステップ 6 [リース時間の設定 (Configure Lease Time) ] 画面で、[リース時間の設定 (Set Lease Time) ] をオンにします。次のフィールドに入力します。

名前	説明
[VM 名 (VM Name) ] フィールド	VM の作成時に指定された名前。 一度入力した後、VM の名前は編集できません。
[リース日時 (Lease Date) ] のカレンダー、ドロップダウンリスト、オプション ボタン	VM のリースの日時。日付のカレンダー、時刻 (時間および分) のドロップダウンリスト、AM と PM のオプション ボタンがあります。

ステップ7 [送信 (Submit)] をクリックします。

## VM アクションの管理

VM を作成した後、ユーザ インターフェイスで使用可能なメニューを使用して、追加タスクを行うことができます。これらのメニューは、次のいずれかの方法でアクセスできます。

- 一部のオプションのリストを表示するには、VM を右クリックします。
- VM を選択し、ツールバーの下矢印のオプションをクリックするとオプションの全一覧を表示できます。

他の VM アクションには次のものがあります。

- VM の詳細を表示：個別の VM にアクセスして、サマリー レポート、vNIC、ディスク、スナップショットなどの詳細を表示できます。
- スタック ビュー：OS、ハイパーバイザ、インフラストラクチャ情報など、特定の VM についてさまざまな情報を参照できます。
- VM の削除：リストから VM を削除できます。電源がオフになっている VM のみ削除できます。
- VM ディスクの作成：カスタム サイズの追加ディスクを VM に追加できます。
- VM ディスクの削除：ディスクを削除できます。
- vNIC の追加：VM に複数の vNIC を追加できます。また、VM 内で vNIC を追加、または交換するオプションもあります。vNIC のオプションは、VM に関連付けられた VDC にマップされているネットワーク ポリシーによって異なります。
- VM クライアントの起動：VM に Web アクセス、リモートデスクトップ、または VMRC コンソール アクセスのいずれかを設定してアクセスできます。
- VNC コンソールの起動：VNC クライアントを使用して VM コンソール を設定してアクセスできます。
- VMRC コンソール (HTML5)：Web ブラウザとプラグイン独立型である VMRC HTML5 コンソールを起動できます。
- VM の割り当て：VM をグループまたは VDC に割り当てたり、VM のカテゴリを変更したりできます。VM のプロビジョニング時間、終了時間、およびラベルを設定できます。
- VM クレデンシャルにアクセス：VM のログイン クレデンシャルが Web またはリモートのデスクトップアクセスに対して設定されており、管理者が、その VM がプロビジョニングされているカタログ内の権限を提供している場合のみ、VM のログイン クレデンシャルにアクセスできます。

- VM のインベントリ収集のリクエスト：1 つの VM を選択し、オンデマンドのインベントリ収集をリクエストできます。
- VNC のテスト：トラブルシューティングを目的として、VNC の接続をテストします。
- 複製：同じ、または類似のクオリティを持つ新しい VM を作成するために、既存の VM を複製したり、コピーを作成したりできます。
- VM を VDC に移動：VM を VDC に移動して、VDC システム ポリシー規則が VM 内で適用されるようにすることができます。
- VM 再同期：VM を Cisco UCS Director と定期的に再同期させる時間（分）を設定することができます。
- CD/DVD ドライブとしての ISO イメージのマウント：物理ドライブを使用せずに ISO イメージを VM にマウントできます。仮想マシンにマウントすると、物理ディスクを使用せずに仮想 CD/DVD ドライブからファイルを開いたり、抽出したり、使用したりすることができます。
- CD/DVD ドライブとしての ISO イメージのマウント解除：仮想マシン上の CD/DVD ドライブにすでに接続されている ISO イメージのマウントを解除できます。

## VM の詳細の表示

### 手順

- 
- ステップ 1 [仮想 (Virtual) ] > [コンピューティング (Compute) ] を選択します。
  - ステップ 2 [コンピューティング (Compute) ] ページでクラウドを選択します。
  - ステップ 3 [コンピューティング (Compute) ] ページで [VM (VMs) ] をクリックします。
  - ステップ 4 詳細情報を表示する VM を含む行をクリックします。
  - ステップ 5 [詳細の表示 (View Details) ] をクリックします。
-

## VMのサイズ変更

### 手順

- ステップ 1** [仮想 (Virtual) ] > [コンピューティング (Compute) ] を選択します。
- ステップ 2** [コンピューティング (Compute) ] ページでクラウドを選択します。
- ステップ 3** [コンピューティング (Compute) ] ページで [VM (VMs) ] をクリックします。
- ステップ 4** サイズ変更する VM を含む行を選択します。
- ステップ 5** [その他のアクション (More Actions) ] ドロップダウン リストから [VMのサイズ変更 (Resize VM) ] を選択します。
- ステップ 6** [VMのサイズ変更 (Resize VM) ] 画面で、次のフィールドに値を入力します。

名前	説明
[VM名 (VM Name) ] フィールド	選択した VM の名前。
[現在の割り当てCPU (Current Allocated CPU) ] フィールド	VM によって使用中の割り当て済み CPU の数。
[現在の割り当てメモリ(GB) (Current Allocated Memory (GB)) ] フィールド	VM に割り当てられているメモリ容量。
[新しいCPU数 (New CPU Count) ] ドロップダウン リスト	必要な CPU を選択します。
[ソケットあたりの新しいコア数 (New Cores Per Socket) ] ドロップダウン リスト	ソケットあたりコア数を選択します。
[新しいメモリ (New Memory) ] ドロップダウン リスト	メモリ容量を選択します。
[現在のCPUコスト(通貨:USD) (Current CPU Cost (Currency: USD)) ] フィールド	1時間あたりの現在の CPU コストを表示します。 この値は、VM に現在割り当てられている CPU に基づいて計算されます。

名前	説明
[現在のメモリコスト(通貨: USD) (Current Memory Cost (Currency: USD)) ]フィールド	1 時間あたりの現在のメモリ コストを表示します。 この値は、VM に現在割り当てられているメモリに基づいて計算されます。
[新規CPUコスト(通貨: USD) (New CPU Cost (Currency: USD)) ]フィールド	VM に指定された CPU の数に基づいて 1 時間あたりの CPU コストが表示されます。
新規メモリコスト(通貨: USD) (New Memory Cost (Currency: USD))	VM に指定されたメモリに基づいて 1 時間あたりのメモリ コストが表示されます。

**重要** VDC を追加または変更するときに [コスト詳細情報の表示の無効化 (Disable displaying cost details) ] をオンにした場合、現在および新しい CPU コストやメモリ コストに関する情報は表示されません。

**ステップ 7** [サイズ変更 (Resize) ] をクリックします。

## スタック ビューオプションの使用

### 手順

**ステップ 1** [仮想 (Virtual) ] > [コンピューティング (Compute) ] を選択します。

**ステップ 2** [コンピューティング (Compute) ] ページでクラウドを選択します。

**ステップ 3** [コンピューティング (Compute) ] ページで [VM (VMs) ] をクリックします。

**ステップ 4** スタック ビューを表示する VM を含む行をクリックします。

**ステップ 5** [スタック ビュー (Stack View) ] をクリックします。

[スタック ビュー (Stack View) ] 画面に、選択した VM の情報が表示されます。

- (注)
- ハードドライブやネットワーク アダプタなど、複数のコンポーネントがレポートにある場合、各コンポーネントに表示されている矢印をクリックし、別のコンポーネントを選択します。
  - 眼のアイコンをクリックすると、各コンポーネントに関する追加情報が表示されません。

## VM ディスクの作成

vDC にマッピングするストレージポリシーの作成時に [ディスクのサイズ変更を許可 (Allow Resizing of Disk) ] をオンにした場合にのみ、VM ディスクを作成できます。

### はじめる前に

VM は電源がオフになっている状態である必要があります。

### 手順

- ステップ 1** [仮想 (Virtual) ] > [コンピューティング (Compute) ] を選択します。
- ステップ 2** [コンピューティング (Compute) ] ページでクラウドを選択します。
- ステップ 3** [コンピューティング (Compute) ] ページで [VM (VMs) ] をクリックします。
- ステップ 4** VM ディスクを作成する VM を含む行をクリックします。
- ステップ 5** [その他のアクション (More Actions) ] ドロップダウンリストから [VM ディスクの作成 (Create VM Disk) ] を選択します。
- ステップ 6** [VM ディスクの作成 (Create VM Disk) ] 画面で、次のフィールドに値を入力します。

名前	説明
[VM 名 (VM Name) ] フィールド	VM の名前。 一度入力すると、VM の名前は編集できません。
[新しいディスクサイズ(GB) (New Disk Size (GB)) ] フィールド	VM のディスク サイズ (GB 単位) 。
[ディスクタイプの選択 (Select Disk Type) ] ドロップダウンリスト	ディスクタイプを選択します。次のいずれかを設定できます。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• [システム(System)]</li> <li>• [切替 (Swap) ]</li> <li>• [データ(Data)]</li> <li>• [データベース(Database)]</li> <li>• [ログ(Log)]</li> </ul>
[データストア/データストア クラスタの選択 (Select Datastore/Datastore Cluster) ] ドロップダウンリスト	VM のディスクがデータストアまたはデータストアクラスタから作成されている場合に指定します。

名前	説明
[データストアの選択 (Select Datastore) ]フィールド	<p>[選択 (Select) ]をクリックして、VMディスクの作成に使用するデータストアを選択します。</p> <p>(注) 使用可能なデータストアはVDCに関連付けられたストレージポリシーによって異なります。ストレージポリシーで指定された条件に合ったデータストアのみ VM ディスクに使用できます。</p> <p>このフィールドは、VM のディスクをデータストアから作成するように指定している場合にのみ使用できます。</p>
[データストア クラスタの選択 (Select Datastore Cluster) ]フィールド	<p>[選択 (Select) ]をクリックして、VMディスクの作成に使用するデータストア クラスタを選択します。</p> <p>(注) 使用可能なデータストア クラスタはVDCに関連付けられたストレージポリシーによって異なります。ストレージポリシーで指定された条件に合ったデータストア クラスタのみ VM ディスクに使用できます。</p> <p>このフィールドは、VM のディスクをデータストア クラスタから作成するように指定している場合にのみ使用できます。</p>
[Thin プロビジョニング (Thin Provision) ] チェック ボックス	<p>VMにシンプロビジョニングされたディスクを追加する場合に、このチェックボックスをオンにします。</p> <p>(注) シンプロビジョニングは、物理ストレージ容量の動的割り当てをイネーブルにし、VMストレージの使用率が向上します。</p>

名前	説明
[新規ディスクコストの計算 (Compute New Disk Cost) ] フィールド	このオプションでは、VM ディスクに指定したデータストアと新しいディスクサイズに基づいて、ディスクのコストが1時間ごとに計算されて表示されます。  <b>重要</b> VDC を追加または変更するときに [コスト詳細情報の表示の無効化 (Disable displaying cost details) ] をオンにした場合、[新規ディスクコストの計算 (Compute New Disk Cost) ] フィールドは表示されません。

**ステップ 7** [作成 (Create) ] をクリックします。

## VM ディスクのサイズ変更

### 手順

- ステップ 1** [仮想 (Virtual) ] > [コンピューティング (Compute) ] を選択します。
- ステップ 2** [コンピューティング (Compute) ] ページでクラウドを選択します。
- ステップ 3** [コンピューティング (Compute) ] ページで [VM (VMs) ] をクリックします。
- ステップ 4** VM ディスクのサイズを変更する VM を含む行をクリックします。
- ステップ 5** [その他のアクション (More Actions) ] ドロップダウン リストから [VM ディスクのサイズ変更 (Resize VM Disk) ] を選択します。
- ステップ 6** [VM ディスクのサイズ変更 (Resize VM Disk) ] 画面で、次のフィールドに値を入力します。

名前	説明
[VM 名 (VM Name) ] フィールド	VM の名前。 この名前は編集できません。
[ディスクの選択 (Select Disk) ] ドロップダウン リスト	ドロップダウン リストから VM ディスクを選択します。
[プロビジョニング済総容量(GB) (Total Provisioned (GB)) ] フィールド	VM 上のプロビジョニング容量の合計を表示します。

名前	説明
[新しいサイズ(GB) (New Size(GB)) ]フィールド	VMの新しいサイズ。新しいディスクサイズはプロビジョニングサイズの合計より大きい必要があります。
[現在のディスクコスト(通貨:USD) (Current Disk Cost (Currency: USD)) ]フィールド	1時間あたりの現在のディスクコストを表示します。
[新規ディスクコストの計算 (Compute New Disk Cost) ]フィールド	このオプションは、指定した新しいディスクサイズに基づいて、1時間ごとにディスクコストを計算します。
[新しいディスクコスト(通貨:USD) (New Disk Cost (Currency: USD)) ]フィールド	VMに指定された新しいディスクサイズの1時間あたりのディスクコストを表示します。

**重要** VDCを追加または変更するときに[コスト詳細情報の表示の無効化 (Disable displaying cost details)]をオンにした場合、現在および新しいディスクコストに関する情報は表示されません。

**ステップ7** [サイズ変更 (Resize)]をクリックします。

## Cisco UCS Director での VM のロック

Cisco UCS Director 管理者として、ロックする VM のリストを作成できます。VM のロックは、指定した VM 上での実行を防止するアクションのことを意味します。これらのアクションはシャットダウン、リセット、電源オフを実行できます。

### 手順

**ステップ1** 次のように VMControls.xml の名前の XML ファイルを作成します。

```
<VMControlList>
--<VMControl>
  <ControlType>lock</ControlType>
  <MatchType>VM-IPAddress</MatchType>
  <MatchValue>19.19.19.19</MatchValue>
  <IsRegex>false</IsRegex>
  <ContactEmail>admin@admin.com</ContactEmail>
--<Label>
  Do not shutdown or delete my machine.
--</Label>
--</VMControl>
--<VMControl>
  <ControlType>lock</ControlType>
```

```

<MatchType>VM-IPAddress</MatchType>
<MatchValue>19.29.29.29*</MatchValue>
<IsRegex>true</IsRegex>
<ContactEmail>admin@admin.com</ContactEmail>
--<Label>
    Do not shutdown or delete this machine.
--</Label>
--</VMControl>
</VMControlList>

```

- ステップ 2** システムからアクセスできる実行中のファイルをサーバ上にホストします Cisco UCS Director。
- ステップ 3** [管理 (Administration) ]>[システム (System) ]を選択します。
- ステップ 4** [システム (System) ]ページで [システム パラメータ (System Parameters) ]をクリックします。
- ステップ 5** [URL から VM ロックのコントロールをダウンロードする (Download VM Locking Controls From URL) ]フィールドで、XML ファイルの URL を入力します。  
URL は次のように表示されます。 <ip\_address>:8000/VMControls.xml
- ステップ 6** [保存 (Save) ]をクリックします。
- ステップ 7** [システム (System) ]ページで [システム タスク (System Tasks) ]をクリックします。
- ステップ 8** [VM コントロールリストポーラータスク (VM Control List Poller Task) ]を検索し、選択します。
- ステップ 9** [今すぐ実行 (Run Now) ]をクリックします。  
このシステムタスクは VMControls.xml ファイルをダウンロードし、インベントリ データベースに保存します。このシステムタスクの実行後に、電源投入またはシャットダウンなどの操作を行うと、XML ファイルで指定された IP アドレスに一致する VM を実行できなくなります。

## vNIC の追加



- (注) vNIC VM を追加するときには、[ポート グループ名 (Port Group Name) ]の値と [アダプタのタイプ (Adapter Type) ]のパラメータが変更されます。VM の IP アドレスは、選択されたポート グループで DHCP が有効な場合にのみ変更されます。ただし、IP アドレスがスタティック プール ポリシーから供給されている場合は変更されません。

## 手順

- ステップ 1** [仮想 (Virtual) ] > [コンピューティング (Compute) ] を選択します。
- ステップ 2** [コンピューティング (Compute) ] ページでクラウドを選択します。
- ステップ 3** [コンピューティング (Compute) ] ページで [VM (VMs) ] をクリックします。
- ステップ 4** vNIC を追加する VM を含む行をクリックします。
- ステップ 5** [その他のアクション (More Actions) ] ドロップダウン リストから [vNIC の追加 (Add vNICs) ] を選択します。
- ステップ 6** [VM vNIC の追加 (Add VM vNICs) ] 画面の [操作 (Operation) ] ドロップダウン リストから [追加 (Add) ] を選択します。  
ネットワーク ポリシーに設定された vNIC の追加制限を超える場合、この追加作業は許可されません。
- ステップ 7** [VM ネットワーク (VM Networks) ] リストを展開します。
- ステップ 8** [追加 (Add) ] (+) をクリックします。
- ステップ 9** [VM ネットワークへのエントリの追加 (Add Entry to VM Networks) ] 画面で、次のフィールドに値を入力します。

[名前 (Name) ]	説明
[NIC エイリアス (NIC Alias) ] ドロップダウン リスト	リストから NIC エイリアスを選択します。
[ポートグループタイプ (Port Group Type) ] ドロップダウン リスト (表示専用)	リストからポート グループを選択します。
[ポートグループ名 (Port Group Name) ] ドロップダウン リスト	リストからポート グループ名を選択します。
[アダプタのタイプ (Adapter Type) ] ドロップダウン リスト (表示専用)	アダプタ タイプを選択します。 この項目が選択可能であるのは、ネットワークポリシーでこの NIC エイリアスに対して [テンプレートからのアダプタのタイプのコピー (Copy Adapter Type from Template) ] が選択されていない場合に限られます。
[DHCP] チェック ボックス	このフィールドをオンにすると、IP は DHCP を使用して割り当てられます。
[静的 IP プール (Static IP Pool) ] フィールド	固定 IP アドレス プール。
[ネットワークマスク (Network Mask) ] フィールド	ネットワーク マスク。

[名前 (Name) ]	説明
[ゲートウェイ IP アドレス (Gateway IP Address) ] フィールド	ゲートウェイ IP アドレス。

(注) [NIC エイリアス (NIC Alias) ]、[ポートグループ名 (Port Group Name) ]、[アダプタのタイプ (Adapter Type) ]、[DHCP]、および[スタティック IP プール (Static IP Pool) ]の各選択項目は、VM (VM の VDC) に関連付けられたネットワーク ポリシーの設定によって異なります。複数の NIC ネットワーク ポリシーの詳細については、[ポリシーの管理](#)、(209 ページ) を参照してください。

このアクションを実行するために VM の電源がオフになります。アクションが完了すると、VM の電源がアップになります。

**ステップ 10** [送信 (Submit) ] をクリックします。

## vNIC の置換



(注) vNIC VM を置き換えるときには、[ポートグループ名 (Port Group Name) ] の値と [アダプタのタイプ (Adapter Type) ] のパラメータが変更されます。VM の IP アドレスは、選択されたポートグループで DHCP が有効な場合のみ変更されます。ただし、IP アドレスがスタティックプールポリシーから供給されている場合は変更されません。

### 手順

- ステップ 1** [仮想 (Virtual) ] > [コンピューティング (Compute) ] を選択します。
- ステップ 2** [コンピューティング (Compute) ] ページでクラウドを選択します。
- ステップ 3** [コンピューティング (Compute) ] ページで [VM (VMs) ] をクリックします。
- ステップ 4** vNIC を置換する VM を含む行をクリックします。
- ステップ 5** [その他のアクション (More Actions) ] ドロップダウンリストから [vNIC の追加 (Add vNICs) ] を選択します。
- ステップ 6** [VM vNIC の追加 (Add VM vNICs) ] 画面の [操作 (Operation) ] ドロップダウンリストから [置換 (Replace) ] を選択します。  
ネットワーク ポリシーに設定された vNIC の追加制限を超える場合、この置き換え作業は許可されません。
- ステップ 7** vNIC を選択します。
- ステップ 8** [vNIC の追加 (Add vNIC) ] 画面で、次のフィールドに値を入力します。

名前	説明
[NIC エイリアス (NIC Alias) ] ドロップダウンリスト	NIC エイリアスを選択します。 ネットワーク ポリシーに設定された vNIC のみが表示されます。
[ポートグループ名 (Port Group Name) ] ドロップダウンリスト	リストからポート グループ名を選択します。
[アダプタのタイプ (Adapter Type) ] ドロップダウンリスト (表示専用)	アダプタ タイプを選択します。 これを選択できるのは、ネットワーク ポリシーで [テンプレートからのアダプタのタイプのコピー (Copy Adapter Type from Template) ] が選択されていないNIC エイリアスを選択した場合のみです。
[DHCP] チェック ボックス	DHCP を使用して割り当てられた IP が必要な場合は、このチェック ボックスをオンにします。
[静的IPプール (Static IP Pool) ] フィールド	固定 IP アドレス プール。
[ネットワークマスク (Network Mask) ] フィールド	ネットワーク マスク。
[ゲートウェイ IP アドレス (Gateway IP Address) ] フィールド	ゲートウェイ IP アドレス。

**ステップ 9** [送信 (Submit) ] をクリックします。

(注) このアクションを実行するために VM の電源がオフになります。アクションが完了すると、VM の電源が投入されます。[置換 (Replace) ] タスクは、VM から既存の vNIC をすべて削除し、追加された vNIC に置き換えます。

[NIC エイリアス (NIC Alias) ]、[ポートグループ名 (Port Group Name) ]、[アダプタのタイプ (Adapter Type) ]、[DHCP]、および [スタティック IP プール (Static IP Pool) ] の各選択項目は、VM (VM の VDC) に関連付けられたネットワーク ポリシーの設定によって異なります。複数の NIC ネットワーク ポリシーの詳細については、[ポリシーの管理](#)、(209 ページ) を参照してください。

## VM クライアントの起動

### 手順

- 
- ステップ 1** [仮想 (Virtual) ] > [コンピューティング (Compute) ] を選択します。
- ステップ 2** [コンピューティング (Compute) ] ページでクラウドを選択します。
- ステップ 3** [コンピューティング (Compute) ] ページで [VM (VMs) ] をクリックします。
- ステップ 4** VM クライアントを起動する VM を含む行をクリックします。
- ステップ 5** [VM クライアントの起動 (Launch VM Client) ] をクリックします。
- ステップ 6** [クライアントの起動 (Launch Client) ] 画面で、VM クライアントのアクセス方式を選択します。Cisco UCS Director を使用して VM をプロビジョニングする場合、このダイアログボックスには、VM のプロビジョニングに使用され、カタログ オプションで有効に定義された、アクセススキームが表示されます。
- 検出された VM では、[リモートデスクトップ (Remote Desktop) ]、[ウェブ アクセス (Web Access) ]、[VMRC コンソール (ブラウザプラグイン) (VMRC Console (Browser Plug-in) ) ]、[VMRC コンソール (標準プラグイン) (VMRC Console (Standalone Plug-in) ) ] のオプションが表示されます。
- ステップ 7** [続行 (Proceed) ] をクリックします。
- 

## VM の VNC コンソールの有効化

### 手順

- 
- ステップ 1** [仮想 (Virtual) ] > [コンピューティング (Compute) ] を選択します。
- ステップ 2** [コンピューティング (Compute) ] ページでクラウドを選択します。
- ステップ 3** [コンピューティング (Compute) ] ページで [VM (VMs) ] をクリックします。
- ステップ 4** VNC を設定する VM を含む行をクリックします。
- ステップ 5** [その他のアクション (More Actions) ] ドロップダウンリストから [VNC の設定 (Configure VNC) ] を選択します。
- ステップ 6** [VNC の設定 (Configure VNC) ] 画面で、ドロップダウン リストからキーボード マッピングの言語を選択します。
- フランス語 (スイス)
  - 日本語
  - 英語 (米国)

- イタリア語
- アイスランド語
- 英語（英国）
- フランス語（ベルギー）
- ドイツ語（スイス）
- ドイツ語
- スペイン語
- ノルウェー語
- フィンランド語
- ポーランド語

**ステップ 7** [送信 (Submit) ] をクリックします。

**ステップ 8** [OK] をクリックします。

システムは、要求が送信されると、VM への VNC コンソール アクセスを自動的に設定します。

---

## VM の VNC コンソールの自動設定解除

VMware の VNC ポート タスクのモニタリングを有効にして VNC コンソールの自動設定を解除することができます。このタスクは 30 分ごとに実行して、デフォルトの 60 分を超えて開いている VNC ポートの設定を解除します。ポート上の VNC の設定が解除されるため、それらのポートは今後の割り当てのために解放されます。

タスクを実行する頻度を変更するには、[システムタスクの管理 (Manage System Task) ] をクリックし、ドロップダウンリストから期間を選択します。

/opt/infra/inframgr/vmware.properties ファイルの unConfigureVNCPortWaitTime パラメータを編集すると、ポートの待機時間を変更できます。

## 手順

- 
- ステップ 1 [管理 (Administration) ] > [システム (System) ] を選択します。
  - ステップ 2 [システム (System) ] ページで [システム タスク (System Tasks) ] をクリックします。
  - ステップ 3 [VMware 標準タスク (VMware Standard Tasks) ] 矢印をクリックし、タスクを展開します。
  - ステップ 4 [VMware の VNC ポート タスクのモニタリング (VMware Monitor VNC Port Task) ] システム タスクを含む行をクリックします。
  - ステップ 5 [タスクの管理 (Manage Task) ] をクリックします。
  - ステップ 6 [タスク実行 (Task Execution) ] ドロップダウンリストから [有効化 (Enable) ] を選択します。
  - ステップ 7 [送信 (Submit) ] をクリックします。
- 

## VNC クライアントを使用した VM コンソールへのアクセス

VNC クライアントは、VM コンソールにアクセスできる Ajax ベースのアプリケーションです。コンソールウィンドウは、あらゆるスタンドアロン Web ブラウザを使用して起動できます。専用のブラウザプラグインを必要とせず、包括的な VM コントロール機能を備えています。ただし、VNC コンソールを起動するには、ブラウザのポップアップブロッカーを無効にする必要があります。

### はじめる前に

- VM コンソールへの VNC アクセス用に ESX/ESXi サーバを設定する必要があります。詳細については、[VM コンソールへの VNC アクセスのための ESX/ESXi サーバの設定](#)、(462 ページ) を参照してください。
- Cisco UCS Director では、VNC クライアントを使用した、VM コンソール アクセスの自動設定を可能にします。設定するには、Cisco UCS Director アプライアンスに対して ESX/ESXi サーバのポート 5901 ~ 5964 を開く必要があります。
- Cisco UCS Director 管理シェルを使用して、自己署名証明書または CA 証明書をインポートします。証明書のインポートによって、VNC クライアントを使用した VM コンソールに安全にアクセスできるようになります。証明書のインポートの詳細については、『[Cisco UCS Director Shell Guide](#)』を参照してください。
- ブラウザのポップアップブロッカーを無効にします。



---

(注) ESX 4.x、ESXi 5.x、および ESXi 6.0 バージョンの VMware では、VNC クライアントを使用した VM コンソール アクセスの設定が可能です。

---

## 手順

- 
- ステップ 1 [仮想 (Virtual) ] > [コンピューティング (Compute) ] を選択します。
  - ステップ 2 [コンピューティング (Compute) ] ページでクラウドを選択します。
  - ステップ 3 [コンピューティング (Compute) ] ページで [VM (VMs) ] をクリックします。
  - ステップ 4 VNC コンソールを起動する VM を含む行をクリックします。
  - ステップ 5 [VNC コンソールの起動 (Launch VNC Console) ] をクリックします。
  - ステップ 6 [VNC コンソールの起動 (Launch VNC Console) ] 画面で、キーボードマッピングレイアウトを選択し、[送信 (Submit) ] をクリックします。
- ヒント 画面が空白の場合は、黒い領域をクリックし、Enter キーを押します。
- 

## VM コンソールへの VNC アクセスのための ESX/ESXi サーバの設定

VM コンソールへの VNC アクセスの設定は、バージョン ESX 4.x および ESXi 5.x の VMware でサポートされています。

## 手順

- 
- ステップ 1 ESXi5.x ホストにログインします。
  - ステップ 2 シェルを使用して、ファイアウォール設定を無効にします。
  - ステップ 3 次の XML 設定をコピーして vnc.xml ファイルに貼り付けます。

```
# cat /etc/vmware/firewall/vnc.xml
<!-- Firewall configuration information for VNC -->
<ConfigRoot>
  <service>
    <id>VNC</id>
    <rule id='0000'>
      <direction>inbound</direction>
      <protocol>tcp</protocol>
      <porttype>dst</porttype>
      <port>
        <begin>5901</begin>
        <end>5964</end>
      </port>
    </rule>
    <rule id='0001'>
      <direction>outbound</direction>
      <protocol>tcp</protocol>
      <porttype>dst</porttype>
      <port>
        <begin>0</begin>
```

```

        <end>65535</end>
    </port>
</rule>
<enabled>>true</enabled>
<required>>false</required>
</service>
</ConfigRoot>

```

(注) この vnc.xml ファイルは、VNC がホストに対して有効になっている場合に使用できません。このファイルを使用できない場合は、vnc.xml ファイルを作成し、この手順に記載されている設定行を追加してファイルを保存します。

**ステップ 4** ファイアウォールルールを更新し、新しい設定が正確にロードされたことを確認します。

```

~ # esxcli network firewall refresh
~ # esxcli network firewall ruleset list | grep VNC
VNC true #*****

```

**ステップ 5** ESXi クラスタのすべての ESXi ホストでこの手順を繰り返します。

## VM の割り当て

ユーザグループにはリソースまたは VM を割り当てることができます。リソースまたは VM が VMWare クラウドにある場合は、それを Cisco UCS Director 内の特定のエンドユーザに割り当てることもできます。

### 手順

- ステップ 1** [仮想 (Virtual) ] > [コンピューティング (Compute) ] を選択します。
- ステップ 2** [コンピューティング (Compute) ] ページでクラウドを選択します。
- ステップ 3** [コンピューティング (Compute) ] ページで [VM (VMs) ] をクリックします。
- ステップ 4** 割り当てる VM を含む行を選択します。
- ステップ 5** [その他のアクション (More Actions) ] ドロップダウンリストから [VM の割り当て (Assign VM) ] を選択します。
- ステップ 6** [VM の割り当て (Assign VM) ] 画面で、次のフィールドに値を入力します。

名前	説明
[VM 名 (VM Name) ] フィールド	VM の名前。
[VM所有者 (VM Ownership) ] セクション	
[顧客組織 (Customer Organizations) ] オプション ボタン	VM を特定のグループに割り当てるには、このオプション ボタンをオンにします。

名前	説明
[顧客組織 (Customer Organizations) ] フィールド	<p>[選択 (Select) ] をクリックして、VM を割り当てる特定のユーザ グループを選択します。</p> <p>このフィールドが表示されるのは、[顧客組織 (Customer Organizations) ] オプション ボタンをオンにした場合のみです。</p> <p>(注) 有効な vDC があるグループだけが表示されます。</p>
[ユーザ (User) ] オプション ボタン	VM を特定のユーザに割り当てるには、このオプション ボタンをオンにします。
[ユーザ (User) ] フィールド	[選択 (Select) ] をクリックして、VM を割り当てるユーザを選択します。このリストには、ユーザへのリソース割り当てを許可するグループのユーザが読み込まれます。
[VMアクセス共有 (VM Access Sharing) ] セクション	
[アクセス権限のあるユーザ (Users with Access Privilege) ] フィールド	<p>[選択 (Select) ] をクリックして、VM 情報へのアクセスのみを許可するユーザを選択します。</p> <p>選択したユーザには、VM へのアクセスのみが許可されます。管理操作を実行することはできません。</p> <p>このオプションを使用できるのは、[ユーザ (User) ] オプション ボタンをオンにして、この VM に特定のユーザを選択した場合のみです。</p>
[管理権限のあるユーザ (Users with Manage Privilege) ] フィールド	<p>[選択 (Select) ] をクリックして、VM の管理のみを許可するユーザを選択します。</p> <p>選択したユーザは、VM の管理タスクを実行できます。</p> <p>このオプションを使用できるのは、[ユーザ (User) ] オプション ボタンをオンにして、この VM に特定のユーザを選択した場合のみです。</p>
[割り当ての一般情報 (General Assignment Information) ] セクション	
[VDC] ドロップダウン リスト	VDC を選択します。
[カテゴリ (Category) ] ドロップダウン リスト	VM のカテゴリを選択します。

名前	説明
[VMユーザラベル (VMUserLabel) ]フィールド	VM ラベル (必要な場合)。
[プロビジョニング時間の設定 (Set Provision Time) ]チェック ボックス	VM のプロビジョニング時間を設定するには、このチェック ボックスをオンにします。
[プロビジョニング日時 (Provision Date/Time) ]カレンダー、ドロップダウンリスト、オプション ボタン	VM プロビジョニングを実行する日時。日付のカレンダー、時刻 (時間および分) のドロップダウンリスト、AM と PM のオプションボタンがあります。  このオプションは、[プロビジョニング時間の設定 (Set Provision Time) ]をオンにした場合に表示されます。
[コメント (Comments) ]フィールド	タスクについてのコメントを必要に応じて追加します。

**ステップ 7** [割り当て (Assign) ]をクリックします。

## VM クレデンシャル

VM に対する Web またはリモート アクセスのログインクレデンシャルは、管理者が VM がプロビジョニングされるカタログに必要な権限を提供した場合にだけ表示されます。

### VM クレデンシャルの表示

はじめる前に

このタスクを完了するには、アプライアンスにログインする必要があります。

### 手順

- 
- ステップ 1 [仮想 (Virtual) ] > [コンピューティング (Compute) ] を選択します。
  - ステップ 2 [コンピューティング (Compute) ] ページでクラウドを選択します。
  - ステップ 3 [コンピューティング (Compute) ] ページで [VM (VMs) ] をクリックします。
  - ステップ 4 クレデンシャルを表示する VM を含む行をクリックします。
  - ステップ 5 [その他のアクション (More Actions) ] ドロップダウンリストから [VM クレデンシャルにアクセス (Access VM Credentials) ] を選択します。
- 

## VM のインベントリ収集の開始

### 手順

- 
- ステップ 1 [仮想 (Virtual) ] > [コンピューティング (Compute) ] を選択します。
  - ステップ 2 [コンピューティング (Compute) ] ページでクラウドを選択します。
  - ステップ 3 [コンピューティング (Compute) ] ページで [VM (VMs) ] をクリックします。
  - ステップ 4 インベントリ収集を要求する VM を含む行をクリックします。
  - ステップ 5 [その他のアクション (More Actions) ] ドロップダウンリストから [VM のインベントリ収集のリクエスト (Inventory Collection Request for VM) ] を選択します。
  - ステップ 6 [送信 (Submit) ] をクリックします。
- 

## VNC 接続のテスト

VNC 接続のテストは、トラブルシューティングのために使用します。成功した VNC 接続のテストでは、ホスト ノードの IP アドレスと VNC ポート番号が表示されます。例：「VNC connectivity intact at 172.16.0.1:5921 (VNC は 172.29.110.75:5921 で接続されています)」。

ただし、接続が失敗すると、エラーメッセージが表示されます。例：「VM is not configured for VNC yet. (VM がまだ VNC に設定されていません)」。

## 手順

- ステップ1 [仮想 (Virtual) ] > [コンピューティング (Compute) ] を選択します。
- ステップ2 [コンピューティング (Compute) ] ページでクラウドを選択します。
- ステップ3 [コンピューティング (Compute) ] ページで [VM (VMs) ] をクリックします。
- ステップ4 VNC の接続をテストする VM を含む行をクリックします。
- ステップ5 [その他のアクション (More Actions) ] ドロップダウン リストから [VNC のテスト (Test VNC) ] を選択します。
- ステップ6 [VNC接続のテスト (Test VNC Connectivity) ] 画面で [送信 (Submit) ] をクリックします。
- ステップ7 結果を使用して、VNC 接続をトラブルシューティングします。
- (注) 接続に失敗した場合は、VM の IP アドレスに VNC ポートが割り当てられていません。詳細については、[VM の VNC コンソールの有効化、\(459 ページ\)](#) を参照してください。

## VM の複製

VMを複製することで、既存のVMで定義されているパラメータを使用してシステムに新しいVMを作成できます。既存のVMのいくつかのパラメータのみを変更する場合に、複製オプションはVMをより迅速に作成するのに役立ちます。複製したVMに指定する名前はシステムポリシーによって定義されます。

## 手順

- ステップ1 [仮想 (Virtual) ] > [コンピューティング (Compute) ] を選択します。
- ステップ2 [コンピューティング (Compute) ] ページでクラウドを選択します。
- ステップ3 [コンピューティング (Compute) ] ページで [VM (VMs) ] をクリックします。
- ステップ4 複製する VM を含む行を選択します。
- ステップ5 [その他のアクション (More Actions) ] ドロップダウン リストから [複製 (Clone) ] を選択します。
- ステップ6 [VMの複製 (Clone VM) ] の [グループの選択 (Select Group) ] 画面で、次のフィールドに値を入力します。

[名前 (Name) ]	説明
[グループの選択 (Select Group) ] リスト	リストを展開して複製する定義済みグループを選択し、[選択 (Select) ] をクリックします。デフォルトでは [デフォルト グループ (Default Group) ] が選択されています。

[名前 (Name) ]	説明
[ユーザに割り当て (Assign to User) ] チェックボックス	<p>特定のユーザに VM を割り当てる場合にオンにします。</p> <p>このオプションは、選択したユーザグループに適用されるグループ共有ポリシーについて、ユーザに対するリソースの割り当てが有効である場合のみ表示されます。グループ共有ポリシーの作成の詳細については、<a href="#">グループ共有ポリシーの作成, (224 ページ)</a> を参照してください。</p>
[ユーザ (User) ] ドロップダウン リスト	<p>この VM を割り当てるユーザを選択します。</p> <p>(注) 現在、特定のユーザに割り当てることのできるのは、VMware クラウド内の VM だけです。</p>
[リンク済み複製の使用 (Use Linked Clone) ] チェック ボックス	<p>リンクされた複製から VM を複製する場合に、このチェック ボックスをオンにします。</p> <p>(注) リンクされた複製とは、親 VM と仮想ディスクを共有する仮想マシンのコピーです。リンクされた複製は、親 VM のスナップショットから作成されます。リンクされた複製は親 VM にアクセスできる必要があります。親 VM にアクセスできない場合、リンクされた複製は無効化されます。</p> <p>リンクされた複製かフル複製かは、ストレージポリシーで選択したリンクされた複製によって異なります。</p>
[スナップショットタイプ (Select Snapshot Type) ] ドロップダウン リスト	<p>リンクされた複製に関連付けられているスナップショットのタイプを選択します。</p> <p>次のいずれかを選択できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• [既存のスナップショット (Existing Snapshot) ]</li> <li>• [新しいスナップショット (New Snapshot) ]</li> </ul>

[名前 (Name) ]	説明
[既存のスナップショットの選択 (Select Existing Snapshot) ] リスト	リストを展開して既存のスナップショットを選択し、[選択 (Select) ] をクリックします。  (注) このフィールドは、[既存のスナップショット (Existing Snapshot) ] を選択した場合にのみ表示されます。
[スナップショット名 (Snapshot Name) ] フィールド	新しいスナップショットの名前を入力します。  (注) このフィールドは、[新しいスナップショット (New Snapshot) ] を選択した場合にのみ表示されます。
[ReadyClone の使用 (Use ReadyClone) ] チェックボックス	VM が ReadyClones を使用して導入されるようにする場合に、このチェックボックスをオンにします。  このボックスがオンの場合、[リンク済み複製の使用 (Use Linked Clone) ] チェックボックスは非表示になります。

**ステップ 7** [次へ (Next) ] をクリックします。

**ステップ 8** [VMの複製 (Clone VM) ] の [カスタマイズのオプション (Customization Options) ] 画面で、次のフィールドに値を入力します。

[名前 (Name) ]	説明
[カテゴリ (Category) ] リスト	リストを展開してVMに必要なカテゴリを選択し、[選択 (Select) ] をクリックします。
[クレデンシャル オプション (Credential Options) ] ドロップダウン リスト	ユーザに対し、VM アクセス クレデンシャル (共有) の取得を許可するか、または禁止するかを選択します。次のオプションを使用できます。  <ul style="list-style-type: none"> <li>• 共有しない</li> <li>• パスワードリセット後に共有する</li> <li>• テンプレート クレデンシャルを共有する</li> </ul> 管理者が Cisco UCS Director 外部の別のユーザにクレデンシャルをプライベートに送信する場合は、[共有しないでください (Do not share) ] オプションを選択します。

[名前 (Name) ]	説明
[ユーザ ID (User ID) ] フィールド	<p>ユーザ ID を入力します。</p> <p>このフィールドは、[クレデンシヤル オプション (Credential Options) ] で共有されているときのみ使用できます。</p>
[パスワード (Password) ] フィールド	<p>ユーザ パスワードを入力します。</p> <p>このフィールドは、[クレデンシヤル オプション (Credential Options) ] で共有されているときのみ使用できます。</p>
[単一データストアのすべてのディスクをプロビジョニングします (Provision all disks in a single datastore) ] チェック ボックス	<p>以前に設定した単一データストアに含まれているすべての VM ディスクをプロビジョニングする場合に、このチェックボックスをオンにします。</p>
[導入アセスメントの実行 (Perform deployment assessment) ] チェック ボックス	<p>VM を複製する前に予算配賦、リソース、リソース制限、およびリソースの可用性を評価する場合に、このチェックボックスをオンにします。このチェックボックスをオンにすると、アセスメントの概要が [導入アセスメント (Deployment Assessment) ] 画面に表示されます。</p> <p>(注) このオプションは VMware クラウド用にのみ表示されます。</p>
[自動ゲストカスタマイズの有効化 (Automatic Guest Customization Enable) ] チェック ボックス	<p>このボックスはオンになっています。</p>
[プロビジョニング後のカスタム アクションの有効化 (Post Provisioning Custom Actions Enable) ] チェック ボックス	<p>VM のプロビジョニング後にオーケストレーションワークフローを有効にする場合に、このボックスをオンにします。</p> <p>プロビジョニングの開始時に、選択されたワークフローが開始されます。</p>

[名前 (Name) ]	説明
[ワークフロー (Workflow) ]ドロップダウンリスト	<p>プロビジョニング用に定義されたワークフローを選択します。</p> <p>(注) このフィールドは、[プロビジョニング後のカスタムアクションの有効化 (Post Provisioning Custom Actions Enable) ]がオンの場合に表示されません。</p> <p>ワークフロー入力値が[クローンの複製：カスタムワークフロー (Clone VM: Custom Workflow) ]画面に入力されます。</p>
[VM アプリケーションの請求間隔 (VM App Charge Frequency) ]ドロップダウンリスト	[毎時 (Hourly) ]または[毎月 (Monthly) ]を選択します。
[アクティブな VM アプリケーションコスト (Active VM Application Cost) ]フィールド	テンプレートに含まれているアプリケーションコストを入力します。
[非アクティブな VM アプリケーションコスト (Inactive VM Application Cost) ]フィールド	非アクティブな状態のVMのこのカタログにかかる毎時または毎月のコストを入力します。

**ステップ 9** [次へ (Next) ]をクリックします。

**ステップ 10** [VM の複製 (Clone VM) ]の [導入設定 (Deployment Configuration) ]画面で、次のフィールドに値を入力します。

[名前 (Name) ]	説明
[VDC の選択 (Select VDC) ]ドロップダウンリスト	VM に設定するポリシーを含む VDC を選択します。
[コメント (Comment) ]フィールド	任意で、VDC の説明を入力します。
[プロビジョニング (Provision) ]ドロップダウンリスト	<p>VDC を今すぐプロビジョニングするには [今すぐ (Now) ]を選択し、VDC を後でプロビジョニングするには [あとで (Later) ]を選択します。</p> <p>[あとで (Later) ]を選択すると、日付と時刻を指定するためのフィールドが表示されます。</p>
[リース時間 (Lease Time) ]チェック ボックス	リースの有効期間を設定する場合に、このボックスをオンにします。

[名前 (Name) ]	説明
[日数 (Days) ] フィールド	リース期間の日数を入力します。 (注) このフィールドは、[リース時間 (Lease Time) ] がオンになっている場合にのみ表示されます。
[時間 (Hours) ] フィールド	リース時間の時間数を入力します。 (注) このフィールドは、[リース時間 (Lease Time) ] がオンになっている場合にのみ表示されます。

ステップ 11 [次へ (Next) ] をクリックします。

ステップ 12 [VM の複製 (Clone VM) ] の [カスタム仕様 (Custom Specification) ] 画面で、次のフィールドに値を入力します。

[名前 (Name) ]	説明
[CPU コア (CPU Cores) ] ドロップダウン リスト	プロビジョニングされる VM の CPU コアを選択します。
[ソケットあたりのコア数 (Cores Per Socket) ] ドロップダウン リスト	プロビジョニングされる VM のソケットあたりのコア数を選択します。ソケットあたりの使用可能なコア数は、VM コンピューティングポリシーで指定されます。
[メモリ (Memory) ] ドロップダウン リスト	プロビジョニングされる VM のメモリ量を選択します。

ステップ 13 [次へ (Next) ] をクリックします。

ステップ 14 [VM の複製 : (Clone VM) ] の [カスタム ワークフロー (Custom Workflow) ] 画面で、該当する場合はワークフローの入力値を入力します。

ステップ 15 [次へ (Next) ] をクリックします。

ステップ 16 [VM の複製 (Clone VM) ] の [データストアの選択 (Select Datastores) ] 画面で、[VM ディスク (VM Disks) ] を展開し、適切なデータストアを適切なディスクに割り当てます。

ステップ 17 データストアを割り当てるディスクを含んだ行をクリックします。

ステップ 18 [下記のテーブルで選択されたエントリを編集 (Edit selected entry in the table below) ] をクリックします。

ステップ 19 [VM ディスク エントリの編集 (Edit VM Disks Entry) ] 画面で、次のフィールドに値を入力します。

[名前 (Name) ]	説明
[ディスク名 (Disk Name) ]	データストアを割り当てる VM ディスクの名前。
[ディスクの種類 (Disk Type) ]	VM ディスクの種類を選択します。例 : [システム (System)]
[選択したデータストア (Selected Datastores) ]	該当する VM ディスク用として目的のデータストアを選択します。表示されるデータストア選択項目は、VDC に関連付けられているデータストレージポリシーによるものです。
[リサイズしない (Do not resize) ] チェック ボックス	VM を複製する前にディスクサイズの変更が不要な場合に、このボックスをオンにします。 このチェック ボックスをオンにすると、[サイズ (Size) ] ドロップダウンリストが非表示になります。
[サイズ (Size) ] ドロップダウン リスト	VM 複製中の新しいディスクサイズを選択します。 (注) ストレージポリシー内の [ディスクのサイズ変更を許可 (Allow Resizing of Disk) ] を有効にした場合にのみ、ディスクのサイズを編集できます。

**ステップ 20** [送信 (Submit) ] をクリックします。

**ステップ 21** [次へ (Next) ] をクリックします。

**ステップ 22** [VM の複製 (Clone VM) ] の [VM ネットワークの選択 (Select VM Networks) ] 画面で、[VM ネットワーク (VM Networks) ] 鉛筆アイコンをクリックして VM ネットワークを編集します。

(注) ネットワークポリシーの [エンドユーザにオプションの NIC の選択を許可 (Allow end user to select optional NICs) ] チェック ボックスがオフになっている場合、[VM の複製 : VM ネットワークの選択 (Clone VM: Select VM Networks) ] 画面は空です。

**ステップ 23** [選択 (Select) ] 画面で、VM に関連付けるクラウドを選択します。

**ステップ 24** [送信 (Submit) ] をクリックします。

**ステップ 25** [次へ (Next) ] をクリックします。

**ステップ 26** [VM の複製 (Clone VM) ] の [カスタマイズのオプション (Customization Options) ] 画面で [導入アセスメントの実行 (Perform deployment assessment) ] をオンにした場合は、[導入アセスメント (Deployment Assessment) ] 画面に表示されるアセスメントのレポートを確認します。  
このアセスメント レポートでエラーが特定された場合、前の画面に戻り、要求を送信する前に、エラーを修正します。アセスメント レポートにエラーが表示されなかった場合は続行できます。

- ステップ 27 [次へ (Next) ] をクリックします。
- ステップ 28 [VM の複製 (Clone VM) ] の [概要 (Summary) ] 画面に表示された複製済み VM の情報を確認します。
- ステップ 29 [送信 (Submit) ] をクリックします。  
複製 VM の新しい名前は、VDC のポリシーから取得されます。
- 

## VM の VDC への移動

VM を VDC に移動すると、VDC システム ポリシーのルールが VM で採用されます。既存の VM は、VDC に移動されたものに置き換えられます。



(注) 古い VM は削除されます。新しい VM 名が、システム ポリシーに従って割り当てられます。

---

### はじめる前に

このタスクを完了するには、アプライアンスにログインする必要があります。

### 手順

- 
- ステップ 1 メニューバーで、[仮想 (Virtual) ] > [コンピューティング (Compute) ] の順に選択します。
- ステップ 2 [コンピューティング (Compute) ] ページでクラウドを選択します。
- ステップ 3 [コンピューティング (Compute) ] ページで [VM (VMs) ] をクリックします。
- ステップ 4 VDC の移動先となる VM を含む行を選択します。
- ステップ 5 [その他のアクション (More Actions) ] ドロップダウンリストから、[VM を VDC に移動 (Move VM to VDC) ] を選択します。
- ステップ 6 [VM を VDC に移動 (Move VM to VDC) ] 画面では、VDC を複製するときと同じ方法で、移動する VM を変更できます。  
[VM の複製](#)、[\(467 ページ\)](#) を参照してください。
- 

## VM の再同期

### はじめる前に

このタスクを完了するには、アプライアンスにログインする必要があります。

## 手順

- 
- ステップ 1 [仮想 (Virtual) ] > [コンピューティング (Compute) ] を選択します。
  - ステップ 2 [コンピューティング (Compute) ] ページで [クラウド (Clouds) ] をクリックします。
  - ステップ 3 [コンピューティング (Compute) ] ページで [VM (VMs) ] をクリックします。
  - ステップ 4 再同期する VM を含む行を選択します。
  - ステップ 5 [その他のアクション (More Actions) ] ドロップダウン リストから [VM の再同期 (Resync VM) ] を選択します。
  - ステップ 6 [VM の再同期 (Resync VM) ] 画面で、[最大待機時間 (Max Wait Time) ] ドロップダウン リストから 0 ~ 30 の分単位の数値を選択します。
  - ステップ 7 [送信 (Submit) ] をクリックします。
- 

## VM へのタグの適用

VM でタギングがサポートされたため、Cisco UCS Director でタグを管理し、特定の VM を分類してファイアウォールとして、またはロード バランサ VM として特定できます。

## 手順

- 
- ステップ 1 [仮想 (Virtual) ] > [コンピューティング (Compute) ] を選択します。
  - ステップ 2 [コンピューティング (Compute) ] ページでクラウドを選択します。
  - ステップ 3 [コンピューティング (Compute) ] ページで [VM (VMs) ] をクリックします。
  - ステップ 4 タグを追加する VM を含む行をクリックします。
  - ステップ 5 [その他のアクション (More Actions) ] ドロップダウン リストから [タグの追加 (Add Tags) ] を選択します。
  - ステップ 6 [タグの追加 (Add Tags) ] 画面で、次のフィールドに値を入力します。

フィールド	説明
[タグ名 (Tag Name) ] ドロップダウン リスト	VM に適用するタグを選択します。 このドロップダウン リストには、以前作成したすべてのタグが表示されます。このリストからタグを選択するか、新しいタグを作成できます。タグの作成方法の詳細については、 <a href="#">タグの作成</a> 、(168 ページ) を参照してください。
[タグ値 (Tag Value) ] ドロップダウン リスト	タグの値を選択します。

ステップ7 [送信 (Submit) ] をクリックします。

---

#### 次の作業

VM のタグベース コスト モデルを作成できます。詳細については、[タグベース コスト モデルの作成](#)、(405 ページ) を参照してください。

## ISO イメージを CD/DVD ドライブとしてマウント

ISO はディスク イメージです。物理ドライブを使用せずに、ISO イメージを VM にマウントできます。仮想マシンにマウントすると、物理ディスクを使用せずに仮想 CD/DVD ドライブからファイルを開いたり、抽出したり、使用したりすることができます。

#### 手順

---

- ステップ1 [仮想 (Virtual) ] > [コンピューティング (Compute) ] を選択します。
- ステップ2 [コンピューティング (Compute) ] ページで [VM (VMs) ] をクリックします。
- ステップ3 ISO イメージをマウントする VM を含む行をクリックします。
- ステップ4 [その他のアクション (More Actions) ] ドロップダウンリストから、[ISO イメージを CD/DVD ドライブとしてマウント (ISO イメージを CD/DVD ドライブとしてマウント) ] を選択します。
- ステップ5 [CD/DVD ドライブ マウント ISO (CD/DVD Drive Mount ISO) ] 画面で、使用可能なイメージのリストから ISO イメージを選択します。
- ステップ6 次のいずれかのオプションを選択します。
- [新しい CD/DVD ドライブの作成 (Create New CD/DVD Drive) ] を選択し、[VM の電源オフ (Power OFF VM) ] をオンにします。
  - [既存の CD/DVD ドライブの使用 (Use Existing CD/DVD Drive) ] を選択し、[DVD/DVD ドライブの選択 (Select DVD/DVD Drive) ] ドロップダウン リストからドライブを選択します。
- ステップ7 [送信 (Submit) ] をクリックします。
- 新規または既存の CD/DVD ドライブが VM にマップされます。VM にログインし、マップされたドライブを表示できます。
- 

## CD/DVD ドライブとしての ISO イメージのマウント解除

仮想マシン上の CD/DVD ドライブにすでに接続されている ISO イメージのマウントを解除できません。

## 手順

---

- ステップ 1 [仮想 (Virtual) ] > [コンピューティング (Compute) ] を選択します。
  - ステップ 2 [コンピューティング (Compute) ] ページで [VM (VMs) ] をクリックします。
  - ステップ 3 ISO イメージのマウントを解除する VM を含む行をクリックします。
  - ステップ 4 [その他のアクション (More Actions) ] ドロップダウン リストから、[CD/DVD ドライブとしての ISO イメージのマウント解除 (UnMount ISO Image As CD/DVD Drive) ] を選択します。
  - ステップ 5 [CD/DVD ドライブのマウント解除 ISO (CD/DVD Drive UnMount ISO) ] 画面で、マウント解除する CD/DVD を [CD/DVD ドライブの選択 (Select CD/DVD Drive) ] ドロップダウン リストから選択します。
  - ステップ 6 [送信 (Submit) ] をクリックします。
-





# 第 18 章

## CloudSense 分析の管理

---

この章は、次の項で構成されています。

- [CloudSense 分析, 479 ページ](#)
- [レポートの生成, 480 ページ](#)
- [アセスメントの生成, 482 ページ](#)
- [カスタム レポート テンプレートのレポート ビルダー, 483 ページ](#)
- [レポート ビルダ テンプレートの作成, 483 ページ](#)
- [テンプレートからのレポートの生成, 485 ページ](#)
- [テンプレートから生成されたレポートの表示, 486 ページ](#)
- [テンプレートから生成されたレポートの電子メールによる送信, 487 ページ](#)

## CloudSense 分析

Cisco UCS Director の Cloudsense 分析 は、インフラストラクチャ リソースの使用率、IT インフラストラクチャ スタック全体にわたる重要なパフォーマンス メトリック、およびリアルタイムのキャパシティを可視化します。CloudSense は、仮想インフラストラクチャおよびクラウドインフラストラクチャのキャパシティのトレンド、予測、レポート、プランニングの性能を大きく改善します。

CloudSense を使用して次のレポートを生成できます。

- 顧客の課金レポート
- EMC のストレージ インベントリ レポート
- NetApp のストレージ インベントリ レポート
- グループごとの NetApp ストレージ節約量
- NetApp ストレージ節約量レポート

- ネットワークのインパクト アセスメント レポート
- 仮想コンピューティング インフラストラクチャの組織使用状況
- PNSC アカウントの要約レポート
- グループの物理インフラストラクチャのインベントリ レポート
- ストレージの重複除外状況レポート
- グループのストレージ インベントリ レポート
- シンプロビジョニングされた領域レポート
- UCS データセンターのインベントリ レポート
- グループごとの VM アクティビティ レポート
- VMware ホストのパフォーマンス サマリー
- 仮想インフラストラクチャおよびアセット レポート



(注) これは、システムで使用可能なレポートの完全なリストです。ただし、ユーザのシステムで利用可能なレポート数はユーザ ロールによって異なります。デフォルトでは、[CloudSense] オプションは MSP 管理者に表示されません。システム管理者は MSP 管理者に対してこのオプションを有効にする必要があります。この作業を完了することで、MSP 管理者がログインしたときに、お客様の組織に関連するレポートのみが表示されます。

## レポートの生成

### はじめる前に

このタスクを実行する前に、アプライアンスにサインインする必要があります。

### 手順

- 
- ステップ 1** [CloudSense] > [レポート (Reports)] を選択します。
- ステップ 2** 生成するレポートのタイプに基づいて、タブをクリックします。次のいずれかを設定できます。
- アプリケーション コンテナ レポート
  - 顧客の課金レポート
  - Cisco C880M4 インベントリ レポート
  - EMC のストレージ インベントリ レポート
  - グループ インフラストラクチャ インベントリ レポート

- Hyper V クラウド使用状況サマリー レポート
- IBM Storwize インベントリ レポート
- NetApp のストレージインベントリ レポート
- グループあたりの NetApp ストレージの節約レポート
- NetApp ストレージ節約量レポート
- ネットワークのインパクト アセスメント レポート
- 仮想コンピューティング インフラストラクチャの組織使用状況レポート
- PNSC アカウントの要約レポート
- グループの物理インフラストラクチャのインベントリ レポート
- サービス リクエスト統計情報
- グループ別サービス リクエスト統計情報
- ストレージの重複除外状況レポート
- グループのストレージ インベントリ レポート
- シンプロビジョニングされた領域レポート
- UCS データセンターのインベントリ レポート
- グループ別 VM アクティビティ レポート
- VM パフォーマンス サマリー レポート
- VMware クラウド使用状況サマリー レポート
- VMware ホスト パフォーマンス サマリー レポート
- 仮想インフラストラクチャおよびアセット レポート

**ステップ 3** [レポートの生成 (Generate Report) ] をクリックします。

**ステップ 4** [レポートの作成 (Generate Report) ] 画面で、次を含む必須フィールドに値を入力します。

名前	説明
[コンテキスト (Context) ] ドロップダウンリスト	レポートを生成するグループを選択します。  (注) 管理者の場合は、管理者権限があるすべてのグループがこのドロップダウンリストに表示されます。たとえば、MSP 管理者の場合は、このドロップダウンリストには管理対象のすべての顧客グループが表示されます。このリストには、他のグループは表示されません。

名前	説明
[レポートラベル (Report Label) ] フィールド	生成する他のレポートと区別するために、レポートにラベルを付けることができます。

- ステップ 5** [送信 (Submit) ] をクリックします。  
 レポートはシステムで生成されます。この生成されたレポートには、あなたと管理対象のグループのユーザのみがアクセスできます。たとえば、MSP 管理者の場合、この生成されたレポートは他の MSP 管理者やグループには表示されません。

## アセスメントの生成

### 手順

- ステップ 1** [CloudSense]>[アセスメント (Assessments) ] を選択します。  
**ステップ 2** [レポートの生成 (Generate Report) ] をクリックします。  
**ステップ 3** [レポートの作成 (Generate Report) ] 画面で、次を含む必須フィールドに値を入力します。

名前	説明
[コンテキスト (Context) ] ドロップダウンリスト	レポートを生成するグループを選択します。  (注) 管理者の場合は、管理者権限があるすべてのグループがこのドロップダウンリストに表示されます。たとえば、MSP 管理者の場合は、このドロップダウンリストには管理対象のすべての顧客グループが表示されます。このリストには、他のグループは表示されません。
[レポートラベル (Report Label) ] フィールド	生成する他のレポートと区別するために、レポートにラベルを付けることができます。

- ステップ 4** [送信 (Submit) ] をクリックします。

# カスタム レポート テンプレートのレポート ビルダー

Cisco UCS Director のレポート ビルダ オプションを使用すると、カスタム レポート テンプレートを作成して、特定のパラメータでレポートを実行できます。コンテキスト、実行するレポートのタイプ、およびレポートのデータ サンプルの期間を指定できます。複数のテンプレートを作成することもできます。

レポートテンプレートを作成した後、そのテンプレートを使用してレポートをPDFまたはHTML形式で生成できます。それにより、Cisco UCS Director でカスタム レポートを表示したり、自分自身または組織内の他のユーザにレポートを電子メールで送信できます。これらのレポートを Cisco UCS Director の外部で確認したりアーカイブしたりできます。

テンプレートの作成だけでなく、カスタム レポートテンプレートの編集、複製、および削除もできます。



- (注) レポート ビルダを使用して日、時間単位のコストのトレンド レポートを生成することはできません。週次および月次の期間のトレンド レポートのみが生成できます。月次のトレンド レポートを生成しているときに、その月の第1日目から現在の日付までのデータが計算されます。たとえば、3月5日にトレンド レポートを生成する場合、そのレポートには3月1日から3月5日までのデータが含まれます。

## レポート ビルダ テンプレートの作成

### 手順

- ステップ 1** [CloudSense] > [レポート ビルダ (Report Builder)] を選択します。
- ステップ 2** [テンプレートの追加 (Add Template)] をクリックします。
- ステップ 3** [テンプレートの追加 (Add Template)] 画面で、次を含む必須フィールドに値を入力します

名前	説明
[名前 (Name)] フィールド	レポート テンプレートの名前。
[説明 (Description)] フィールド	テンプレートの説明。
[レポート (Reports)] フィールド	レポートにエントリを追加するには、[+] をクリックします。

- ステップ 4** [レポートへのエントリの追加 (Add Entry to Reports)] 画面で、次を含む必須フィールドに値を入力します。

名前	説明
[レポートコンテキスト (Report Context) ] ドロップダウンリスト	次のいずれかのオプションを選択します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• VDC</li> <li>• クラウド</li> <li>• 物理アカウント</li> <li>• マルチドメイン マネージャ</li> <li>• グローバル</li> <li>• グローバル管理</li> </ul>
[VDC] ドロップダウン リスト	VDC を選択します。 このフィールドは、レポートのコンテキストが [VDC] に設定されている場合のみ表示されます。
[クラウド (Clouds) ] ドロップダウン リスト	ドロップダウンリストからクラウドを選択します。このリストには、以前にシステムで設定したすべてのクラウドが表示されます。 このフィールドは、レポートのコンテキストが [クラウド (Cloud) ] に設定されている場合のみ表示されます。
[物理アカウント (Physical Account) ] ドロップダウン リスト	ドロップダウンリストから物理アカウントを選択します。このリストには、以前にシステムで設定したすべてのアカウントが表示されます。 このフィールドは、レポートのコンテキストが [物理アカウント (Physical Accounts) ] に設定されている場合のみ表示されます。
マルチドメイン マネージャ	ドロップダウン リストからマルチドメイン マネージャを選択します。このリストには、以前にシステムで設定したすべてのアカウントが表示されます。 このフィールドは、レポートのコンテキストが [マルチドメイン マネージャ (Multi Domain Manager) ] に設定されている場合のみ表示されます。

名前	説明
[レポート (Reports) ] ドロップダウン リスト	[選択 (Select) ] をクリックして、テンプレートに含めるレポートを選択します。  このリストは、選択したレポートのコンテキストに応じてフィルタリングされます。
[傾向分析レポートの期間 (Duration for Trend Reports) ] ドロップダウン リスト	レポートのコンテキストとして [VDC] を指定した場合は、次のいずれかの期間をテンプレート用に選択します。  <ul style="list-style-type: none"> <li>• [毎時 (Hourly) ]</li> <li>• [毎日 (Daily) ]</li> <li>• [毎週 (Weekly) ]</li> <li>• [月 1 回 (Monthly)]</li> </ul> レポートのコンテキストとして [クラウド (Clouds) ] を指定した場合は、次のいずれかの期間をテンプレート用に選択します。  <ul style="list-style-type: none"> <li>• [毎日 (Daily)]</li> <li>• [毎週 (Weekly) ]</li> <li>• [月 1 回 (Monthly)]</li> </ul>

**ステップ 5** [送信 (Submit) ] をクリックします。

**ステップ 6** [テンプレートの追加 (Add Template) ] 画面で、[送信 (Submit) ] をクリックします。

### 次の作業

テンプレートを作成すると、そのテンプレートに基づいてレポートを生成できます。詳細については、[テンプレートからのレポートの生成](#)、(485 ページ) を参照してください。

## テンプレートからのレポートの生成

### はじめる前に

システムでレポートテンプレートを作成しておく必要があります。詳細については、[レポートビルダテンプレートの作成](#)、(483 ページ) を参照してください。

## 手順

- 
- ステップ 1 [CloudSense]>[レポート ビルダ (Report Builder)] を選択します。
  - ステップ 2 テーブルからテンプレートを選択します。
  - ステップ 3 [その他のアクション (More Actions)] ドロップダウンリストから [レポートの作成 (Generate Report)] を選択します。
  - ステップ 4 [レポート生成の確認 (Confirm Report Generation)] 画面で、次を含む必須フィールドに値を入力します。

名前	説明
[レポートのタイトル (Report Title)] フィールド	レポートのタイトル。
[説明 (Description)] フィールド	レポートの説明。

- ステップ 5 [生成 (Generate)] をクリックします。  
システムでレポートが生成され、保存されます。
- 

## 次の作業

生成されたレポートは、表示できるほか、必要に応じて電子メールで送信することもできます。

# テンプレートから生成されたレポートの表示

## はじめる前に

テンプレートを作成し、テンプレートを使用してレポートを生成する必要があります。

## 手順

- 
- ステップ 1 [CloudSense]>[レポート ビルダ (Report Builder)] を選択します。
  - ステップ 2 テーブルからテンプレートを選択します。
  - ステップ 3 [その他のアクション (More Actions)] ドロップダウンリストから [レポートの表示 (View Reports)] を選択します。  
[カスタムレポート (Custom Reports)] 画面に、テンプレートを使用して生成したレポートが表示されます。

- ステップ 4** テーブルからレポートを選択します。
- ステップ 5** [レポートの表示 (View Report)] をクリックします。
- ステップ 6** [レポートの表示 (View Report)] 画面で、レポートを表示する形式を選択します。  
[HTML] または [PDF] のいずれかを選択できます。
- ステップ 7** [送信 (Submit)] をクリックします。  
レポートが新しいブラウザ タブで開きます。

### 次の作業

組織内の別のユーザにレポートを電子メールで送信できます。

## テンプレートから生成されたレポートの電子メールによる送信

テンプレートから生成されたレポートは、自分宛てに、または組織内の他のユーザ宛てに電子メールで送信できます。

### はじめる前に

- テンプレートを作成し、テンプレートを使用してレポートを生成する必要があります。
- また、システムの初期設定時に電子メールアドレスを設定している必要があります。この場合、名前と電子メールアドレスが、レポートを添付した送信者として特定されます。

### 手順

- ステップ 1** [CloudSense] > [レポートビルダー (Report Builder)] を選択します。
- ステップ 2** テーブルからテンプレートを選択します。
- ステップ 3** [レポートの表示 (View Reports)] をクリックします。  
[カスタムレポート (Custom Reports)] 画面に、テンプレートを使用して生成したレポートが表示されます。
- ステップ 4** テーブルからレポートを選択します。
- ステップ 5** [電子メールレポート (Email Report)] をクリックします。
- ステップ 6** [電子メールレポート (Email Report)] 画面で、次を含む必須フィールドに値を入力します。

名前	説明
[宛先 (To)] フィールド	受信者の電子メールアドレス。 複数の電子メールアドレスをカンマで区切って入力できます。

名前	説明
[件名 (Subject) ] フィールド	電子メール メッセージの件名。
[形式 (Format) ] ドロップダウン リスト	電子メールメッセージに添付されるレポートの形式を選択します。次のいずれかを選択できます。 <ul style="list-style-type: none"><li>• HTML</li><li>• PDF</li></ul>

**ステップ 7** [送信 (Submit) ] をクリックします。

---

#### 次の作業

レポートが不要になった場合は、レポートを選択して [削除 (Delete) ] をクリックして、システムからレポートを削除できます。